PL 842 06 1931 v.16
Yoshida, Genjiro
Yoshida Genjiro zenshu

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

吉田絃二郎全集

第十六巻

LIBRARY
OCT 1 1971
UNIVERSITY OF TORONTO

PL
842
06
1931
v. 16.

目次

童話集……一

本村軍曹と赤靴……三
騎兵と馬……一三
熊爺さんの鶏……二三
伐り倒された木……三〇
正直な和尚さま……三五
萬平ぢいさん……三九
水車の新作……四八
イワンの歎き……五四
歩哨の話……六四
甚内さんの旅……七四
濱の父と子……八二
柿丸と梨丸……九八
エルサレムまで……一〇三
賣られたひつじかひ……一一一
京の寺へ……一一三
マカアの夢……一一九
小鳥も歸る……一二六
クリスマスの夜……一二八
五郎三郎と二人の娘……一三三
乞丐とダンス……一四一
黒ん坊白ん坊……一五〇
清坊と三吉……一六三
かあさんの目……一六八
痩犬とお獅子……一七〇
梅吉の悲しみ……一七四
たつたひとりで……一七八

青い海……一七九
お馬鹿さんと小鳥……一八四
ゆふべの濱……一九一
故郷……一九三
伊之馬鹿の國……一九五
捕虜の子……一九八
天までとゞけ……二〇五
あたたかい風……二一三
青い鳥と赤い花……二一五
杢平爺さんの死……二二一
子供と小鳥……二二六
仔馬は歸りぬ……二三二
信濃の子……二四七
白い雲が飛ぶ……二五二
わたしたちの先生……二六六
ふとつた王様……二七三
お寺の塔……二七九
水の上……二八五
梟と幸吉……二八九
天城の子……二九七
驢馬のやうな男……三〇四
ひとりぼつちの鐵ちやん……三一七
惡太郎烏の死……三二〇
壺作りの人丸……三二九
熊とピストル……三三六
六里ケ原……三四五
川沿ひの村……三五一
濱の燭……三五七
長谷寺詣で……三七一
桃の花の下……三九七
影……四一二
山の子たち……四一四

口絵　大正六年夏佐世保重砲兵大隊時代（前列向つて左著者）

童話集

本村軍曹と赤靴

一

旅順の戰ひのころでした。

ロシヤ人の撃つた大砲の彈丸は、ふしぎと、いつも一番左翼になつてゐた攻城重砲兵聯隊第四中隊の中隊長を殺しました。

第一番目の中隊長はまだ大尉になつたばかりの若い士官でしたが、第一回の總攻擊の朝、敵の大砲の彈丸にあたつて戰死をしました。第一小隊長の中尉が一時中隊長代理をして中隊を指揮してゐましたがこの中尉も翌日戰死をしました。

間もなく後方から新しい中隊長が補充されて來て、第四中隊の指揮をとりましたが、これも一ケ月とたゝぬうちに敵の全彈をあびて戰死しました。

第四中隊の陣地がちやうど、岡の傾斜面のはしで敵の目標になりやすかつたせゐもあつたのでせうが、ともかく第四中隊では來る中隊長も來る中隊長も戰死をしてしまひました。

いつたい戰地ではなにかにつけ、みんなが迷信的になるものです。第四中隊の四は死に通ずといつたあんばいで、みんなが四といふ言葉をきらつてゐました。その上、つゞいて三人も四人も中隊長が死んでしまつたものですから、聯隊の將校たちは第四中隊附になることをあまり好みませんでした。

五日目に內地から來た中隊長は、もう後備の大尉で髮の毛も白くなつてゐました。

朝早く中隊に來たのでしたが、隣りの第三中隊や第二中隊の陣地へ新任のあいさつに行つた時、

「あなたの中隊の陣地は、一部分敵に暴露してゐますから危險です。御注意をなさい。」と同僚にいはれたのでしたが、その日の午後は腰から上をすつかり敵の彈丸にくだかれて戰死しました。

本村軍曹が負傷をしたのはちやうどその時だつたのでした。

まだそのころは上等兵でしたが、本村軍曹は觀測手でしたから、中隊長といつしよに小高いあかつち山の上の觀測所に行つて雙眼式の望遠鏡をつかつて敵の砲臺を見てゐたのでした。

いつたい觀測所といふものは厚い鐵筋コンクリートで打ちかためられてゐますもので、たとへば軍艦の司令塔みたいな場所ですから、たいていの彈丸ぐらゐは防げるのですが、あまり大きな敵の海軍砲の彈丸だつたので、觀測所の厚いコンクリートの壁をこなみぢんに破壞して、丸彈が觀測所の中へはいつて來て破裂してしまひました。

そこにゐた六七人の男たちは一度に胴體を持つて行かれるものもあるし、首を引きちぎられるものもあるし、觀測所のなかはまるで血の池のやうな慘狀でした。

さいはひに本村軍曹だけはふしぎと左の腕をすこしと、鼻の先をほんのぽつちり、彈丸の破片に傷つけられたばかりですみました。

ところが、もと〳〵本村軍曹は大へんそゝつかしい人でしたから、觀測所のなかに一人のこらず打ち倒されてしまつた人たちの死骸を見たばかりで、自分の傷もきつとひどいにちがひないと思ひこんでしまつたのでした。一番まつさきに氣がついたことは鼻の先が、燒火箸かなにかでたゝきのめされたやうに感じたことだつたのでした。

「しまつた。」と本村軍曹は思ひました。自分たゞ一人が生きのこつた仕合せはうれしくないことはなかつたのでしたが、大事な鼻が缺け落ちてしまつたのでは、たとひ無事で日本へ凱旋しても、第一、軍人の威嚴を損ずることおびただしいと思はざるを得なかつたのでした。

本村軍曹は正直な、親切な氣のやさしい男でしたが、軍人の威嚴を保つといふことにかけては人一倍見え坊なところがありました。

まだあのころは陸軍ではお正月や紀元節などにはドイツ式のかたい革で作つた禮裝用の帽子をかぶつたものでした。黒い漆で塗つて金の帽章をつけたちよつと昔の兜のやうな感じの帽子でした。だけどもと〳〵革でこしらへた重い帽子ですから一日もかぶるとたいていの人は頭が痛んで來るのでした。

ところが本村軍曹は、明日は天長節だといふやうなときは、前の日から、その兜のやうな革の帽子をかぶるのがうれしくてたまらないので、幾度となく帽子を取り出しては帽章をみがいたり、顎紐をこすつて、つやを出したりするのでした。

いつたいがそんな風な人でしたから、「鼻がとれてしまつた。」と思つたときは死ぬよりも苦しい思ひをしました。咄嗟の考へとして、彈丸に落された鼻を拾つて顏にくつ付けながら野戰病院へ飛んで行つたら、何とかして鼻はもともと通りになほしてもらへるだらうと思つたのでした。ですから本村軍曹はだしぬけに、人々の死骸の間をさがしてまはゝました。

小隊長や看護卒たちが觀測所へかけのぼつて行つたときは本村軍曹は、

「おれの鼻が落ちた。そこいらに飛んでゐるはずだ。おれの鼻を拾つてくれ。」といつて走りまはつてゐました。

みんなは、かなしいなかにも、腹をかゝへて笑ひ出してしまひました。凱旋してから後も木村軍曹の鼻の話はいつもみんなを笑はせました。

しかし、もと〳〵鼻の先を弾丸の小さな破片がなでゝ行つたばかりでしたから、實際に鼻の形はすこしも破壊されたのではありませんでした。よく氣をつけて見ると、ちよつとしたやけどのあとがのこつてゐるくらゐのものでした。

二

わたくしはそのころ玄海の荒波につゝまれた或る島の砲臺にゐました。そのころはまだ要塞砲兵といつてゐました。木村軍曹は凱旋してわたくしたちの砲兵隊へかへつて來ました。

ちやうどそのころ壹岐の島から、わたくしたちの砲兵隊へ神奈邊治郎兵衛といふ二等卒がはいつて來ました。神奈邊二等卒は壹岐の漁夫でしたから潜ぐことが上手で、二十尋くらゐの深さの海の底へもぐつて行つて、鮑などを銛で突いて來ました。そんな風でしたから日曜なんかには木村軍曹は神奈邊二等卒をつれて砲臺の下の濱へ行つて、神奈邊に魚をとらせては酒を飲んだりしてゐました。

島ではまだ電燈がありませんでしたから、兵營内でも夜はランプをともしてゐました。

わたくしたちの要塞砲兵隊でも、秋の大演習には玄海をわたつて内地へ出かけて行きました。はじめて内地の野を毎日々々行軍をつゞけてゐた神奈邊二等卒は或る時、歩きながら大きな聲を出して、

「日本は廣いなあ。幾日歩き續けても海が見えぬもの。」といひましたので、みんな大笑ひしたことがありました。今まで玄海の荒波のなかの小さな島より外には出たことがなかつた神奈邊二等卒には内地の平野はいかにも廣いと思は

れたのでした。

それからわたくしたちが博多の町に宿營した時でした。島の兵隊たちは、はじめて內地へ行つて電燈といふものを見たのでした。

神奈邊二等卒は博多の町で電燈の球を一つ買つて來て、大事さうに背囊へ入れて、毎日演習で山をのぼり、川をわたる時も、背囊のなかの電燈の球のことばかり考へてゐました。

「お前は電燈の球なんか買つて來て、どうするんだ。」

神奈邊二等卒が背囊のなかゝら辨當を出さうとしたはずみに、電燈の球が草の上にころげ落ちたのでした。それを見つけた本村軍曹がかういつてたづねました。

「はい。わたくしは滿期になつたら、電燈の球をお土產に壹岐に持つてかへります。そして紐でくゝりつけて天井から下げます。」と神奈邊二等卒は答へました。

「お前は馬鹿だなあ。電燈の球だけあつたつて電氣がなくては燈はつかないんだよ。」と軍曹は敎へました。それでも神奈邊二等卒には電燈の原理がのみこめなかつたのでした。演習がすむまで大事にして背囊のなかにしまつといて、たうとう島まで電燈の球を持つてかへりました。

神奈邊二等卒は正直な男でしたから、本村軍曹はいつも神奈邊を可愛がつてゐました。

いよ〳〵神奈邊が滿期になつて壹岐へかへるといふ十一月の末でした。本村軍曹はその前日に、神奈邊二等卒を下士官室へ呼んで、自分が持つてゐる一番新しい靴を神奈邊へお別れの記念にやりました。それは赤革の靴で、よく油を塗つた、つやのいゝものでした。

神奈邊二等卒は大よろこびで赤革の靴をもらひました。そして翌日、朝早く砲兵隊を出て波止場の方へ行きました。隊からは波止場までは三里ばかり山みちを歩くか、ガタ馬車に乗つて行かなければなりませんでした。

本村軍曹は明日の朝、新兵が入隊するので、その準備をしてゐました。そして明日宣誓式に出なければならぬことを思ひ出しましたので、當番に命じて一番よい赤革の靴を、みがいておくやうに頼みました。

「軍曹殿。あなたの一番よい赤革の靴はどうしても見つかりません。滿期兵にずるい奴がゐて盗んで行つたのぢやありますまいか。」と當番の兵卒が申しました。

「な、な、なに……おれ、おれの赤革の靴が盗まれたつて、滿期兵が盗んだつて。畜生奴。」そそつかしやの軍曹は、飛び上つて、營舎の方へ行きました。なるほど赤革の靴はありませんでした。いつも練兵にはいてゐた古いぼろ靴が一足殘つてゐました。軍曹は頭のてつぺんまで眞赤になつて、おこつて大急ぎで劍をさげると營門の方へ走つて行きました。

「まだ船が出るまでには三時間ある。十分間に合ふな。」さう思ひながら、波止場行きのガタ馬車に乗りました。まだぶら〳〵と歩きながら、三里の山みちを波止場の方へ行く滿期兵たちを幾人も見出しました。そのたんびに、本村軍曹は兵隊たちの靴を見ました。しかし、みんな古いぼろ靴をはいてゐました。

「おい馬をうんと、早く走らせてくれ。」軍曹は幾度か御者へ聲をかけました。

「さうは走らせられませんよ。何せ、一方は山、一方は幾十丈といふ切り岸になつてゐますからなあ。一歩まちがへば玄海の波のなかに落つちるんですぜ……」御者はのんきさうな顔をしてぽかり〳〵と煙草をふかしました。

三

やつと波止場に着いたころは、まだ船は港にゐて滿期の兵隊たちはそこいらの町を幸福さうな顏をしてぶらり〳〵歩いてゐました。

滿期兵たちは本村軍曹が歩いて來たので、一人々々ていねいに敬禮をしました。しかし本村軍曹は兵隊の靴ばかり見てゐてすこしも兵隊の顏なんか見ませんでした。ですから滿期兵たちがどんな敬禮をしてゐるかも知りませんでした。

ちやうど波止場の石だゝみの上に、一人の滿期兵が赤い革の美しい靴をはいて、いかにも幸福さうに沖をながめてゐました。手にさげた風呂敷包のなかには大事さうに電燈の球が入れられてありました。いふまでもなく、神奈邊二等卒でありました。

本村軍曹は、石だゝみの上に、赤革の靴を發見しました。軍曹はその靴をはいてゐる男が誰であるかもたしかめないで、その男に飛びかゝつて行つて、つゞけさまに二つ三つびんたをなぐりつけました。不意を喰つた兵隊は不動の姿勢のまゝ風呂敷包をかゝへて、そこに立つてゐました。

「何だ、きさまか、神奈邊治郎兵衛か」……顏を見てから、本村軍曹は張合ひ拔けしたやうな表情をしました。

「きさまは、なんでおれの一番いゝ靴を盗んで來たのぢや。」

「軍曹殿。わたくしは盗んではまゐりません。」

「嘘をつくと承知せぬぞ。」

「嘘ではありません。昨夜軍曹殿がわざ〳〵わたくしを下士官室にお呼びになつて、この赤革の靴を餞別に下さつたのでした。」

「なあるほどさうだつたな。かんにんしてくれ。おれはすつかり忘れてゐたわい。」軍曹は大きな聲を出して笑ひました。

神奈邊二等卒はあまりなぐられて痛かつたのでぽろ〳〵と淚を落しました。

「軍人が泣く奴があるか。日本軍人ぢやないか。泣くな泣くな。」軍曹は神奈邊二等卒のびんたをさうつとなでてやりました。

「痛かつたらうな。かんにんしろ。おれなんか旅順の戰では、鼻までもぎとられたが泣かなかつたぞ。」といひました。

神奈邊二等卒はそれでもやつぱり痛かつたので、ぽろ〳〵淚を落しました。

「もう泣くな。お前は博多で買つた電燈の球はどうした？」

「この風呂敷包のなかに入れとります。」

「さうか、よし。」軍曹はさういつて、海岸の店に走つて行きました。そしてそのころはじめて長崎から島の港へ傳へられた懷中電燈を一つ買つて、ふたゝび波止場の方へかへつて來ました。

「どうだ、お前のその電燈の球は、電氣がないから燈がつかぬだらう。」

「はい。幾らやつて見ても燈はつきませぬ。」

「さうだらう。これを見い。これなら、ほら、このまゝすぐ燈がつく。」といつて懷中電燈を神奈邊二等卒の手に握らせました。

神奈邊二卒はうれしさうな顏をして懷中電燈をぱち〱とつけて見ました。

「これもお前にあげる、うれしいだらう。」

「うれしくあります。」

神奈邊二等卒はぽとりと涙を落しながら子供のやうな顏をして笑ひました。

赤革の靴をはき、懷中電燈をポケットに入れた神奈邊二等卒は、船に乘りましてから、船の一番うしろに廻つて、いつまでも波止場に立つてゐる本村軍曹をながめて敬禮をしました。

ぽとり〱と涙が落ちて來て仕方がありませんでした。

本村軍曹は帽子をぬいで振りました。そして船が玄海の波のなかに見えなくなつてから、ふたゝびガタ馬車に乘つて隊の方へかへつて行きました。古い練兵靴をはいて。

騎兵と馬

一

箱根仙石原の草はかゞやいてゐました。

「おい、草野上等兵。」若い少尉が木の下にしやがんでゐる上等兵に聲をかけました。

「はい。」

「あの原のところを馬をひいて走つて來るのは、澤村の奴ぢやないのかい。」

「はい、澤村にちがひありません。」

「澤村はへんな男だなあ。今朝御殿場の宿營を立つ時から、あいつは鞍ずれがして馬に乘れません、といつて乙女峠をすつかり歩いて來たんぢやないか。」

「さうであります。」

「しかしあんなにうれしさうに草のなかを馬といつしよに飛んでゐるぢやないか。」

「はい……」

「何しに行つたのだい、あんなところまで馬をつれて？」

「多分水を飲ませにでも行つたのでございませう。」

「さうか。面白い男だなあ。」

少尉も上等兵も、やがて木の下に眠つてしまひました。

そこには一隊の騎兵が夜晝の長い行軍に疲れたらしく、木蔭をもとめて草のなかに眠つてゐました。やはらかな草の原には、あちらこちらに二三十頭づゝの馬が、一かたまりになつて草を食べてゐました。

澤村二等卒は、みんなが木の下に寢ころんでゐる間に、自分の愛馬新月をつれて、湖から流れて來る谷川へ行きました。そして新月にも冷たい水を飲ませたり、背中を洗つてやつたりしました。新月はいかにもうれしさうに、澤村の肩に首をもたせたりしました。

新月はうれしさうに、いなゝきながら仙石原の草のなかを走つてゐましたが、澤村は何となく元氣のない顔をしてゐました。そして新月のたてがみをなでてはためいきをつきました。

「乘馬用意。」

人も馬もにはかに草の中から道の方へ走りました。若い士官は劍を拔いて圓をゑがくやうなかつかうに、青い空に劍を振りました。佩劍の音や、肩の銃の鞍にあたる音がしました。人々は愉快さうに馬に乘りました。

赤い砂埃を立てゝ騎兵の一隊は仙石原を下つて行きました。

白い雲が草の上にわいて來ました。

人々は愉快さうに馬上から山をながめたり、振りかへつては何か話しながら笑つたりしました、みんなが幸福でした。

みんなからすこしおくれて馬をひきながら歩いて行く澤村二等卒を山の人々はめづらしさうに眺めました。

「澤村、ほんたうにお前は鞍ずれた馬に乘れないのか？」少尉は隊のうしろまで馬を走らせて來て聲をかけました。

「はい……」澤村は馬をひいたまゝ少尉を見上げました。

「さうか……ぢや、うしろの方から歩いて來い。」少尉はやさしい目で澤村を見ました。少尉は澤村の眼に涙がたまつてゐるのを見つけたのでした。

少尉の胸には澤村の心がはつきりとうつつて來るのでした。

澤村は射撃も下手ですし、何をさせてもとんちんかんなことばかりする兵卒でしたが、馬に乘ることゝ、馬を可愛がることだけは誰よりもすぐれてゐました。

富士の裾野で演習が終つて、明日東京へ向つて出發するといふ日のことでありました。

「今度聯隊へ歸れば、三十頭の軍馬が廢馬になつて、町の商人へ拂ひ下げられるさうだ。」といふことが知れました。

澤村が急に元氣のない顏をしたり、ため息をついたりするやうになつたのは、その日からだつたのです。

「新月は中隊では一番年をとつてるのだから。」澤村は何も知らないで、彼の肩に顏をすりつけてゐる愛馬をぢつと見つめてゐました。

「いよ〳〵新月が、拂ひ下げられるのだとしたら、どうしよう。」考へただけでも悲しいことであつた。

富士の裾野から、東京へかへりつくまでの命である。東京へ着いてしまへば、新月とも別れなければならぬ。それを考へると、一日でも暇を入れて東京へかへつた方がいゝ。澤村はかう思ふのでありました。

少尉は、澤村の心を察することができましたので、ちつともしかりませんでした。

「新月や、お前はわしを乘せて幾度こゝの箱根を越えてくれたつけな。」澤村は馬のたてがみをなでてやりました。

「東京へ着きさへすれば、もうお前ともぢきにお別れになるかも知れない。お前は今日まで、毎日毎夜わしを乘せてくれたんだつた。だから今度だけ、わしは東京まで歩いて行つて、お前の手綱をひいてゆくよ。」
澤村はから思つたのでした。だから、わざと鞍ずれがしたといつて、馬には乘りませんでした。
澤村はたうとう東京まで歩いて新月をひいてかへりました。

二

東京の聯隊へ着いて、三四日たつてからでありました。師團の獸醫が來て、聯隊の馬をしらべました。そして拂ひ下げられる馬には、いち〱その馬小屋へ癈馬のしるしをつけて行きました。
新月の馬小屋にも、癈馬のしるしがつけられました。澤村はそれを見た時、目がくらんで眞つ暗になつたやうに思ひました。
澤村は夕方酒保にかけつけて、大きな紙袋にいつぱい、お餅を買つて來て、新月に食べさせました。
「いゝかい、もう食べないのかい。明日賣られてしまうと、お前は馬車屋にでも連れていかれるだらう。そして毎日、重い石だの材木だのを積んで、手荒い男たちになぐられたりするんだらうな。かはいさうだなあ。」
澤村はさういつては、新月の顔だの、背中だのをなでてやりました。
その夜中ごろになつて、中隊では大變なことが起りました。
若い少尉は週番士官の提灯をつけて、中隊をまはりましたが、澤村が寢臺の上に寢てゐないことを發見しました。
中隊の兵士たちは、不時呼集のラッパの聲におどろかされて、起き上りました。

「脱營したんでせうかな。」
「さあ、さうかも知れぬ。」
「練兵がつらいので逃げ出したんだな。」

そんなことをいひながら、人々は提灯をつけてさがして歩きました。

ところが偶然にも少尉は、澤村が馬小屋の藁のなかにしやがんでゐるのを發見しました。澤村は、中隊の部屋にかへつて寢臺の上に寢たのでしたが、どうしても明日別れなければならぬ新月のことが忘れられぬので、ふたゝび馬小屋のなかへはいつて行つて、新月といつしよに藁のなかに寢てゐたのでした。

新月は、麴町の商人に拂ひ下げられてしまひました。

聯隊の裏門から、見知らぬ男にひかれて行く新月を見ました時、澤村はさうつと手の甲で淚を拭きました。

澤村は練兵場に出ても、元氣のない顔をしては、新月のことを思ひ出してゐました。

一ヶ月たち、二ヶ月たちました。澤村はやつぱり別れた馬のことを忘れることはできませんでした。夢にでも新月に逢つて見たいと思ひました。

或る靜かな夜でありました。

澤村は中隊の部屋の寢臺の上に眠つてゐましたが、遠くにいなゝく馬の聲を聞いて、眼をさましました。

「おやツ。」と思ひました。その聲はたしかに新月の聲でありました。

「だつて新月がやつて來るはずはない。」さう思つて、ふたゝびがつかりして、寢臺の上に眠つてしまひました。

澤村は自分の顔に何か黒いものゝさはるのを感じました。澤村はふたゝび眼をさましました。澤村は自分の眼をうたがはないではをれませんでした。一頭の馬がのこ〳〵と、中隊の部屋のなかへはいつて來たのです。そしてたしかに澤村の寢臺の前に、立ちどまつてゐるのでありました。

「新月だツ。新月だツ。」澤村は寢臺の上に飛び起きて、新月の首に抱きつきました。馬は喜んでいなゝきました。部屋のなかに眠つてゐた兵士たちは驚いて、みんな寢臺の上に飛び上りました。

「馬だ、馬が部屋の中へはいつて來た。」

「いつたいどうしたんだい？」

「電燈をつけてくれ。」

「驚いたなあ、馬ぢやないか。」

中隊の人々は、寢臺から飛び下りてさわぎ立てました。少尉もやつて來ました。

「澤村、新月ぢやないか。いつたいどうしたんだ？」

「どうしたのか知りませんが。わたしが眠つてゐました間に、こゝへ來て、わたしの枕に自分の顔をくつゝけてゐました。」

「どこからか、手綱を切つて逃げて來たのだな。」

「大分遠いところを逃げて來たやうでございます。餘程疲れてゐますよ。」

「澤村、これから馬小屋へひいて行つて、夜が明けるまでつないでおいてやれ。」

「はい、さうします。」澤村は新月をひいて馬小屋の方へ行きました。そして、まぐさを運んで來ては、新月にたべさ

してやりました。

「お前はよつぽどつらい仕事をしてゐるんだな。重い荷を曳かされるんだな。痩せたなあ……」澤村はこんなことをいひながら、夜が明けるまで新月のたてがみをなでてやりました。

澤村はうれしくてなりませんでした。

今までのことはすつかり夢で、今新月といつしよに馬小屋のなかにゐることだけがほんたうなので、明日また夜が明ければ、いつでも新月に乗つて練兵に出かけることができるやうに思はれるのでありました。

夜が明けました。

新月はやつぱり輓馬として、町の商人に拂ひ下げられてゐたのでした。晝になつて或る一人の男が、聯隊をたづねて來ました。それは新月を買つた馬車屋の主人でありました。

その男は夜つぴて新月をさがして聯隊までやつて來たのでありました。

「はあ、わしの家は東京から十里ばかりもはなれてゐますだ。この馬の野郎、夜つぴて走りつゞけてこゝまで來たのだなあ。」さういつて、その男は新月の手綱を握りました。

「おやぢさん、この馬を可愛がつておくれよ。わしが満期除隊になれば、きつと金をこしらへてこの馬をつれもどしにゆくからな。いゝか……」澤村は馬をつれて行く男に念を入れてさういひました。

「馬くらゐ可愛いものはないなあ。いやわかりました。だがや、いつでもあんたが金さへ持つて來なされば、わしこの馬かへして上げるだ。これほどお前さんに、なじんでゐるんだもの、あんまりかはいさうぢやなあ。」

「ちや、大事にして飼つてくれよなあ、おやぢさん。」
「兵隊さん、安心しなせえ。わし大事にして、あんたの來るのを待つてるで。」その男は新月をひいてかへつて行きました。

三

澤村はもうたゞ一生懸命になつて、練兵にも精を出しました。
そして他の兵士たちが、俸給をもらつては酒保へかけつけて、お酒を飲んだり菓子をたべたりしますのに、澤村は俸給をもらつたまゝにして貯金しました。
どんなに菓子がたべたくなつても、新月のことを思つては、酒保にもかけつけないでお金を貯へました。
新月と別れてから二年あまりして、澤村もいよ〳〵滿期になつて故鄕にかへることになりました。
滿期兵たちは、まだ二ヶ月も三ヶ月も前から、いよ〳〵聯隊を出てからの、いろ〳〵な仕事の計畫を、立てゝるました。
みんなが聯隊を出る三日前の晩でありました。中隊長はみんなを招いて、茶話會を開いてくれました。そして一人一人に鄕里にかへつてからの計畫についてたづねました。
「わたくしは米屋になります。」
「わたくしは鐵工場の主人となつてはたらきます。」
「わたくしはホテルを開きます。」

「わたくしは驛遞の役人になります。」
「わたくしは山林技師になります。」
一人々々が元氣な聲で答へました。
「澤村、お前はどうするのだ？」
「はい……」澤村はちよつと口ごもりました。人々は、けいべつしたやうな眼で澤村を見ながら笑ひました。
「澤村、お前は聯隊を出たら、何になるんだ？」
「はい……わたくしは、馬車屋になります。」澤村はきまり惡さうに申しました。
人々は大きな聲で笑ひました。
「どうして馬車屋になるんだ？」
「はい……」澤村はうつむいてしまひました。澤村はぽとりと涙を床の上に落しました。
その夜澤村は馬車屋の主人に手紙で、除隊の日の朝、聯隊まで新月をつれて來てくれるやうにたのんでやりました。
いよ／＼みんなが滿期になつて聯隊を出る朝になりました。
大きな旗を振り、音樂隊を先頭に立てゝ歸つて行くものもありました。あつちでもこつちでも、萬歳々々の聲につつまれて滿期兵たちは聯隊を出て行きました。
きよろ／＼とあたりを見まはしながら聯隊の門の前に一人の男が馬をひいて來ました。その男は澤村を見つけると同時に、馬をつれて澤村の前へ走つて行きました。

澤村は誰一人出迎へに來てくれる人も持ちませんでしたので、きよとんとして聯隊の門を出かけましたが、急にかがやかな眼をして、馬と一人の男の方へ走つてゆきました。

「あゝほんたうに新月をつれて來てくれましたね。」

澤村は飛びつくやうにして新月の手綱を握りました。

「えゝ、晩夜は寢ないで、この馬といつしよに歩いて來ました。畜生でもちやんと知つてると見えて、嬉しさうに歩いて來ましたよ。」

「あゝ、新月、お前も丈夫だつたなあ。さあこれからいつまでもお前といつしよにをれるのだぞ。」

澤村は懷から金を出して、その男の手にわたしました。それはまる二年半の間、澤村が酒も飲まず、菓子もたべないで、貯へておいたお金だつたのです。

人々は、いかにもうれしさうな顏をして、馬をひいてかへつて行く澤村を見ました。

澤村にたうとう一人の出迎へ人も持ちませんでしたが、いかにも幸福さうな顏をして、馬の手綱を握つてゐました。

馬はいなゝいて走りました。

熊爺さんの鶏

熊爺さんといへば越後の或る片田舍の村々では知らない人もないほどのとぼけ爺さんで、慾がふかくて、おまけに嘘つきの爺さんでございました。

二三年前官林の中に木を盜みに行つて、見まはりの役人に追はれて高い崖を飛び下りて逃げるはずみに、脚を折つてからびつこになつてしまひました。

こんな熊爺さんでもまだ子供のころは正直で可愛いところもあつたのですが、年をとるにつれて惡い友だちと酒を飲んだり、人をごまかしたりするやうになつてしまつたのでした。

熊爺さんがほんの十か十一の子供のころでした。

或る秋の日、村の人たちは鐵砲をかついで鹿狩りに出かけました。熊爺さんは妹を負んぶして道ばたに遊んでゐましたが、犬を連れて山に行く人たちを見てゐると自分も鹿狩りに連れて行つてもらひたくてなりませんでしたので、妹を負んぶしながら山の方へみんなの後から歩いてゆきました。

「おや、お前までついて來たのか、熊坊。」

後からついてくる熊爺さんに氣づいた一人の獵師は困つた顏をしてかう言ひました。

「ぢや、こゝまで來たんだから仕方がない。お前はこの椎の木の下にゐて、この法螺の貝を貸してあげるから、もし鹿が飛び出して來たらこの貝を吹くんだよ。いゝかい。この木から一寸でもはなれてはいけないよ。あぶないから。」

他の一人の獵師がかう言つて法螺貝を一つ熊爺さんにわたしました。

熊爺さんはうれしくてたまりませんでした。いまに大きな鹿が山から飛び出して來たらこの法螺貝を吹いてみんなに合圖をしてやらうと思つて、法螺貝を握つて、赤ん坊を負んぶしたまゝ椎の木の下に立つてゐました。

「しかし、鹿が飛び出して來るにしても、まだ半時間や一時間はかゝるにちがひない。その間ぼんやり木の下に立つてゐるのもばかばかしい。」とひとりごとをいひながら、椎の實を拾つて噛んだり、梢の小鳥に石を投げつけたりしてゐました。

さうするともの五分と經たないうちに大きな嵐のやうな音がして、直ぐ上の山から大きな鹿が飛び出して來ました。

熊爺さんはあんまり急だつたのでまつたくたまげてしまひました。

とても、數へられてゐた法螺貝を吹く勇氣なんかありませんでした。もう法螺貝のことなんかわすれてしまつて、椎の木に登らうとしましたが、赤ん坊を負んぶしてゐるのと、兩脚がわなわなふるへてゐるのとで、どうしても木にのぼることができませんでした。たうとう椎の木の下に尻餅をついてへたばつてしまひました。

でも大鹿は幸、何の害もしないでどんどん山を下つて逃げてゆきました。しばらく經つてから獵師たちが鹿のあとを追つかけて來ました。

「おい熊坊、大きな鹿が、いまこゝを通つた筈だがお前知らないか？」

と一人の獵師が、そこにへたばつてゐる熊爺さんを見てたづねました。

「あゝ、さつきこゝんとこを下つた。」と尻餅をついたまゝ熊爺さんは麓の方を指さしました。

「じやあ、なぜさつき貸してやつた法螺貝を吹いて知らさなかつたの？」と法螺貝を貸した男が言ひました。

「だつてとてもこはくつて法螺貝なんか吹けるもんか。」と熊爺さんはふるへながらいひました。

「そしていつたい法螺貝はどうした？」

「法螺貝！」熊爺さんはきよとんとしてそこいらを見まはしました。

「あんまりこはかつたので、あんなところに抛り出したんだなあ。」といつて一人の男が笑ひながら十間もはなれた草の中から法螺貝を拾つて來ました。

熊爺さんが臆病で法螺貝を吹いてくれなかつたので、大鹿はたうとう撃つことができませんでした。だけど、みんなは大鹿を取り逃がした口惜しさは忘れて、赤ん坊を負んぶして、貝を抛り出してふるへてゐる熊爺さんのをかしい風を見て吹き出して笑ひました。

熊爺さんは酒を飲んで、きげんがよくなるといつも鹿狩の話をしてはみんなを笑はせました。その時だけは慾深の熊爺さんも子供のころの熊坊にかへつて可愛い顔をしました。

その熊爺さんがちかごろ慾を出したためにとんだしくじりをしました。それはかうなんです。

熊爺さんが子供のころ鹿狩について行つた山道を越えて行くと、そこは信濃の國になつてゐました。或る日熊爺さんはその山道を越えて善光寺さまへお詣りにゆきました。

善光寺さまの山門を出たところに、一人の男が盥に水を汲んで來て一羽の鬪鷄をたんねんに洗つてやつてゐました。熊爺さんは鷄を蹴合せることが大好きでしたから、その鷄をぢつと見つめてゐました。嘴といひ、肩の張

りといひ、丈といひ、脚の大きさといひ、蹴爪といひ、まことに申分のない立派な鷄でした。

熊爺さんは、ほんの今、善光寺さまの眞つ暗な戒壇めぐりをして、惡いことはしまい、むごたらしいことはしまい、たゞひたすらに死ぬる日までお念佛を唱へてゐませうと決心したのでしたが、その鷄を見ると、そんな強い鷄を持つて行つて蹴合せをさして見たくてたまりませんでした。

熊爺さんはその男に聲をかけました。

「いゝ鷄ですね。さぞ強いでせうな？」

「えゝ、この鷄ですかい？ そりやあ強いですとも。信濃中でこの鷄に勝つ鷄は一羽もをりません。こなひだは越後まで連れて行つて蹴合せましたが、越後でもこれに勝つ鷄は一羽もゐませんでした。」とその男は自慢さうに答へました。

熊爺さんは信濃第一番の鷄が欲しくてなりませんでした。

「どうかその鷄をわしにゆづつてくれませんか？ お金はいくらでもあげるが……」熊爺さんはずるさうな眼をして、その男を見ました

「わしは百兩貰うてもこの鷄をゆづるのはいやだ。」

熊爺さんは困つたなと思ひました。

夜、こつそり來て、その男が眠つてゐる間に、その鷄を盜んで行かうと思ひました。しかし夜道をかけて信濃の國の山々を逃げ出すのはなか／＼できないことでしたから、

「では、どうかその鷄の卵があつたら一つゆづつてください。」とねだりました。

「たつた一つこれの卵があるにはあるが、これも百兩もらつたつてゆづられませぬ。」とその男はいひました。

裏の方で牝鷄がくつ〳〵と鳴きました。

「あゝ、あの牝が生んだのですかい？」

「さうですよ。」

「あの牝もいゝ鷄だなあ。どうかぜひその卵をわしにゆづつて。」

「駄目ぢやがなあ、旅の人、あんたがどういうても……」

仕方がないので熊爺さんはぼんやりとそこに立つてゐました。どうかして盗んで逃げる方法はないかと思つて。

「わしはなあ、今日川中島で鷄の蹴合ひがあるんで、これから出かけるんだが、あんたも來て見なされんか。」

とその男がいひました。

熊爺さんは、川中島へは行きたくなかつたのでしたが、ひよつとしたら途中でその鷄を引つたくつて逃げられるかも知れぬと思ひましたので、

「おやあ、ぜひ行つてあんたの鷄の強いところを見せていたゞきませう。」

「ほんとに川中島まで來て鷄の強いところを見てくださるか？ ほんとにか。それはうれしい。」その男は自分の鷄の蹴合ひを見てもらふのがうれしいので、急ににこ〳〵した顔で奥に働いてゐたおかみさんを呼びました。そしてたうとうたつた一つしかない大事な卵を熊爺さんにやつてしまひました。

熊爺さんは大事さうに一つの卵を風呂敷に包んで、鷄を抱いた男のうしろから川中島の方へ歩いて行きました。

熊爺さんは道の十二三町も行くと急に草叢の中に倒れてしまひました。そして「おういた、おういた。」といつてお

なかをおさへて苦しみました。
「旅の人、どうしたんだ？」と鷄を抱いた男はびつくりしてたづねました。
「おなかゞ痛いんだ。今朝宿屋でわるい魚を食つたので。」といつて草の上をころがつて見せました。「殘念だがわしはあんたの鷄の蹴合ひを見ないで越後にかへるから。」
「それは口惜しいことをした。ではわしだけ川中島へ行くから。」といつてその男は鷄を抱いて出かけました。
その男の姿が見えなくなると、熊爺さんはひよつくり立ち上りました。そして赤い舌を出して笑ひました。
「あいつうまくだまされたな。おかげでわしは卵一つまうかつた。」熊爺さんはびつこ足で走りながら越後の方へ急ぎました。
熊爺さんは越後へかへると、信濃から持つて來た卵を牝鷄の巣に入れてあたゝめました。
まいにち、熊爺さんは卵がわれて、中から雛つ子が出て來るのを待ちかねてゐました。
ほんたうに立派な強い鷄が生まれました。親鷄にもまさつた立派な鷄でした。
「これなら信濃、越後はおろか、日本一の鷄に違ひない。」と思つて熊爺さんは大事に育て上げました。
或る時善光寺さまの山門の前の男がひよつくり熊爺さんをたづねて來ました。
「どうでした、卵は？」
「あんなになりましたよ。」熊爺さんは籠の中の鷄を見せました。
「やあ、見事。これは無類に強い鷄が生まれたもんぢやたあ、これは日本一の鷄ぢや。」その男はためつすがめつ籠の

中をのぞきこんでゐました。

最初は自慢で鷄を見せてゐた熊爺さんも、自分の心にくらべて、その男の心を判斷しました。そして「この男はわしの鷄を盜みに來たにちがひない。」と思ひました。ですから、しまひにはその男が何を話しかけても、無愛想な顔をして見せました。その男はつまらなさうな顔をしてかへつてしまひました。

熊爺さんは信濃の男が歸つて行くのを窓からそつとながめました。その男は森の下の道を信濃の方へ歩いてゆきました。

「あの男はずるいぞ。信濃にかへる振をしてきつと日が暮れたら、立ちかへつて來てわしのこの鷄を盜むつもりだらう。わしはそんな間抜ではないぞ。そつちに計略があればこつちにも計略があるぞ。」熊爺さんは川中島の策士でしたやうにぺろりと赤い舌を出しました。そして夕方になりましたら、鷄をいだいて山一つ越えた神主さまの家へあづけに行きました。

熊爺さんは、家にかへつて來て安心して寢床にはいりました。きつと信濃の男が暗くなつたら鷄を盜みに來て、鷄がゐないので、がつかりするにちがひないと思つては、ひとりでくす〳〵笑ひ出したりしました。そして時々夜具の中から耳を立てゝは庭の物音をきゝました。しかし夜つぴて氣をつけてゐても、庭には誰も來ませんでした。熊爺さんは早く鷄をつれてもどりたかつたので、夜が明けるのを待ちかねて、びつこの足を引きずりながら山一つ越えて神主さまの家へ行きました。

神主さまは熊爺さんの顔を見るとふと思ひ出したやうに、「あつしまつた。」と大きな聲を出しました。

「どうしたんです？」

「昨夜、あんたの鷄を家の中に入れてやることを忘れてしまつた。このごろは狐が多いので。」と神主さんは庭の方へ下りました。

狐！ といふ言葉をきいた時、熊爺さんは咽喉がつまつたやうに思ひました。神主さんのうしろについてびつこの足でかけながら小屋の方へゆきました。

そこいらには狐に食ひのこされた鷄の羽毛だけが散らかつてゐました、熊爺さんは、子供のころ鹿狩で尻餅をついた時と同じやうに、眼を丸くして口をもがもがだけさしてゐました。

伐り倒された木

高い山の上に一本の大きな樟が空にそびえてゐました。

あまり大きいものですから、遠くからちよつと見たところでは小山のやうに思はれました。ですから樟の蔭になつてゐる小さな木やいろ／＼な草花などはどんな風が山を荒しても、樟のおかげでついぞ枝一つ、茎一つ折られたこともありませんでした。

けれども樟の蔭になつてゐる柊はいひました。「ばか／＼しい大きな樟の爺のおかげで、おいらは星の光りだつてめつたに見ることができない。」

また野菊はいひました。「まつたくだよ。あの大きな樟の爺が、大きな手を空いつぱいにひろげてゐるので、お月さまだつてろくに拝まれもしない。」

「ほんたうにあんな能なしのもうろく爺なんか早く枯れてしまへばいゝんだ。おいらは立派な花を咲かせたり、美しい香を空いちめんにたゞよはせたりするのに、あの樟と来たら年中へんてつもない葉をふんりよふしやくもなく山いつぱいにひろげるんだからおいらは息がつまりさうだ。」と春蘭が言ひました。

「あんなもうろく爺は、早くくたばればいゝがなあ……」と小さな岩間の花がいひました。

樟は春蘭だの、野菊だの、柊だのゝ悪口をぢつと聞いてゐました。

ちやうどその時北の空が俄に曇つて、黒い雲がもく／＼と向うの山の上にあらはれて来ました。恐ろしい雷が鳴つ

て來ました。小石を打ちつけるやうな雨が降つて來ました。

　樟は空いつぱいに兩手をひろげて、柊だの、春蘭だの、野菊だのを抱くやうにしてやりました。

　柊も、野菊も春蘭もおかげで何の怪我もしませんでした。

「恐ろしい雷だつたなあ。」と耳をおさへたまゝ柊が空を見上げていひました。

「嵐の奴がおどかしやがつたなあ。」と野菊が遠く行つてしまつた嵐の音に耳をかたむけながらいひました。

「もう日はすつかり暮れた。お月さまが出た。これでこの老いぼれの樟さへゐなければ、雨上りの空のお月さまも、お星さまもすつかり見えるんだがなあ。」と春蘭がいひました。

　樟はその深い、廣い、柔かな枝の間に鳩だの、鶯だの、駒鳥だのに巣をあたへて、しづかに小鳥らの夢をまもつてやりました。

　雷や嵐におびえた駒鳥が胸毛をふるへさせてゐるのを見て、樟は柔かな葉で駒鳥の胸をしづかにさすつてやりました。駒鳥は間もなくすや／＼と眠りました。

　夜が明けました。熱い日でした。太陽はぎら／＼と地を照りつけてゐました。草も木も息苦しさうに喘いでゐました。

　樟は柔かな廣い手を空いつぱいにひろげて、野菊だの、柊だの、春蘭だのゝ上を掩うて、涼しい蔭を作つてやりました。

　山の麓から多勢の樵夫たちが斧をかついで上つて來ました。

「この樟だ。」と一人の片眼の男が聲をかけました。

「なるほどこいつは立派な樟だ。これなら御領主さまのお城の普請に持つて行つて獻上したら、たいした御褒美がいたゞけようぞ。」と顔中ひげだらけの男がいひました。樟は荒くれた男たちの話を聞いてどんなに驚いたでせう。男たちは樟の下で斧の刃を研ぎはじめました。

「今日は何といふ熱い日だらう！」

「でも、この樟の蔭にゐればまるで極楽だ。こんな凉しいことはない。」

こんなことを話しながら、樵夫たちは斧を振り上げては樟の幹を伐りはじめました。

「この樟はどれくらゐの年だらう？」

「さあ千年もたつたかなあ。」

「いや、とても千年ではきくまい、二千年ぐらゐ經つだらう。」

かたん、かたん、かつ、かつ、と斧の音が遠く谷底まで響きました。

「あゝ、熱い、とても苦しい。もうおひるだらう。一休みしてからかゝるとせう。」片目の男がかういひました。

多勢の男たちは樟の凉しい木蔭でおひるのごはんを喰べました。そして草の上に寝ころびましたが、いつの間にかぐう／＼と眠つてしまひました。

幹をもう半分ばかり切られた樟は、草の上に眠つてゐる樵夫たちを見ました。斧を枕に眠つてゐる片目の男の上を太陽の光りがぎら／＼と照りつけてゐました。

樟は片目の男を可哀さうだと思ひました。樟は自分の廣い手をひろげて太陽の光りをさへぎつてやらうとしました。けれども樟はもう幹をずゐぶん斧で切られてゐましたので、からだぢうが痛んで、手がわな／＼と顫へて思

ふやうに手をひろげることができませんでした。

それでも樟は痛む兩手をひろげて、眠つてゐる片目の男のために涼しい小蔭を作つてやりました。

「おや、これは寢すぎたぞ。さあ起きた、起きた。」片目の男は草の上に眠つてゐる仲間を搖りうごかしました。

樵夫たちはふたゝび斧を持つて立ち上りました。そしてかつかつと音を立てゝ樟の幹を伐りはじめました。

「おい若い者二人ばかり木にのぼれ。そして綱を結びつけるんだ。」と片目の男が腰から長い綱を、そばに立つてゐた若者にわたしました。二人の若者が樟に上つて行つて綱を結びつけました。

日が暮れる少し前でした。樟の幹はたいてい斧で伐られてしまひました。

「おうい、みんな、下の方にまはつて綱を引くんだぞ。」と片目の男が言ひました。みんなは綱を握つて下の方にまはりました。

片目の男と、顏中ひげだらけの男とが斧を振り上げて最後の一擊を樟の幹に加へました。樟はものすごい悲しみの聲を立てゝ、草の上に倒れました。巢に眠つてゐた鳩が驚いて眞つ赤な夕燒けの空に飛んでゆきました。

しばらくはびく〳〵と樟の梢が痙攣をおこしたかのやうに顫へてゐましたが、やがて靜かに眠つてしまひました。

「あゝあゝ、おかげでさつぱりした。今夜からは思ふ存分星の光りも見られるぞ。」と春蘭がいひました。

「さうだとも、今夜からはお月さまだつて夜つぴてをがまれるぞ」と野菊がいひました。

「これではじめて胸いつぱいに呼吸ができるといふものだ。おかげでせい〳〵した。」と柊がいひました。

片目の男たちは樟の梢を伐り拂つて、大きな幹を山から谷に落しました。

樟はものすごい音を立てゝ、谷を滑ッてゆきました。

「あツはツはツ。あツはツはツ……」
春蘭も野菊も柊も手を打つて笑ひました。
「づうたいばかし大きくて能なしのもうろく爺が死んぢやつた。はツはツはツ……」
しかし樟は谷に落される前に、樅の間から小さな種子を草の中に撒いて行つたのを、誰も知りませんでした。
樟が伐られてしまつた山は急にひろびろとしたやうに思はれました。
星が草の上へまたゝきはじめました。月の光りが草一面を照らしました。
「さあ、今夜からおいらの世界がはじまるのだ。」
から言つて柊も、春蘭も、野菊も、草の上で露のお酒を飲みながら踊りはじめました。
あまり踊りつかれてみんなは草の上に眠つてしまひました。
月が曇つて來ました。風が恐ろしい勢で吹きつけて來ました。
柊や、野菊たちが眼をさました時は、雷が草の上をすさまじく叩きつけてゐました。
柊も春蘭も野菊も、樟の木蔭に逃げ込まうとしました。しかし、そこにはもう樟の影は見えませんでした。
夜が明けた時柊も春蘭も野菊も嵐に叩きつけられて息さへ切れ切れになつてゐました。
五六ケ月も經ちました。枯れた野菊の傍にちひさな樟の芽が五六寸も伸びてゐました。

正直な和尚さま

或る冬の日でした。

信濃の山をこえて、越後の方へいそぐ坊さまがありました。坊さまは笈をしよつてゐました。

ふもとの茶屋のおばあさんが、峠には追ひはぎが出るから、もう日はくれかゝつたし、明日の朝早く立つたらいゝでせう。といつて、とめました。

けれども坊さまは「いや／＼、わしは法師だ。そのやうな惡いものがゐては、山をこゆる旅人がこまるであらう。わしはその追ひはぎに逢つたら、わるいことをしないやうにお說敎をしてきかせよう。」といつて、暮れかゝつた山道を、ずん／＼歩いてゆきました。

「おい／＼。そこへゆくのは誰だい？」と、だしぬけに木立ちのなかゝら、大きな男が、長い刀をぬいて出て來ました。

「わしだ、わしだよ。心配することはない。」と、坊さまは平氣な顏で大きな男を見ました。

「おや、お前は坊主ではないか。わしのこの長い刀が目にはいらぬか？」とその男はいひました。

「長い刀は目にはいるが、ちつともこはくはないよ。」と、坊さまは、すました顏をしてゐました。

「恐ろしく大膽な坊主だな！」さすがに氣の強い山賊も、刀を見てちよつとも驚かぬ坊さまを見ては、かへつて氣味惡く思ふのでした。

「おい坊主、お前は金を持つてゐるだらうな？」と山賊がたづねました。

「あゝ旅をするのだから、金は持つてゐるよ。」と、坊さまはこたへました。

「おれは、お前の持つてゐる金がほしいのだ。」

「ぢや、お金はあげよう。」と、いつて、坊さまは、ふところのなかゝら金包をとり出して、そのまゝ山賊にわたしました。

「うむ、大分お金がはいつてゐるやうだ。」

山賊は包みを、うれしさうにかゝへて見ました。

「もう他にお金は持たぬだらうな？」と、山賊はたづねました。

「あゝもう他にお金は持たぬ。それだけだ。」と、坊さまはこたへました。

「ぢや、もう行つていゝ。ころもだけは坊主だからゆるしてやる。」

「ぢや、わしはこれから越後の方へゆくが、今度はわしの方からお前さんにたのむことがある。」と、坊さまはいひました。

「おれにたのむつて、何をたのむのぢや。」

「わしがお説教をしてきかせるから、しばらくそこへ坐つてきいてくれ。」

「坊主の説教なんか、誰がきくものか、はゝゝゝ……」山賊は笑ひながら、木立ちの中へはいつて行つてしまひました。

「縁なき衆生は度しがたしといふのは、お前さんのやうな人間のことだ。氣の毒なことだ。」

坊さまは越後の方へ、山を下つてゆきました。

一里ばかり下つたところに、小さな村里がありました。坊さまは一軒の宿屋を見つけて、そこにとまることにきめました。

笈の中から、お經をとり出して、佛壇の前に坐つて、お經を上げようとしますと、ぽとりと、笈のなかゝら、おちたものがありました。

坊さまは、へんだなと思つて、床の上におちたものを、手にとつて見ました。

「おや、これはお金だぞ。あゝ笈の中にもお金がはいつてゐたことをすつかり忘れてゐた。」と、ひとりごとをいひながら、急いで、わらぢをはきました。宿屋の人たちはびつくりしました。

「どこにお出かけになります。和尚さま？」

「いや、わしは山の中の追ひはぎ殿に逢ひにゆくのぢや。提灯を一つかしてくだされ。」

「追ひはぎに逢ひにゆくとおつしやるんですか？」

「はやく〱、提灯をつけてくれ！」驚いてゐる宿屋の人たちをあとにして、坊さまは、折から降り出した雪のなかを、出てゆきました。

「おうい！　おうい！　さつきの追ひはぎ殿。」と。呼んでは、峠の方へ走つてゆきました。

「何だ。何しに歸つて來たのだ法師。」と、山賊が木立ちの中から出て來ました。

「おい、追ひはぎ殿、わしが惡かつた。わしはもう一つ噓をついてゐたのだ。わしはさつき考へちがひしてもう他にお金は持たぬといつてふところの中の金包だけを、お前さんにわたしたが、この下の里でお經を上げようと思つて、

財布をあけたら、中からまたも一つの金包が出た。わしは、財布の中にお金がはいつてゐたことを忘れてゐて、お前さんに嘘をついたのだ。ゆるしてくれ。」と、いつて坊さまは、お金を山賊にわたしました。

山賊はびつくりして、そのお金を見てゐましたが、急に「和尚さま。あなたは仏さまに違ひない。わしは今日かぎり悪いことはよします。」と、いつて、雪の中に手をついて、泣いてあやまりました。

「さうかい。そんならさうしたがいゝ。しかしその金はお前さんにあげるよ。」と、いつて、坊さまは後も見ず、また雪の山をてく／＼下つてゆきました。

萬平ぢいさん

萬平ぢいさんはその朝もびつこ馬の脚をあついタオールであたゝめたり、かんこうを飲ませたりしました。

萬平ぢいさんは馬を見ることゝ、馬の療治をすることには、ふしぎなほどの天才を持つてゐました。

だから馬の市が立つごとに村の人たちは萬平ぢいさんを頼んで、馬を買ひに市まで出かけて行きました。

萬平ぢいさんはごし〳〵とびつこ馬の脚を二時間もこすつてゐました。ふしぎなことに馬はきちんと立つて歩くやうになりました。萬平ぢいさんはびつこ馬を曳いて、村の人たちといつしよに朝早く山を越えて馬市へ出かけて行きました。

勘作はまだ子供でしたが、お父さんが病氣をしてゐたので、弟の彌二郎と二人で萬平ぢいさんのうしろからついて行きました。

「勘作！　彌二郎！　お前たちも馬が欲しいのかい。」と萬平ぢいさんは二人の子供に聲をかけました。

「あい、いゝ馬が一疋欲しい。どうぞいゝ馬を見つけてくだせい。」と勘作がいひました。

「よし〳〵、わしが一番いゝ馬をお前たちにやすく買つてあげるぞ。」と萬平ぢいさんは毛むくぢやらな熊のやうな手に、大きな鉈豆煙管をつかんで、ぼかり〳〵煙草をふかしながら振りかへつて勘作と彌二郎を見ました。

「おやをかしいぞ。」と彌二郎が急にとんきやうな聲を出して、萬平ぢいさんの馬の前脚を見ました。

「何がをかしいのぢや？」萬平ぢいさんは馬の手綱を曳いたまゝ、彌二郎をふりかへつて見ました。

「馬の前脚がさ、昨日まで、この馬はびつこひいてゐたぢやねえか、をぢさん。」と彌二郎は、ふしぎさうに馬の前脚をながめてゐました。

「何こくだ。何がびつこ馬だ。昔から立派な馬だ。お前、馬市に行つてそんなことをいうたら、承知せぬぞ。」萬平ぢいさんは、わざと大きな眼をむいて彌二郎をおどかすやうにいつて、村の人々を見まはしましたがさすが自分もをかしかつたので笑ひ出しました。

「だつて、昨日までは、たしかにびつこ馬だつたもの。」と彌二郎はいひました。

「昨日までは病氣だつたのだ。それが今日はもうすつかりよくなつたので、馬市につれてつて賣るんだがのう。」と村の人が彌二郎にいつてきかせました。

「そんなことがあるかなあ、昨日まではびつこ馬だつたが……」

彌二郎にはふしぎに思へてなりませんでした。で、首をかしげて考へてゐました。

「彌二郎、馬市にいつたら、びつこ馬なんて、じやうだんにもいふんぢやねえぞのう。」と萬平ぢいさんは念を押しました。

みんなは三つ山を越して、或る町はづれの廣い草原の馬市へつきました。

勘作や彌二郎もびつくりしたほど、たくさんな馬が、草の中につながれてゐました。白馬だの、栗毛だの、青だの……。

みんなは一疋々々たんねんに馬を見てまはりました。

猿のやうな顔をした小男が出しぬけに萬平ぢいさんの馬をつかまへました。

「この馬賣つてくれよ。」
「高いぞ、この馬は、よい馬だからなあ。」と萬平ぢいさんはまじめくさつた顔でいひました。
「よい馬はよい馬ぢやなあ。」と、その小男は欲しさうな顔をしてみんなを見ました。
萬平ぢいさんは、その朝三つ目の山を越えた時、ふところの中から何か妙な藥を出して馬の背中にごし〳〵と塗りつけました。そしてブラッシユをかけましたら見ちがへるほど毛並や艶が美しくなりました。ですから、その小男が萬平ぢいさんの馬を欲しがつたのも無理はありません。
「いつたいいくらで賣つてくれます。」
「さうさなあ、第一毛並からしてこんなよい馬はないしなあ、どこの競馬に出しても、一等賞ばかりだ。去年なんか競馬の褒美だけでも三千兩から貰つたからなあ。この脚を見てくれ、どうだい。」萬平ぢいさんはいかにも自慢さうに、馬の前脚をかゝへて蹄を見せました。
「それはつい昨日まではなあ、萬平ぢいさん……」と彌二郎が話しかけましたので、萬平ぢいさんはびつくらして大きな咳をしてごまかしました。みんなはくす〳〵と笑ひました。
「いくらで賣つてくれます。」
「さあ、大まけにしてこれだけだ。」と萬平ぢいさんは左の手の指を五本開いて、それに右の拇指を一本加へて見せました。
「六百兩！」とその小男は頭のてつぺんから出たやうな聲を出しました。
「さうさ。六百兩ぢややすいや。」

「よい馬ではあるが、六百圓ぢや高すぎる。」

「ぢや賣らぬだけさ、はゝゝゝ……」萬平ぢいさんはわざと大きな聲で笑ひました。

それでも小男は欲しくてたまりませんでしたので右の指を五本ひろげて見せました。

「ぢや仕方がない。損だが、あまりあんたが欲しがるから、賣つてあげよう。」といつて萬平ぢいさんは五百圓の金をうけとつて、その馬を小男にゆづりました。

萬平ぢいさんは大よろこびで馬を見て歩きました。

「わし、この馬が欲しいと思ふが。」と彌二郎が尾の長い大鹿毛の前へ立ちどまりました。

「この馬が欲しいのかい。なるほどこの馬はよささうだ。どれわしが見てあげよう。」

萬平ぢいさんは大きな眼鏡を取り出して、馬の頭からたてがみを見ました。

「うん、これはいゝ馬だ……」

「いゝ馬かい、おぢさん。」

「いゝ馬だ。」

「ぢや買つてもいゝかい。」

「うむ、いゝ馬だ。これなら買つてもよからう。」萬平ぢいさんは馬の首から背、それから、おなかの方をずつと見てゐましたが終にうゝむと唸りました。そしていかにも感心したらしく馬を見つめてゐました。

「をぢさん買つて大丈夫かい。」と彌二郎がふたゝびたづねました。

「うゝむ……買つても悪いことはないが。」と萬平ぢいさんは急にへんな返事をしました。

「ぢや、どこかへんなところがあるの？」

「うゝむ……この馬は買はぬがいゝぞ。これは見かけだほしの馬ぢや。癖の悪い馬ぢや。」と萬平ぢいさんは答へました。そしてなほ熱心に馬のおなかだの蹄だのをしらべて見たり、馬を歩かせて見たりしました。

「でも、わしはこの馬が欲しいがなあ。」と彌二郎はいひました。

「お前たちのやうな小僧に何で馬のよしわるしがわかるものか。この馬は見かけはよいがぢき死んでしまふぞ。癖の悪い馬だ。」といつて、彌二郎を大きな眼でおどかすやうにして見ました。

馬を見ることの上手な萬平ぢいさんに、この馬はぢき死ぬのだ、癖の悪い馬だといはれて見ると、どうしても買ふわけにもゆきませんので、勘作や彌二郎はまたほかの馬をさがして歩きました。

今度は勘作が栗毛の若馬を見つけました。

「ぢや、わしはこの馬がいゝと思ふが、をぢさん見てください。」と勘作はいひました。

萬平ぢいさんはふたゝび大きな眼鏡を持ち出して若馬を見ました。

「これなら買つていゝ。實にいゝ馬ぢや。この馬は今に、すばらしいものになるぞ。早くこの馬をお買ひ。」と萬平ぢいさんはいひました。

勘作と彌二郎はその若馬を買つてしまひました。

村からいつしよに來た人たちもみんな萬平ぢいさんに見てもらつては一疋づゝ馬を買ひました。萬平ぢいさんはちよつと用事があるので後からかへるといひましたので、みんなはまた峠を越えて村の方へかへつて行きました。

ところがおどろいたことにはみんなが二つ目の山を越えてゐるころ、萬平ぢいさんがうしろから馬に乘つてみんなに追ひついて來ました。

「うむ、いゝ馬だなあ。早い馬だなあ。」とみんなはびつくりして、萬平ぢいさんの馬を見ました。

「おや、あの馬はわしが最初に欲しいといつた大鹿毛ではないか。」と彌二郎が大きな聲でいひました。

「さうだ、彌二郎がさつき欲しいといつた大鹿毛にちがひない。」と村の人たちもいひました。

「さつきはぢき死ぬから買はぬがいゝといふたぢやないか、萬平さん。何でそんな馬買うたのぢや。」

「あの大鹿毛ぢやねえよ。似てはゐるが、あの馬のきやうだい馬だ。」と萬平ぢいさんはいひました。

「うんにや、あの大鹿毛にちがひない。」

「さうぢやない、あの馬のきやうだいぢや、その證據はしつぽを見てごらん。さつきの馬は長いしつぽぢやつた。これはこのやうに短い。」と萬平ぢいさんはいひました。

みんなはしつぽを見ました。なるほど短いしつぽでした。

彌二郎も勘作もふしぎだと思ひましたが、仕方がないので、そのまゝだまつてゐました。

萬平ぢいさんは、彌二郎が見つけ出した大鹿毛があまりいゝ馬であり、それにおなかのなかへは、すでに仔馬をはらんでゐるのを知つたものですから、彌二郎に買はせるのが惜しくなつたのでした。ですから、わざと彌二郎には惡い馬だといつて買はせないで、みんなが馬市からかへつてしまつたあとで、こつそり行つてその大鹿毛を買つたのでした。そして大きな鋏を借りて、長い馬のしつぽを、短くかりこんでしまつたのでした。

萬平ぢいさんは大鹿毛に乘つて、大きな鉈豆煙管を、ぽかり〳〵とふかしてはひとり笑ひをしながら、みんなのう

しろからやつて來ました。
びつこ馬を知らないで買つて歸つた小男のことや彌二郎をごまかして買つてしまつた自分の大鹿毛のことを考へると、世の中に自分ほど悧巧な人間はないやうに思はれるのでした。
「ふゝゝゝゝ……はゝゝゝ……」萬平ぢいさんはひとりで馬の上で笑ひ出しました。
萬平ぢいさんの大鹿毛は、村中の評判になりました。だれもかれもが、すばらしい大鹿毛を見に來ては、あまり立派な馬なのでおどろきました。
萬平ぢいさんは大得意でした。
「びつこ馬は五百兩に賣るし、こんなすばらしい大鹿毛は買つたし、今年は豐年だぞ。それにもうおなかのなかには仔馬がはいつてゐる。今にどんなすばらしい仔馬が生まれるだらう。」から考へただけでも萬平ぢいさんはうれしくてなりませんでした。世界中の幸福を自分ひとりでしよつたやうな氣がいたしました。
大鹿毛はそれから間もなく仔馬を生みました。萬平ぢいさんは大よろこびで厩に駈けつけました。
「さあこれでいよく〳〵びつこ馬のかはりに名馬が一度に二頭になつたぞ!」萬平ぢいさんは大喜びでございます。そしてあまりうれしかつたので厩の前で踊りました。
ところが大鹿毛は仔馬を生むと間もなく難產のために死んでしまひました。おまけに仔馬もまた母親の乳が飲めないで死んでしまひました。萬平ぢいさんは厩の柱につかまつて泣いてしまひました。

勘作と彌二郎は鹿毛栗毛の馬を可愛がつて育てました。もと〳〵いゝ馬でしたから勘作の家に來てから、めき〳〵とすばらしい馬になりました。そしてこの馬もまた翌年仔馬をうみました。

村の人たちはまた翌年も馬市へ出かけました。

萬平おぢいさんは一頭の馬も持たなくなりましたから、村の人たちといつしよに馬を買ひに行きました。

勘作と彌二郎はかはる〴〵栗毛に乘つては、仔馬をつれて山を越えて馬市を見に出かけました。

「何といふいゝ馬だらう。こんなにいゝ馬を見たことがない。」馬市に出張して來てゐた種馬所の役人たちは、勘作の栗毛の親子を見て、びつくりしてかういひました。みんながあつまつては栗毛を見ておどろきました。

勘作と彌二郎は、うれしくてうれしくてなりませんでした。

「おうい、ちよつと待つてくれ。」と大きな聲でたれかゞ呼んでゐました。振りかへつて見ると萬平おぢいさんを追つかけて來る小男がありました。それは去年萬平おぢいさんからびつこ馬を高く賣りつけられた猿のやうな顏の男でした。

萬平おぢいさんは見てゐる間に、ぶる〳〵とふるへて眞青な顏をしました。

「おい、おぢいめ、よくもおれにびつこ馬を五百兩に賣りつけたな。」小男はびつこ馬を曳きながら背の高い萬平おぢいさんの胸倉にしがみつきました。

「おれはそんなきたない馬は見たこともない。」と萬平おぢいさんがいひました。なるほど馬は見るかげもなく毛並も惡るく、つやもなくなつてゐました。

「去年、お前がおれに五百兩で賣つた馬ぢやないか、買つて山の峠一つ越えたらびつこになつてしまうたのぢや。」

「わしはそんな馬は知らぬ。」と萬平おぢいさんはいひはりました。しかし馬の方では元の飼主の萬平おぢいさんをよくお

ほえてゐて、なつかしさうにいなゝきながら近づいて來て、いかにも馴れ〳〵しい風で萬平ぢいさんの肩に自分の顏をこすりつけました。

「それ見い、馬の方でそんなになついてるぢやねえか。」小男は猿のやうな顏を眞赤にしていひました。

萬平ぢいさんは五百圓のお金をその小男にかへして、おまけにびつこの馬を曳いて村へかへらなければなりませんでした。

勘作と彌二郎は栗毛の上から振りかへつては萬平ぢいさんを見ました。そしてくす〳〵と吹き出して笑ひたくなるのを、がまんしてゐました。

村の人たちもみんな馬のおなかへかくれてはくす〳〵と笑ひました。萬平ぢいさんは泣き出しさうな顏をして、びつこ馬を曳いてみんなのうしろから峠を越えてかへりました。

水車の新作

新作は今日も朝から、川の縁の水車小屋を出て、町の方へゆきました。

新作はお父さんも持たず、お母さんも持たず、この世界に一人ぼつちの少年でした。

お父さんが生きてゐた間は川の縁の水車もまはつてゐて、幸福に暮してゐたのでしたが、お父さんが亡くなると家も畑も悪い人にとられてしまひました。お父さんが死ぬと間もなくお母さんも亡くなりました。後には盲人の祖父さんだけが生きのこつてゐました。新作は町に出かけて行つては町の人のお使ひをしたり、薪を割つたりして、少しばかりのお金をもらつて祖父さんを養つてゐました。

しかしその祖父さんも去年、川に落ちて死んでしまひましたので、それからは新作はいつもたつた一人で、こはれてしまつた水車小屋の隅の方に住んでゐるのでした。朝になれば毎日町の方へ出かけて行つて、働いて來るのでした。あまり着物がきたないものですから町の子供たちは新作を見ると「乞食の子ッ！」と言つて石を投げました。

新作にはこの世界に一人の友達もありませんでした。やさしい言葉一つかけてくれる人もありませんでした。新作には空に鳴いてゐる小鳥や、道ばたの花の方が、よつぽど人間よりかなつかしいやうに思はれました。新作が川の縁を歩いてゐると小鳥たちは「新作さんお早う！」と言つてゐるやうに思はれました。

もし、喰べるものさへあつたら、いたづらつ兒のゐる町へはいつまでもゆくまいと思ふこともありました。

今日も町に行つて、いつも手傳ひにゆくお寺の庫裡で薪を割つて和尚さんにいたゞいたお錢でお米だの、味噌だの

を買つて新作は歸つて來ました。町の出はづれで新作は五六人のいたづらな子供たちに取りかこまれてしまひました。惡戲な子供たちはいつものやうに「乞食の子ッ！」と言つては石を投げたり、竹ぎれをぶつつけたりしました。でも新作は他の子供たちよりはずつと走ることが上手でしたから石を投げつけられながらも逃げることができました。お米と味噌を懷の中に大事に抱いて川の縁まで逃げてから、新作ははじめてほつとしました。

土堤の地藏さまの御堂の屋根には、いつもの鳥が「新作さんお歸り！」といふやうな聲で鳴いてゐました。夕暮の空が眞赤に燒けてゐました。

「あの夕燒けの空の彼方に行つたらお父さんや、お母さんがゐるのかも知れない。あすこに行つたら、だれも石を投げたり、乞食の子なんて言ふ人はゐないだらう！」

かう思ふと、早く夕燒けの空の彼方へ行きたくて、仕方がありませんでした。

「なぜ僕はいつも一人ぼつちなんだらう！」

新作はぼんやり考へ込んで夕燒けの空を見つめてゐました。恰度その時うしろから新作の肩を叩く者がありました。新作はびつくらして振りかへりました。

「君何考へてゐるの？」

若い男がにこ〳〵笑ひながらからかうたづねました。その男は赤い筒袖の短い着物を着てゐました。同じ色のもゝひきをはいてゐました。着物の襟には字が書いてありましたが、その男は笑ひながらその字の書いた布を破いて捨てゝしまひました。それからまたその男は腰につないであつた鐵のくさりをいま〳〵しさうに捨てゝしまひました。

新作にはその男が何であるかすこしもわかりませんでしたが、最初はなんだか氣味が惡いやうでした。「ひよつとし

たら牢破りの懲役人ぢやないかしら？」と思ひました。けれどもそれにしては、あまりにやさしい顔をして、あまり温順しい眼をしてゐました。「君、どうしたの？」とその男はふたゝび言ひました。そして笑ひました。

「僕一人でこれから家に歸るの。」と新作はその男の顔を珍らしさうにながめました。

「君の家は何處？」

「あの深い葦の中の水車小屋。」

「僕も、そこにつれて行つてくれない？」

「あゝつれて行つて上げよう。」と新作は言ひました。

その男と話しながら歩いてゐる間に新作はその男が好きになりました。その男は道々高い木にからみついてゐる木の實を取つてくれたり、高い枝の美しい花を折つてくれたりしました。新作は今までそんな親切な人に逢つたことがありませんでした。

新作は直ぐその男と仲善しになりました。

その男は新作といつしよに水車小屋の隅の方で、いつしよに晩のごはんをたべました。

「まあ、可哀さうに君は一人でこんなところに寝るのか。さびしいだらうなあ。」かう言つてその男はきたない部屋の隅々まできれいに掃除をしてくれたり、倒れかゝつてゐる壁に突つかい棒をしてくれたりしました。

「僕も、世界でいつも一人ぼつちなんだよ。」

「ぢや、僕の兄さんになつておくれよ。」

「兄さんになつてあげたいけれど、いつまでもこゝにはゐられないんだから。」とその男は言ひました。

「どうして、いつしよにをれないの？」

「いまに分るよハッハッハッ……」と、その男はさびしさうに笑ひました。

「今夜だけ、こゝに置いてくれたまへ。」とその男はまをしました。

「一年でも二年でも、こゝにゐておくれ。」と、新作は言ひました。

「僕はゐたいけれども……」と、その男は深い溜息をつきました。

二人が晩のごはんをたべてしまつたころ大きなお月さまが川の向う岸から出てまゐりました。

「いゝ月だなあ。久しぶりにこんな月を見た。」と、その男は言ひました。

「君は、笛を持つてゐるかい？」

「もう、せんに一つ祖父さんがこしらへてくれたけれど、無くしちやつた。」

「そんなら僕がこしらへて上げよう。」

その男は水車小屋の裏の竹藪の中にはいつて行つて、竹を一本伐つて來ました。それから三十分ばかりの後にはその男は立派な笛を一つこしらへてゐました。

「吹いて見ようか？」とその男に言ひました。

「あゝ。」

その男は上手に笛を吹きました。笛を吹きながらも、その男はしよつちう屋外の跫音に氣をつけてゐました。

「ほんたうに面白いなあ……」新作は手拍子をとつて唄ひました。

月はだん〳〵明るく、そして高くのぼつて行きました。その男の吹く笛の音はだん〳〵冴えて來ました。新作はう

れしくてたまらないので、しまひには躍り出しました。

新作は五年でも十年でもその男のやうな親切な人といつしよに生きてゐたいと思ひました。もしこの世界にその男のやうな人がたくさんゐたら、どんなにか幸福だらうと思ひました。二人は水車小屋の隅に藁を敷いて寝ました。

「君、君のお父さんか、誰かの、古い着物はないの？」と、その男はたづねました。

川にはまつて死んだ祖父さんの着物が一枚柱の釘にかけられたまゝになつてゐました。

新作はその着物を、その男にやりました。男は赤い着物を捨てゝしまつて、祖父さんの着物と着替へました。

「今夜は初霜かな、ばかに寒い。」家のまはりを、ずつとひとまはり見まはつて來た男は、かう言つて新作の横にごろりと寝ころんでしまひました。

新作は藁の寝床の中に、まるで自分の兄さんにでも抱かれたやうにすや〳〵と眠りました。藁の寝床はいつになくあたゝかでした。

新作はほんたうに幸福でした、あんまり嬉しいので時々眼をさましました。新作が眼をさましてその男を見ると男は「はやくおやすみ、僕がゐるから安心しておやすみ。」といひました。戸口からさし込んで來る月の光りがその男の顔を白く照らしてゐました。

新作はその男の胸にしがみつくやうにして幸福な夢を見ました。しかし新作が四度目に眼をさましてその男の顔を見ようとした時でした。新作はがつかりしました。もうその男はそこにはゐませんでした。新作は驚いて跳び上りました、そして小屋の中を探しました。家のまはりを探しました。しかしその男の姿は見えませんでした。

「夢だつたのかしら？」かう默つて部屋の中を見ました。そこには昨夜その男が作つてくれた笛が、ちやんと窓のわ

きに置いてありました。

新作は笛を握つたまゝぼんやり窓の外を見ました。月がまだかなり高くかゝつてゐました。葦の上には深い霜が一面に漂うてゐました。

新作は夜が明けるまで眠られませんでした。夜が明けてから、またいつものやうに町の方へ出かけてゆかねばなりませんでした。道を歩きながら、その男に似た人を探しましたが、たうとうその男の姿は見えませんでした。

夕方すつかり疲れて歸つて來る時でした。新作は土堤の上から、劍をさげた男や、ピストルを持つた男たちが七八人で葦の中を探してゐるのを見ました。一人の男は馬に乘つてゐました。

「昨日、監獄から逃げた男があるんだとさ。」

「若い美い男だつてさ。」畑に働いてゐる人たちがこんなことを話してゐました。新作はどしんと胸を突かれたやうな氣がしました。

「きつと、あの人なんだらう。でも、どうしてあんなやさしい人が監獄なんかに入れられたんだらう！」新作には大人の世界といふものが不思議でなりませんでした。

新作は水車小屋に歸つて來ました。やつぱり元のところに笛が置いてありました。

新作は笛を握つたまゝその男のことを考へてゐました。劍やピストルを持つた恐ろしい人たちの顏が眼に寫つて來るのでした。

「早く、お逃げよ。早く、早く……」新作は夕燒けの空を見ながら、あてもなしにこんなことを言ひました。

イワンの歎き

「イワン、イワン、イワンの馬鹿よ。
雪が降つても
クリスマスが来ても
山の柊に赤い提灯がついても
靴は破れ靴
馬は痩せ馬、イワン、イワン、イワンの馬鹿よ。」

村の子供たちはイワンが客を乗せて馬を駆つてゐると、いつもこんな歌をうたひました。

早くお父さんとおつ母さんを亡くしたイワンは、田舎の叔母さんに引きとられて、小学校もほんの二年か三年、出してもらつただけで、十一の時から叔母さんの家の馬車を御しては、隣町の方へ稼ぎに行かなければなりませんでした。

叔母さんは、イワンの亡くなつたお父さんのきやうだいでしたが、はじめからイワンをひどくあつかひました。そして気にいらないことがあれば「お前の父さんは酒飲みで、馬鹿だつたから、お前のおつ母さんのやうなヂプシイの娘なんかをおかみさんにしたんで、お前のやうな馬鹿が生まれたんだ。」と口汚く、亡くなつたイワンのおつ母さんのことを罵りました。

チプシイといふのはヨーロッパの國をさまよひ歩く人たちで、國も持たなければ、きまつた家も持たないやうなあはれな人々です。よく歌をうつたり、樂器を彈いたりして世界中を放浪する旅人です。ですから、どこの國でもヂプシイは乞食か何ぞのやうに輕蔑されてゐます。

イヷンのおつ母さんは美しい女でしたが、麥の穗が黄金のやうに太陽の光りにかゞやいてゐる夏の日など、イヷンを抱いて涼しい木蔭で面白い歌をうたつてくれました。村の人たちがヂプシイだと言つて、どんなにイヷンのおつ母さんを輕蔑しても、イヷンには、世界中でおつ母さんよりやさしい人はありませんでした。

ですから叔母さんや叔父さんに叱られて、たゞ一人で麥畑などを見つめてゐると亡くなつたおつ母さんのことが思ひ出されてなりませんでした。そんな時、イヷンはよくおつ母さんがうたつてくれた歌を思ひ出しましたが、たいてい歌の文句は忘れてしまひました。

叔父さんといふ人もあまり心のよくない人で、馬を盜んだり、旅人を馬車に乘せてたくさんの金をむさぼるやうなことを平氣でしてゐました。

或る寒い雪の日でありました。一人の赤ん坊をつれた若い旅の女が、イヷンの叔父さんの馬車に乘りました。そして町の入口でお金を拂ふ時になつて、その若い女は途中でお金をすつかり落してしまつたことに氣付いたのでした。

叔父さんはたいそう怒つて、その若い女のきれいな帽子から上着から靴までひつたくつてしまひました。それでもなほ馬車賃に足りないと言つて、赤ん坊の外套まで取つてしまひました。

叔父さんが、旅の女の上着や靴を持つて歸つて來た時、叔母さんはたいへん喜びました。そして自分でその帽子を冠つて見たり、その上着を着て見たりしました。

叔母さんはそのあけの日の日曜日に、その帽子を被つて、上着を着てお寺へ説教を聴きにゆきました。みんなは貴婦人のやうだと云つてイヷンの叔母さんを見ました。

イヷンは叔父さんの話を聞いた時、雪の中をはだしで、上着もなしに歩いて行つた旅の若い女のことや、可哀さうな赤ん坊のことを考へました。

叔母さんが日曜の朝のお寺の説教をきゝに行つて、歸つて來て間もなく、叔母さんの家ではたいへんなことがおこりました。

叔母さんがお寺から歸つて來て大事に部屋の壁にかけておいたその旅の女のきれいな上着も帽子も家の中に見えなくなつてしまつたのでした。叔母さんはもしかと思つて靴をしまつて置いたところに走つて行つて見ました。やつぱり靴もありませんでした。赤ん坊の外套もありませんでした。

叔母さんは大急ぎで、裏の山で働いてゐた叔父さんを呼んで來ました。イヷン！　イヷン！　イヷン！　とそこいらをさがして見ましたが、イヷンもゐませんでした。

「おやツ！　薄のろのイヷンが盜んだ！」と叔母さんがいひました。

ちやうどその時、七つになる叔母さんの娘が馬小舍から走つて來て、

「おつ母さん、馬も馬車もないよ。」といひました。

叔父さんや叔母さんが馬小舍の前で大騒ぎをしてゐたころは、イヷンは旅の女の上着だの靴だのを掴んで、雪の中を馬車を走らせてゐたのでした。

イヷンは町の入口に來ると、そこいらの人に「こゝに若い女の人で、赤ちやんをかゝへた旅人が通りはしませんでしたか。」とたづねました。

日が暮れるまでに、イヷンは三つの町を通りぬけました。しかしその日はたうとうその女を見出すことはできませんでした。

その夜はひどい吹雪が夜つぴて廣い野の中の町を吹きつけました。

イヷンは或る町はづれの水車小屋の蔭に馬をいたはりながら一夜を明かしました。

夜が明けるのを待ちかねてイヷンは旅をつゞけました。

その日もイヷンは三つの町を通り拔けました。でも、やつぱりその女を見出すことはできませんでした。

三日目の夕方でした。イヷンは雪につゝまれた廣い野原の中に、夕燒けの空に映つてぎら〳〵とかゞやいてゐるお寺の丸屋根を見出しました。さうすると不思議と、今まで衰へてゐた勇氣がとりもどされて來るのでした。

「今度こそ旅人に出逢ふかも知れない。急いでおくれよ。」かう言つてイヷンは馬の背を輕くたゝきました。

馬も急に勇み立つて雪の中を走りました。

近いやうに見えても、その町まで行きつくにはなか〳〵ひまがとれました。

太陽がだん〳〵雪の地平線の下に沈みかゝつてしまひました。

町の入口にたどりついたころは日はすつかり暮れてしまひました。雪の上を町の家々の燈がかすかに照してゐました。

丸屋根のお寺は直ぐ知れました。そこには幾千といふ人々が集まつて、明日の朝のお勤めを待つてゐるのでした。

イヴンは幾度も、旅の女のことをたづねて見ましたが、誰も赤ん坊をつれた女に逢つたものはないと言ひました。

イヴンはその夜は、お寺の裏の廣場に馬といつしよに夜を明かすことにしました。人々はあつちでもこつちでも、廣場に火を焚いて朝のお勤めを待つてゐるのでした。

イヴンも馬を連れて焚き火の方へ近寄つて行きました。

夜明けすこし前でした。イヴンは赤ん坊がしきりに泣いてゐるのに氣付きました。イヴンは赤ん坊の泣き聲の方を見ました。そこには一人の若い女が赤ん坊を抱いて焚き火の前に立つてゐました。

その若い女は上着も持ちませんでした。赤ん坊は外套も持ちませんでした。女は靴をはいてゐませんでした。

イヴンは女が立つてゐる焚き火の方へ進んでゆきました。

そしてびつくりしてゐる女に上着と靴と帽子と外套をわたしました。

旅の女は涙を流してよろこびました。間もなくお寺の扉が開かれ、朝の勤めがはじまりました。

イヴンは赤ん坊を抱いた若い女といつしよに朝のお勤めにおまゐりをしました。赤ん坊を抱いた女は、そこの町からまた三日も四日も旅をつゞけなければなりませんでした。けれども、金を落してしまつたので、馬車に乘ることもできないし、雪の中を赤ん坊を抱いて歩いてゆきました。

「おやあ僕の馬車にお乘りなさい。」イヴンは女の後を追つかけて行つて、女を馬車に乘せてやりました。

夜も晝もイヴンは馬車を走らせました。三日目の朝イヴンは女の町に着きました。

その女は町でも二人とないといはれるほどの大金持の娘だつたのです。ですから親切なイヴンの話をきいた時、娘の親たちはイヴンを神樣のやうに喜んで、毎日お客さまを呼び集めてはイヴンをもてなしました。

大金持はイワンを自分の家の子供にしようと考へました。けれどもイワンは大金持の子供なんかになるよりか、馬車を驅つて毎日お客さまをはこぶのが面白いからといつて、或る日みんなにわかれて叔母さんの家へかへることにしました。

大金持はイワンの馬車いつぱいにパンだの、羊だの、お金だのを積んでやりました。

イワンは一人で町を出ました。みんなが町はづれまで來て別れを惜みました。もう雪は解けてしまつて麥の穗が柔かな春の風に吹かれてゐました。

イワンは幾日も廣い〱麥の野を旅しました。

或る町に通りかゝつた時、イワンはたくさんの人たちが饑饉でくるしんでゐるのを見ました。イワンはその人たちに馬車の中のパンも羊もやつてしまひました。

また或る町に着いた時、イワンはたくさんの貧乏な人たちが困つてゐるのを見ました。イワンはその人たちに馬車の中のお金をやつてしまひました。

また或る廣い草原を通りぬけてゐた時一人の巡禮が、足を痛めてゐるのを見ました。イワンは自分のいゝ靴下と靴と、その巡禮の破けた靴下と靴とをとりかへてやりました。

イワンは三ケ月目に叔母さんの家へ歸りました。まるで乞食のやうになつて。

叔父さんは五日の間、イワンを馬小舍にくゝりつけたまゝパンも水もくれませんでした。

「イワン。お前は何といふ惡者だ。馬鹿だ。よくその苦しい日をいつまでも覺えてゐるがいゝよ。」叔母さんはかういつて憎々しさうに笑ひました。

その後、イヴンが一生どんな立派な生き方をしたか、また叔父さんや、叔母さんがどんな悪い生き方をしたかといふことは、みなさんに想像がつくでせう。

イヴンの話は、こゝで五十年も飛びます。

イヴンも、イヴンの叔父さんも叔母さんも死んでしまつて、三人が神さまの世界へ行つた時のお話になります。

馬車屋のイヴンは神さまの世界では、いつも神さまのおそばに坐ることができる身分になつてゐました。けれどもイヴンは自分の叔父さんや叔母さんが天國に來てゐないことを、いつも悲しんでゐました。

或る日神さまがイヴンにおたづねになりました。「イヴン！お前は何でいつもそんな悲しい顔をしてゐるのだ？」

「神さまわたくしの叔父と叔母はまだ地獄で苦しんでゐます。あの人たちもどうぞ神さまのおそばにつれて來たいのです。」とイヴンはまをしました。

「お前がそんなにあの腹黒い叔父や、叔母を助けてやりたいのならお前に免じて二人を天國へ引上げてやらう。」かういつて神さまはイヴンをつれて、天國の高い塔の上から地獄を御覧になりました。

暗い地獄の底ではイヴンの叔父さんや叔母さんが、馬の悪魔に追はれて血の海の岸に倒れてゐました。

「あすこに、お前の叔父と叔母がゐる。お前は昔、巡禮の破れた靴下とお前のいゝ靴下とを取りかへて、巡禮を助けてやつたことがあつた。その時のお前の靴下は私が今こゝに持つてゐる。」神さまはその古い片方の靴下を袂から出してイヴンにおわたしになりました。

「この靴下の糸をほごして地獄に投げてごらん。」

イヴンは靴下の糸の一端を地獄の底へ落しました。今まではよごれた糸のやうでしたが、それが急に星の光りのや

うに美しいものになりました。長い〳〵銀の糸になつて靴下の糸が地獄に着いた時、イヷンの叔父さんと叔母さんはどんなによろこんだでせう。

二人はその糸にすがりつきました。イヷンはその糸を手繰りはじめました。

イヷンの叔父さんと叔母さんがうれしさうに、ふは〳〵と雲のやうに浮いて天國へ昇つて來るのでした。

だん〳〵二人の影がちかづいて來ました。イヷンは二十年振りではつきり叔父さんと叔母さんの顏を見ることができました。

「あゝ、イヷン、イヷン！」

と叔母さんが叫びました。その聲が天國のイヷンにきこえるほど近くまで二人はちかづいて來たのでした。

しかし、その時でした。暗い空に呻き、なやんでゐた地獄の人たちが、天國へ引き上げられてゆく二人の姿を見つけましたので、たれもかれもと二人の後を追つかけて來ました。そして一人の男が手をのばして、第一にイヷンの叔父さんの足を掴みました。また他の一人の女が手をのばしてイヷンの叔母さんの足にとりつきました。第二の男第三の男第四の女といつたふうに、千人、二千人、三千人の男や女がみんな手から手、足から足へとつながりました。

イヷンは古い靴下の糸を一生懸命に引き上げました。

イヷンは幾千といふ人々のよろこびの聲をきいてびつくらしました。そして地獄の方を見ました。たゞ一本の小さな靴下の糸は幾千といふ地獄の人々を樂々と天國へ引き上げてゐるのでした。

天にも、地獄にもよろこびの聲があふれました。

しかしイヷンは眞つ先に靴下の糸を掴んでゐる叔父さんと叔母さんが後を振りかへつては何か口ぎたなく罵つてゐ

ゐのを見ました。

「これはわしの甥のイワンの靴下の糸です。だから天國へ行くのはわたしたち二人だけなんです。」

とイワンの叔母さんがいひました。

「さうだとも、お前さんたちは地獄の底にゐて何萬年でも苦しむのがあたりまへだ。」イワンの叔父さんがいひました。

「そんな意地の惡いことをいはないでわたしたちもいつしよに神さまのところへつれて行つてください。」

と一人の女がいひました。

「どうぞお願ひですから……」

と一人の男がいひました。

「どうぞ、どうぞ……」

と三十人の男や女たちが泣き聲をあげていひました。

「何ていひ草なんだい、ばか〳〵しい。」かういつてイワンの叔父さんが一人の男の頭をいやといふほど蹴りました。

「さうだとも、みんなどうしてこんなにずう〳〵しいんだらう。」といひさまイワンの叔母さんが一人の女の横腹を蹴りました。

ちやうどそのはずみに、叔母さんと叔父さんが握つてゐた古い靴下の糸がぷつりと切れました。

わあつと、まるで熱い蟲のやうな呻き聲が地獄の底で聞えました。

イワンの叔父さんも、叔母さんも眞つ倒さまになつて再び元の地獄へ落ちてゆきました。

イワンはかなしげに地獄の底を眺めてゐました。

「イワン。今のは右の靴下だつた。まだわしの袂にはお前の左の靴下がある。もう一萬年お待ち、さうするとわたしはお前に左の靴下をかへして上げよう！」と神さまはおつしやいました。

歩哨の話

ロシヤのニコライ・レエスコフといふ人の書いた物語のうちから、日本の大岡裁判に似てゐて面白いと思ひました一つの話をこゝに書いて見ました。

西暦千八百三十九年の冬、ロシヤの都ペテルスブルグではめづらしく春のやうなあたゝかな日がつゞきました。そのために雪が解けはじめてニコライ皇帝がお住ひになつてゐる冬宮の前をながれてゐるネヴァ河の面にも、ところどころに氷が解けて、大きな氷の穴ができました。

西風が海の方から強く吹き寄せて來て、そのために海水がネヴァ河へ押し上げられて來たので、危險を知らせる大砲の音がたえず聞えてゐました。

その時、冬宮の御警衛にあたつてゐたのはイスマイロブスキイ聯隊の一個中隊で、ニコライ・イバノヴイッチ・ミラアといふ若い大尉が中隊長をつとめてゐました。ミラア中隊長は評判のいゝ、氣のやさしい人でありましたが、この人が冬宮の衛兵司令をしてゐる間に、大變な事件が持ちあがつたのでした。

ニコライ皇帝はその日、御馬車に召されて夕方冬宮におかへりになつて御きげんよくおやすみになりました。冬宮全體が眠つたやうに靜かでした。

ミラア大尉は夜がふけるまで司令室でしづかに本を讀んでゐました。午前三時ごろでした。歩哨勤務についてゐた

一人の軍曹が、まつ青な顏をしてふるへながら司令室にやつて來ました。

「中隊長殿、大變な事件が起きました。」とまをしました。

「大變な事件！」ミラア大尉も驚いて飛び上りました。

大變な事件といふのはかうなんです。

いつたい陸軍では鐵砲を持つた步哨といふものが大切な地點に立つて警戒してゐますが、ふだんは步哨が立つてゐるところには、きつと哨舍といふ番小屋があります。步哨はいつも哨舍の直ぐ前に立つてゐることにきまつてゐます。もし戰時であればその場所からはなれたりすると銃殺されるといふほど、きびしいきまりがあるのです。どんなことがあつても、哨舍から十步とか十五步とかより遠くはなれることはできない規則になつてゐます。

その晩のことです。イスマイロブスキイ聯隊のポスニコフといふ一兵卒が冬宮の步哨に立つてゐました。ポスニコフといふ男も氣のやさしい、ものごとに感じ易い性でしたが、夜中に自分が立つてゐるすぐ前の川のなかゝら「助けてくれ！」と呼ぶ聲がつたはつて來るのをきゝました。

ネヴア河の氷が解けて、そこに誰か落ちて溺れかゝつてゐるのでした。

ポスニコフは闇のなかをぢつと見まはしました。しかしそこには、人の影も見えませんでした。

「助けてくれ！」ふたゝびかなしげな叫び聲が河の中から聞えました。

ポスニコフは氣のやさしい男でしたから、聲のする方へ飛んで行かうとしましたが、ふと自分が今大事な步哨に立つてゐることに氣づきました。

「溺れかゝつてゐる人を救ふことはいゝことであるが、自分は今大切な歩哨に立つてゐるのだ。だからどのやうな理由があつても哨舎から勝手にはなれて河の方へ飛んで行くことはゆるされない。もし巡察將校にでも發見されゝば、軍法會議に廻されて監獄にはいらなければならぬし、場合によつては銃殺されるかも知れない。」ボスニコフはさう思ひました。

「誰も助けてくれる人がゐなければ、あの男は氷の下に溺れてゆくだけのことだ。わしは冬宮の歩哨に立つてゐるのだから、ちつともこの場所をはなれるわけにはゆかないのだ。」ボスニコフはかう思つて、ぢつと河の方から聞えて來る聲をきいてゐました。

三度河の方から溺れてゆく男の聲が聞えました。

「助けてくれ！　助けて……」ボスニコフの腸にしみるほどに悲しい聲がひゞいて來ました。

ボスニコフはもう自分が歩哨に立つてゐることも、暗い監獄のことも、銃殺のことも忘れてしまつて、鐵砲をさげたまゝ河の方へ走つて行きました。そしてあたりをぢつとながめましたが、遠くにたゞ一つの燈が見えたきりで、誰もゐませんでした。ボスニコフはなほも氷の上を、聲の方へ走つてゆきました。

黑い影が氷の上に動いてゐました。ボスニコフは小銃を黑い影の方へ突き出しました。溺れかゝつてゐた男は小銃につかまつて、ボスニコフの方へ引き寄せられました。ボスニコフはその男を河のなかゝら抱き上げました。ボスニコフもちやうど溺れた人のやうにすつかり濡れてしまひました。

溺れかゝつてゐた男は救ひ上げられたうれしさにひどく興奮してゐましたが、寒さのためにふるへながらそこに倒れました。ボスニコフは河の岸まで運んで行つて介抱してやらうと思つて、倒れてゐる男を抱きかゝへようとしてゐ

ました。ちやうどその時岸の方から一臺の橇が走つて來ました。橇のなかには一人の巡察將校が乘つてゐました。
その士官は氷の上に救はれてゐる男を自分の橇に乘せて河の岸の方へ歸つてしまひました。救はれた男はまだ氣を失つて橇のなかに眠つてゐました。ボスニコフは濡れたまゝ自分の哨舍の方へかへつて來ました。

近衞の衞兵司令室ではボスニコフが勝手に哨舍をはなれてネヴア河の方へ飛んで行つたといふこと、一人の溺れた男を救はうとしたといふことだけがすぐにわかりましたので、ミラア大尉は驚いてボスニコフを呼びつけました。
ボスニコフは正直に一切のことを語りました。一人の巡察將校が自分の橇に溺れかゝつた男を乘せて警察の方へ行つたことも語りました。
その話をきいた中隊長は心臟を突かれたほど驚きました。
「その士官は警察の方へ行くといつたか？」ミラア中隊長はボスニコフの顏を穴のあくほど見つめました。
「はい、警察の方へ行くといはれました。」
ボスニコフの話をきいてゐる間に中隊長の顏色は青くなつてしまひました。
「その士官が警察へ行つたとすると、一切の報告が警察長官からさらに皇帝陛下のお耳に達せられるにちがひない。ボスニコフはむろん陸軍刑法に問はれるであらう。それにつれて中隊長たる自分にも、さらに大隊長殿にも責任問題がおこつて來るにちがひない。」
ミラア大尉は化石したやうになつてそこに突つ立つてゐました。
ミラア大尉はすぐに大隊長スビニン中佐のところへ大急ぎの傳令を出しました。「大事件が突發しました。どうぞ至

衛兵司令室までおいで下さい。」といふ手紙を持たせてやりました。ちやうど午前三時のことでした。

明日の朝になつて、警察長官ココシユキンが皇帝陛下へ一切のことを御報告申し上げぬうちに、何とかいゝ工夫をしなければならないと、中隊長は考へたのでした。

大隊長スビニン中佐は傳令の手紙を讀んで寢床から跳び起きて衛兵司令室へやつて來ました。

スビニン中佐は決して冷酷な人ではありませんでしたが、いかにも軍人らしい嚴格な人でありました。ですから中隊長からポスニコフの話をきいた時は火のやうになつて怒りました。そしてすぐポスニコフを聯隊の營倉のなかへ押しこめてしまひました。

「大隊長殿、わたくしは悪いことをいたしました。神さまと陛下の前に悪いことをいたしました。しかし、あの時はどうしても溺れてゆく男を見殺しにすることはできませんでした。どうぞわたくしを存分罰して下さい。」ポスニコフはおとなしく暗い營倉のなかへはいつて行きました。

大隊長スビニン中佐は外套を引つかけて警察長官ココシユキンの官邸へ馬車を走らせました。

警察長官ココシユキンはスビニン中佐からだまつて一切の物語をきいてゐました。そして「はゝア、その歩哨が、哨舎からはなれて河の方へ飛んで行つたのですか。でもまあ、その留守に哨舎を盗むものがなくつて仕合せでしたな。」

といつたきりだまつて中佐の顔を見てゐました。そしてポスニコフのことなんかまるでたづねませんでした。

警察長官はネヴァ河で溺れてゐた男と、その男を橇にのせて來た巡察將校とを呼び出しました。

長官は巡察將校にたづねました。

「あんたはこの男が溺れかゝつてゐるのを助けたんですね。あんた一人で？」

「はい、わたくしはこの男が河の中へ落ちてゐるのを見ましたが、はたには誰もゐませんでしたので、わたくしたゞ一人で命がけで助けてやりました。」と士官は、まことしやかにいひました。

「さうですか。はたにはあんたの他には誰もゐなかつたといふのですな……ところで君は酔つぱらつてゐたのか。夜あの宮城の前を歩くなんて。」と長官は士官の方からさらに助けられた男の方を向きました。

「いゝえ、酔つぱらつてはゐませんでしたが、ほんのすこしばかり酒を飲んでをりましたので、つい飛んだことをいたしました。」

「どうして河に落ちた？」

「あの河を渡つてゆくつもりで氷の上を歩いてゐます間に道に迷ひまして、いつの間にか宮城の前の廣場をうろついてゐたのでございます。」

「そして水のなかゝら引き上げてくれた者は誰であつたかわからなかつたのかい？」

「はい、まつ暗でしたから、どなたが、わたくしをお助け下されましたか、すこしも、わかりませんでした。……多分この士官の方でございましたでせう。」助けられた男はそこに立つてゐた巡察將校を指しました。

「よし、それではよくこの士官のお顏をおぼえて置け、この方が命を投げ出してお前を救つてくだすつたのだ。」

「決してこの御恩は忘れません。閣下。」

「よし、朝も晩も、お前が神さまにお祈りをする時は、この士官の方の幸福を神さまにお願ひするのだぞ。」

「閣下」わたくしは決してこの士官の方の御恩を忘れはいたしませぬ。」

「よし。ではお前にはもう用はない。歸れ。」

救はれた男は部屋を出てゆきました。

「あんたは命を捨てゝあの男を助けたんですね。」長官はふたゝび巡察將校の方を向いて話しかけました。

「閣下、わたくしは命をかけてあの男を救けました。夜、まつ暗でしたから誰も見てゐる人はありませんでしたが、たしかにわたくしがあの男を救けました。えゝさうです。むろん歩哨なんかそこには一人も來てゐませんでした。」とまじめくさつた顔で答へました。

「さうですか、歩哨なんかそこには一人もゐなかつたのですね。」と長官は念を押して、「あんたは誠に善い事をなすつた。わしは、あんたの獻身的な行爲を早速皇帝陛下へまをし上げます。あんたの胸には、すぐさま勳章が一つ飾られることになりませう。早く家へかへつて、皇帝陛下の御褒美をお待ちになつてゐるがよい。」

士官はよろこんで、長官に一禮して部屋を出て行かうとしました。

「ちよつと待つて下さい。」と長官は今一度嘘つきの士官を呼び止めました。「あんたはたしかに、たゞ一人であの男を救けたんですね。歩哨はちやんと哨舍のところに立つてゐて、その場所へは出て來なかつたといふのですな。」長官はぢつと士官の顔を見ました。

「閣下、たしかに歩哨は哨舍の前にゐました筈です。わたくし一人で救けました。」と士官はいひました。

「わかりました。おかへり下さい。」

「陛下はあの士官に拜謁仰せつけられるかも知れぬ。」と長官はわざと大きな聲でかたはらの男に話しかけました。

士官はうれしさうにして出て行きました。

スピニン中佐はそばにゐて、長官の一切の取りはからひ方を不思議な眼で見てゐました。嘘つきの士官を憎らしいとも思ひましたが、長官のするまゝにまかせてこらへてゐました。

間もなく嘘つきの士官は、はたして人命救助の勳章をいたゞいて、それを胸に飾りながら、大威張りで町を歩きました。

警察長官が士官の嘘を知りながら、なぜこんな方法を取つたか？　後になつてスピニン中佐はやつとうなづくことができました。

嘘つきの士官に人命救助の勳章を一つあたへたために、ポスニコフが哨舍からはなれて行つたことは、もう問題にする必要はなくなつたのでした。

長官は巡察將校が嘘をいつてゐることは知つてゐながらわざと勳章をその胸にかざつてやりました。

「ポスニコフは哨舍からはなれなかつたのだ。溺れた男を救つたのは巡察の士官だつたのだ。だからポスニコフが哨舍をはなれる筈がない。」といふ立派な理由が成り立つたのでした。ポスニコフは軍法會議にまはされる必要がなくなつたのでした。

聯隊にかへつて來たスピニン中佐は、ミラア大尉を呼びました。

「警察長官のさばき方は實に武士的な立派な方法であつた。これでわれ〳〵も救かつたわけだ。そこで、こゝにたゞ一つ殘つた問題がある。それはポスニコフをどうするかといふ問題だが、われ〳〵も警察長官のせつかくの親切を無

にしてはならぬ、われ〳〵も武士的な方法でポスニコフを處分しなければならぬ。」スピニン中佐はかういつてポスニコフを營倉から引き出しました。

ポスニコフは、自分はきつと銃殺されるにちがひないと覺悟をして營倉から出て來ました。

スピニン中佐は、おごそかな言葉で「ポスニコフを二百なぐれッ！」と命じました。

ポスニコフは聯隊の廣い營庭に引き出されて、みんなの眼の前で二百だけなぐりつけられました。

しかし、そのころの嚴重なロシヤの陸軍刑法からいへば、それは輕い〳〵刑罰のやりかただつたのです。ですからポスニコフは心から大隊長に感謝しました。

二百なぐられたポスニコフはすぐ衞戍病院へはこばれて、そこでゆつくり養生をすることになりました。

スピニン中佐は、すぐに病院へ走つて行つて、ポスニコフを見舞ひました。

もうその時は、嚴格な大隊長でなく、まるでやさしい、お父さんのやうな氣になつて、ポスニコフを見舞つたのでした。

「なぐられて痛かつたらうな、お前は人を救ふといふまことに善いことをしてくれたな。わしはうれしいぞ。」といつてやさしい眼でポスニコフを見ました。

「それからな、砂糖を一ポンド、とそれから茶を四分の一ポンドだけポスニコフに與へてくれ！」スピニン中佐はかういつて軍醫に頼みました。

それを聽いてゐたポスニコフは寢床の上から大隊長を拜むばかりによろこんでいひました。

「大隊長殿、ありがたうございます。」

ボスニコフはぼろ〳〵と涙を落しました。そして心からうれしいと思ひました。

ボスニコフがその夜、哨舍をはなれたといふことは、後になつて世間にも知れましたが、もうその時はボスニコフが人を救けたといふことが、それよりも一層有名になつたので、ボスニコフは何の罰もうけないで、却つてみんなにほめられました。

一番惡い役まはりになつたのは嘘つきの士官であることはまをすまでもありません。

警察長官ココシユキンが一人の罪人も出さないやうなさばき方をしたのは、まことに立派なやり方だといふので、社交界の人々の噂にのぼされました。

甚内さんの旅

「榛山の甚内さん
また馬買うた
十三兩の牡馬。
また牛買うた
十三兩の牡牛。
馬は買うたが
牛は買うたが
家はあばらやで
破風のつばくろに
わらはれた。」

村の子供たちは榛山にかへつてゆく甚内さんを見つけると、かういつてうたひながら、はやし立てゝは、うしろからわい〳〵と甚内さんについてゆくのでした。

甚内さんのうしろからついてゆくのは村の子供たちばかりではありませんでした。牛や馬や羊や驢馬や犬や、そしてそれがみんな、牡の動物ばかりなんです。そんな獸が、のぞくさと、甚内さんのうしろから二十疋も三十疋もついて

ゆくのでした。

甚内さんは一日にきつと一度は村はづれの櫨山から草山の方へ歩いてゆきました。家のまはりに草を食つてゐた羊も牛も、甚内さんが草山の方へ出かけてゆくのを見ると、飛んで來て甚内さんのうしろへついて、草山の方へ歩くのでした。

「もう甚内さんが通るころぢや、だいぶおなかゞすいた。」野良に働いてゐる人たちは高くかゞやいてゐる太陽を見上げました。

甚内さんは、たいてい、おひるごろになれば、のこ〳〵と草山の方へ出かけてゆきました。

「あゝ、あすこから甚内さんが來るにちがひない。馬が見えた。羊が見えた。」子供たちはよくさういつて、のびあがつて道の方をながめました。

今日も甚内さんは櫨山の家を出かけて草山の方へのこ〳〵と歩いてゆきました。

うしろからは春の日の輕いほこりを立てゝ、馬だの羊だの犬だのがぞろ〳〵と三十頭ばかりもついてゆきました。

或る川の邊に來ました。美しい流れには春の花の影が映つてゐました。

馬や牛たちは流れの美しい水をうれしさうに飲みはじめました。

甚内さんは青い草の上にしやがんで、うれしさうに馬や牛たちをながめてゐました。

甚内さんはふと馬の嘶く聲をきゝました。

一人の伯樂が二疋の牝馬と五匹の仔馬とをつれて來ました。そして甚内さんの前を、わざとのそくさと通りすぎてゆきました。

「おい〳〵。」と甚内さんは聲をかけました。

「はい〳〵、何か御用ですかい、甚内さん？」

「お前さん、その仔馬をどうするのだね。」と甚内さんがたづねました。

「この仔馬かね、これ、ごらんの通りみんな牡ばかりですわ。だから飼うておいても子は生ねえし、これから町へつれてつて、牛馬にでもたゝき賣るか、もしよい買手がなけりや、打ち殺して太鼓の皮にすべえかと思ふのさ。」作藏はさういつて、ずるさうな眼で甚内さんを見ました。

「そいつは可哀さうだな。せつかく生まれたばかりの仔馬を打ち殺すなんてそりやあんまりだ。どうだものは相談だがわしにその仔馬を賣つてくれぬか。」

「そりや値段次第では賣られねえこともないが、すこし値が高いが合點かな。」作藏はます〳〵ずるさうな眼をして甚内さんを見ました。

「いくらだな？」

「さあ三十兩だ。」

「仔馬五匹でかい？」と甚内さんはたづねました。

「冗談ぢやないよ。甚内さん、一匹三十兩だから、五匹だと百五十兩さ。」

「もうすこし安くしてくれ。でないと、わしはもうあんまりたくさん牛だの馬だのを買つたのでおあしがない。」

「でもまだ、甚内さんは家を持つてるぢやないか。」

「家はあるが。」

「ぢやあんたの家とこの五匹の仔馬と取つかへつこにしよう。」
「家がなくなると困るがのう。」
「ぢや無理に買つてくれとはいはぬ。町につれてつて五匹の仔馬を打ち殺して革にして賣れば、百五十兩や、二百兩にはなるからのう。」
伯樂はさういつてぢつと甚内さんを見ながら仔馬をつれて歩き出しました。
「おい〳〵しつかり歩けよ。」伯樂はぴしやりと一匹の仔馬を鞭でなぐりつけました。
仔馬は痛さうに、びつこをひいて、歩いてゆきました。
それを見てゐた甚内さんはうしろから飛んで行つて伯樂に聲をかけました。
「おうい、待つてくれ。待つてくれ。仔馬を打つのはよしてくれ。町につれてつて打ち殺されるのは可哀さうだ。わしの家をあげるから、その仔馬をゆづつてくれ。」
甚内さんは、たうとう自分の家と五匹の仔馬とをとりかへつこにしました。
伯樂はうしろを向いて、赤い舌を出してわらひました。
その日から甚内さんは自分の家も伯樂にゆづつてしまつたので、夜になると櫨の下に寢ました。三十匹あまりの馬も牛も羊も犬も驢馬も、甚内さんのまはりをとりまいて眠るのでした。
村では牛や馬が生まれるとすぐに牡か牝かといふことをたれでもまつさきにしらべました。もし牝ですと大きくな

つて赤ん坊を生みますのでたれでも大切に育てるのでしたが、牡ですと赤ん坊を生みませんので、すぐに町に持つて行つて賣つてしまふのでした。

甚内さんの家は町へゆく道の上にありましたので、甚内さんは賣られてゆく仔牛だの仔馬だのをよく見かけました。

そして親にわかれて賣られてゆく仔牛や仔馬を可哀さうだと思ひました。

あまり可哀さうだと思つては町へつれられてゆく仔馬を買ひ、仔牛を買ひました。

そのためにだん／＼おあしがなくなつて、しまひには畑を賣り、田を賣り、家まで賣つてしまつたのでした。

田も畑も、なくなつてしまつた甚内さんはたくさんな牛や馬に、たべさせるものを買ふこともできませんでしたから、毎日夜が明けるとぶら／＼草山へ行つたり、川のほとりを歩いたりしました。

そのたんびに多勢の牛や馬が草をたべたり、水を飲んだりして甚内さんのうしろからついて歩くのでした。

はじめのうちは村の人たちも甚内さんが毎日村の草山へ牛や馬をつれて行つて草を食はせるのをぢつと見てゐましたが、しまひにはあんまりたくさんの牛や馬が村の草山の草をたべてしまひますので、村中の人たちが寄つて相談をしました。

「甚内さんの牡牛買ひや、牡馬買ひも結構だが、あんなにたくさんの牛馬に村の草山の草を食はされたのでは、おれたちの馬にやる草がなくなる。氣の毒ではあるが、甚内さんに村から出てもらふべえか。」と一人の男がいひました。

それはこなひだ甚内さんに五匹の仔馬を高く賣りつけて、甚内さんの家をとつてしまつた伯樂でした。

「それがいゝ、それがいゝ。」と、みんなが贊成しました。

甚内さんは親切に村中の牡牛や牡馬を買つてやつたために、あべこべに村の人たちから追ひ出されてしまひました。

秋のしづかな日でした。朝から、小雨が降つてゐました。
甚内さんは村の人たちから追はれて傘もさゝずに村を出てゆきました。
甚内さんのうしろからは三十五六匹の馬や牛や羊や驢馬や犬などが、雨にぬれてしよぼ〳〵とついてゆきました。
さすがに村の人たちも悪いことをしたと思ひましたが、今となつてはどうすることもできないので、ぼんやりながめてゐました。
時雨の中を甚内さんと、そのうしろからついてゆく動物とが、だん〳〵小さくなつて、村境の峠を越してゆきました。
甚内さんはその日の夕暮に峠を越えた山向うの村につきました。
もう馬や牛に草をたべさせる草山もありませんでしたので、甚内さんはそこいらの百姓家に行つて秣をねだりましたが、あまり牛や馬がたくさんでしたから、たれも相手になつてくれる人がありませんでした。
甚内さんは暮れてゆく時雨の中にきよとんとして立つてゐましたが、急に自分が着てゐた外套も、上着も脱いでしまつて、たゞシヤツ一枚になつてしまひました。そして村の人に外套と上着を賣つて、そのおあしで秣を買つて牛や馬にたべさせました。
甚内さんはその夜はそこの村のはづれの森のなかに、牛や馬たちといつしよに寢ました。
夜が明けてから甚内さんは、ふたゝび牛や馬をひきつれて、あたらしい草山をさがしに旅をつゞけました。
甚内さんは二度と村へはかへつて來ませんでした。
「甚内さんはどこへ行つたゞらう。」

村の人たちはその後もよく、甚内さんの噂をいたしました。

村を立つて三日目の晩、甚内さんが雨の中を、どこかの村の森の中でシヤツも着ないでズボン一つになつて焚火をして、ぼんやり牛や馬を見てゐたのを見うけたといふ人がありましたが、それきり甚内さんの行方はたれにもわかりませんでした。

「こゝから三十里行つたつて、五十里行つたつて、あれだけの牛や馬にたべさせるやうな草山はないよ。それにもう今に山には雪が降つてくるからシヤツ一枚では、甚内さんはこゞえ死ぬにきまつてる。草は枯れる。馬も牛も甚内さんといつしよに死んでしまふにちがひない。」

「ばか〳〵しい話さなあ、はゝゝゝ。」

村の人たちはよくそんな話をしました。

しかしどこの山にも、甚内さんの死んだ姿も、また馬や牛の死骸も見えませんでした。

甚内さんと、馬や牛の行方については幾年たつても誰も知ることができませんでした。

村では今でも子供たちはよく雨の降る日など、小さな窓から、往来を通る旅人や馬などを見ますと、

「櫨山の甚内さん
また馬買うた
十三疋の牡馬。
また牛買うた
十三疋の牡牛。

馬は買うたが
牛は買うたが
家はあばらやで
破風のつばくろに
わらはれた」
とうたひます。

濱の父と子

海は荒れてゐた。
「信二や、濱に出て防風を少しとつて來てくれぬかい？　おれこの寒風が立つてから久しく濱に出ないで、急に防風の香が嗅いで見たくなつた。」
父は見えぬ眼を土間の信二の方へ向けた。
「お父つあん、防風かい？」網を繕ふてゐた信二は手をやめて父の方を見た。
「あゝ濱に出て防風を少しとつて來てくれよ。」
「お父つあん晩げにおしよ、信二も忙しいでなあ。」と土間の爐で焚いてゐた母が心配さうに戸の外を見た。
戸外には雪が降つてゐた。濱にも松原にも二三寸ばかりの雪がつもつてゐた。
「晩げでもいゝよ。信二も忙しいだらうからのう。」父は屈託さうな眼を爐の火に向けた。火箸を手さぐりにさぐつて榾の火をかきまぜてゐた。
濱には防風が一面に這つてゐた。夏から秋のはじめにかけて眞つ白な防風の花が潮吹を浴びながら、濱の砂をやわらかにつゝんでゐた。
「お父つあん防風の香がそんなに嗅ぎたいのかい？」信二は網の手をやすめて父を見た。
「うむ。なにのう、わしは若いころから一日でも濱に出ないことはなかつたし、わしほど沖に出て荒い波の中を大膽

にくゞつて働いたものはあるまいよ。それだけにわしはもうこんな日になつても、ちつとも海を忘れることができないのだ。」
「さうだよ。家のお父つあんほどよく船を漕いだ人はなかつたよ。どんな恐ろしい嵐の中でも、家のお父つあんさへ乘つてゐれば船を沈めることはなかつたのだからなあ。」母は竈の前に立ち上つて父の顏を見た。
「わしの口からいふと自慢らしいが、わしが眞二くらゐの年には九十九里から鹿島灘にかけて櫓櫂にぎつて、わしの右に出る者はなかつたからのう。」
「そのお父つあんがなあ、あんなことで眼も見えぬやうになつたんだから、わしやあれを思ふとお父つあんが氣の毒でならぬよ。」母は袖口で涙を拭いた。
十年も前の嵐の夜であつた。
父は妻の弟にあたる儀平といふ男たちと沖に出てゐた。父と儀平は二丁ばかりのへだたりを置いて、山のやうに群がつて來た鰹を釣つてゐた。急に襲つて來た嵐のために見てゐる間に五六十艘の漁船は波の下に叩きつけられてしまつた。
腕達者な父の船だけは山のやうな波を切つて濱の方へ漕ぎ寄せた。
もうすでに濱の山が見えるほど岸に近づいた時であつた。櫓を摑んでゐた父は「しまつた！」と叫んだ。そしてふたゝび船の舳を沖の方へ向けなほした。
「儀平やあい！　儀平やあい！」父は妻の弟のことを思ひ出したのであつた。父は暗い海の上を見まはした。濱でも父ほど遠眼のきく男はなかつた。

さつきまでそこいらに集まつてゐた鰹船の影は父の船の他一艘も見えなかつた。しかし父は勇氣をおとさなかつた。沖へ／＼と荒波を切つて船を漕いだ。

「儀平やあい！」

「おうい……」かすかに沖の浪の間に聲が聞えた。

嵐は陸の方から沖へ／＼と吹き荒れるのであつた。

小さな一つの黒點ほどの影が沖の浪の蔭に見えた。父はさらに勇氣をはげましてその方へ漕いで行つた。

「儀平やあい！」

「おうい……」

父はそれから二時間の後船板にかじりついて流されてゐる儀平を見出した。濱に上つて來た父と儀平は抱き合つてうれし泣きに泣いた。しかしその時父は潮のために眼をつぶしてしまつたのであつた。

「わしの弟の儀平を見捨てずに助けてくだされたのはかたじけないが……わしはあんたの目を見ると、もう氣の毒で／＼……」母はいつもさういつて泣くのであつた。

「わしの眼が見えなくなつたのをお前たちは氣の毒がるが、わしは儀平どんの大切な命と、わしのろくでもない眼と、とりかへつこにしたのぢやと思へば何でもない。わしはかたじけないと思ふよ。お前たちはわしを氣の毒ぢや、氣の毒ぢやといふが、去年濱で死んだ眞二の兒こそ氣の毒ぢや。あの子のことを思ふともうこの胸が裂けるやうぢや。」父はぽとりと涙を榾火のうへに落した。

「もう英一のことは話さぬがいゝ、可哀さうでもあるが、あれも沖の難破船の人たちを助けるために死んだのぢやからなあ。それにさ、あゝやつて松山の中には立派な記念碑まで村の人たちに建てゝもらふたのぢやもの、わしはもう泣きはせぬつもりぢや。」母までが同じやうに泣いてしまつた。

眞二は去年の冬、沖の難破船を救ひに出て白い波の下に呑まれたまゝ死んでしまつた兄の英一のことを思ふとたまらなくなつたので、網を土間に置いたまゝ濱の方へ出かけて行つた。

「おらあお父つあん、濱に出て防風とつて來るで！」

「うむ、すこしでいゝからのう。」父は戸口に立つてゐる眞二に聲をかけた。

眞二は雪の中を外へ出て行つた。

裏の小屋の中に眠つてゐたエスが、尾を振りながら眞二を追つかけて濱へ走つて行つた。

「エス！　お前はまたついて來たのか！」

眞二は犬の頭をさすつてやつた。

眞二は濱に出てそこいらの雪をかきわけた。

雪の下にはかをりのいゝ防風が、青々とした柔かな葉をひろげてゐた。

眞二は一握りの防風を父のためにとつて沖をながめた。

「嵐が來るな！」眞二は不圖さう思つた。

去年兄の英一が難破船を救ひに行つた日の空によく似た雪雲が、海の面を暗くするほどに低く垂れてゐた。

鴎の群が悲しい鳴き聲を立てゝ、陸へちかく嵐を避けるやうにして飛んで來た。

「兄の死體も見えなかつたが、まだ兄はあの暗い沖の波の中に浮き草のやうに流されてゐるのではないか知ら！」眞二は低い雪雲の下の海に吸ひ込まれるやうにして見入つてゐた。

眞二は濱から松山の方へ雪の中を歩いて行つた。

そこには大理石の兄の記念碑が、沖を見晴らすやうにして建てられてゐるのであつた。

「嗚呼早瀬英一少年の碑」と誌した大理石の表を、淡い雪が吹きつけてゐた。

松山の中で山鳩が鳴いてゐた。波の音が松山の中までも地を搖るほどに響いて來るのであつた。

十日ばかり前、父の手を引いて碑の前にぬかづいた時、地にさして置いた線香が濕みかゝつてゐた。誰か濱の人たちであらう、今朝この雪の中をわざ〳〵さゝげてくれたのか、水仙の花束が生々と雪の中に花を開いてゐた。

眞二は碑の前に頭を下げて家の方へ歸つて行つた。エスは眞二の先になり後になりして、雪の中を走りまはつた。

「お父つあん、防風をとつて來たよ。」眞二は父の手に防風を握らせた。

「うむ、ありがたうよ。なるほどいゝ香だ。雪の下にはいつてゐると香氣が強くなるからのう。」父はいかにもうれしさうに防風の葉を嗅いでゐた。

「お父つあん、今夜もまた荒れさうぢやぞ。」

「さうかい。なるほど波の音がすこし陰氣になつて來たのう。」父は首をかたむけてゐた。

「それにのう、濱で見てゐたが鹿島灘の方にいやな雲が出てをつたよ。」

「風はどつちだい？」

「風ですか、東北になつてしまひましたよ。」

「東北か！ ふむ、そりやいかんのう。」

「今日のやうな天氣でしたねあの晩も。」

「さうだつたのう。」

父と眞二が話してゐるところへ、裏から母が榾をかゝへて土間にはいつて來た。

「嵐だよ。今夜もまた。」母は暗い顔をした。

「嵐かのう母さん。」

「またこんな晩は難破船でもなけりやいゝがのう。」

「ほんとにのう、難破船を見るくらゐみじめなことはないでのう。」

「いやだ、いやだ思ひ出しても……あゝそれから忘れてゐた。」と母は懐から玉蜀黍を三つだけとり出した。

「それどうしたの？」と眞二は母の顔を見た。

「うむ、ほらこの春だつたらう。誰やら知らぬ人から小包が送つて來た。開いて見たら玉蜀黍の種子がはいつてゐただらう。」

「うむ、さうだつたなあ、母さん。北海道からぢやつた。」

「去年の冬英一が助けに出かけて行つた難破船の人から、お禮にといつて送つて來たんだつたのう」

「さうよ、あの玉蜀黍の種子を播いといたのさ、裏の畑に。それが、この秋になつて三百からなつただらう。わしそれを小屋の蔭に干しといたのさ。おかげにこの冬は玉蜀黍をたんと喰べられるよはゝゝゝ……」

「それも英一が立派に死んでくれたからぢやのう。」父はまた眼を拭いた。

母はうつむいたまゝ爐の火の中に玉蜀黍を入れて焼いた。

風の音がひどく高鳴りして過ぎた。

「波の音がきつうなつたやうぢや。」

「さうぢやのう。また難破船でもなけりやいゝがなあ。」

「うむ。」

「眞二や、お前はもう難破船があつても、あの兄の英一のやうに眞つ先に船を乗り出すぢやねえぞ。英一が眞つ先に船を乗りつけて大きな綱をくゝりつけたので、難破船は助かつたさうぢやが、自分は死體もわからぬやうになつてさ……」

「おい、もう英一のことは話すな。」

「でもさあ、後にはこの眞二一人しきや家には居らぬのぢやから、もし眞二が兄の眞似でもしてあんなことになつたらお父つあんは盲目だし、わしとお父つあんと二人で遍路にでも出るより他に生き方はないからのう。」

「母さんや、大丈夫だ。わしは死なんよ。」

「あゝ、死んでくれるなよ。お前一人がわしらの頼りぢやからのう。」

「あぶないところに近寄つたりしてはくれるなよ。」

「あい安心するがいゝよ母さん。」

眞二はふたゝび土間に下りて綱をつくろひはじめた。

雪が高窓から風に叩きつけられて土間の中へ舞ひこんで來た。
「あゝ嵐ぢやなあ。何事もなくすんでくれゝばいゝがなあ。」
母は佛壇の方へ行つてお燈明を上げた。
日が暮れかゝつて來た。
「ひどい雪ぢやなあ、珍らしい雪ぢや。」
よぼ〳〵のお爺さんの配達夫が土間へはいつて來た。
「茂七さんの聲ぢやないか。」父は爐のはたから聲をかけた。
「はあわしだ。お父つあん小包が來たでのう。」と大きな小包をどしんと上り框に置いた。
「あゝそれからこゝに手紙も來てゐる、そうれ。」
「眞二、その手紙を讀んでくれ。どこから來たのぢややら。わしの家に小包が來るなんて、滅多にないことぢやがなあ。」と父は不審さうに首をかしげた。
「ぢや、お父つあんわし讀んで上げよう。おやつ、こいつは變だぞ。たいそう遠いところから來とる。」と眞二は封筒をながめてゐた。
「どこぢや、遠いところつて？」
「やつぱり、北海道ぢやが……中の文句を讀んで見よう。」
「さうしてくれ。」
「月日の經つのは早いものでございます。わたくしは去年の冬常陸の海岸にて難破したる太平洋丸の一乘組員でござ

います。貴方の御子息が恐ろしい怒濤の中に大危險を冒して太平洋丸の船首へちかづきロープを投げて下された時まっさきにそのロープの端を受けとつたのはわたくしでございました。おかげにてわれ〳〵船員は全部救はれました。御子息がお投げ下されしロープを受けとりし刹那に不圖御子息のお顏を燭の光りで見ました。實に神のごとく貴く拜まれました。わたくしはあの時のお顏の雄々しさを今でも忘れることはできませぬ。わたくしがロープを受けとり、ありがたうと一聲をしあげた時御子息はにつこりお笑ひになりました。しかも何といふ殘忍なことでせう。荒波は御子息を一呑みに呑んでしまひました。」

手紙を讀んでゐた信二は、ぽとりと涙を手紙の上に落した。

「さうぢやつたかのう。」

「あゝゝ……」

父も母も顏を掩ふてしまつた。

「氣の毒なことぢやつたのう。」と老配達夫までが貰ひ泣きした。

「わたくしはおかげにて一命を助かり、そのころ危篤にてわたくしの歸りを待つてをりし一人の老母にも逢ふことができました。妻や三人の子供たちを見ることができました。あれからちやうど一年になります。あの夜のことを思ひ出しては母や妻子たちとも御子息のこと、みなさまのお氣の毒な境遇をお噂いたしてをります。母はわたくしが歸りましたので急に元氣づき、今では丈夫にくらしてゐます。これもみな亡くなられた御子息さまのおかげでございます。まことにつまりませぬものですが、お寒うございますからシャツ、ズボン下、毛布など取りまとめお屆けまをします。ほんのわたくしの感謝のおしるしばかりでございます。」

父も母も眞二もしばらくは俯向いたまゝ泣いてゐた。

「でもなあ、みんなこれも英一さんのおかげぢやなあ。こんなことがあればわしたち村の者まで餘所村の衆に向つて鼻が高いや。英一さん一人のために助けられた人たちの親だの妻子だのどれほどたくさんの人がありがたいと思つてゐるか知れぬ。もうなげかぬがいゝわい。」老配達夫は雪の中を町の方へかへつて行つた。

「ありがたいことではあるのう。」と父は腕を組んで俯向いた。

「お父つあんこれを直ぐ着るがいゝ。せつかく送つてもらつたのだから。」眞二は小包を開けて、シャツを父の手に握らせた。

「惡かぢやなあ、こんな上等なシャツはもつたいないわいのう。」

「そんなことはない、みんなそれも英一のおかげぢやからなあ。」

「母さんはこれがいゝぞ。」眞二は女のシャツを出した。

「わしまだ生まれてそんなハイカラなもの手に通したことがない。でも、せつかくだからちよつと握らせていたゞくかのう。」

「わしのはこれだなあ。ズボン下もあるわい。」

「おや、眞二お前はもう着てしまふたのか。お正月のにしとけや。」

「お正月着るのにするがあまり着心地がいゝで一度着たら脱がれぬわい。」眞二はシャツとズボン下を着てうれしさうに部屋の中を走つて見たり、からだを前後に曲げて見たりした。

「このやうな立派なシャツを着てゐるのを英一が見たらどんなに喜ぶか知れぬ。英一に見せてやりたいなあ。」と母は

しみじみとした聲でいつた。
「うむ、わしこのシヤツを着て、これから直ぐ松山の中の兄さんの記念碑の前に行つて拜んで來るでのう。」
「あゝ、それがいゝ。ぢや、わしもこのやうないゝシヤツを貰ふてゐるのを英一に見せたいでわしもつれて行つてくれ。それからいたゞいたズボン下も穿いてゆくぞ。あの子は親思ひだつたからどんなに喜ぶか知れぬ。」
父は手さぐりに立ち上つた。
「お父つあん、もう日も暮れたし、雪も降つてるで、あんたお止し。」と母がとめた。
「いや、雪が降つてもちつとも寒うない、このシヤツを着たので。」
「ぢや、英一に見せて來なされや。」
「あゝさうする。」
信二は父の手をとつて戸外に出た。
父も信二も新しいシヤツとズボン下で出かけた。
日が暮れてゐたが、雪明りで道は白く見えてゐた。
「ひどい吹雪になつて來たのう！」
「いやな天氣ぢやのうお父つあん。」
「沖はひどく荒れとるぞ。」
「えゝ、荒れとります。また難破船でもないといゝですがのう。」
「どうも胸さわぎがする。」

「どうしたのですかお父つあん！」
「いやどうもせんが、妙に胸さわぎがする。英一が難破船を助けに出かけたあの晩もやはりかうぢやつたが。」父は胸に手をやつて考へこんだ。
「そりや、お父つあん、氣のせいでせう。」
「いや、さうぢやない。わしは盲目になつてから、眼が見えなくなつたかはりに、妙に魂がはたらくやうになつた。うれしいことでもかなしいことでも、人よりか半日も一日も早く胸にこたへて來るのぢや。」
「ぢや今日こんなシャツやズボン下が來る事も前から知つてゐましたか。」
「そんなことはわからなかつたが、けさからわしは何だか妙に暗い心になつてしまうたのぢや。だからさつきお前に濱の防風をとつて來てくれとねがつたのさ。防風を嗅いでゐるといくらか氣がまぎれるのでのう。」
「お父つあん、こゝは大きな石が出てをるであぶないよ。しつかりわしの手をつかまへておいで。」
「よし／＼。」
「もう松山の中に來た。」
「眞二、恐ろしい波の音ぢやないか。」
「えゝ、空が眞つ暗になつて來ましたよ。」
「わしはどうも胸さわぎがしてならぬ。」
「お父つあん、安心なさい。何も起りはしませんよ。」
「さうかなあ。」

「ほら、こゝが兄さんの碑の前ですぞ。こゝに水仙がありますよ。手でさぐつてごらんなさい。」眞二は父の手を握つて水仙の花にさはらせた。

「うむ、水仙ぢやのう。いゝ香ぢや。」

「けさこの雪の中を誰やらこゝまで持つて來てくれたのぢや、お父つあん。」

「うむ、ありがたいことぢやのう、英一が死んだばかりにみんながかうしてくださるのぢやのう。」

「さうですよ。だからお父つあん、あまりなげかぬがいゝよ。」

「あゝ。だがわしはどうも胸さわぎがして……」

父は雪の中にしやがんでしばらく碑を拜んでゐた。

「おヤツー、變だぞ！」

「どうかしたのかい眞二？」

「いえね、今、濱の方で半鐘が鳴りはしませんでしたか？」

「半鐘？」

「えゝ……」

「うむ、鳴つてゐるぞ。鳴つてゐる。」

「おや、烽火が上つた。」

「烽火が！」父は雪の上に倒れんばかりに驚いた。

「また難破船だなあ。ひどい嵐になつた。」

「お父つあん、たしかに難破船だ！」

「また難破船か！」父は化石のやうになつて雪の中に立ち上つた。

「お父つあん、あんなに鐘が鳴つてゐます。あんなに濱の人たちがさわいでゐます。提灯をつけて走つてゐます。」

「うむ、たいへんなさわぎらしい聲ぢやな。」

「この松山の中にゐてさへぢつとして立つてをれぬくらゐの嵐ですから沖はひどい荒れでせうよ。」

「うむ、さうだらう。松がぽき／＼折れてゐるやうだのう。」

「さうです。お父つあん、濱の人たちはあの岬の船倉の戸を明けてゐます。おや、おや、沖の方でさかんに危險信號の火をあげてゐますよ。鯨が吼えるやうな汽笛を鳴らしてゐますよ。」

「うむ、去年、ちやうど英一が沖へ出て行つた晩のやうな嵐ぢやのう。」

「お父つあん、濱の人たちは救命船を出しましたよ。青年たちもみんな走つてゐます。」

「さうか、青年たちも出て行くか。」悲愴な父の顏が暗の中にうごいた。

「お父つあん。兄さんのことを思へばその弟のわしがこんなところにぢつとしてゐたのでは世間に顏出しもできません。お父つあん！」眞二は語氣を強めていつた。

「さうだのう。よし、行け。わしは雪の中を這つても家にかへる。いや、わしはこの雪の中で英一の墓も冷たからうから、今夜は英一の墓を抱いてあたゝめてやる。お前は村の衆におくれぬやうに早う濱へ飛んで行け。わしは今夜はこゝにゐて、雪に埋もれても、英一と二人でお前の無事を祈つてゐる。早く行け。わしをかまはんで早う濱へ飛んで行け！」

「おや、お父つあん、わしは行くぞ。濱へ行くぞ。寒いからわしの着物を着てゐなされ。」眞二は自分の羽織と着物を脫いで父に着せて、新しいシヤツとズボン下だけで雪の中を濱の方へ飛んで行つた。

盲目の父は英一の碑にしがみついたまゝ、涙を嚙みしめて眞二が走つて行つた濱の方へ耳を傾けてゐた。

一艘の救命船がちやうど荒波の中へ押し出されるところであつた。

濱に焚かれた松明の火が人々の顏を照らしつけた。

船が濱をはなれようとした刹那、砂丘の上から走つて來た一人の青年が船の船板の上に飛び乘つた。

「眞二さんぢやないか。」

「眞二さんぢや。」

「あんたは下りなさい。英一さんがあんなことになつたので、あんた一人がお父つあんの頼りぢやから。」

「眞二は下ろした方がいゝぞ。氣の毒だから！」

人々はさういつて眞二を船から下さうとした。しかし眞二はきかなかつた。

「心配せんでもいゝ。わしは大丈夫だから。わしの腕はあんたらも知つてるだらう。さあ錨を揚げた！」眞二は命令するやうな調子で言つた。

なるほど眞二は父に似て櫓を操ることは濱一番の巧者であつた。眞二が一人船に乘つてくれたことは、どれほど濱の人たちを氣強く感じさせたか知れない。

眞二を乘せて、救命船は矢のごとく荒波の中を沖へ向つて走つた。

沖の難破船からはさかんに信號の火が打ち揚げられた。汽笛が鳴つた。
救命船は幾度か山のやうな怒濤の下をくゞつた。
人々はあまりに荒れ狂ふ怒濤に、やゝもすれば勇氣を失ふのであつた。
「しつかりしろ、もう直ぐだ。おれたちは今幾百人といふ人の命を助けるのだ。
しつかりしろ、風は凪いだぞ。
さあ、船が見えたぞ。
波は低くなつた！」
舳先に立つて鬼神のやうな毅然たる態度で人々をはげましてゐるのは眞二であつた。
「さあ、難破船が見えた。漕げ、漕げ！　ロープを出せ、ロープを！」
眞二はロープを摑んで波の上に立ち上つた。
そしていかにも落ち着いて黒い難破船を見つめてゐた。それは去年亡くなつた兄の英一そつくりの雄々しい姿であつた。

柿丸と梨丸

東の國の柿丸と、西の國の梨丸とは、京の叡山で同じ坊に住んで學問をはげんでゐました。

柿丸と梨丸とは兄弟よりもむつまじく、たすけ合ひなぐさめ合つてくらしました。

二人がお友だちになつてから五年經ちました。

二人は叡山のたくさんの若い人たちのうちでも殊に立派な坊さまになりましたが、めい〳〵自分の故郷に歸らなければなりませんでした。

柿丸も梨丸も學問を卒へたことはうれしいと思ひましたが、いよ〳〵別れなければならぬとなつてくると、悲しくてなりませんでした。

二人は叡山の高い塔にのぼりました。

そこからは近江の國も見え、山城の國も眼の下に見えました。

「梨丸、君はあの白い川を下つて行かなければならないのだねえ。」と柿丸が西の川を指さしました。そこには伏見から攝津の方へ流るゝ大きな川が銀のやうに輝いてゐました。

「柿丸、君はあの湖を渡つて行かなければならぬのだねえ。」梨丸は東の方を指さしました。そこには海のやうにひろい琵琶湖がしづかに眠つてゐました。秋でしたから湖の方へたくさんの雁が山を越えてとんで行きました。

いよ〳〵別れなければならぬ日になりました。まだ夜が明けぬうちに二人は山を下りました。

霧が深く山や谷をうづめてゐました。

夜明けの明星が霧の間からかすかにぴか〳〵と光つてゐました。

二疋の馬が木の根につながれてゐました。

二人は久しいこと木の根に腰をかけて別れを惜みました。

「いつまでもお互に忘れないやうにしよう。そしてあの星を見るたんびにお互のことを思ひ出すやうにしよう。」

二人は夜明けの明星を見ながらこんな約束をしました。

やがて霧の中を二人は馬に乗つて東と西に別れました。

柿丸は近江の方へ、梨丸は山城の方へ山を下つて行きました。

東の國の柿丸も西の國の梨丸も朝うすぐらいうちに起きて、鐘樓にのぼつて行きました。そして明け方の鐘をつきながら、夜明けの明星を見ては別れてしまつた友達のことを思ひました。

一年二年と東の國と西の國からは絶えずたよりがありました。

ところが三年目の春でした。東の國の柿丸からの手紙がふつつり來なくなりました。梨丸は毎日柿丸のことを案じては東の方の空を眺めてゐました。

ところがその年の秋になつて東の國の柿丸から、西の國の梨丸のところへ手紙がまゐりました。

その手紙によると柿丸は去年の冬からひどい病氣にかゝつて、もういつまで生きてゐられるかわからないといふのでした。東の國と西の國とはたいへんへだたつてゐるし、とてもたづねて來てもらふこともできまい。だから僕は君

にも違はないでひとりでしづかに死んで行くのであらうといふやうなことが薄い墨で書いてありました。

西の國の梨丸はその手紙を讀んだ時、どんなに驚きもし悲しみもしたか知れません。

「どんなに遠いところだつて、どうして行かずにをれよう！」梨丸は鐘樓に立つたまゝ日が暮れるまで東の空をながめてゐました。

西の國の梨丸は貧乏でしたから、古い袈裟までも賣りはらつて長い道中のお金を支度しました。

梨丸は笠と杖を持つて、小さな風呂敷包を腰に背負つて、遠い東の國の旅に出かけました。

東に行くにつれて秋の風が寒くなつて來ました。

雁が空を飛んでは遠い山や海に消えてしまひました。

梨丸は三年前の秋、柿丸と叡山で別れた秋のことを思つては、道をいそぎました。

夜、焚火についても梨丸は柿丸のことばかり夢に見ました。

柿丸が丈夫で、赤い頬をして高い美しい聲でお經を讀んでゐるのを見ました時、梨丸はほんたうによろこびました。

そして自分が心配して旅に出たことを笑ひたくなりました。柿丸は御堂から走つて來て梨丸の手を握りました。そして「僕はこんなに丈夫でぴん〳〵してゐるんぢやないか。」と言つて跳び上がつて見せました。

しかしそれはみんな夢でありました。梨丸が夢からさめました時は夜が明けかゝつてゐました。

梨丸は或るさびしい山の辻堂に寢てゐるのでした。

秋の雨がしと〳〵と降りそゝいでゐました。

西の國の梨丸は或る時は辻堂に寢たり、また或る時は草の中に寢たりして、三百里あまりの道を歩きました。

高い山には雪が降つて來ました。

ところが、梨丸は東の國の柿丸の故郷から五十里ばかり手前まで歩いて行つた時、或る夜ひどいあらしに會ひました。

そこは三十里四方も一つの家もないやうなひろい野原でした。あらしの中を歩いても家はなく、辻堂はなく、それにたべるものもありませんでしたので、梨丸はたうとうあらしの中に倒れてしまひました。

夜が明けてあらしがしづまつた時、梨丸は草の中に眼をひらきました。枯れ草の野がどこまでもつゞいてゐました。遠い山の白い雪が雲のやうに枯れ草の上に見えてゐました。

「きつとあの雪のつもつた山の向ふが柿丸の故郷にちがひない。」かう思ふと胸がをどるほどうれしかつたのですが梨丸はどうしても枯れ草の中から起上ることができませんでした。

梨丸はたうとうあらしの夜から三日目に枯れ草の中で死んでしまひました。

「柿丸、柿丸ッ！」梨丸は熱にうなされながらかう言つて柿丸の名を呼んで死にましたが、だれも梨丸の聲をきいた人はありませんでした。

不思議にも梨丸が枯れ草の中で死んでしまつたのと同じ日に、東の國の柿丸も山寺の中で死んでしまひました。

柿丸も死ぬ時には、「梨丸、梨丸ッ！」と呼びました。柿丸は梨丸が自分をたづねて來る途中で死んだことなどはたうとう知らなかつたのでした。

西の國の蘭丸が死んでから幾度か春がめぐつて來ました。毎年東の國から京の方へ金買ひに行く一人の男が蘭丸の死んだ廣い野を通りかゝりました。

金買ひの男はその廣い野の中に、今まで見馴れなかつた大きな雲を突くやうな木が、草の中から聳え立つてゐるのを見出しました。そこはちやうど蘭丸が死んでゐた場所でありました。

金買ひの男は今までにそんなに立派な大きな木を見たことがありませんでした。眞つ白な大きな花が咲いてゐて、遠い遠い草の中からでも、直ぐにその大きな木を發見することができました。

このさびしい廣い野を旅する人たちは、その大きな美しい木を目じるしとして道に迷はないやうにしました。

また雨や嵐の日には、旅人はその大きな木の下に安全なかくれ場所を持つことができました。

またひもじい時には、旅人たちはその木の大きな木の果をもぎとつて幾日でもおなかを滿たすことができました。

旅から旅を歩く巡禮の子供たちに、その大きな美しい木の下で、たのしさうに歌をうたつて遊んでゐました。

月が出る晩など、さびしい廣い野の中で、この大きな木の下にだけは、東の國から來た人も、西の國から來た旅人も、いつしよになつて夜が明けるまで國々の話をしたり、踊つたりして旅のさびしさを忘れてゐました。

誰いふとなく廣い野の中で美しい木を愛の木も呼ぶやうになりました。

誰ひとり、それが蘭丸の屍から生えた木であることも知りませんでしたが、この野を往き來する旅人たちは、みんな愛の木を、自分たちの故郷の家のやうになつかしく思ひました。

エルサレムまで

ヨブのお母さんは毎日騾馬をつれては村はづれに出て、旅人を待つてゐました。

ヨブはお母さんといつしよに朝うすぐらいうちから起きて家を出かけるのでした。

ヨブのお父さんはヨブが生まれて間もなく死にましたから、ヨブはいつもお母さんと二人きりで寂しく暮してゐるのでした。

けれどもヨブは幸福でした。ヨブのお母さんはほんたうにヨブを可愛がつてくれました。

ヨブのお母さんは毎日旅人や旅人の荷などを騾馬にのせて三里も五里も離れた町まで行つて、すこしばかりの駄賃を貰ふのでした。

ヨブとヨブのお母さんは、ユダヤからエヂプトまでも荷を運んで長い旅にやとはれて行つたこともありました。

エヂプトからの歸りみちには、ヨブはまるでお客さまのやうに得意な顔をして騾馬の背に乘つてユダヤへもどつて來ました。

幾日も幾日も遠い野を越えて旅をしなければなりませんでしたが、夜は美しい星がまたゝいてゐたり、晝は無花果の實が、道傍に熟してゐたりしましたので、お母さんと二人だけで旅をしてゐてもちつとも寂しいとは思ひませんでした。

日が暮れるとヨブはお母さんと二人で草の中のテントにはいつて寢るのでした。テントの隅の方には騾馬も寢るの

でしたが、騾馬は暗がりでも秣をたべてゐました。騾馬が秣をたべてゐる音を聴きながら、ヨブは眠りました。そして暗い夜中にヨブは時々眼をさましました。テントの隙間から星のやさしい眼がまたゝいてゐるのでした。

「ヨブさん安心しておやすみなさい。」と星が言つてゐるやうに思はれるのでした。

ヨブは安心してふたゝび眠るのでした。

「ヨブさん起きるんですよ。ホツホツホツ……」たれかゞかう言つて笑つてゐました。

ヨブは眼をさましました。風がヨブの耳にさゝやいてゐました。東の空がかすかに明けはじめてゐました。無花果の葉がかすかに朝の風にゆれてゐました。

「ヨブさんお早う。」と木の葉が言ひました。

お母さんのやさしい眼がヨブの前に星のやうにまたゝいてゐました。

ヨブは世界中で自分くらゐ幸福な人間はないだらうと思ひました。

しかし、だん〳〵大きくなるにつれて、ヨブは町には自分たちよりも、もつと幸福な人たちがたくさんゐることを知るやうになりました。お金をたくさん持つた人や、立派な軍人や、学者やみんなえらい、そして幸福な人たちがたくさんゐることを知りました。

ヨブは毎日騾馬を引いて出かけるのがいやにさへなることもありました。

「ヨブの騾馬追ひ！」などとお友だちなんかに呼ばれると、急に恥かしいやら悲しいやらで、騾馬を捨てゝ家に逃げて行かうかなどと考へることさへありました。

しかし時々ヨブは、なぜ騾馬を追つて歩く人は卑しくて、大きな城の中に遊んでゐる人たちの方が貴いのかなどと疑つて見ることもありましたが、やはり「騾馬追ひのヨブ！」と言つて聲をかけられると何だかきまりが惡くて仕方がありませんでした。

「お母さん、騾馬を追つて歩くのは止してしまひませう。」ヨブはこんなことをお母さんに話すこともありました。

「なぜ、僕は學者やお金持ちの子に生まれないで、こんな貧乏な家に生まれて來たゞらう？」と自分の家の貧乏を悲しまずにはをられなくなりました。

お宮を建てゝゐる大工さんや、お寺の前で鳩の豆を賣つてゐるお婆さんの方が、まだ自分等よりはずつと立派な人のやうに思はれました。

「世界中で騾馬を追つて歩く自分たちが一番卑しい人間だ！」とヨブは思ふやうになりました。生きてゐる甲斐さへないやうに思ふのでありました。

ユダヤで一番大切な、偸越の節といふお祭が近づいた或る春の日の出來事でありました。

ユダヤの町では偸越のお祝ひをするためにどこの家でも入り口の柱に仔羊の血を塗つて祭り日の來るのを待つてゐました。

ヨブはまたいつものやうに暗いうちに起きて、騾馬をつれてお母さんと二人で町の方へ出かけて行きました。

エヂプトへ行つたころテントの中から見た星が、まだ夜明け前の空にまたゝいてゐました。

ヨブはそのころのことを思ひ出しました。が、どうしてもそのころのやうに幸福を感ずることはできませんでした。

騾馬の後からついて歩いてゐる自分は世界中で一番卑しい何の役にも立たない人間だと思はずにはをられませんでし

た

お母さんと騾馬を捨てゝ、自分一人で家に歸つてしまはうかとさへ考へました。

「お母さん！」とヨブは出しぬけに聲をかけました。

「どうしたの、なまづめでもはがしたんぢやないかい？」と、お母さんはびつくらしてヨブの方を振りかへつて見ました。

「いゝえ。でも僕悲しいの。なぜ僕たちは毎日騾馬を追つてゐなければならないの。こんなつまらない卑しい仕事は止してしまひたい。」とヨブはもう涙を流してゐました。

「…………」お母さんは何も言ひませんでした。靜かに兩方の手でヨブの腕を抱いて、そしてやさしい眼でヨブを見ました。

ヨブはお母さんにやさしく抱かれるとどうすることもできませんでした。ヨブは仕方なしにお母さんと騾馬の後から溜息をつきながら歩いて行きました。

星の光りがだんだん薄らいでゆきました。朝の風が草の葉をそよがせて來ました。ヨブはエヂプトの旅の朝のことを思ひ出しました。しかしヨブには、自分はやつぱり世界中で一番卑しい不幸な人間のやうに思はれて仕方がありませんでした。ヨブは足を引きずりながら歩いて行きました。

草の上には霧がかゝつてゐました。

ヨブはその時、誰か草の上を羊飼ひの笛を吹いて通つて行くのを聽きました。

「羊飼ひ！　何といふ高尚な仕事だらう。」ヨブはかう思ひました。自分の騾馬追ひといふ卑しい仕事が一層いやにな

りました。

羊飼ひの笛の音が聞えなくなつてしまふと今度は男や女たちの笑ひ聲や、話し聲が森の中から響いて來ました。

間もなく十七八人の男や女たちが直ぐヨブの前にあらはれました。

ヨブのお母さんはその人たちの前に頭を下げて、

「旦那さま、騾馬に乗つてくださいませんか、どうぞ。」とまをしました。

ヨブはその旅人たちの姿をぢいつと見てゐました。みんなが長い旅に疲れたやうな、青白い顔をしてゐました。着物は荊の棘などでひどく破けてゐました。靴を片方しか穿いてゐない男もありました。みんなその人たちは貧乏だといふことは、ヨブにも直ぐにわかりました。

「騾馬に乗せても、とてもお駄賃をくれさうにもない。」とヨブは思ひました。

ヨブがこんなことを考へてゐた間に、お母さんとその人たちの間には話がまとまつてしまひました。

その人たちの中で一番やさしさうな、美しい、そして若い男が騾馬に乗ることになりました。その若い男もすつかり破けた着物を着てゐました。

みんなはその男のことを、先生！　先生！　と呼んでゐました。

髪の白い一人の男が自分の紫色の外套を脱いで騾馬の背に掛けました。先生と呼ばれた若い男は騾馬の背に乗りました。ヨブは騾馬の前に立つて手綱を曳いて歩きました。

「エルサレムの町まで乗せて行つておくれ。」と若い男はやさしい聲で言ひました。

ヨブは振りかへつてその男を見ました。その若い男の眼はエヂプトで見た星よりもやさしくまたゝいてゐました。

「わたしはすつかり疲れてしまつたので、とてもエルサレムの町までは歩いて行くことはできなかつたが、驢馬に乗せていただいたので、樂に行くことができる。」と言つて、若い男はヨブやヨブのお母さんを見てうれしさうに笑ひました。

ヨブは、なぜだか、その若い男を見てゐるのが好きでした。その男の美しい眼を見てゐると、不思議と、ヨブの心は昔の仕合せをとりもどして來るのでした。

最初、ヨブは「このお客さまはとてもお駄賃なんか拂つてくれさうにもない。」と思つて、念入りに若い男のポケットなどを注意して見ましたが、その男を見ながら歩いてゐる間にすつかりその男が好きになつてしまひました。

日が地平線の上にのぼつて來ました。

驢馬の上の若い男はポケットの中から黒いパンを取り出してヨブにくれました。

ヨブはパンを嚙じりながら歩きました。

エルサレムの町の、高いお宮の屋根が見えるやうになりました。小鳥が草の上に鳴いてゐました。丁度その時でした、道の兩側の家々から男も女も飛び出して來て、驢馬の上の男の名を呼びました。

「あの男はイエス・キリストだ！」と叫んだ者がありました。盲人も跛者も家の中から急いで出て來て、口々に「ホザナ！」と叫びました。

「あれは生きた神さまだ！」「救ひ主だ！」

「ホザナ！　ホザナ！」

道傍の人たちは狂人のやうになつて、若い男を歡迎しました。誰も彼もが橄欖や棕梠の葉を持つて來て、道に布き

ました。その上をヨブもお母さんといつしよに、若者について歩くのでした。

エルサレムの門の前に來ました。

町の人たちはなだれを打つて門の外へ集まつて來ました。そしてみんながうれしさうに、

「ホザナ！　ホザナ！」と叫びました。

エルサレムの町中が谺して響きました。

ヨブはうれしくてたまりませんでした。ヨブは自分が褒められてゐるやうに愉快でした。

若い男や、伴れの人たちはエルサレムの門口でヨブやヨブのお母さんと別れました。

ヨブは破けた着物を着た人たちの姿がエルサレムの町の中にかくれて見えなくなるまで、その人たちを見送つてゐました。その人たちの姿が見えなくなると同時に、ヨブは何だか急に寂しい氣持ちになりました。

「お母さん、今のお客さまは誰でせう？」騾馬の手綱を引きながらヨブはお母さんにたづねました。

「あたしにも誰だかわからない。」とお母さんもきよとんとしてエルサレムの方を振返つて見ました。

それから十日ばかりも過ぎてからでした。ヨブはイエス・キリストといふ男が、エルサレムの學者やお金持のために十字架にかけられて殺されたといふことを聽きました。

「あのお客さまだねえ。イエス・キリストと言つたのは。」ヨブはその時かう言つて、お母さんと話しました。そして破けた着物を着た美しい顏の若者を思ひ出しました。

「何だか可哀さうだねえ。」かう言つてヨブはお母さんを見ました。お母さんは淚を落してゐました。

それからまた二三日過ぎてからでありました。ヨブは一度殺されたキリストがよみがへつて天に昇つたといふ噂を

聴きました。

「イエス・キリストこそほんたうに神様のお子ですよ！」誰も彼もかう言ひました。

ヨブとヨブのお母さんがエルサレムの門口までイエス・キリストを驢馬に乗せて行つたことが知れわたつた時、村の人たちはほんたうにヨブとヨブのお母さんをうらやましいと思ひました。

「僕は神様のお子イエス・キリストを僕の驢馬に乗せてエルサレムに行つたのだ！」ヨブはかう思ひました。自分は世界中で一番神さまにめぐまれた人間であると考へずにはをれなくなりました。ヨブは自分が學者でもなく、お金持でもなく、貧乏な驢馬追ひであつたことをほんたうにありがたく思ひました。

ヨブは毎日お母さんと二人で驢馬をつれて働きに出かけましたが、昔の幸福がふたゝびヨブの心によみがへつて來ました。

賣られたひつじかひ

故郷なつかし
角笛吹けば羊らは走る
木はまるはだか
あの山
あの峠
秋の風吹く

あの山
あの峠
雪の夜は
羊を抱いて
夢ばかり見る

小鳥は鳴けど

あの山
あの峠
花ぐもり
春の日が暮れる
売られた子は
羊を抱いて
空ばかり見る

京の寺へ

陸奥の國のお金持の八太郎爺さんと貧乏人の三五郎爺さんは、或る年の秋、京の御本山まゐりに出かけました。

八太郎爺さんはお金持ちでしたから二百兩のお錢を振り分けの荷につゝんで出かけました。三五郎爺さんは京までゆく旅の費用をどうしてこしらへたらいゝかと幾日も幾晩も考へました。そしてお婆さんの智慧で去年生まれたばかりの二郎坊といふ仔馬を賣つて、たつた二兩のお錢をこしらへました。

「二郎坊やい、かんにんしてくれ。お前を人に賣つてはすまないが、お聖人樣を拜みにゆく金にするぢやで……」とかう言つて、伯樂にひかれてゆく仔馬を見送りながら、三五郎爺さんは、ぽろ／＼と涙を落しました。

八太郎爺さんはたくさんのお錢を持つてゐましたから、途中の茶店にやすんでもおいしいものばかりたべましたが、三五郎爺さんは二兩のお錢を大事さうに懷に入れたまゝ茶店にやすんでもめつたに物もたべないで水ばかり飲んでゐました。

三五郎爺さんは儉約の上にも儉約をしなければ京の御本山まで行つて、お金を納めて歸つてくることはできまいと思ひました。故郷を立つてから四日目には、陸奥を立つた時お婆さんが風呂敷につゝんでくれた柿の實が一つ殘つてゐました。

三五郎爺さんは柿の實を出しては「これは陸奥の國の珍らしい柿の實ぢや、何でも結構な物と換へてくだされ。」と節面白くうたひながら歩いてゆきました。

一人の旅人は三五郎爺さんの柿一つと、自分の持つてゐた三つの梨とを取換へてくれました。

三五郎爺さんはその一つの梨だけ食べて他の二つの梨を出しては「これは陸奥の國の珍らしい梨の實ぢや……」と同じやうなことをうたつては歩いてゆきました。

今度は二つの梨と、五つの玉蜀黍と取り換へました。三五郎爺さんは一つだけ玉蜀黍をたべて、あとの四つの玉蜀黍と十文のお錢とをとりかへました。

こんなことをして武藏あたりまで旅をつゞけて來た時は、三五郎爺さんはもう三兩のお錢を儲けてゐました。それでも三五郎爺さんは一文でもたくさんお錢をためてみんな京の御本山へお納めしなければならぬと思ひましたので、茶屋にやすんでも水ばかり飮んでゐました。ですから、からだはだん〳〵弱りますし、足はのろくなりました。おしまひにはどうしても八太郎爺さんといつしよに歩くこともできなくなりました。

或る日、相模の國の或る峠にかゝつた時でありました。八太郎爺さんは駕籠をやとつて峠を越しました。貧乏な三五郎爺さんは息せき切つて走りましたが追ひつけませんでした。そのうち駕は見えなくなりました。日は暮れかゝつて來ました。三五郎爺さんは泣き出しさうな顏をして山道を歩いてゐました。或る森の蔭に一軒の百姓屋がありました。三五郎爺さんは森の百姓家の方へ歩いてゆきました。

「ごめんなさい、わたしは旅の者ですが、つれにはぐれて難儀してゐます。どうか今夜だけとめてください。」と三五郎爺さんは言ひました。

家の中はもう薄暗くなつてゐました。家の中にはたしかに人のけはひがするのでしたが、たれも返事をする人がありませんでした。三五郎爺さんはそうツと戸をあけて見ました。たしかにそこには四つの人の影が見えるのでした。

薄暗い床の上からさびしさうに、眼だけが、三五郎爺さんの方を見てゐるのでした。

「どうしたんです。御病氣ですか。」と三五郎爺さんは聲をかけました。

「えゝ、もうわたしたちはこの二三日水一つ飲まないで苦しんでゐるのです。」と家の主が低い弱い聲で申しました。

「去年からわたしの病氣で馬も鍬も賣つて麥や粟を買ひましたが、いまでは一合の粟も持ちませんので、かうやつて親子四人が死ぬのを待つてゐるばかりです。」

三五郎爺さんは主の話をきいて泣かずにはゐられませんでした。おかみさんと、それから二人の子供たちは犬のやうになつて土間の藁の上にうめいてゐました。一人の子供はその藁をぼり〳〵と噛んでゐました。

三五郎爺さんは爐に火を焚きつけました。それから川に行つて水を掬んで來ました。そして自分の持つてゐた粟とお米を袋からとり出して、お粥をこしらへて家の人たちにたべさせました。

「わたしたちは半年振りにお米をいたゞきました。」と言つて幽靈のやうな四人の家族たちは涙を流してよろこびました。

その翌日も、その翌日も、三五郎爺さんはお粥を焚いてやつたり、水を飲ませてやつたりしました。

三五郎爺さんは八太郎爺さんのことや、京の御本山まゐりのことが氣にかゝつてなりませんでしたが、この氣の毒な百姓家の人たちを見捨てゝ京へゆくこともできませんでした。三五郎爺さんはしまひにはお米だの藥だのを買つて來ては四人の家族をたすけてやりました。四人の病人はすつかり元氣になりました。

春が來ました。三五郎爺さんはまだ森の百姓家に逗留してゐました。野には青い麥がかゞやいて來ました。けれども森の家の人たちは去年馬も鍬も賣つてしまつたので畑を耕すこともできませんでした。

三五郎爺さんは、故郷から持つて來た二兩のお錢と、道々儲けて來た三兩のお錢を懷にして、もいちど武藏の國の馬の市まで出かけました。そこで馬だの、熊だのを買つて森の家にかへりました。ところが不思議なことには三五郎爺さんが武藏の馬の市で買つたその馬はあの二郎坊だつたのです。

三五郎爺さんも馬もどんなにかよろこんだでせう。

三五郎爺さんはお錢も何もすつかり百姓たちにやつて夏まで森の家の手つだひをしました。百姓たちは前よりずつと幸福な人になりました。

或る晩、秋風が吹くころ、三五郎爺さんは二郎坊に乘つてこつそり百姓の家から逃げるやうにして、陸奧の國へかへりました。百姓たちは三五郎爺さんがどこの國の人だか、また何といふ名の人だかそれさへたうとう知ることができませんでした。「あれはきつと佛さまか神さまだつたのだらう。」と森の家の人たちは語りつたへました。

三五郎爺さんはたうとう京の御本山にもゆかないで、おいもだの、柿の實だのをかじりかじり二郎坊に乘つて故郷へかへりました。それでも三五郎爺さんはほんたうにうれしさうな顏をして、故郷へかへつて行きました。

駕籠に乘つたり馬に乘つたりして、ぜいたくな旅をつゞけて京についた八太郎爺さんは、御本山におまゐりをしました。

八太郎爺さんはびつくりしました。御本山のお聖人さまの直ぐそばに貧乏人の三五郎爺さんがきちんと坐つてゐるのを見たからです。

「わしは馬や駕籠で京に着いたばかりだのに、あのよぼ〳〵の三五郎がわしより早く京に着いた筈はない。これはわしの眼のまちがひぢや。」とかう思つては幾度も幾度もお聖人さまの方を見ましたが、やつぱり頭のてつぺんが丸くは

げてゐる具合までが三五郎爺さんにそつくりでした。それに不思議なことには三五郎爺さんの頭の上には後光がさしてゐるのでした。

八太郎爺さんは翌の日も御本山へおまゐりをしました。やつぱり昨日と同じやうに三五郎爺さんがお聖人さまのすぐそばに坐つてゐるのでした。頭からは後光がさしてゐました。

八太郎爺さんはどうかして三五郎爺さんに聲をかけて見たいと思ひました。お勤めがすんだらきつとお寺の門で逢へるにちがひないと思つて、門のところに立つてゐましたが、三五郎爺さんは一度も門から出て來ませんでした。

八太郎爺さんは毎日御本山におまゐりはしましたがすこしもうれしい心持ちにはなれませんでした。それは八太郎爺さんの懐にはいつてゐたたくさんなお錢を、お寺の人ごみの中で掏りとられはしまいかと思つてお念佛を唱へながらも、お金のことばかり心配しなければならなかつたからです。まつたくそのころはお寺にゆけば掏摸がゐますし、旅をすればおひはぎがゐたりして、お金を持つてゐる人ほど旅は心配でした。

ですから、八太郎爺さんは京の御本山まゐりをしましたが、すこしもありがたい心持ちにはなれないで、夜も晝もお金の心配ばかりして、青いやつれた顔をして、秋の末頃陸奥の國にかへりました。

陸奥へかへるとまたびつくりしました。

村の入り口で、八太郎爺さんは三五郎爺さんに出逢ひました。三五郎爺さんは赤い丸々した顔をして、川の中で二郎坊のたてがみや脚を洗つてゐました。

「おやツもう京から歸つたのかい。」と八太郎爺さんは眼を丸くしてたづねました。

「いゝや、わしは相模まで行つて、途中で旅がいやになつたので、京には行かんで歸つてしまひました。」と三五郎爺

さんは申しました。まつたくそれにちがひなかつたのでした。

八太郎さんはぽかアんと大きな口を開けたまゝ三五郎さんを見つめてゐました。

「いや、たしかにわしはこの眼で、三五郎さんが御本山に坐つてゐたのを見たんだがなア。」と八太郎さんは口のうちで申しました。そしてそつと三五郎さんの頭を見ました。別に後光もさゝず、元のまゝに三五郎さんの頭のまんなかは丸くはげてゐました。

マカアの夢

ロシアに、マカアといふ大酒飲みの男がありました。

大變いゝ男でしたが、神さまにお祈りもさゝげず、酒を飲んではなまけてばかりゐて、おかみさんや子供たちが寒いのにパンも持たず、靴下も持たないことなどは、まるで考へもしませんでした。

朝家を出かけて行く時には、今日こそ一生懸命にかせいで來ようと思ふのでしたが、さて雪の中を歩いてゐる間に、酒屋の窓から酒の香でもぷうんと漂うて來ると、矢も盾もたまらなくなつてしまふのでした。まるで幽靈にでもとりつかれたもののやうになつて酒屋の中に走りこむのでした。

そして一杯二杯とお酒を飲んでゐる間に、やかましやのおかみさんのことも、可愛い子供たちのことも忘れてしまふのでした。

マカアのポケットの中のお錢がなくなると、酒屋の主人は可哀さうにマカアを往來に突き出してしまふのでした。

マカアは雪の中をひよろ〳〵しながら歩いて來るのでした。

雪の中に醉ひつぶれて眠つてゐるところを、おかみさんに見つかつてさん〴〵に打たれることもありました。人のいいマカアはそんな時は心から「わたしがわるかつた。かんにんしてくれ」と言つておかみさんにあやまるのでした。

マカアは今日こそはうんと働いておかみさんや子供たちにも、夕方にはおいしいパンでもどつさり買つて歸つてやらう、赤ん坊の毛糸の帽子も買つてやらうなどと考へながら袋をかついで町の方へ出かけて行きました。

丁度雪が降り止んで、雲の間から太陽がぎら〳〵とかゞやいてゐました。

小鳥はうれしさうに梢を飛んでゐました。

マカアはぼんやり雪の上にしやがんで日の光りを見つめてゐました。マカアは幾月振かに太陽の光りを見たのですから、まるでこの世界が新しくよみがへつて來たやうにさへ思ひました。

マカアの頭には若いころ戰爭に出かけて行つたことのあつた南のあたゝかい國のことなどがうかんで來ました。美しい花だの、香のいゝ黄金のやうな色の木實などが、マカアの眼の底に刻みつけられてゐたのでした。

雪の中を、空の小鳥たちは嬉しさうに鳴きながら日の光を浴びて南の方へ飛んで行くのでした。遠い地平線の上には青い空さへほの見えてゐました。

「あゝ、あゝ、あゝ……」マカアは欠伸まじりに深い溜息をしました。そして自由に南の空へ飛んで行く小鳥をうらやましさうにながめました。

「わたしらのやうなロシヤの雪の中の貧乏人に生まれるくらゐなら、あんな小鳥にでも生まれて來た方がよかつた。わたしたち貧乏人はどれほど働いても働いても、死ぬまで一日だつておなかいつぱいパンだの肉だのを食ふこともできない。一度でいゝから思ふ存分おいしい酒を飲んで見たいが貧乏人にはそれもできない。どんなにかせいだつて、どうしてあの小鳥たちのやうにあたゝかい南の國に行かれるものか。一生、牛や馬のやうにこき使はれて、瘦せこけて、しまひには、雪の中に捨てられてしまふのだ。そしてたまにはちつとばかしの酒を飲めば家の嬶にはひつぱたかれるし、あゝあゝこんなつまらないことはない……」マカアはしばらく考へこんで空を見つめてゐました。またいつものやうにマカアの心の中に怠け者が頭をもたげて來ました。

まじめに働く事がつく〴〵ばか〳〵しくなつて來ました。

「まゝよ、今日も遊んでしまへ。」マカアはかう思ひました。マカアは自分のポケツトのなかに手を突つこんで見ました。

ポケツトの中には銅貨がたつた一枚あるきりでした。

「ちえツ……」マカアはいま〳〵しさうに舌打ちをしました。「あの意地悪の地主の山の木を盗んでやれ……」マカアは氣味の悪い笑ひ方をしました。

マカアは袋の中から手斧を取り出して地主の山の中へはいつて行きました。三十分ばかりの後には、マカアは大きな木を伐り倒して雪の中を町の方へ運んで行つて、銀貨三枚に賣つてしまひました。

マカアは三枚の銀貨を握つていつもの酒屋に行きました。

「今日こそうんと飲むぞ。」マカアは大威張りで三枚の銀貨をがちやりと音をさせてテエブルの上に置きました。

マカアは日暮ころまで酒を飲みました。

マカアがよろ〳〵した足どりで、雪の中を歩き出したころは灯があちこちの窓からまたゝきはじめました。

マカアは雪の中を歩いてゐる間に眠たくてなりませんでした。たうとう或る木の下に眠りこけてしまひました。そして悲しい夢を見ました。

「マカア！」と呼ぶ恐ろしい聲が聞えました。マカアはびつくらして顔を上げました。

そこは天の上の世界で、まんなかには神さまが腰をかけておいでになりました。左右にはたくさんの天使たちが並んでゐました。

神さまの前には大きな秤がありました。秤の水平な棒の兩端には大きな分銅皿がつるしてあつて、一方の皿には天國行き、そして、もひとつの皿には地獄行きと書いてありました。

マカアは秤を見た時、あまり秤が大きいのでびつくらしました。

秤の傍には五六年前に死んだ村の教會の長老が生きてゐた時のやうに白い長い髯を生やして立つてゐました。

「おやツ！　さうするとわたしはいつの間にか死んだのかしら。」とマカアは思ひました。そしてびつくらして長老の顏を見ました。

「マカア！　お前はもう死んだのだよ。こゝは裁きの世界といふところだ。一度死んだ人間はみんなこゝに來て、神さまの前で、お裁きをうけなければならぬ。」

長老はマカアの顏を見てマカアの心を察しながらかう言ひました。

「ほんたうにわたしは死んだのですか？」マカアはわあツと泣きました。

「こんなに早く死ぬのだつたら、女房や子供たちとも、もいちど逢つて來るんだつたに。そして親切に子供たちを可愛がつてやつたものを……」と後悔しました。

「マカア、只今からお前が一生の間にした善いことゝ惡いことをこゝで秤にかけて衡つて見る。善いことの方が多ければ天國にやつてやる。惡いことの方が多ければ地獄に追ひやるのだ。」神樣は嚴かな聲でマカアにかうおつしやいました。

そして長老の方を向いて、

「長老！　マカアの一生の善と惡とをそこで讀み上げろ。」とお命じになりました。

長老は大きな帳面を取り出して讀みはじめました。

「えゝ……七月二日マカアは酒を飲むために地主の山から楢二十本を盗む……」

長老はこゝまで讀んで、秤の方を見ました。さうすると不思議と一方の地獄行きの分銅皿の方が重くなつて低く下つて行くのでした。

長老はまた讀みました。

「……九月一日マカアは酒屋に行き酒二合の金を拂ひ、酒屋の主人をごまかし酒五合を飲む……」

また、地獄行きの分銅皿が重くなつて、低く下りました。

「……十一月十日マカアは一日怠け歩き大酒を飲んで雪の中に眠る……」

また地獄行きの分銅皿が重くなつてぐつと下つてしまひました。

長老が讀み上げてしまつた時は、秤は垂直になつてしまつて、地獄行きの分銅皿は床の上に着くやうに下つてゐました。

「マカア、お前は地獄に行かねばならぬぞツ！」

神さまはかうおつしやいました。

それと同時に、地獄の門が遠くの方で開く音がしました。

マカアは再びわあツと泣き出しました。

「神さま、地獄だけは勘忍してください。わたしは地獄に行きたくはありません。」とまをしました。

「それでもお前はこんなに惡いことをしたり、怠けたりばかりしてゐたではないか。」と神さまは秤を指さしてお見せ

になりました。

「でも、神さま、わたしが怠けたり、地主の山の木を伐り倒してお酒を飲んだりしましたのには、理由があるんですから……」

と、マカアがまをしました。

「それではその理由を話すがいゝ。」と神さまはおつしやいました。

「神さまは貧乏といふことを御存知ですか？」とマカアがたづねました。

「俺は貧乏といふことは知らない。」と神さまはお答へになりました。

「さうですか。それではお話いたします。人間の世には貧乏といふものがございます。それは〳〵苦しいものです。貧乏に苦しめられてゐる人間は一生かせいでもかせいでも腹いつぱいパンを食ふことはできません。貧乏の家では子供だつて女房だつてどんな寒い冬でも満足な靴下一つ穿くこともできないで慄へてをります。あまり寒いものですから暖まりたいと思ひますが、酒を買ふ金もありません。仕方がないから地主の山にはいつて木を盗みます。さうすると今度は鉄の鎖でくゝられて、恐ろしい監獄に押し込められます。ロシヤの貧乏人は一生苦しみ通しで、おしまひには監獄で殺されてしまひます。」

マカアはかう言つて思はずぽとり〳〵涙を落しました。

マカアの話を聴いてゐて、そしてマカアの涙を御覧になつた神さまも思はずほろ〳〵と涙をお落しになりました。神さまがお泣きになつたのを見た天使たちもまたほろ〳〵と涙を落しました。長老も泣きました。

みんなの涙が偶然にも秤の天国行きの分銅皿の上に落ちたのです。さうすると、今まで高く上つてゐた天国行きの

天秤の方へ上つてしまひました。地獄行きの分銅皿は輕くなつて、分銅皿が急に重くなつて、今度はあべこべに、低く〳〵床の方へ下りて來ました。

神さまも天使たちも、マカアもびつくらして秤の分銅皿を見ました。

「マカア、お前の罪はゆるされた。お前は天國に行くがいゝ。」

と神さまはおつしやいました。

マカアはあまりの嬉しさに飛び上つてよろこびました。そのはずみにマカアの夢は破れてしまひました。

マカアは、やつぱり木の下に、雪の中に寢てゐるのでした。靑い星がまたゝいてゐました。

星の光りが、マカアには夢の中で見た神さまの眼のやうに思はれました。

マカアはしばらく雪の中で考へこんでゐました。急に今まで怠けてゐたことや、山の木を盜んだりしたことが恐ろしくなつて來たのでした。

それから後、マカアは雪の日でも一生懸命に働いては、妻や子供を可愛がつて、神さまにお祈りをさゝげるやうな殊勝な人間になりました。

小鳥も歸る

雲雀が鳴く六月の空
草いきれした地平線をかすめて
白い雲の下に汽車が走る
帆が走る
故郷戀ひし、弟よ、妹よ
麥の丘に爪立ちすれど
雪のアルプスのかなしくもある。

雲雀が鳴く六月の正午
桑の實をつゝく小鳥あはれ
たつた一羽で青い空に歸る
弟よ妹よ
柴笛吹けば微風が
故郷の山から吹いて來れど

故郷は見えず
雪のアルプスのかなしくもある。

雲雀が鳴く六月の午後
葦の原わけて帆は歸る.
小鳥も歸る
白い雲も歸る
たつた一人で麥の丘に立つて
柴笛吹けば
楡が三本ひよろひよろと
湖に沿うて光る
風も光る

柴笛吹けば弟よ妹よ
故郷の空へ日は落ちる
力まかせに飛び上つて見れど
涙ばかりが地に落ちて
雪のアルプスのかなしくもある。

クリスマスの夜

北の、寒い荒れ果てた國にハルバアトと云ふ老人と、その息子のホップといふ二人の男が住んでゐました。

父のハルバアト爺も息子のホップも仕様のないまるで獸のやうな亂暴ものでした。父のハルバアト爺は七十にもなつてゐましたが、なかなか腕力が強くて、何か氣に食はぬことでもあると、ぢきに人をなぐりつけるといふやうな男でした。息子のホップの方も父にまけぬほどの亂暴ものでした。

ですから近所の人たちはハルバアト親子を見るとまるで厄病神にでも出逢つたやうに、恐れるのでした。近所の人たちは誰一人、この親子に聲をかけるものもありませんでした。

親子二人はたゞ二人きりで、暗い小屋の中で住んでゐました。そしてお互のあひだでも、何か氣に食はぬことでもあれば、なぐり合つたり、噛みついたりしました。村の人たちは獅子のやうな、ものすごい聲を出して、親子が洞穴のやうな小屋の中で喧嘩をしてゐるのを、毎日のやうに見ました。

「きつと、どつちかゞ殺されたにちがひない。」と思つて、村の人たちはおつかなびつくりで、小屋のなかを、のぞき込んで見るのでした。

さうすると二人の男たちは、いつの間にかもともと通りに仲なほりをして、爐のはたで、酒を飲んだり肉をわしづかみにして、むさぼり食つてゐたりするのでした。

「しかし、きつと一度は二人のうちのどつちかゞ殺されてしまふにちがひない。」

村の人たちはこの二人がなぐり合ひをするたんびにさう思ふのでした。村の人たちの豫想が、たうとうほんたうになつてあらはれて來ました。

クリスマスの夜でした。

ほんたうに寒い晩でした。雪が深くつもつてゐました。しかし、どんな貧しい人の家でも、今夜だけは、爐のわきに柊の葉がかざられたり、飾り蠟燭の火がともされたり、テエブルの上にはクリスマスの御馳走がならべられたりしてゐました。子供たちは樂しい讃美歌をうたつてクリスマスをいはひました。寢床の中の子供たちは、サンタクロスのお爺さんを夢みてゐました。

どこも、こゝも世界中が樂しみにみたされてゐました。

ところが、ハルパアト親子の小屋のなかだけには何の樂しいことも湧いて來ませんでした。二人はクリスマスのことさへ忘れてしまつてゐたのでした。

二人は薄暗い一つのランプの下で、まづい晩餐を取りました。小屋の窓の外には、樂しいクリスマスの星がかゞやいてゐるのも氣付かないで二人の男は、いま〳〵しさうな顔をしてパンをかじつたり、牛の骨を土間に叩きつけたりしました。

この夜も食事の後、ハルパアト爺とホップは、つまらぬことから、口ぎたなく罵り合ひました。そしてしまひには、またいつものやうに獅子のやうな恐ろしい聲を立てゝ、なぐり合ひをしました。

ハルバアト爺は顔を火のやうに赤くして、さんざんにホップの悪口をいひました。

ホップはたまりかねて、たうとうハルバアト爺の胸ぐらを掴みました。そして、

「このおいぼれ奴、出て失せろ。この家は二人でゐるにはあまり暑すぎる。お前は雪のなかに行つて體でも冷して來い。」と言つて、ハルバアト爺を小屋から雪のなかへ引きずり出さうとしました。

「なにをぬかす。この家は俺のものだ。きさまこそ出て失せろ。親不幸ものが……」と、がなりながらハルバアト爺も一生けんめいにホップとなぐり合ひをしました。

ですが、ハルバアト爺は年をとつてゐましたから、若いホップにはかなひませんでした。

ハルバアト爺は、たうとう戸口の方へ押し出されるやうになつてしまひました。それでもハルバアト爺はホップの腕に噛みついて、小屋から外に出ようとはしませんでした。

二人が戸口でなぐり合ひをしてゐる時でした。村のお寺のクリスマスの鐘の聲が、靜かに雪の中をひびいて來ました。

その鐘の音をきいたハルバアト爺は、急にかすれかすれの聲でホップに話しかけました。

「ホップや、ちよつとお前の手をゆるめてくれ。俺はあの鐘の音をきくと今でも思ひ出す。俺の親爺さんがまだ生きてゐたころぢや。俺は親爺さんとひどい喧嘩をした。そして俺はたうとう親爺さんを追ひつめて、丁度、こゝの戸口まで引きずり出した時であつた。俺は今夜のやうにクリスマスの鐘をきいた。俺はその時、ほんたうに悪いことをしたといふことに氣付いた。神さまが高い空から俺に何か話しかけてゐなさる聲をきいた。俺はそれで、この戸口まで來た時、親爺さんを掴んでゐた手をゆるめて、親爺さんをゆるしてやつた。ホップや、お前もこの戸口の敷居から外

へは一歩も俺を追ひ出してはならぬ。それは俺の爲ではない。お前のためだから……」とまをしました。

さすがに、意地の惡いホップも、父の話をきいてゐると、自分が惡かつたことに氣付いたのでした。ホップは父の胸ぐらを摑んでゐた兩手をはなして、ハルバアト爺をゆるしてやりました。そして二人はまた暗い小屋のなかにはいつて行きました。

窓の外にはクリスマスの夜の星がまたゝいてゐました。

ハルバアト爺の顏は草のやうに靑くなつてゐました。そして寒さうにわな〳〵とふるへてゐました。

ホップは幾年にも焚いたことのない爐の中に薪を投げ込んで部屋をあたゝめてやりました。そして雪のなかを町まで出かけて行つて、七面鳥の肉を買つて來てハルバアト爺にたべさせてやりました。

靜かな雪の夜をクリスマスの鐘の聲が、かすかに鳴りひゞいてゐました。

寒い灰色の雪の日が夜明けました。ハルバアト爺はその朝、爐のはたで、やすらかに死んでゐました。

ハルバアト爺のお葬の日、ホップは靑い顏をして杖にすがつたまゝ、ひよろ〳〵してハルバアト爺の棺について墓場に行きました。

ホップは雪の中を歩きながら、しよつちゆう、何か口のなかで祈つてをりました。そして時々悲しさうに深いためいきをつきました。

棺が墓の中におろされた時、ホップは子供のやうになつて、しく〳〵泣き出しました。

村の人たちはその時はじめてホップが泣いたのを見ました。

ホップは見るも氣の毒なくらゐ悲しい顏つきをして墓場から歸つて來ました。

或いたづらな子供たちが、ホップを見ては、

「親不孝のホップやあい。」と言つて石をホップに投げつけました。

昨日までのホップだつたら、やにはに飛びかゝつて行つて、子供たちをなぐりつけたでせうが、今日のホップは子供たちのいたづらを見ても、ぢいつとさびしい眼をみはつてゐるだけでした。

たま〳〵子供が投げつけた石が一つホップの額にあたりました。ホップの額からは、どすぐろい血が流れて來ました。

けれどもホップはすこしも怒らないで、自分を傷つけた小石を拾つてポケットに入れたまゝ、悲しさうな顏をして自分の小屋へかへつて行きました。

ホップはその後、急におぢいさんのやうになつてしまひましたが、それから數年後、やはりクリスマスの晩に、クリスマスの鐘の音をきゝながら爐のはたで、平和な死にかたをして死にました。

五郎三郎と二人の娘

昔、大和の國に遠藤五郎三郎といふお爺さんがゐました。身の丈は六尺を越え、腕は樫のやうに固く、年はとつてゐましたが、小牛くらゐの石は平氣で持ち上げることができました。

また五郎三郎爺さんの聲といつたら、まるで雷のやうでした。五郎三郎爺さんが畑で働いてゐて高い聲を出しますと、七つの村七つの山に響くといはれてゐました。

今では大和の葛城の大臣といふ貴い人の邸に養はれてゐるのでしたが、葛城の大臣の家來になることができたのも、五郎三郎爺さんの強い腕の力のおかげでありました。

或る年の秋のことでありました。それは五郎三郎爺さんがまだ若いころのことですが、葛城の大臣は牛車に乘つて、觀月の宴に、宮中へ出かけて行きました。

或る川の高い崖のところに車がさしかゝつたときでありました。どうしたのか、牛が驚いたはずみに、牛も、車も、葛城の大臣も眞つさかさまに川の中へ落ちようとしました。

そこを通りかゝつてゐた五郎三郎は牛車のうしろから車をつかみました。そして兩腕に力を入れて落ちかゝつてゐる車も、大臣も牛もいつしよに崖から引き上げてしまひました。

見てゐた人達はみんな眼を丸くして驚きました。

大臣は涙を流してよろこびました。

それ以來五郎三郎は、葛城の大臣から遠藤といふ姓をもらつて、大臣の家來になりました。そして立派な一人前の武士として長い劍を佩いて、大臣のお伴をしては戰爭にも行きました。

五郎三郎爺さんは、少しお酒に醉つてくると若いころの戰の自慢話をしては若い男たちに聞かせました。

五郎三郎爺さんは、いつも口癖のやうに先づ第一に自分の先祖の名を話しました。

「わしは坂上田村麻呂將軍の子孫なんだが。」五郎三郎爺さんは、先づかう言つて置いてから、いよ〳〵自分の若いころの戰話に移つて行くのでした。

田村麻呂將軍の子孫だなんていふことは五郎三郎爺さんが何の理由もなしに、自分勝手にきめたことなんですが、しまひには、自分でも、ほんたうに田村麻呂將軍の子孫だと信じ切つてしまふやうになりました。

若い人たちのうちには五郎三郎爺さんを見ると「田村麻呂將軍御機嫌はいかゞ？」などとからかふものもありましたが、五郎三郎爺さんは、さう呼ばれるのをたいへんよろこんでゐました。

それから、もひとつ、五郎三郎爺さんには御自慢の物がありました。それは若いころ葛城の大臣について東の夷退治に行つた時、夷の首を切つたといふので、大臣から御褒美にいたゞいた太刀と烏帽子でした。

お祭があつたり、何かおめでたいことでもあると、五郎三郎爺さんはきつと、その古い烏帽子をかむつて、太刀を腰に佩いて得意な顏をするのでした。

五郎三郎爺さんは、毎日野良に出ては鍬を持つて土を掘つたり、芋の根を植ゑたりしてゐました。

しかし、そのやうな百姓の仕事は、五郎三郎爺さんには少しも面白くはありませんでした。

「戰でもおつぱじまつてくれるといゝがなあ！」

かう言つては、つまらなさうに畑の芋の葉などをながめて溜息をつくこともありました。そんな時は五郎三郎爺さんは、自分の腰がまがりかゝつてゐることも、自分の顏にも腕にも皺が寄つて來たことも忘れてしまつてゐるのでした。

五郎三郎爺さんの耳には、勇ましい駒の蹄や、矢さけびの聲が聞えて來るのでした。五郎三郎爺さんは自分の腕を叩きました。いまにも戰が初まつたら、あの烏帽子をかむつて、太刀を佩いて、眞つ先きに敵の中に切り込んで行かうと思ふのでした。

五郎三郎爺さんはぢいつと心を落ちつけて見ました。さうすると、そこには何のへんてつもない畑の中に、芋の根がごろ〳〵と轉がつてゐるのでした。

「ちえツ、ばか〳〵しい！」五郎三郎爺さんは、敵の大將の首でなくて、土のついた芋がころがつてゐるので、がつかりしました。そしていま〳〵しさうに芋の上に唾をひつかけました。

五郎三郎爺さんはつまらなさうな顏をして遠い山を見ました。山には白い煙がたゞよつてゐました。里からは鷄の聲などが聞えて來ました。どこもこゝも天下泰平でした。戰などはすつかり忘れられてゐました。

五郎三郎爺さんは二つ三つつゞけさまに大きな欠伸をしました。

大きな欠伸をして、芋の畑を掘りかへしてゐると、ふと、二人の娘のことを思ひ出しました。姉娘は二十五で、妹娘は二十でした。姉の方は町の鑄物師のお嫁さんになつてゐましたが、妹の方はまだお嫁さんにはなつてゐませんでした。

「さうだつた。わしはすつかり二人の娘たちのことを忘れてゐた。わしが丈夫でゐるあひだに、二人の娘たちのことも考へておいてやらなければならぬ。わしがいつ死んでも難儀をしないだけのことはしておいてやらなければならぬ。」

五郎三郎爺さんは芋の畑を打ちながらかう考へたのでした。娘たちのことを考へるときの五郎三郎爺さんは、まるで人がちがつたほどのやさしいお爺さんでした。

いつたいかうしなければならぬと考へ込むと、ちよつとでも待つてをれないのが五郎三郎爺さんの性分でした。ですからその夜、五郎三郎爺さんは葛城の大臣の前に出てかうまをしました。

「わたくしも、たいへん老人になりました。もう、いつ死ぬかも知れません。つきましては二人の娘たちに、わたくしの家も、畑も、田も、お金もすつかり今のうちにゆづりたいと思ふのです。」

この話を聞いた大臣はしばらく五郎三郎爺さんの顔を見てゐましたが、

「しかし、その考へはすこしのばした方がよくはないか、お前の二人の娘は安心して信用できるかも知れぬが、お前の婿の鑄物師は安心のできぬ人物のやうに思はれる。だからお金や家をゆづることは見合せたらどうだ。」と言ひました。

けれど五郎三郎爺さんは「いゝえ、わたくしは自分の娘を信じますから。」と言つて、たうとう自分が一生かゝつて貯へたお金も、家も、二人の娘たちにゆづることにきめてしまひました。

村の和尚さまも、村長も、それから村のたれかれと大勢の人たちが、五郎三郎爺さんの家に集まつて來ました。大臣の家からは、箕面鴨人といふ老武者が一人、大臣の代理でやつて來ました。

みんなは、五郎三郎爺さんの前に出ては今日、家ゆづり、田ゆづりのさかもりに呼ばれたお禮をのべました。

大臣の代理で來た箕面鴨人は、頭の髮は半分以上白くなつてゐましたが、まだ誰もお嫁さんに來てくれる人がないので、どうかして五郎三郎爺さんの妹娘をもらひたいと思つてゐるのでした。ですから今日はできるだけ立派な烏帽子をかむつて、瘦せ馬に乘つてやつて來ました。

二人の娘も、婿の鑄物師もお客たちもそろつたので、五郎三郎爺さんは正座にきちんと坐りこんで、懷の中から紙に書いた物をとり出しました。

今日は五郎三郎爺さんも、御自慢の古い烏帽子をかむつて、太刀を佩いてゐました。

いかにももつたいぶつた風で五郎三郎爺さんは讀み上げました。

「えへん、……坂上田村麻呂將軍八代の孫、葛城の大臣の家臣遠藤の五郎三郎神明に誓つてまをす、このたび我が家、我が畑、我が田、我が貯へすべてを二人の子らにゆづる。その父の恩に對して二人の子らは我が生きんかぎり、屋根の下と、毎日五合の米とを父に與ふべきものなり。もし約束に違背する時はたちどころに春日明神の神罰あたるべし、えへん／＼……」

五郎三郎爺さんはこれだけ讀んでしまふと、ふたゝびうや／＼しく、書きつけを懷のなかにしまひました。

これで儀式はすみました。お客さまたちはみんな五郎三郎爺さんの振る舞ひ酒を飲んでさかもりをはじめました。

お寺の和尚さまはだれよりたくさんお酒を飲んで、たくさん御馳走をいたゞきました。

和尚さまがまるで馬のやうに喰べてゐるのを見た五郎三郎爺さんは、和尚さまの前に行つてかうまをしました。

「あなたはよくたくさんおあがりになりますねえ。」

和尚さまは平氣な顏で答へました。

「いや、愚僧がこのやうにたくさん御馳走をいたゞくのは、後日、いざといふ事が起つた場合におなかゞすいてゐては、働けないからです。」

和尚さまは、五郎三郎爺さんの言葉などにはまるで頓着しないで、大きな杯の中に首を突つ込んでお酒を飲みました。

田ゆづり家ゆづりのさかもりがすんでからまだ半年もたゝないうちに、五郎三郎爺さんは、自分のやつたことを後悔しなければならなくなりました。それはかういふわけなんです。

五郎三郎爺さんが信じてゐたほど二人の娘たちは、親孝行ではなかつたのでした。それに婿の鑄物師は脊の低い、心のわるい人でした。ですから五郎三郎爺さんの畑や家は貰ひながらも、三人で惡い相談をして、犬のたべるやうな喰ひのこしの御飯をやつて、約束のお米なんかちつとも五郎三郎爺さんにわたさないのでした。それから五郎三郎爺さんが、夜になつて家にかへつて眠らうとすると、「あなたは牛のにほひがする。」と言つて、家の中に入れないのでした。

「でも、あの通り毎日五合の米と、屋根の下を與へると約束をしたではないか。」と五郎三郎爺さんが怒りますと、心の惡い鑄物師は、

「どんな米だつて、お米はお米だよ。犬の喰ひかすでもまうろく爺さんなんかにはたくさんだ。屋根の下といふ約束だから、牛小舍の屋根の下でたくさんぢやないか。」と憎々しいことを言つて、すこしも五郎三郎爺さんの言ふことをかまつてくれないのでした。

或るひどい雨の日でした。

五郎三郎爺さんが野良からすつかり雨にぬれて歸つて來ました。五郎三郎爺さんは朝から握り飯一つたべてゐませんでしたので、姉娘の窓に行つて、御飯をたべさしてくれとたのみました。

さうすると鑄物師が窓から顏を出しまして、「これでも食へ。」と言つて、芋の根の腐つたのを五郎三郎爺さんの顏にたゝきつけました。

五郎三郎爺さんは妹娘の窓に行つて、「今日はあまり寒いから、どうか家の中にとまらしてくれ。」とたのみました。

「姉さんの屋根の下におやすみなさい。あなたは姉さんばかりにたくさん畑もお金もおやりになつたんですから。」と言つて妹は窓をしめてしまひました。

五郎三郎爺さんはひもじいお腹をかゝへて雨の中を、あてもなく、雨にぬれて歩いてゐました。

いつの間にか五郎三郎爺さんは大臣の邸の前に來てゐました。家の中から箕面鴨人がとんで來て、五郎三郎爺さんを引き入れました。

寒さとひもじさに顫へてゐる五郎三郎爺さんの恰好はまるで熊のやうでした。

「だから、わしがあの時言つたぢやないか。しかしもう仕方がない。これからはわしの邸で安心してくらした方がいい。不孝者の娘の家なんかに歸るんぢやないぞ。」と大臣はたいへん親切に言つてくれました。そして五郎三郎爺さんをお風呂に入れて、自分の立派な着物などを着せてやりました。

そのまゝですめばよかつたのでしたが、こゝにまた不圖したことからたいへんな騷ぎがおこりました。

猿丸といふそねみ深い男がゐました。この男はやはり五郎三郎爺さんと同じくらゐ長いこと大臣の家にゐるのでしたが臆病者で、嘘つきで、なまけ者でしたから、たれにも可愛がられないで、いつも乞丐のやうなきたない着物を着てゐました。ふだんから五郎三郎爺さんが大臣に可愛がられてゐるのをねたんでゐたのでしたが、今日は大臣から立派な着物まで戴いたのを見てます〳〵ねたましく思ひました。で、よせばいゝのに五郎三郎爺さんが風呂から上つて、着物を着てゐるところにやつて來て、

「五郎三郎、お前は仕合せ者だよ。だがお前ほどの強い力を持つてゐて、それでゐてあんな不孝者の娘や、拙低の鑄物師なんかに馬鹿にされて、家を追ひ出されて來るなんて、お前も思つたほどの男ぢやなかつたな。若いころは大臣さまの御車を崖から引きずり上げたか知らぬが、今では小猫一匹も摑み上げることもできまい。老いては駿馬も駑馬に如かずかハツハツ〳〵〳〵……」

猿丸はかう言つて、五郎三郎の顏を指さしながら大きな聲で笑つて見せました。

「なに、老いては駑馬に如かずツ？　なまいきなことを言ふな。わしの力は昔と少しもちがはぬぞツ！　わしがどんな力を持つてるかよく見ておけよ。」五郎三郎爺さんはかう言つて、大臣からいたゞいたばかりの立派な着物をぬぎすてゝ元の乞食の様な着物に着かへると雨の中にとび出しました。

猿丸がびつくりしてゐる間に、五郎三郎爺さんは大臣の邸の高い塀をとび越えて往來に出ました。そして一目散に娘たちの家へ走つてまゐりました。

雨がだん〳〵ひどくなつて來ました。

五郎三郎爺さんは、娘の家にとんで行つて猿のやうに屋根の上にのぼりました。

娘たちはびつくりして窓から顔を出しました。

「お前たちは、わしを屋根の下にも寝かしてくれなかつた。だからわしもお前たちを屋根の下に寝かさないぞッ！」

かう言つて五郎三郎爺さんは、樫のやうな腕でめり〳〵と屋根の板をはぎました。

鑄物師は驚いて、窓から顔を出して、

「悪うございました。この通りです。」と言つて掌を合はせましたが、五郎三郎爺さんは、

「嘘つきの、狐野郎、何を言ふか？」とどなりながら、窓の方へ向けて大きな垂木を二三本投げつけました。

娘はちは仕方がないので村の和尚さまを呼びにやりました。

この前馬のやうにたくさん御馳走をいたゞいた和尚さまは、不承不精に雨の中を歩いて來ました。和尚さまは法衣の袖の下から阿彌陀さまの御像を取り出して、

「おゝい、おゝい五郎三郎ッ！」と大きな聲で呼びました。そして五郎三郎爺さんの方へ阿彌陀さまを向けました。けれども獅子のやうに怒つてゐる五郎三郎爺さんには、阿彌陀さまの御像も何の甲斐もありませんでした。

和尚さまは、阿彌陀さまの御像を上げては下げ、下げては上げして見せましたが、五郎三郎爺さんは平氣で雨に濡れながら屋根をめくりつゞけました。

大臣の邸からは、箕面鴨人が立派な烏帽子を冠つて、太刀を佩き、痩せ馬に乘つてかけつけました。そして屋根の上の五郎三郎爺さんを見て、大きな聲で、

「おゝい、おゝい。箕面鴨人御迎へに、まかり越したり。早々御屋根を下りさせ給へッ！」と呼びました。

五郎三郎爺さんはやつぱり平氣でした。ずん〳〵屋根の板をはいで行きました。

和尚さまは阿彌陀さまの御像を上げたり下げたりし、箕面鴨人は「おゝい、おゝい……」とくりかへしましたが、五郎三郎爺さんは平氣ですつかり屋根をはがしてしまひました。鑄物師も、姉妹の娘たちも家にをられなくなつて、家の外へ逃げ出してしまひました。

それを見た五郎三郎爺さんは、急に屋根の上で跳り上つてよろこびました。しかし屋根の上で跳り上つたはずみに、雨に濡れてゐた梁の上からすべり落ちました。そしてくづれて來た大きな梁や壁の下になつて押しつぶされてしまひました。

和尚さまと、箕面鴨人はとんで行つて、五郎三郎爺さんを助けようとしました。しかし五郎三郎爺さんは蟲の息になつてゐました。

和尚さまは阿彌陀樣の御像を取出して念佛を唱へました。

箕面鴨人はどこまでも眞面目くさつた顏をして、

「いかに、遠藤五郎三郎殿、氣をたしかにお持ちなされ、傷は淺い。」とまをしました。

五郎三郎爺さんは、そうつと眼をあけましたが、その眼には少しも人を怨んだり、憎んだりしてゐるやうなところはありませんでした。どこまでもやさしいお爺さんの眼でした。

「娘たちはけがはしませんでしたか？……」

心配さうな顏をして、五郎三郎爺さんは箕面鴨人や和尚さまを見ました。

「御娘御は何のおけがもなく……」と鴨人がまをしました。

それを聞いた五郎三郎爺さんはさも〳〵安心したやうなやさしい顏をして死んでしまひました。

五郎三郎爺さんが死んでから間もなく、二人の娘たちは家を捨てゝ旅に出てしまひました。

三四年經つてからでした。葛城の大臣は二人の娘が山城の或る尊い尼寺で立派な尼さまになつて、諸人に尊敬されてゐるといふ噂を聞きました。

乞丐とダンス

「きらきら星までも
星までも億兆萬里青い海のやうな
光りきらきら
そよ風よ吹けさらさら天まで吹けよ
白い蓮の花の香さらさらさら」

鐘吉はいつものやうに、夕方になると自分の家から廣い野を一つへだてた町ちかくまで、歌をうたひながら歩いて行くのでした。

鐘吉のおばあさんが去年亡くなりました時は、恰度蓮の花が咲いてゐるころでした。そよ風が吹くと、やすんでゐるおばあさんの部屋までかすかな蓮の花の香がたゞようて來るのでした。おばあさんは蓮の花の香をたいへんよろこびました。

鐘吉はおばあさんが亡くなつてからも、蓮の花の香がたゞようて來ると、おばあさんのことを思ひ出しました。そしてどうかして星の世界に行つてしまつたおばあさんに蓮の花の香を送つてあげたいと思つては、こんな歌をうたふのでした。

おばあさんは亡くなる時、鐘吉に文庫の中にあつたたくさんのお金をくれました。そしてこんなことを言つて聞か

せました。
「鐘吉や、このお錢はお前に上げるから、貧乏な人や、困つてゐる人たちに上げておくれ。けれどもお錢を人に上げたから、お前はそれでいゝことをしたと考へてはいけない。お錢よりもつと大事なものもいつしよに人にお上げなさいよ……」
おばあさんはこれだけのことを話して間もなく死んでしまひました。
鐘吉はおばあさんの言つた通りに、町のちかくまで出かけて行つてはお金を幾らづつか貧乏な人たちにやつて來るのでした。けれどもおばあさんが言つたおしまひの言葉の「おあしよりもつと大事なものもいつしよに人にお上げなさいよ。」といふ意味はどうしてもわかりませんでした。
鐘吉は、はじめのうちは毎日自分が貧乏な人たちにお金をやるのだと思ふと、何だか恥かしいやうな、しかし自分はいゝことをしてゐるのだといふやうな、うれしい心持ちになることができました。町外れの草原や川のほとりの砂の上には、古い船板や、川に流れついた木などで拵へた小さな小屋が並んでゐました。そこには人相の惡い、顔の蒼い人たちが住んでゐました。
それでも鐘吉の「きらきら星までも」といふ歌の聲が聞えて來ると、みんながうれしさうな、人の善ささうな顔をして草の中を鐘吉の方へ飛んで來るのでした、大人も子供も、
「坊ちやん。よくいらしつてくださいました。わたしたちはおひるから、坊ちやんがおいでになるのを待つてをりました。ほんたうに坊ちやんは歌がお上手でいらつしやいますねえ……」
ありつたけのお世辭をならべ立てゝ鐘吉の手からお金を貰ふのでした。

鐘吉は自分が急に何だかたいへんえらい人にでもなつたやうな氣持ちで、みんながぺこぺこ頭をさげたり、お世辭を言つたりするのを眺めてゐました。小屋の中から男も女も總出で、川の岸の草の上で輪を作つて、「きらきらきら星までも」とうたつて踊りまはつて鐘吉をよろこばせました。

けれども、一月二月と同じことを繰かへしてゐる間に、鐘吉は毎日同じやうに貧乏な人たちにお金をめぐんでゐながらも、いろいろいやなことを知るやうになりました。

「みんなが坊ちやんぼちやんと言つてさわいでくれるのは自分にお金があるからだ。」といふ事を考へると鐘吉はさびしい心になるのでした。それから、小屋の中から出て來る人たちが、老人や子供を押しのけて、强い男たちだけがいつもたくさんのお金を鐘吉の手からひつたくつて行くのでした。そんな時はお世辭笑ひをしてゐた男の顏がまるで狼のやうになるのでした。

鐘吉からお金をひつたくるやうにして持つて行つた男たちは、町に行つては酒を飲むのでした。そしてしまひには町で喧嘩をしたり、家に歸つて來てはおかみさんだの、子供たちを蹴つたり、なぐりつけたりするのでした。

鐘吉は人にお金をほどこしたために却つていろいろな惡い結果が生まれて來ることを知りました。それからまた人間の世界といふものが、今まで空想してゐたやうにそんなに美しいものでないことを知るやうになりました。

「きらきらら星までも」とうたつて歩きながらも鐘吉は幸福ではありませんでした。

三ケ月ばかり通つてゐる間に、亡くなつたおばあさんにいたゞいたお金はすつかりなくなりました。

それでも鐘吉は「きらきらら星までも」とうたつていつものやうに草原を歩いて行きました。

小屋の人たちは飛んで來て鐘吉のまはりに「きらきらら」をうたひながら踊りました。しかし今夜はいつまで踊つ

ても鐘吉がお金を出しませんので、無慾な一人の男はたまりかねて鐘吉の手を握つて見ました。またも一人の慾深なお婆さんは鐘吉の懐を撫でて見ました。

「坊ちやんお金は？」と一人の男がたづねました。

「もうすつかりあなた方に上げたんで、家には一文のお金もない。」と鐘吉はきまり悪さうに答へました。

みんな電氣にでも打たれたやうに、一度にぴつたりと歌を止めて、棒杭のやうに草の上に突つ立ちました。

「馬鹿なことをいふ小僧だ。」

「散々人にお世辭を言はせやがつて！」

「一文なしの洟つたれ小僧奴！」

「すつかり草臥れちやつた。一文なしで人にうたはせたり、踊らせたりするつて、何んといふ圖々しい小わつぱだらう！」

みんなはこんなことを言つて鐘吉を散々いぢめました。鐘吉は着物も、帶もすつかり破かれてしまひました。

廣い野には秋の月が出てゐました。蟲も鳴いてゐました。

「人間くらゐ悪いものはない！」

鐘吉はかう思ひました。川のほとりの小屋の中の人たちのことが鐘吉の頭にこびりついてゐるのでした。

鐘吉は急に悲しくなつて木の下に泣いてゐました。その時そこに來かゝつた一人の年寄つた乞丐がありました。

乞丐は鐘吉の顏を見ると、

「坊ちやん。どうぞ一文めぐんで下さい。」

と兩方の手を差し出しました。鐘吉はすつかり困つてしまひました。鐘吉が困つてゐるのを知らない乞丐は重ねて

「坊ちやんどうぞ一文いたゞかせて下さい。」

と言ひました。

鐘吉はどうしたらいゝのかまつたく困つてしまひました。

「どうぞ一文……」

と乞丐は鐘吉の前に兩手をひろげました。

鐘吉はたうとう思ひ切つて、乞食と同じやうに兩手をひろげて、何も言はないできたない乞丐の胸にとびかゝつて行きました。

「小父さん、僕はもうお金は一文も持たないんだから勘忍しておくれ！」

乞丐に鐘吉に抱きつかれたので最初はびつくりしましたが、次の瞬間には、

「あゝ、勿體ない。わたしのやうなものに小父さんなんて、そして抱いてくだすつて。あゝ、わたしは千兩萬兩のお金をいたゞいたよりもうれしうございます。」

と言つて乞丐も鐘吉を抱きました。そしてうれしくてたまらないと言つて泣きました。

一時間ばかりの後、まるい秋の月の下で鐘吉と乞丐は抱き合つたまゝ「きらきら星までも」とうたつて草の上で踊つてゐました。

鐘吉は今までになく幸福でした。鐘吉ははじめておばあさんが、

「お銭よりもつと大事なものもいつしよに人にお上げなさいよ。」

と言つた意味がわかつたのでした。

「やつぱり人間の世界には僕等が知らないたくさんな幸福があるんだ。」

と鐘吉は乞丐と踊りながら考へました。

黑ん坊白ん坊

東京の山の手に或る學校がありました。そこにはたいてい軍人の子だの、技師の子だの、會社員の子だのといふ人たちが多くありました。ですからみんながきれいな洋服を着たり、ぴかぴかとひかつた靴をはいたりして學校に通つてゐました。

またお友達の話にしても、たいていお父さんや、兄さんの自慢話が多くありました。

「僕のお父さんは陸軍中將だよ。」と一人の子供が言ひました。

「僕のお父さんは文部大臣だよ。」と一人の子供が言ひました。すると、一人の子供は、

「僕のお父さんは大學の博士だよ。」と言ひました。

「僕の兄さんは法學士だ。」と言つた子供もありました。

ところが、その學校にたつた一人いつもぼろ〱の着物を着て、青白い顏をしてゐる子供がありました。いつも、よく、顏に煙突の煤をくつつけてゐるので、學校の子供たちは、その子をほんたうの名で呼ばないで、印度人、印度人の黑ん坊と呼んでゐました。その子の本當の名は松吉といふのでした。

或る日學校で先生がみんなに、お父さんの職業をたづねた時、みんなは元氣よく、

「僕のお父さんは局長です。」

「僕のお父さんは將校です。」などと答へました。

松吉の順番になりました。松吉もみんなの高い元氣な聲につりこまれて、つい大きな聲で、

「僕の父は煙突の煤掃き人ですッ。」と言つてしまひました。そして黒くよごれた顔を上げて、先生の方を見ました。

しかし松吉が氣付いた時は、もうおそすぎました。クスッ、クスッと隣の席にゐたお友達がまつさきに笑ひ出しましたが、しまひには教室のなかのお友達がみんな大きな聲をしてワッハッハッと笑ひました。しまひには教壇の上の先生までが笑ひました。松吉はしくじつたと思ひました。もそつと低い聲で言へばよかつたと思ひました。

「けれども僕の父はやつぱり煙突掃除人なんだから……。低い聲で言つても、やつぱりみんなに笑はれるにきまつてる。」かう思ふと、何だか急に悲しくてなりませんでした。

「家の父もやつぱり軍人か會社員かそんな人であつたらどんなにいゝか知れないに。」と思ひました。

松吉は學校から、自分の家にかへつて行くあひだにも、今日の學校での出來ごとが頭にのこつてゐて何だか氣がふさいで仕方がありませんでした。

「僕はなぜ貧乏な煙突掃除人の子供に生まれたんだらう？」松吉はいつしよに樂しさうにかへつて行くお友達から、かくれるやうにして一人で長いさみしい塀の下を歩いてゐました。

「印度人ッ。黒ん坊ッ。」と誰かゞうしろから聲をかけました。今まではそんなことを言はれても平氣でゐられたのですが、今日はどうしても平氣でゐることができませんでした。急に恥しいやうな、くやしいやうな感じが胸いつぱいになつて來るのでした。

松吉は聲のした方を振り向きもしないでそのまゝ一目散に大きな並木の下を走りました。うしろの方からは多勢のお友達が、

「印度人の黒ん坊ツ。ワツハツハツ……」と呼んでゐる聲や笑つてゐる聲がしばらく聞えました。

松吉はたまらなくなつて林のなかに逃げて行きました。蜘蛛の巣が顏いちめんにひつかゝつたり、荊棘が着物を破いたり、手を引つかいたりしましたが松吉は夢中になつて林の奥へ奥へと逃げて行きました。そしてお友達の笑ひ聲や、話し聲が聞えなくなつた時、はじめて安心したやうに、林の中の草の上にしやがんでしまひました。ひとりでに涙がにじみ出て來て仕方がありませんでした。ふだんさへきたない着物でしたが、それが蜘蛛の巣でよごされたり、荊棘に裂かれたりしたのですから松吉の着物はまるでぼろ〳〵な乞食の着物のやうになつてしまひました。

松吉はいまゝで一度も自分の着物がつぎだらけのことやきたないことなどを、氣にかけたことはありませんでしたが、今日だけはぼろ〳〵な着物を着てゐることが氣になつて仕方がありませんでした。松吉は自分の穴だらけの靴や、まつくろによごれてゐる袴などを、ぢつと見つめてゐました。さうすると學校のお友達のぴか〳〵光つた靴や、涼しさうな洋服や、絹のリボンをかざつた帽子だのが、はつきりと松吉の頭にうかんで來るのでした。

「煙突掃除人の子ツ。貧乏人の子ツ。ワツハツハツハツ……ワツハツハツ……」たれか、かう言つて笑つてゐるやうに思はれたので、松吉はおやツと思つてあたりを見まはしました。けれど誰もそこにはゐませんでした。しかし、ふと頭をもたげて見ると、そこに一羽の美しい青い鳥が高い栗の枝にとまつて、

「きんからこ。きんからこ。」と啼いてゐるのでした。松吉は草の上にしやがんだまゝ木の上の青い鳥をながめてゐました。青い空に美しい鳥の聲が「きんからこ。きんからこ。」とひゞきました。白い雲がしづかに青い空をかすめて飛んで行きました。青い鳥は枝から枝へと美しい玉のやうに光る羽根をひろげて飛んでは、また幸福さうに、

「きんからこ。きんからこ。」とうたひました。

松吉はつく〴〵鳥の幸福をうらやみました。鳥は松吉のやうに、學校に行つて、先生にしかられることもなく、黑ん坊と言つて、お友だちに笑はれることもなく、靑い空を見たり、白い雲を見たりして、美しい靑い着物を着て、のんきさうにうたつてゐるのでした。松吉は煙突掃除人の子なんかに生まれないで、靑い鳥にでも生まれた方がよかつたと思ひました。松吉は家の方へかへつて行きました。

「家の父が煙突掃除人でなく、もし立派な軍人だつたら？」と松吉はこんなことを再び思ふのでした。すると松吉の頭に、立派なおひげをはやして、大きな馬に乘つた軍人の姿がうつつて來るのでした。胸にはたくさんの勳章をつるしてゐました。松吉がその軍人の顏を見ると、それは松吉の父でした。松吉は飛び上るやうによろこびました。しかし、恰度その時、松吉はいやといふほど、何かかたい物で頭をどやしつけられました。はつと思つて松吉が前の方を見ると、松吉は牛乳配達の車にぶつつかつてゐるのでした。

「あゝ、つまらない。僕はつまらぬ考へごとなんかして歩いてゐたものだから、あんなものにぶつつかつたのだ。」松吉は痛い頭をさすり〳〵家に歸つて來ました。日がくれかゝつてゐましたが、貧乏な松吉の家では、まだランプもついてゐませんでした。薄暗い土間で何か黑い物が動いてゐました。

松吉が、父だ、と思つたのとほとんど同時に向ふからも聲をかけました。

「松吉、どうしたんだい？　今日はおそかつたねえ、父は心配してゐたよッ。」と言つた聲は正しく父でした。松吉は父の顏を見た時、一寸失望しました。

學校からかへつて來る途中で空想してゐたやうな立派な馬の上の軍人でも何でもない。煤だらけの眞黑な父の顏が

ぬつと暗がりのなかゝら出た時は、松吉は腹立たしくさへ思ひました。父のうしろからは、これも父にまさるとも劣らないほどの真黒な顔や手の、弟と妹が暗のなかゝら飛び出して來ました。

松吉がたつた今まで想像してゐたぴか〱光つた勲章のかはりに、父の胸にはぼろ〱の着物に、煤やペンキがいちめんにくつついてゐました。立派なサアベルのかはりに、すりきれてしまつた長い柄のブラッシを持つて父に笑ひながら、松吉の顔を見てゐました。

「日がくれかゝつてもかへつて來ないので、おれはお前がけがでもしたんぢやないかと思つて、ほんとに心配してゐたよ。」父は少しもしからないで、かへつて松吉のことを心配してゐたのでした。父のやさしい顔を見た時、松吉の失望はだんだん薄らいで行きました。

「父はほんたうにいゝ人だ。」と松吉は思ひました。

父は奥からランプを持つて來てあかりをつけました。その時、松吉は父が、頭を白い繃帯でぐる〱とまいてゐたことに氣付きました。びつくらして父にたづねました。

「どうしたの？　父。頭は？」そして心配さうに父の頭を見ました。

「これかい？　何でもないんだよ。ほんのぽつちり、けがをしたのさ……」父はさう言つて氣にもかけないやうにしてブリツキやトタンの板を槌でこん〱叩いて風呂や臺所の古煙突を修繕してゐるのでした。

寢るすこし前でした。松吉のおつ母さんが、心配さうな顔をして、

「父は今日煙突掃除をしてゐて高い屋根から落ちたんだとさ、その時、あんなに頭をけがしたんだつて……」と語つてくれました。父はわざと平氣な顔をして夜おそくまで、薄くらいランプの下で働いてゐました。

松吉は今日の學校での悲しい出來事なんかすつかり忘れて、たゞ父のことばかり心配しながら寢床にはいつてしまひました。

そこは青い毛氈をしきつめた宮殿のやうに美しい部屋でした。どこからともなく美しい鳥の聲が聞えて來ました。いろいろな音樂の音もひゞいて來ました。急に廣い部屋の隅の方から大勢の人々がやつて來る足音がしました。松吉は窓の傍に立つてゐました。大勢の子供たちが、後から〳〵と集まつて來ました。百人、二百人、五百人、千人……と大勢の子供がやつて來ました。

松吉は思はず吹き出してしまひました。どの子もどの子も、煙突の煤で顏も手もまつ黑けによごれてゐるのでした。どの子も、どの子も、一本づつ柄の長いブラッシとバケツを提げてゐました。みんな煙突掃除の小僧だつたのです。幾十人といふ煙突掃除の小僧たちは部屋の眞ん中に來ると大きな輪をこしらへて、手をつなぎ合はせて踊りました。

「きんからこ、きんからこ。きん〳〵からこ、きんからこ。」

ふとこんな音樂が聞えるのでした。それにつれて黑ん坊たちはうれしさうに踊りまはるのでした。バケツを振つたり、ブラッシを高く投げたりして、

大きな輪のまんなかに青い衣を着た美しいお姫さまが一人立つてゐました。

「きんからこ、きんからこ。」といふ歌はこの美しい青い衣を着たお姫さまの口から洩れてくるのでした。

踊りつかれてしまふと、今度は可愛い黑ん坊たちは、かはるがはる高いテイブルの上に乘つて演說をはじめました。

「もし、僕等がゐなかつたら、ロンドンの町でも、巴里でも、東京でも、みんな煤でまつ黒けになつてしまふのだ。美しいおつ母さんや、姉さんたちの白い顔や手だつて、町中の煙突の煤で印度人のやうにまつ黒けになつてしまふのだッ。」と一人の黒ん坊が叫びました。

「エス。エス。」と誰かゞ、いつしよに、二三人叫びました。

また他の一人の黒ん坊が机の上にあがつて行きました。

そして鷄のやうな聲をして、

「諸君。僕等はいつまでも世界中の人々に眞白な顔と眞白な美しい手と、眞白な机掛けやカアテンを與へるために、僕等の一身をさゝげて世界中の煙突の煤を僕等の全身に吸ひ取つてゐるのだ。僕等は世界中の煤を吸ひ取る紙だッ。」

と叫んで妙な身振をしましたので、みんながいつしよにどつと笑ひました。

「ですから、今日からあなた方を人いちばい美しい眞白な幸福な人間にしてあげます。あなた方は軍人より、學者より金持よりも誰よりも、いちばん立派な人です。世界の人間のためにほんたうに幸福を生んでくれた人ですから……」

と青い衣のお姫さまがみんなに語りました。

それと同時に手に持つてゐたまつ白な花を二三度高くさしあげました。

さうすると白い花のなかからたくさんな星が流れて、その光の一つ〳〵がまつ黒な子供たちをつゝんでしまひました。さうすると子供たちはみんな銀のやうな美しい衣を着て、まつ白な顔や手をして踊りながら、笑ひながら窓から空へ飛び出して行きました。

よく見てみますと子供たちの背には銀の羽根がかゞやいてゐました。

「起きなよ、松ちゃん。」

びつくらして眼をさまして見ると、松吉は暗い部屋のなかに眠つてゐたのでした。

「夜が明けたよ。起きて、今日から父のかはりに働いておくれよ。」

松吉のおつ母さんは悲しさうな聲をして、かう言ひました。おつ母さんの眼には涙が、かゞやいてゐました。

「父がやつぱりからだが悪いんだよ。昨日高いところから落ちてけがをしたので、今朝から熱が出て仕事に出かけられないのさ。」

松吉は、そばに寢てゐる父を見ました。父は青い顏をして頭を繃帶で卷いたまゝ苦しさうに、うなつてゐました。

松吉はその日から學校にも行かれなくなつて、父のかはりに毎日暗いうちから起きて、ブラッシとバケツをさげては煙突掃除に出かけて行つて、病みついてゐる父と、おつ母さんと妹や、弟たちをやしなふのでした。松吉はどんな高い煙突の上にでものぼつて、仕事をすることができましたので、どこでゝも調法がられました。

秋の始めころでしたが、まだ眞夏のやうに暑い日がつゞきました。

松吉は東京の高臺の上の、東京中で一番高い煙突の上にのぼつて行つて、いつものやうに顏も手もまつ黑けになつて煙突の掃除をしてゐました。すると、ふと、どこかで美しい鳥の聲が聞えるのでした。

「きんからこ、きんからこ。」

松吉は林のなかで聞いた青い鳥のことを思ひ出しました。また夢のなかで聞いた青い衣のお姫さまの歌の聲を思ひ出しました。またお姫さまの、

「ですから、今日からあなた方を人いちばい美しいまつ白な幸福な人間にして上げます……」といふ夢のなかの言葉

を思ひ出しました。

「きんからこ、きんからこ。」どこからともなくたえず、歌の聲が聞えて來ました。松吉は自分の手や、着物を見ました。しかし、やつぱりどこもこゝもまつ黑でした。

「ちえツ。」思はず松吉は、つまらなさうに、舌打ちをしました。そして、まつ黑になつて働いてゐるのがばかばかしいやうな氣もしました。

しかしまた恰度その時、靑い鳥の聲が聞えて來ました。松吉は高い煙突の上から、鳥の聲のした方を見ました。靑い空に、白い雲が飛んでゐました。松吉は林のなかで靑い鳥の生活をうらやましいと思つた日のことを思ひ出しました。

松吉は今、自分が東京のうちで、誰よりも一番高い空にのぼつて、思ふ存分涼しい風に吹かれて、靑い空だの、白い雲だのをながめてゐることに氣付きました。松吉は低く低く見える東京の町を見ました。岩崎だの大倉だのといつて威張つてゐる人たちの大きな邸も、高い煙突の上からはまるで低い乞丐小屋のやうに見えました。また大將だの、博士だのと言つて大きな顏をしてゐる人たちの家は豚小舍よりも薄汚く見えました。東京の瓦も馬も人間も眞晝の太陽に灼かれて苦しさうに吐息をついてゐました。

お金持ちや、大臣やの大きな建物のつゞいた町外れの畑の中には、赤い煉瓦塀の監獄がありました。松吉が、のぼつてゐる煙突の下の大きな家からは立派な洋服を着た男が悲しさうな顏をして、監獄の馬車に押しこめられて赤い煉瓦塀の方へ急いで行きました。また或る美しい西洋館の門からは、色の靑い若い人が馬車に乘せられて病院の方へ運ばれて行きました。見送りの人たちがみんな泣いてゐました。

馬の上の或る立派な軍人はあまり暑いかして、幾度も帽子を脱いで額の汗を拭いてゐました。そして苦しさうに溜息をついてゐました。

また美しい大理石の橋の上では二人の男が一つの金庫を前に置いて小刀を摑んで切り合ひをしてゐました。また或るお役所の窓では立派な口髭をはやした、そして、ぴか〳〵と光る勳章をつるした男がぴよこ〳〵とお金持らしい男の前に米つきばつたのやうに、おぢぎをしてゐました。

煙突の上から見た下の世界は、何も彼も蒸し暑さうで、息苦しさうでした。松吉はあの蒸し暑い下界で朝から晩まで苦しさうに働いてゐる人たちを氣の毒に思ひました。松吉は大臣だの、大將だの、お金持だの學者だのを、うらやんだことを思ひ出しては、自分でもばか〳〵しくて吹き出したくなりました。

松吉は胸いつぱいに涼しい空の上の空氣を吸つて、もいちど、青い鳥の聲のする方を眺めました。そこには青い空に銀のやうな美しい富士の山がパノラマのやうに、くつきりと浮かび上つてゐるのを見ました。

「あゝ、すてき〳〵。」松吉は思はず、さう叫びました。

「きんからこ、きんからこ。きんからこ、きんからこ。」青い鳥の聲はどこからともなく一層近く、一層はつきりと聞えて來るのでした。

松吉は夢のなかで見た大勢の黒ん坊たちの踊りを思ひ出して自分も煙突の縁の欄干につかまつたまゝ、足拍子をとつて、

「きんからこ、きんからこ、きん〳〵からこ、きんからこ。」と、うたひ出しました。松吉は東京中の誰よりも一番幸福でした。松吉はうれしくてたまりませんでした。しまひにはブラッシもバケツも放り出して、どん〳〵足踏みをし

ながら、煙突の上で踊りました。そして日が暮れかゝつて來るのも氣付きませんでした。

「おうい、小僧さん。煙突掃除の小僧さん。」と下から呼ぶ聲にびつくらして松吉が、きんからこ、きんからこ……、の歌をやめた時は、もう日はすつかり暮れてしまつてゐました。月が出て來るので、東の空がほんのりと明るくなつてゐました。松吉は煙突から下りて來ました。

「何してゐたの小僧さんは？　煙突の上で踊つてゐたの？　ホツホツホツ……」煙突の下に立つてゐたお婆さんはさう言つて松吉の前に紙に包んだ物を出しました。

「これはねえ。お月さまのお團子ですが、家に持つてかへつて父やみんなに分けておやりなさい。」さう言つてお婆さんは紙包を松吉の懐に入れてやりました。松吉はブラッシとバケツをさげて寂しい道を家の方に歸つて行きました。道の中程まで來ると、まんまるい秋のお月さまが、草の原を照らして、ぬつと出て來ました。

「お月さまいくつ……、十三七ツ……」どこかの森から子供の聲がひゞいて來ました。聲はだん〳〵近づいて來ました。

「まだ年やわかいな……」すぐ近くで聲が聞えました。

「あつ、弟だツ。」と松吉が思ひましたのと、ほとんど同じに、草の中に父や弟の姿があらはれました。妹もうしろからついて來てゐました。父はすつかり繃帶も何もはづしてしまつて元氣な顏をして歩いて來ました。

「父。」と松吉がうれしさうに飛んで行つて聲をかけました。

「お前の歸りが、おそいので心配してやつて來た。ワツハツハツ……」父は、ほんたうに愉快さうに笑ひました。

「もう、父はすつかり、けがはよくなつたの？」と松吉が父の頭を見ながらたづねました。

「あゝ、もうすつかりよくなつた。明日からはお前と二人で煙突掃除に出かけよう。」と父はうれしさうに言ひました。

「ほんたうに父もいつしよにかい。」と松吉はたづねました。

「さうだとも、こんなに元氣になつたんだもの。」

「嬉しいなあ。」松吉は喜んで飛び上がりました。そのはずみに懐の中のお團子が殘らず草の上に轉げ落ちました。

「どうしたの？ 兄さん。」弟と妹は、びつくらして、草の上のお團子を拾ひながら、たづねました。

「煙突掃除に行つた家で貰つたのさ。今夜の、まんまるいお月さまに上げるんだつて……」さう言つて松吉はお團子を妹や弟たちに分けてやりました。

三人の子供たちは松吉を先頭にして、草のなかを、お團子をかゝへたまゝ踊りながら家の方へ急いで行きました。父は後の方から、うれしさうに笑つて、ついて來ました。三人の子供も、父も青い月の光に照らされてゐました。松吉は自分で自分の手を出して月の光にかざして見ました。今まで、まつ黒だと思つてゐた手も足も、それから着物までが銀のやうに白く光つてゐました。ふだんは眞黒な父の顔も、印度人のやうな弟や妹の顔も、それから、よごれた着物もまるで銀のやうに白く輝いてゐました。父も三人の子も、まるで、ちがつた世界の人のやうに幸福さうに見えました。

「お月さまいくつ……」と弟がお團子を手に、さゝげながらうたひました。

「十三七つ……」と妹がうたひました。

「まだ年やわかいな……」と松吉が、うたひました。三人の子供の聲が森のなかに響いて、こだましたかと思ふと、

どこからともなく美しい聲で、

「きんからこ、きんからこ、きん〱からこ。きんからこ。」と誰かゞ、うたひました。

三人の子ども、父もいつしよに、をかしがつて、

「ワツハツハツ……ワツハツハツ。」と笑ひこけました。そして、しまひには父も子供たちと同じやうに草の上を踊りながら、うたひました。松吉は、

「今日から、あなた方を人いちばい美しい、まつ白な幸福な人間にしてあげます……」といつた夢のなかの青い衣のお姫さまの言葉を思ひ出しました。そして父や弟や妹を見ました。松吉には生まれてからこつち、今日ほど幸福な日はありませんでした。

白い顏、白い手、白い着物が月の光りにひか〱と輝きました。松吉は自分たちこそ世界でいちばん幸福な、いちばん白い人間であると思ひました。そして、すつかり、くたびれてしまふまで父や弟や妹たちと草の上で、月の光を浴びながら、うたつたり、踊つたりしました。

父の顏も弟や妹の手も銀のやうに、いつまでも白く美しくかゞやいてゐました。

清坊と三吉

或る湖に近く高い山寺がありました。その山寺の鐘は、風の時は七里四方も聴えると噂されてゐました。

清坊は、その山寺の鐘樓守のお爺さんのたつた一人の孫でありました。清坊のお父つあんも、おつ母さんも、清坊が生まれて間もなく死にましたので清坊は世界にお爺さん一人を頼りにして成長しました。

清坊は朝も晩も、お爺さんが撞く鐘の聲を聴いては、大きくなつて來たのでした。

「僕もいまに大きくなつたら、お爺さんのやうに鐘をついてやるぞ！」

清坊は鐘樓の下から、鐘を撞いてゐるお爺さんを見上げては、さう思ふのでした。

けれどもお爺さんは、なか〳〵清坊に鐘を撞かせませんでした。

「ねえ、お爺さん、僕にも鐘を撞かせて下さい。」

と清坊は一日に幾度もねだるのでした。

「ばかを言はつしやい、お前はまだ小さいから撞けない。鐘の數一つ撞きそこねても大變なんだから喃！」と言つて、お爺さんは少しも鐘を撞かせてくれませんでした。

清坊が八つになつた年の春でした。冬の寒い間を、夜遲く起きて鐘を撞いたせいか、お爺さんはこのころになつて骨の節々が痛んで、鐘樓の階段を昇り降りするのさへ、たいへん難儀なやうに思はれました。

「お爺さん、今度は僕に鐘を撞かしておくれ！」清坊はお爺さんのいたいたしい風を見てゐるにしのびないでさう言

ひました。

お爺さんは、はじめのほどは、何うしても聴きいれてくれませんでしたが、おしまひには自分の足腰が立たなくなつたので、やつと清坊に鐘を撞くことをゆるしてくれました。

清坊がはじめて鐘を撞くのだからと言つて、山寺の和尚さまは清坊に小さな黒い法衣を一枚拵へてくれました。

清坊は、うれしくてたまりませんでした。

「宜えかな、鐘樓に上る時は、和尚さまが佛さまの前にお坐りなさるやうな心持で行くのだよ。撞木を握つて鐘の前に立つた時は、自分の心をお月さまのやうに清くして撞くのだよ。心が曇れば、鐘の音まで曇つて來る……」

お爺さんはさう言つて、清坊を鐘樓に上らせてやりました。

清坊はその日の眞夜中の鐘を、はじめて撞くのでした。

清坊は和尚さまにいたゞいた黒い法衣を着て、鐘樓の階段を昇つて行きました。かすかな月の光のなかに、花が白く咲いてゐるのが見えました。高いお山の寺なので、夜はまだなか〳〵寒くありました。清坊はお爺さんに教へられた通りに自分の心を清めて、鐘の前に立ちました。

満身の力をこめて、鐘を撞きました。

ゴーン……ゴーン……ゴーン……

鐘の聲は夜の空を靜かに湖の上につたはつて行きました。

清坊が心を清めて、鐘樓で鐘を撞いてゐる時でした。湖の上を、一艘の舟が岸から遠く離れて、沖へ沖へと隔つて行きました。その舟の上には、湖の岸の農家に生まれた三吉といふ若者が乗つてゐました。

若者は年寄つたたゞ一人の母親と、貧しく暮してゐたのでしたが、田舎では幾ら働いてもお金持になれませんでしたので、今夜おつ母さんを捨てゝ、こつそり湖をわたつて向ふ岸の鐘山に逃げて行くつもりだつたのです。

三吉は船を漕ぎ出しては、振りかへつて岸の方を見ました。何にも知らないで眠つてゐるたつた一人のおつ母さんの家の窓からは、小さな燈がちら〱と、戸外へ洩れてゐました。

三吉は、そのかすかな燈を振りかへつて見ては泣きました。それでも船をぐん〱沖の方へ漕いで行きました。

湖の上には霧がかゝつて、間もなくおつ母さんの家の窓の燈も見えなくなりました。

三吉はやつと思ひ切つて、沖へ沖へと船を漕ぎました。

一里ばかりも船を漕いでからでした。

ゴーン……ゴーン……ゴーン……と清坊が撞いてゐるお山の寺の鐘が、湖の上を静かにひゞいて來ました。

三吉は昨夜までおつ母さんと二人つきりで、爐の火を焚きながら、鐘の聲を聽いてゐたことを思ひ出しました。

おつ母さんが今夜はたゞ一人で、あの鐘の聲を聽いてゐなさるかも知れぬと思ふと、何うしても歸らないでは居られないやうになりました。

それでも三吉は「おつ母さんは、今日は麥畑で働いて疲れておいでだつたから、きつ 眠つてゐて、鐘の音なんかお知りにならないかも知れないッ！」と思ひ直して、また船を沖の方へ漕ぎ出しました。

ゴーン……ゴーン……ゴーン……

と、清坊が撞いてゐる鐘の音が、再び湖の上に聞えてまゐりました。

「おつ母さんが眼をさまして、私が居ないので、あの鐘の聲を聽きながら、何んなに泣いてゐらつしやるか知れな

い。」

三吉はさう思つて、船を漕ぐ手をちよつと止めました。

けれども直ぐ「おつ母さんは疲れて眠つてゐらつしやるにちがひない……」と思ひ直して、三吉はまた船を沖の方へ漕ぎました。

ゴーン……ゴーン……ゴーン……

清坊が撞く鐘の聲が三度、湖の上を靜かにひゞいて來ました。

「やつぱり駄目だ、あんなに鐘が鳴るんだもの、おつ母さんは眼をさまして見て、私がゐないので泣いてゐらつしやるにちがひない……」

三吉はさう思ひました。そしておつ母さんのことを思つて泣きました。何うしてもおつ母さんを捨てゝ、旅に逃げて行くことはできなくなりました。

三吉は船をぐるりと廻してしまつて、一生懸命に岸の方へ船を漕ぎもどしました。霧のなかからおつ母さんの家の窓の燈が、だんだん明るく、大きくなつて、近よつて來ました。三吉は岸に飛び上つて、おつ母さんの家に歸つて行きました。おつ母さんは眠りもしないで、爐の火を焚いて三吉の歸つて來るのを待つてゐました。

「おつ母さん！　勘忍して下さい。」

三吉は土間から飛んで行つて、おつ母さんの胸にすがりついて泣きました　おつ母さんは何にも言はないで、優しく三吉の背を撫でゝやりました。

ゴーン……ゴーン……ゴーン……

清坊はしばらく鐘を撞いて、鐘樓から降りて、お爺さんのところに行きました。

お爺さんは寢ないで、爐のなかに焚火をしながら、清坊を待つてゐました。

「おう、善く撞けた。たいへん善い音に響いた。寒かつたゞらう喃！」と言つてお爺さんは冷たくなつた清坊の手をごしごしとこすつてくれました。

清坊は幸福に輝いた顏をして、お爺さんといつしよに眠りました。

かあさんの目

かあさん！　世界のうちで、かあさんはだれがいちばんすきですかと、ぼくはたづねました。かあさんはわらつて、ぼくのかほをみてゐました。

お月さま？　ほしさま？　カナリヤ？　おしろのわうさま？

かあさんは、ぼくをしつかりだいて、いくどもほほずりしてくれました。そしてちつちやなこゑで、うちのいたづらつ子がいちばんすきといつて、ぼくのかみをなでました。

ぼくはあんまりうれしかつたので、かあさんの、黒いほうせきのやうな目を、ぢいつとみつめました。ぼくはびつくらしました。かあさんの黒い瞳のなかには、ちいちやなぼくが、そつくりはいりこんでゐるのです。

かあさんの瞳のなかに、ぼくがはいつてゐて、かあさんいたくはないの？　とたづねました。かあさんは、たゞわらつてゐました。

それからは、ぼくはいつでもかあさんにだかれるたんびに、かあさんの黒い瞳をみました。

ぼくがないてるときは、かあさんの瞳のなかには、なきむしのちひちやなぼくがはいつてゐるのです。

わらつてるときは、ちひちやなわらひむしのぼくがはいつてるのです。よくきをつけてみるとかあさんの瞳のなかには、お月さまがはいつてることもあります。うつくしい花や、カナリヤがはいつてることもあります。

かあさんはぼくをだいて、けしばたけのなかにすわつて、こもりうたをうたひましたが、かあさんはぼくよりはや

くねむつてしまひました。

ぼくはかあさんのながいまつげを、いぢつてゐましたが、いつものいたづらをおもひだしました。かあさんがねむつてゐるときは、かあさんのくろい瞳のなかの、ちひちやなぼくもねむつてゐるにちがひないとおもひましたので、そうつと、かあさんのまぶたをつかんで、かあさんのめをあけてみました。

でも、かあさんのくろい瞳のなかのちひちやなぼくはやつぱり、瞳をぱちくりさせておきてゐました。あをいそらも、うつくしいけしのはなも、かあさんのくろい瞳のなかで、をどつてゐました。

どうしたのぼうや。おまへはいたづらだねと、かあさんは目をさましていひました。そしてわらひながら、ぼくをしつかりだいてくれました。お月さまより、お城の王さまより、うちのいたづらつ子がいちばんすきといつて、いくどもぼくにほほずりをしてくれました。

ぼくも、せかいぢうで、かあさんがいちばんすきです。

痩犬とお獅子

朝まだ早かつたので、學校の門はしまつてゐました。
二郎はひとりでぽつねんと門の前に立つてゐました。
二郎は爲ようことなしに、門にもたれながら空を見上げました。
空は靑い寶石か何ぞのやうにかゞやいてゐました。
門の前の栗の葉がはら〳〵と落ちて來ました。
高い空を渡り鳥がたゞ一羽寂しさうに鳴いて行きました。
寂しい鳥の影が小さな、黑いぽつちりした一つの點のやうになるまで、二郎は鳥を見送つてゐました。
二郎が空ばかり見上げてゐる間に、ふと二郎の傍を人が歩いて行く音がしました。
二郎は「學校のお友だちか知ら。」と思つて、道の方を見ました。
一人の男が馬を曳いて來るのでした。
男は栗の木に馬をつないで、馬の背から袋を出して、袋のなかの麥と秣を食べさせました。
馬はおいしさうに食べました。
一疋の痩犬が黍の畑から、ひよろ〳〵と歩いて來ました。
犬は欲しさうに馬のそばに近寄つて行きました。

馬はさくさくとおいしさうな音をさせながら食べました。

犬はちよつと袋のなかをのぞいて見ては、恐さうに馬から離れました。

馬が前足を上げたり、尾を振つたりするたんびに痩犬はとびあがつて、逃げました。

逃げてはまた、馬のそばへ近寄つて來ました。

馬はすつかり麥と秣を食べてしまひました。

男は栗の木から馬の綱を解いて、馬をつれて行つてしまひました。

痩犬は馬が食べこぼして行つた麥や秣を、鼻の先で嗅いで見るやうにしました。

しかし、痩犬は食べられるものは何にもなかつたので、つまらなさうに顔を上げて、あたりを見まはしました。

痩犬の眼には寂しい涙がこぼれてゐるやうに思はれました。

痩犬は頭を垂れて黍畑の方へ、ひよろひよろと歩いて行きかけました。

二郎は痩犬が可哀さうでなりませんでした。

二郎は低く口笛を吹きました。

痩犬はまたひよろ、ひよろと門の方へ歩いて來て、二郎の前に、ちよこなんと坐りました。

二郎はカバンのなかのお握りを一つ出して痩犬にやりました。

痩犬はまたゝく間に食べてしまひました。そしてお腹がくちくなつたと見えて、二郎の袴を嚙む眞似をしたりしてふざけました。

テン、テン、テン、テン……

森の方から寂しい太皷の音がきこえました。

可愛い角兵衛獅子が太皷をたゝきながら、やつて來ました。

角兵衛獅子は足袋もはかないで、片ちんばの下駄をはいてゐました。

角兵衛獅子は泣いてゐました。

「何うしたの？」と、二郎がたづねました。

「昨日、お父ちやんが逃げちやつたので、昨夜から何にも食べないんだ……」と言つて、角兵衛獅子はまたすゝり上げて泣きました。

二郎は、またカバンのなかのお握りを出して、角兵衛獅子にやりました。

角兵衛獅子は、おいしさうにお握りを食べて、うれしさうににつこり笑ひながら、歩いて行きました。

テン、テン、テン、テン、テン……

角兵衛獅子の寂しい太皷の音が、しばらくきこえてゐました。

二郎のお友だちも、集まつて來ました。

山からは、お日さまが出ました。

栗の木では、頰白がしきりと鳴きはじめました。

小使さんが來て、門をあけてくれたので、みんなといつしよに二郎も學校のなかへ、はいつて行きました。

お正午になりました。

村の工場の可愛い汽笛が鳴りました。
鈴が鳴りました。
皆はお辨當を出して、おいしさうに食べました。
二郎もカバンからお握りを出さうとしました。
しかし、カバンには一つも、お握りはのこつてゐませんでした。
「あゝ、さうだつた！」と二郎は口のなかで、言ひました。
今朝逃つた痩犬や、寂しい角兵衛獅子の姿が、二郎の心にうかんで來ました。
二郎は、うれしさうにふざけて歸つて行つた痩犬や、につこり笑つてわかれて行つた角兵衛獅子の顔を思ひ出しました。
二郎は、うれしいやうな、ひとりで笑つて見たいやうな心持になりました。
テン、テン、テン、テン……
角兵衛獅子の太鼓の音が二郎の耳には、いつまでも響いて來るやうに思はれました。
二郎は、ちつともひもじいとは、思ひませんでした。
二郎は、誰よりも幸福さうな顔をして、運動場に出かけて行きました。

梅吉の悲しみ

山の中の梅吉の家から町の學校までは、一里ちかくのさびしい道を、歩いて行かなければなりませんでした。梅吉は、毎日同じ村のお友だちといつしよに、つれ立つて、夜が明けると直ぐ、町の學校へ歩いて行かなければなりませんでした。

春先は、道の兩側には菜の花が咲いたり、青々とした麥畑がつゞいてゐたり、雲雀が高い空に鳴いてゐたりするので、とほい道もさして苦にはなりませんでしたが、秋になり、冬になるにつれて寒い風が吹いたり、雪が降つたりして、歩くのさへうんざりすることもありました。梅吉も、ほかのお友達も、本を包んだ風呂敷を肩に背負つたまゝ、つまらなさうな顏をして山の方へ歸つて來るのでした。

「ちつとも面白くないなあ。僕、こんな埃つぽい道歩いて學校に行くのはいやだなあ……」などと言つて、草の上につくねんと、坐りこんでしまふやうなお友達もゐました。

あんまり寂しい、そして何のへんてつもない一本筋の道でしたから、子供たちは何でもいい。一寸した珍らしい變つたことでもあれば、それを大袈裟にはやし立てゝ、自分で自分を無理に笑はせるやうなことをしてゐました。

或る冬の日でした。梅吉はほかのお友だちといつしよに、つかれきつた顏をして、いつものやうに、學校から山の村の方へ歸つて來ました。

「あゝ、あゝ、つまらないなあ。こんな埃つぽい道なんか歩いたつて、ちつとも面白いことはないや。」と梅吉が、あく

びをしいしい、まをしました。お友達もいつしよにあくびをしました。

「まつたくだあ、こんな道を歩いてみたつて、ちつとも面白いことはない。」と一人のお友達がまをしました。

みんなが、また、つまらなさうに大きなあくびをしました。

「しめたツ！」と梅吉が叫びました。

「盲人だ！」

「琵琶弾きの男だ！」

とお友達が、叫びました。子供たちは、何とかして盲人を驚かしてやりたいと思ひました、みんなは急に嬉しさうな眼をして、近づいて來る盲人を見てゐました。

「馬の眞似をしよう。馬の眞似をツ！」と梅吉が言ひました。

「贊成ツ！」とみんなが叫びました。

盲人が、近づいて來るまで、みんな足音もさせないやうにして歩くのでした。

そして盲人が十五六間ぐらひまで近づいて來た時、梅吉が急に大きな聲を出して、

「馬が逃げた。暴れ馬が逃げたツ！」と叫び出しました。

それといつしよにほかのお友達は、みんな下駄で馬の蹄の音をさせて、ばた、ばた、ばた、ばた、と盲人の方へ飛んで行きました。

可哀さうに若い盲人は夢中になつて水溜りのなかへ逃げていつたのでした。そして、琵琶も着物も、すつかり泥だ

らけにしてしまつたのでした。

子供たちは、盲人のあわてた風を見て、腹をかゝへて笑ひました。

そして、みんなで「やあい。ばかやらう。馬ではないんだぞ。ハハハッ、ハハハッ！」と叫びました。

「あゝ、ほんたうに愉快だつた。」梅吉もさう思つて、家に歸るまで笑ひつゞけてゐました。ほんたうに、その日一日愉快のやうに思はれました。

けれども、その翌日でした、梅吉は學校にいつて、先生のお話をきいてゐる間に、昨日の盲人のことを、思ひ出さずにはをれなかつたのでした。

先生はその日「不幸な人をあはれめ。」といふお話をして下さいました。そのお話をきいてゐると、梅吉は、昨日自分等が往來で盲人を笑ひ物にしたことが、ほんたうに惡いことであつたと思はずに居れませんでした。

「眼の見えない人の前で景色のお話をしたり、足の惡い人の前で走りつこのお話をしたり、するものではありません、不幸な人があつたら、みなさんは、自分の兄弟の不幸と同じやうに、やさしい心で、いたはつてやらなければなりません。」と先生はおつしやいました。

先生が昨日、自分等が往來でしたことを見ていらしつたのではないかとさへ梅吉は思ひました。梅吉は、先生のお話を聽いてゐる間は、殆んど頭を上げることができませんでした。

梅吉は、先生のお話をきいてからは、遊戲の時間にも、唱歌の時間にも、ちつとも、いつものやうに、愉快に遊んだり、うたつたりすることはできませんでした。

氣の毒な、盲人の琵琶法師の姿ばかりが、梅吉の頭にうかんで來るのでした。梅吉は夕方お友達といつしよに、また昨日の埃つぽいさびしい道を歩いてゐました。ほかの子供たちが、はしやいでも梅吉は、どうしてもはしやぐことはできなくなりました。

梅吉は昨日の盲人がもし歩いてゐたら、飛んで行つて、道の上に坐つて、盲人におわびをしようと思ひました。しかし昨日の盲人は、往來には見えませんでした。

梅吉は、その次の日も、その次の日も、學校から歸り道に、盲人の男に逢つてあやまりたいと思ひましたが琵琶法師は來ませんでした。

冬が過ぎてしまひました。

道の兩側には菜の花が咲いて來ました。雲雀がうれしさうにさへづるやうになりました。しかし、梅吉は春の野の道を歩いてゐても、ちつとも愉快にはなれませんでした。梅吉は、若い琵琶法師に逢ひたい、そして、お詫をしたいとばかり思つて毎日道を歩いてゐたのでした。

若い盲人の姿は、それから、遂に一度も見かけませんでした。

たつたひとりで

お庭の花が今日もまた
高い屋根越え野を越えて
たつたひとりで飛んで行く

森の小鳥が今日もまた
廣い野を越え山越えて
たつたひとりで飛んで行く

お寺の鐘が寂しげに
暗い野を越え湖越えて
たつたひとりで鳴つて行く

飴をかついで本爺や
チヤラメル吹いて春の野に
たつたひとりで立つてゐた

青い海

萬作は九十九里ヶ濱の漁夫の子で一人ッ子でした。萬作が五ッの年萬作の父は、暴風雨の夜沖に出たきり、二度と村には歸つて來ませんでした。暴風雨の後三日ばかり經つてから、萬作の父の船だけが海岸に流れついて來たが、櫓も櫂も失くなつてしまつて萬作の父が何時も冠つてゐた破けた帽子だけが不思議にも船板の底に挾まれて殘つてゐました。

萬作の母は泣きながら、父の帽子を箱に入れて、濱の松原のなかに埋めて、その上に小さな石碑を建てました。

萬作は母につれられて、毎日のやうに松原のなかの父の墓に行きました。墓の周圍には春になれば菫やれんげが咲きました。夏になれば月見草や白い百合が咲きました。

萬作はしまひには自分一人で毎日のやうに松原のなかの父の墓の前に行つては、寂しさうに沖を見るのでした。黒い海の前には大きな浪が銀を碎いたやうに流れてゐました。白い翅の鷗が悲しい唄をうたつては萬作の上を飛んで行きました。

「あの船で父が歸つて來るかも知れぬ！」

白い船の帆が遠い水平線の上に見えるたんびに、萬作はさう思つて、沖の船を見つめてゐました。

船はやがて方向を變へて、或る時は北の方に、或る時は西の方に、再び水平線の下にかくれてしまふこともありました。萬作の心は暗くされました。

また帆を張つた船が九十九里ヶ濱の松原の傍についても、船からは萬作の見知らぬ荒くれた男たちが魚だの網だのをかついで自分々々の家に歸つて行くのでした。一人だつて「萬作かい？」と言つて、やさしい聲をかけてくれるものもありませんでした。「やつぱり父は死んだのだ……」と思ひ切りながらも萬作は毎日、松原のなかの墓の前に行つては、沖をながめてゐました。

萬作にとつては一層悲しいことが起つて來ました。萬作の父が歸つて來なかつた日から一年經たぬ間に萬作の母が悲しさの餘り、病氣で死んだのでした。

村の人たちは萬作の父の墓に並べて、萬作の母の墓を建てゝやりました。萬作は村の商人の家に引き取られて行かなければなりませんでした。しかし萬作は何うしても商賣のことなど習ふ氣にはなれませんでした。

萬作は暇さへあれば父と母の墓の前に坐つては沖を見つめてゐました。おしまひには商人の家でも怒つて、萬作を家から追ひ出してしまひました。萬作は結句それを宜いことにして、朝から晩まで松原の中の墓の前に坐つてゐました。そして餓じくなつて來れば村の方へ行つて、何か貰つて食べて來るのでした。

萬作の着物は破けてしまつて、しまひにはまるで乞丐のやうになりました。それでも萬作は墓場から去りませんでした。萬作の顏は一日一日とやつれてまゐりました。子供たちは「萬作のおこもやい！」と言つて誰も對手にして遊んでくれませんでした。しかし萬作は決してそんなことを悲しいとは思ひませんでした。

萬作には波の音や、鷗の唄などの方が濱の人たちの唄などよりずつと／＼面白いやうに思はれて來ました。

墓の前に坐つたまゝ、波の音を聽いてゐると、何處から來るともなしに遠い遠い沖から、父の聲が聞えて來るやう

に思はるゝのでした。

また鷗の唄を聴いてゐると亡くなつた母の聲が青い空から響いて來るやうに思はれました。

萬作はそれを樂しみに、眼をつむつて、墓の前に坐つてゐるのでした。

萬作は夜も大抵海岸の漁小舍などに寢てゐました。暖かい夏の夜などは墓の前で過してしまふこともありました。

萬作はうと〱と眠つてゐながらも、波の音や、鷗の唄を聽いてゐると寂しくはありませんでした。眼には見えないが遠い世界から父や母の魂が萬作に話しかけてゐるやうな氣がしてなりませんでした。

濱の砂丘には高い燈臺がありました。横濱から出帆したアメリカ行の船は、みんなこの濱の燈臺を左に見て、北の方へ進んで行くのでした。

眞つ白な城の塔見たいな燈臺からは、夜になると寶石のやうな光が、暗い太洋を照らすのでした。

白い鳥はその光に照らされながら、海の唄をうたふこともありました。沖が荒れた夜など、海の鳥は靜かな入江をもとめて燈臺の方に飛んで來るのでした。そして或る鳥は厚い燈臺の硝子板に打つ突かつて翼を折つたり、足を折つたりするのもありました。時としては冷たくなつて燈臺の下の巖の上に死んでゐるのもありました。

そんな鳥を見た時、萬作の心はたまらなく悲しくなりました。萬作は死んだ鳥を抱いて行つて、松原のなかに小さな海の鳥の墓を建てゝやりました。また足を折つたり、翼を折つたりした鳥を抱いては、濱に繁つてゐる草の葉でつつんでやつたりしました。

不思議と鳥は元氣になつて、空を飛ぶことができるやうになりました。

萬作は自分の病氣が快くなつたやうによろこんで空を見上げました。

萬作に助けられた鳥はだん〲殖えて來ました。そしてしまひには、濱に飛んでゐる鳥が、萬作の歩いて行くところに伴いて行くやうにさへ思はれました。

萬作が村の方へ行くと、白い鷗の群が村の屋根の上を飛ぶのでした。また萬作が燈臺の下に行くと、海の鳥が燈臺の周圍をめぐつては嬉しさうに、海の唄をうたふのでした。

萬作が松原のなかで、唄をうたひ出すと、沖の鳥までもが松原の方へ飛んで來るのでした。

「青い……青い……海の胸！
私にや知れぬ海の心、
今日もかなしい歌を聽く。
なんでこんなに悲しいか？
青い……青い……海の胸、
今日もかなしい日が暮れる！」

萬作は沖を見ては、うたふのでした。白い鳥が輪をつくつて萬作の上の空を飛ぶのでした。

萬作には父や母が、何處かの國から、萬作の唄を聽いてゐるやうにおもはれてなりませんでした。それで繰りかへし幾度も同じ唄をうたふのでした。萬作の唄の響きが黑い沖の濤の上を滑つて遠く遠く流れて行くやうに思はれました。

萬作は自分の唄の聲の流れて行く遠い沖を見つめてゐました。そこから父や母が自分を呼んでゐるやうな氣がしてなりませんでした。萬作は波打ち際に立つて暮れ行く空をいつまでも見つめてゐました。

村の人たちは夕方、よく白い潮吹を浴びながら、唄をうたつて、沖を見つめてゐる萬作の姿を見ました。「可哀さうに、両親を亡くしたので萬作は氣が狂つたのぢや。」と言つて涙を流して萬作のことを噂する村の人たちもありました。

月の良い夜など漁夫たちは濱で萬作の唄の聲と、嬉しさうな笑ひ聲を聽きました。萬作はまるで人の顔でも見えるやうに空に指をさして、父や母を呼びかけては笑つてゐました。月見草の咲くころでした。夕方から俄に、掻き曇つた空には、大暴風雨が襲ふて來ました。漁夫たちは濱の船を砂山の上に引き上げたり、小舎の戸を堅く縛りつけたりしました。日が暮るゝにつれて暴風雨は一層強くなりました。その恐ろしい暴風雨のなかに村の人たちは、時々萬作の唄の聲や、嬉しさうな笑ひ聲を聽きました。

夜が明けて暴風雨が靜まつてから村の人たちは濱に出ました。濱には五六艘の難破船が流れ着いてゐました。松原の墓の周圍には大きな松の幹が折れてゐるのもありました。

村の人たちはつひに萬作の姿を見出すことはできませんでした。

「昨夜、暴風雨の最中に、鷗が集まつて來て、萬作を連れて沖の方へ飛んで行つたのを見た。」といふ漁夫もあつたが、それつきり萬作は、何處に行つたのか誰も知るものはありませんでした。

しかし、今でも月の美しい晩など、松原のあたりで、何うかすると萬作の唄と笑ひ聲を聽くことがあると村の人は語つてゐます。

お馬鹿さんと小鳥

兎之吉は或る山里の百姓の一人子でした。お父さんも、お母さんも亡くなつてしまつて、この世界にたゞ一人の祖父さんと二人きりで暮してゐました。兎之吉は毎日幾つも〳〵の山や川を越えて學校まで行かなければなりませんでした。冬などはまだ暗いうちに起きて、星の光を見ながら町の學校へ出かけて行くのでした。

兎之吉は町の子供たちのやうに悧巧ではありませんでした。山里の百姓の子供でしたから着物だつてずゐぶん粗末で汚れてゐました。髪は一年にたつた一度か二度、祖父さんが馬の毛をはさむ鋏でかつてくれましたので、いつも蓬々としてゐました。

唱歌だけは不思議と上手で、いつも甲ばかり取つてゐましたが、その他の學課は何も彼も大抵は丙か丁でした。町の子供たちは兎之吉を見ては「お馬鹿さん」だの「木兎」だのと呼んで笑つてゐました。しかし兎之吉はそんなことは氣にもかけないで、いつもみんなから除けものにされたまゝ木の下にぽつねんと立つては、小鳥の歌を聽いたり、また或る時は怪我をした小鳥を抱いて家につれて行つて藥をつけてやつたりしました。

學校の先生も兎之吉を呼んで「お前はもつと勉強して、みんなに追ひつくやうにしなければいけない。」と言つて叱るのでしたが、兎之吉は寂しさうに笑つたまゝ、何にも言はないで、先生の顔ばかり見つめてゐるばかりでした。

おしまひには先生も根負けして、兎之吉には何とも言はなくなつてしまひました。兎之吉はそれを宜いことにして、學校に行つても自分ひとりでしよつちう木の下に立つて小鳥の歌を聽きながら、しまひには自分でも、小鳥といつし

よにうたひ出すのでした。

兎之吉が唱ひはじめると、不思議と森の小鳥が、兎之吉が立つてゐる直ぐ傍の木に集まつて來て面白さうに兎之吉の唱歌を聽いてゐるのでした。

ですから、兎之吉は學校で、町の子供たちに、仲間はづれにされても、少しも寂しいとは思ひませんでした。兎之吉はひとりで居て寂しくさへなれば木の下や、森のなかにはいつて行つて唱歌をうたふのでした。さうすると、何處からとなく小鳥が集まつて來て、てんでに森の歌や、沼の歌をうたつてくれるのでした。

兎之吉が毎日學校へ通つて行く山や谿のなかにもいろ〳〵な小鳥がゐました。そして兎之吉が唱歌をうたつて通り過ぎるのを待つてゐたやうに、兎之吉が山道を歩きながら唱歌をうたふのをきつかけに、谿の小鳥も山の小鳥もうたひ出すのでした。

ですから、兎之吉には町の子供たちの間には一人のお友だちもありませんでしたが、山に行つても、沼の邊に行つても、野に行つても、兎之吉は寂しいとは思ひませんでした。小鳥でも蝶でも、花でもみんな兎之吉のお友達のやうに思はれました。

兎之吉にもたつた一人のお友達がありました。角太郎といふ子でした。これもやつぱり田舍の百姓の子でしたが、學校の仲間たちからは「懲役人の子」と呼ばれてやつぱり除け者にされてゐました。角太郎の父は人を傷つけて、北海道の監獄に送られてゐるのでした。

角太郎も學課は大抵丙か丁でした。それに兎之吉は學校のことは出來ませんでも、正直で思ひやりのある子でしたが、角太郎は悪戯で、嘘つきで、強情で、ひねくれ者でしたから、先生にさへ憎まれてゐました。

誰も對手にしてくれる者がないので、角太郎は、お馬鹿さんの兎之吉と遊ぶより仕方がなかつたのでした。でも角太郎は意地の惡い子でしたから、兎之吉がひとりで森のなかにはいつて小鳥を對手に唱歌をうたつてゐると、木の蔭にかくれてゐて石を投げたりして、森の小鳥を追ひ立てゝしまふのでした。それでも兎之吉は怒りませんでした。そして「角ちやんもお出で、そしていつしよにうたつて御覽！」と言つて、角太郎に唱歌をうたはせやうとしました。

「何ていつてうたふんだい！」と角太郎が、憎々しい顏をして訊ねるのでした。

兎之吉は木の上を仰いで美しい聲でうたひ出すのでした。

「親なし小鳥
　ひとりぼつちの小鳥
　　ひいろい世界のはてまでも
　　たつたひとりで飛んで行く
　親なし小鳥
　ひとりぼつちの小鳥
　　鳴いてうたふて草臥て
　　お山の奥でねんねしな

親なし小鳥
　ひとりぼつちの小鳥
　　夢の世界に飛んで行きや
　　　父さん母さんが待つてゐる」

角太郎も兎之吉の眞似をしてうたひました。けれども、角太郎がうたひますと森の小鳥は、殘らず山の奥の方へ逃げて行つてしまふのでした。角太郎は怒つて逃げて行く小鳥に石を投げました。

可哀想に一羽の小鳥が角太郎の石に當つて落ちました。

角太郎は飛んで行つて小鳥を掴み殺さうとしました。けれど。その時兎之吉が走つて來てその小鳥を胸に抱きました。

「角ちやん、可哀想ぢやないか。」

「だつて、僕がうたふと逃げつちまうんだもの。」

「そりや、角ちやんが惡いからさ。たゞ唄をうたつたつて駄目だ。僕なんか幾度も小鳥とお友達になつたんだもの。」

「何うして、小鳥とお友達なんかになれるもんか。」

「なれるよ……」

「何うして？」

「僕ねえ、學校から歸り路に、よく獵師に射たれて怪我をしてゐる鳥を見つけては、家に連れてつて祖父さんと二人

で介抱してやつたんだよ。」

「そして快くなつてからまた放すのかい？」

「さうだよ。さうして放してやる前に毎日僕は學校から歸ると、さつきの唱歌をうたつてやつたのだよ。だから山に歸つてからも僕の唱歌を覺えてゐたんだらう、僕がうたふと小鳥がお友達を伴れて飛んで來るんだよ。」と話しながら兎之吉は翅を折られた小鳥を大事さうに抱へてゐました。

「そんな馬鹿なことがあるものか、そんなことを言ふから君はお馬鹿さんだの木兎だのと言つて學校でみんなに笑はれるんだ。」角太郎はさう言つて笑ひながら、歸つて行つてしまひました。

角太郎はその翌日學校に行きました。その日は朝から雪が降つてゐました。角太郎は兎之吉を待つてゐましたが、兎之吉は學校に見えませんでした。

「何うしたんだらう。乾度雪が深いので來られないのかも知れない。」と角太郎は思ひました。

二時間經つても、三時間經つても兎之吉は學校に見えませんでした。

「何うしたのか知ら、どんな雪の日でも今まで一度も休んだことのないのに！」角太郎はさう思ひながら日暮ころ自分の家に歸つて行きました。

自分の家に歸つて暗いランプの下で爐にあたりながら、窓の外の雪を見て、餅を食つてゐると、角太郎は不圖、昨日の小鳥の事を思ひ出したのでした。そして何となしに心配でたまらなくなつて來たのでした。

角太郎は雪のなかをかきわけて山を越えて兎之吉の家に行きました。

兎之吉は青い顔をして出て來ました。
「小鳥は何うした？」と角太郎がたづねました。
「昨夜から雪が降つて寒いので、僕の懐のなかに顫へてゐる。だから學校にも行けなかつた。」と心配さうに言つて兎之吉は小鳥を見せました。角太郎に翅を折られた小鳥は寂しさうな眼をして兎之吉を見ました。
小鳥の悲しさうな眼を見た時、角太郎ははじめて悪いことをしたと思ひました。そして小鳥がお父さんやお母さんから離れて自分ひとりで、どんなに寂しいだらうと思ふと、ぢつとしては居れないほど氣の毒になつて來ました。
「僕の父ちやんは雪の深い北海道にやられちやつたんだ、お母ちやんは亡くなつたんだよ。お前もひとりで寂しいだらう。僕が悪かつた勘忍しておくれ！」角太郎はつひぞ流したことのない涙を流して小鳥にさう言ひました。
その次の日も、その次の日も、角太郎は兎之吉の家に來て、兎之吉と二人で小鳥をいたはつてやりました。そして二人で、

「親なし小鳥
　ひとりぼつちの小鳥……」

とうたひました。小鳥は耳を傾けて二人の唱歌を聽いてゐました。角太郎は自分の唱歌を小鳥が聽いてくれたので、嬉しくて堪らないで、跳び上りながらうたひました。
山の雪が解けて春が來ました。
小鳥はすつかり翅の怪我も快くなつたので、兎之吉と角太郎は唱歌をうたひながら小鳥を森に放してやりました。

宇之吉と角太郎は、學校では一番びりとびりから一つ上の席順で進級しました。級のお友達はこの二人の低能兒を見ては相かはらず「懲役人の子」だの「お馬鹿さん」だの「木兎」だのと言つて、除け者にしました。

しかし宇之吉も角太郎も、この森くらゐ幸福なことはありませんでした。二人は森に行つては、

「親なし小鳥
　ひとりぼつちの小鳥
　　ひいろい世界のはてまでも
　　　たつたひとりで飛んで行く……」

と言つてうたひました。

二人の唱歌につれて森の小鳥がまた嬉しさうに啼き出しました。

角太郎はあまり嬉しかつたのでしまひには眼に涙をためながら聲が嗄れるまでうたひつゞけました。

終日森の小鳥が「懲役人の子」と「お馬鹿さん」の唱歌に合せて、樂しげに囀りました。

ゆふべの濱

一つ 二つ 三つ、
青い夕べの海越えて
白い鷗がとんで行く。
濱のお寺の鐘が鳴る。

一つ 二つ 三つ、
青い夕べの海越えて
白い片帆が搖れて行く
濱のお寺の鐘が鳴る。

一つ 二つ 三つ、
青い夕べの海越えて
白い光の星が出た。
濱のお寺の鐘が鳴る。

一つ　二つ　三つ、
露はきら／＼狐草
ぴよん／＼黒ん坊が肩組んで、
をどる濱から月が出た。

一つ　二つ　三つ、
星の數ほどをどつてのけろ
「お月さまいくつ十三七つ……」
濱のお寺の鐘が鳴る。

故郷

山を越えて
山を越えて
疲れたる馬の背に
八月の太陽は照る
雲の峰故郷は遠し

山を越えて
疲れたる旅人は
草に眠る
夢に似し合歡の花紅し
道つゞら故郷は遠し

山を越えて
曠野を走る

きりぎりす寂し黍の畑
蔓顔の花凋みてあり
お寺の甍見ゆ故郷は近し

野を越えて
稲の原行く
風は秋の如し
「蜻蛉來い！ 蜻蛉來い！」
弟の聲聞ゆ白蓮の沼

越えて來し山
歩み來し曠野
夕暗の心は寂し
村の燈よせゝらぎの音よ
月は出でぬ
昔語りせん爺なきが悲し

伊之馬鹿の國

昔或る田舍に伊之太郎といふ男がゐました。あまり悧巧でないので、村の人たちは伊之馬鹿と呼んでゐました。しかし伊之馬鹿は正直で、慾がなくて、毎日々々野に出ては一生懸命にはたらきました。自分の畑ばかりでなく他家の田畑まで耕してやりました。そして何んなに働いても一錢より餘計に賃銀を貰つたことはありません。

或る日伊之馬鹿が疲れて畑の隅で居眠りをしてゐましたら、急にそこいらがまばゆいほど輝いて來ました。伊之馬鹿はびつくらして眼をさましました。美しい神さまが伊之馬鹿の前に立つておいでになりました。「お前は正直で誰よりも善く働くから、その御褒美に何でもお前の願ひを叶へてあげよう。」と神樣が仰しやいました。

「そんなら、私を大名にして下さい！」と伊之馬鹿がまをしました。

五六日經つてからでありました。たくさんの武士が駕籠をかついで伊之馬鹿を連れに來ました。伊之馬鹿は三日ばかり駕籠にゆられて、或る美しい大きな城に行き着きました。そしてその城の殿樣になつたのでした。

伊之馬鹿はお城の殿樣になつたのですが、御殿のうちにぢつとしてゐるのは窮屈でなりませんので、立派な着物を脫いでしまつて、朝から晩まで襦袢と股引だけで畑を打つたり、薪を割つたりしました。家來たちも仕方がないので殿樣の眞似をして襦袢と股引だけで畑に出て働きましたが、しまひには苦しくなつて他國に逃げて行つてしまひました。伊之馬鹿はそんなことは少しもかまはないで朝早くから御殿を出て畑に行つて働くのでした。あとでは國のうちの悧巧な人や怠惰者たちも、みんな逃げてしまつて馬鹿な男や女たちだけが伊之馬鹿の領地にのこりました。伊之馬

鹿の領地の馬鹿たちは殿様の眞似をして自分等もやつぱり朝から晩まで襦袢と股引だけを着て働きました。

或る日狂信者の國の惡魔が人間に化けて伊之馬鹿の御殿に來ました。そして伊之馬鹿やその他のみんなの馬鹿に

「お前さん方は、朝から晩までせつせと働いてゐるが、頭の智慧を使へば少しも骨折らないで、樂に仕事ができる。」

と申しました。

「お前さん方は大根を引つこ拔くにしても手で一本々々拔いてゐるが、頭の智慧を使へば遊んでゐて一度に千本くらひ拔ける。」と話をしました。

「頭の智慧を使ふとはどんな事をするんだ？」と馬鹿どもが惡魔にたづねました。

「それは機械を發明して大根を引つこ拔くのだ！」と惡魔がまをしました。しかし對手はみんな馬鹿ばかりですから機械といふ言葉が少しもわかりませんでした。そこで馬鹿たちはまた「その機械つていふのは何だい？」と惡魔にたづねました。惡魔は少しじれつたくなつて「機械つてこの頭の智慧で發明したものだツ！」と大きな聲で叫びながらまた自分の頭を叩いて見せました。馬鹿どもは發明といふ言葉がわかりませんでしたので「そんなむつかしい言葉は俺たちにわからぬから、お前さま實地に頭で大根を千本掘つて見せて下さい。そんなことができるもんかツ。ハハハツハ……」と大きな聲で笑ひながら惡魔にねがひました。

惡魔は火のやうに怒つて馬鹿たちを見下しながら「大馬鹿ども、この頭の智慧を使ふことを知らぬかツ！」と言つて夢中になつて塔の上で飛びあがりました。そのはずみに惡魔は足を滑らして倒まに塔の上から大根畑に落ちました。伊之馬鹿をはじめみんなの馬鹿はあんなにして頭を大根畑に突つ込んで大根を掘るのか、と思つて感心して見てゐました。

しかし餘り何時までも惡魔が起き上つて來ませんので、みんなは惡魔の傍に近づいて見ました。千本の大根はさておき一本の大根も掘れないで、惡魔は大根畑の土のなかに頭を突き込んだまゝ死んでゐました。

「やつぱり頭で掘るより、俺たちの手で一本々々正直に掘つて行つた方が宜いなあ。」と伊之馬鹿がまをしました。他の馬鹿どもゝ「ほんたうに殿樣の仰しやる通りだ。」と言つて感心しました。それから伊之馬鹿の領地ではみんなの馬鹿が元の通り一生懸命に手を使つて働きましたので、大層幸福な國になりました。

捕虜の子

赤城幸吉の父は後備の騎兵上等兵であつたが、幸吉が九つの時日露の戰爭が始まつたので、急に召集されて戰地に出て行つたのであつた。幸吉の村からは赤城上等兵といつしよに、これもやはり騎兵であつたが、村野といふ後備の軍曹が戰地に出て行つたのであつた。そして戰地では都合よく赤城上等兵は村野軍曹と同じ隊に附いて、廣い滿洲の野を驅けめぐつてゐたのであつた。

村や學校の人々は出征軍人の家族を特に大事にいたはつてくれたので、幸吉は母と二人きりで寂しく、貧しい生活をしながらも學校から歸つては父の凱旋を樂しみに母を助けて畑を耕したり、野に牛を牽いて行つたりしてゐた。

隣村から出てゐた水車屋の二男や、鍛冶屋の一人息子が旅順の攻撃で戰死したといふので戰地から遺骨が送つて來たり、寂しいお葬の行列が山の上の墓場へ急いだりした。その折は幸吉はわけもなしに涙が流れた。そして「僕のお父さんだけは乾度金鵄勳章を貰つて歸つて來るにちがひない。」と思つて、自分の心をはげましたこともあつた。

あつちの村でも、こつちの村でも戰地に出てゐる若い人たちの戰死が傳へられた。方々の寺で戰死者の葬式が行はれた。

「幸吉のお父さんは元氣で宜いなあ。」

村の人たちは葬式に行く途中で幸吉の顏を見ては、さう言つて幸吉の頭を靜かに撫でてくれた。また或る時、村長は牛を牽いて野に出かけてゐる幸吉の頭を撫でゝ「お前は感心な子供だ。」と言つて、やさしく笑つたこともあつた。

「屹度今にお父さんが大手柄して村に歸つてみんなに褒められるにちがひない。」と幸吉は思ひながら道を歩いて行つた。幸吉は幸福であつた。

しかし幸吉の樂しい空想は悲しくも破られなければならなかつた。

旅順から遼陽の方面へ前進したといふ父の手紙を幸吉が受け取つて間もなくであつた。留守師團から赤城騎兵上等兵生死不明といふ通知が來た。幸吉と母は畑にも出ないで泣いてゐた。「でも愈戰死とはきまらないのだから。或ひは何處かに生きてゐるかも知れない。」と言つて慰めてくれる人々もあつた。

「屹度さうだ。お父さんは生きてゐる。敵なんかに殺されるものか。」幸吉はさう考へて自分を慰めることもあつた。幸吉は何處かに父が生きてゐて、深い雪のなかを敵にかくれて走つてゐるやうな氣がしてならぬこともあつた。

遼陽が陷落したといふので、村では家毎に國旗を樹てたり、鎭守の森では二日も三日もつゞけて祭禮があつたりした。その村の祝の最中に、二つの新しい報告が師團から來た。

それは村野騎兵軍曹が敵の大鐵橋を破壞した殊勳者であるといふ目出度いことゝ、生死不明を傳へられてゐた幸吉の父が敵の捕虜となつたといふ不快な通知であつた。

村の人々は村野軍曹の萬歳を唱へて、軍曹の留守宅に押しかけて行つた。そこには幸吉と同じ齡の武といふ軍曹の子がゐた。村の人々は武を肩車に乘せて鎭守の森の方へ走つて行つたりした。

幸吉の家には誰一人たづねて來るものもなかつた。たまに家の前を通りかゝる人々は、冷たいさげすみの眼で幸吉や、幸吉の母を見て行つた。夜になると誰かゞ幸吉の家の壁や屋根に大きな石を投げつけたりした。幸吉が畑に出て

ゐると、竹藪のなかゝら顏を出して「捕虜の子の幸吉や！」と言つて笑ひ出す者もあつた。幸吉と母と二人で二三日かゝつて耕した畑も一夜のうちに村の若い男たちに踏みにじられてしまつたりした。幸吉は學校に行つても石を投げつけられたり、頭を打たれたりした。幸吉は學校にも行かれなくなつた。

「何故、僕のお父さんは死んでくれなかつたのだらう！」と幸吉は思つた。

「父が戰死してくれたのなら何れほど嬉しかつただらう？」とも考へた。

鍬を畑の隅の椿の木の下に投げ出して、幸吉はたゞひとりですゝり上げて泣いたこともあつた。

幸吉は山の上の畑に母と二人だけで、働いてゐる時が一番うれしかつた。山の上の畑の附近には滅多に村の人たちは來なかつた。畑の隅の椿は燃えるやうに紅く咲いてゐて、花蔭には終日繡眼兒だの鶲だのが來てうれしさうに囀つてゐた。幸吉は小鳥の囀を聽いたり、青い空を飛ぶ白い雲を見て寂しい心を慰めてゐた。

幸吉がたゞ一人でいつものやうに椿の下に足を投げ出して小鳥の唄を聽きながら、戰地の敵に捕へられたといふ悲しい父のことを考へこんでゐる時であつた。幸吉は靜かに彼の肩を叩かれたのに氣付いた。彼は振りかへつて後を見た。そこには彼の一等の仲善しであつた武が立つてゐた。武はいつものやうにやさしく笑ひながら幸吉の兩手を握つた。

「何うしたんだい君……このころは學校にも僕の家にもちつとも見えないぢやないか。」と言つて武は、尙一度強く幸吉の兩手を握つた。幸吉は淚が出るほど嬉しかつた。けれども彼は默つてゐた。

「だつて、君が惡いんでも、何でもないんぢやないか。君のお父さんだつて臆病で捕虜なんかになつたのぢやないと思ふ。何か理由があるにちがひない。またほんたうは捕虜になつてゐないかも知れないから、あんまり考へない方が

宜いよ。」

「でもねえ、村でも、學校でも、僕に話なんかしてくれる人つて一人もないんだからなあ。」と言つて幸吉は俯向いた。

「村の人が何うしようと、僕は幸ちやんを惡くは思はない。幸ちやんと僕は何時までゞも親友なんだから。」と言つて武は懷から雜誌だの菓子だのを幸吉に渡して歸つて行つた。

幸吉は日が暮れてから家に歸つた。道すがらも、先刻武が話した言葉を幾度も思ひ出して見た。

「ほんたうにお父さんが、捕虜なんかになつてゐないと宜いがなあ……」と幸吉は思ひながら歸つて來た。幸吉の胸には幾分かの明るい希望が湧いて來たやうに思はれた。

櫻の花が山にも丘にも咲きこぼれたころであつた。金鵄勳章を胸に飾つた村野軍曹は村長や校長や多數の村の人たちに迎へられて歸つて來た。武は父の胸にすがりついて喜んだ。村の入口には綠門が出來たり、國旗が飾られたりした。同じ村から出征してゐた他の兵士たちも歸つて來た。あつちでも、こつちでも、歌をうたふ聲や萬歲の聲が聞えた。幸吉の父が歸つて來たのは三ヶ月も遲れてからであつた。村の入口には綠門は取り去られてしまつてゐた。幸吉と母とたゞ二人だけが遠い停車場まで迎へに行つた。村では國旗一つ樹てゝくれるものもなかつた。

「まあ、圖々しいにも程がある。捕虜なんかになつて生きて歸つて來るなんて……」と言つて笑ふ村人もあつた。

「お父さんほんたうに捕虜なんかになつたの？」

幸吉は或る日思ひ切つて父に訊ねた。赤城上等兵はたゞ「あゝ」と言つたきり、何にも言はないで、俯向いてしまつた。幸吉は暗い絶望の底に投げこまれたやうな氣がした。

赤城上等兵は家に閉ぢこもつたまゝ戸外には出なかつた。彼の顔は一日々々と病み上りの人のやうに蒼白くなつて行つた。彼は夜中など起き上つて無念さうに涙を流してゐることもあつた。

靜かな秋の日であつた。村では聯合の凱旋祝ひが行はれた。家にも、山にも國旗や提灯が飾られて、高い丘からは花火が打ち揚げられたりした。村の人々は歡喜に醉ふてゐた。赤城上等兵は村の人々から隱れるやうにして幸吉を伴れて山の上の墓地に行つた。そこには先祖代々の墓があつた。赤城上等兵は幸吉を墓の前に坐らせた。そして何時になく重々しい言葉で話しかけた。

「幸吉、お前は、お父さんが、臆病で捕虜なんかになつたと思ふか？」

幸吉はわなわなと體が顫へた。

「お父さんが捕虜になつたのはこんな譯なんだ。それはなあ、お父さんのゐた騎兵の一隊が敵の退路を斷つために、敵の大鐵橋を破壞しに行つたことがあつた。暗い雨の夜であつた。しかしまだ私たちが鐵橋まで行き着かぬ間に、味方の幾十倍といふコザックの騎兵隊に打つ突かつたのだ。味方もよく戰つたが多勢に無勢で大抵は馬から落ちて殺された。お父さんは雨の降る中に死んでゐたんだ……」

赤城上等兵はさう言つて考へ込んでゐた。

「それで捕虜になつたの？」と幸吉が訊ねた。

「さうぢやない。まだ話はこれからだ。……私が氣が付いて眼を開いて見ると、ちくちくと胸が痛んでゐる、お父さんは自分で胸を繃帶しながら、そこいらを見廻して見ると、敵味方の死骸や馬の倒れてゐるのなどが暗のなかに見えるきりで、他には誰もゐない。味方の騎兵も退却したのかと思ふと私は泣きたいやうな氣がした、殘念で……しかし、

それから間もなくであつた……」

赤城上等兵は墓の前に線香を焚きながら語りつゞけた。

「何處が何處だか見當はつかないが直ぐ近くに大きな鐵橋が暗のなかに見えてゐるのに氣付いた。私の胸は躍り上つた。鐵橋だ、あの鐵橋だッと言つて私は跳び上るほど喜んだ。お父さんはそこに倒れてゐた馬の鞍嚢を探つて、鐵橋破壞の爆發藥を摑み出した。恰度都合よく雨がどしや降りに降つて來たので敵の哨兵にも見つけられないで、お父さんは鐵橋の袂まで這ふて行くことが出來た。爆藥に火を點けて間もなく暗のなかに電光のやうな閃光と山を碎くやうな爆音を聽いた時、どんなにお父さんは喜んだゞらう！」赤城上等兵は寂しく笑つた。

「それではほんたうはお父さんが鐵橋を破壞したのねえ……」幸吉は跳び上るやうにして喜んだ。

「さうだ……」

「それだのに何うしてお父さんは捕虜になつたと言つてみんなに笑はれるの？」

「そんなことは何うでも良い。お父さんの話をお聽き。鐵橋が破壞したのを見たので私も安心したと見えて、そのまま倒れてしまつたのだ。そして尚一度私が眼をさました時は、お父さんは殘念だつたが敵の野戰病院のなかに寢てゐたんだ……」

赤城上等兵は深い吐息をついた。

「それで、みんなはお父さんが鐵橋を破壞したことは知らないの？」

「うむ。鐵橋を破壞したのは、退却して逃げて行つた人たちの勳功になつたのさ、この村にも逃げて行つた仲間の一人がゐる！」

赤城上等兵は悲しさうに山の下の賑かな凱旋の騒ぎの方を見た。幸吉は退却して歸つて行つた騎兵の一人が武の父の村野軍曹であることを知つた。

「しかし、幸吉、決してこんな事を人に語るな。人の幸福を破つてはならぬ。お父さんさへ默つてゐれば宜いのだから。お前さへお父さんを知つてゐてくれゝば宜いんだ。」

幸吉親子は日暮れ方家に歸つて來た。

その夜であつた。赤城上等兵は幸吉と妻とを家に遺して行方知れず旅に出て行つた。

幸吉は悲しんだ。そして折々は「一層のこと父の話を村の人たちに話して、父の名譽を取り返さうか。」とも思つた。しかしそれでは、誰にも語るなと言つた父の言葉に對しても濟まないし、親友の武の父に迷惑をかけることにもなるので、幸吉は苦しい恥づかしい月日を送りながらも默つてゐた。「捕虜の子！」といふ言葉は小學校を終るころまでも、毎日のやうに幸吉は聽かなければならなかつた。

彼が小學校を出た年の秋であつた。赤城上等兵の殊勳といふことが、ロシヤの新聞紙によつて傳へられた。金鵄勳章と多額の賜金を幸吉の家に贈つて來たのは、それから間もなくであつた。村の人たちは今更のやうに驚いた。

それに依つて今までの父の苦しい心持が償はれ、幸吉の肩身の狹い思ひが解かれたことは事實であるけれども、幸吉にとつてはそれ等の事よりも、今に至つて父の行方の判らないといふ事が憾みであつた。父が傍にゐてこの喜びを受けて吳れたのだつたら――さういふうら淋しい思ひに幸吉の胸は晴るゝ時はなかつた。

天までとゞけ

彌一はどうしても眠ることができませんでした。

夜がふけるにつれて、あらしがます〳〵はげしくなつて來ました。

沖に漁に出かけてゐる父のことが心配でなりませんでした。

彌一は寢床から起きて、ランプを持つて窓のところにゆきました。瀧の水のやうに雨がはげしく硝子窓をたゝきつけてゐました。

風がまつくらな空をうなりながら走つてゆきました。

村では半鐘の音が鳴り響いてゐました。「おうい、おうい。」と人を呼ぶ聲が、時々、あらしの音にまじつて聞えました。それがたまらなくものさびしく思はれました。

彌一は硝子窓の傍にランプを置きました。そこからは、ひろい海がすつかり眼の下にながめられました。ですから、そこにランプを置きさへすれば、暗い沖の船からもランプの光りが見えるにちがひないと思つたのでした。

濱の家々の灯も嵐ですつかり消えてゐましたので濱に歸つて來る沖の人たちはきつとこまるにちがひないと思ひましたから、彌一はいつまでもランプを持つたまゝ硝子窓の中に立つてゐました。

ランプの灯が幾度も消えました。彌一は灯をつけなほしては、暗い沖を見つめてゐました。

「おれはぢき家のランプが遠い沖からでも目につくんだ。家のランプの灯が見ゆれば櫓を握る腕の力も百倍になる。」

彌一の父はよくこんなことを彌一に話しました。彌一は父の言葉を思ひ出したのでした。大きな白い波が濱に押しよせて來るたんびに家がみし〳〵と動きました。それでも彌一は窓のところを去らないでランプを守つてゐました。

しかし眞夜中ごろになつて大變なことができました。ランプの石油がなくなつてしまひました。石油を買ふには一里餘もはなれた町まで行かなければなりませんでした。

「どうしよう。父の船が、濱に灯が見えないので、航路をあやまつたら大變だ。」彌一はまつたく驚きました。

彌一はふと決心したらしく、土間の壁に立てかけてあつた手斧をつかんで裏の小屋に飛んでゆきました。彌一は手斧を揮つては小屋を倒しました。そして小屋の板を庭に運んで來ました。

雨はまだ降つてゐましたが、風は幾分凪ぎましたので、小屋の板に火をつけると火はあか〳〵と燃え上りました。

彌一は小屋をくづして來ては火を燃しました。

嵐が止み、濱の靜かな夜が明けました。彌一はまだ燃えてゐる火の前に立つてぼんやり沖をながめてゐました。

濱にはたくさんの難破船が流れついて來ました。船の緣にしつかりつかまつたまゝ息が絶えてゐる若い男もありました。

濱の人たちは海岸に火を焚いては難破船から助けられて來た男たちをあたゝめました。

白い鷗の群がいちんち濱の難破船の上を飛んでゐました。

彌一はどんなにか父の船を待つたでせう。しかし彌一の父の船はたうとう濱には歸つて來ませんでした。それらしい船の板一枚流れついては來ませんでした。

彌一は夜が明けると月見草の咲いた濱の砂山につくねんと坐つて沖を見ました。
青い海をわたる船の白い帆が東から西へ、北から南へとしづかに浪の上をすべつてゆきました。
しづかな雨がひろい海の上をつゝんでしまひますと、白い帆がみんな雲のやうな霧にかくれてしまひました。霧がはれ、雨がやむと、ふたゝび白い帆が南から北へ、西から東へとしづかに浪の上をすべつてゆきました。
けれども彌一の父の船だけはどうしてもかへつて來ませんでした。
日が暮れると彌一は家に歸つてゆきました。
濱の人たちは「彌一坊、父は死んだにきまつとる。もうあきらめて早くおやすみ。」と言つてくれましたが、彌一はどうしてもあきらめることはできませんでした。
日が暮れかゝると彌一は手斧を持つて、小屋に行つて、小屋をくづしては庭に出て火を焚きました。
沖に出て働いてゐる漁師たちは「今夜も彌一坊が山の家で火を焚いてるぞ。可哀さうに。」と言つては彌一の焚火を頼りに船を走らせてゐました。
十夜焚き。二十夜焚いてゐる間に、小屋の木はすつかりなくなつてしまひました。それでも彌一の父はかへつて來ませんでした。
彌一は夜が明けると濱の砂山に立つて沖を眺め、夜になると歸つて來て、今度は家の羽目板をはづし、壁を毀し、屋根をはいでは薪にしました。そして夜つぴて火を焚いては父を待ちました。
「彌一坊は、父がかへらぬので氣が狂ふたのぢやなあ、可哀さうに。家をこはしてるぞ、いまに雨でも降つたらどこに寢るつもりだんべえ。」

濱の人たちはかう言つて彌一に、家をこはすことをやめさせようとしました。それでも彌一は手斧を握つては家をこはしては火を焚きました。

夏も過ぎ、空には渡り鳥が海をわたつて來ました。靜かな秋の夜、美しい星がきら〳〵と空いつぱいにまたゝいてゐるころ、遠い沖からも見えるほど彌一の火はあか〳〵と濱の山の上に燃えてゐました。

沖を通る船の人たちはいつとなしに、濱の山の上に毎夜燃えてゐる火に氣付きました。

或る外國船の老船長は甲板の上から双眼鏡で彌一の火を見ました。そして「何といふ聖い炎だらう。」と叫びました。

まつたくそれは美しい、聖い炎でありました。

「あんなに聖い燈臺の火を見たことがない。」と叫んだ航海者もありました。

彌一の家の屋根も壁もすつかりなくなつてしまひました。柱さへもなくなつてしまひました。

それでも彌一の父の船は歸つて來ませんでした。

彌一は夜は焚火の側に坐りつきりで火を焚きました。雨の中に破れたマントをかむつたまゝ庭に立つてゐる彌一を村の人たちはしば〳〵見ました。

彌一は住むべき家がなくなつたことを少しも悲しみませんでした。たゞ焚くべき薪のなくなつて來たのを一番心配しました。

村の子供たちはふだんからしんせつな彌一がすきでしたから、彌一の父の話をきいてはほんたうに彌一を氣の毒だと思ひました。

焚くべき木をすつかり焚きつくした日、彌一はいつものやうにぽつねんと砂山にしやがんで沖を眺めてゐました。いつもより彌一の眼はずつと悲しさうでした。

「どうしたの彌一！」と一人の子供が聲をかけました。

「家も燃やしてしまつたので今夜から焚くものがないんだよ。父が沖からかへつて來るのに困るだらうと思ふんだよ。」と彌一はぽとりと涙を落しました。

その子供も悲しくなつてぽとりと涙を落しました。それを見てゐた二郎も三郎もお花もお露もみんなぽとり〳〵と涙を落しました。

そのうちの一人の子が「いゝことがある。難破船の板貰ふて焚くべえ。」と頓狂な聲を出したのでみんなが笑ひました。

「あゝさうすべい。」

「よかつぺえ。」

一郎も二郎もお花もお露も、お露に手をひかれてよち〳〵と濱を歩いてゐたちひちやな罌粟坊主の豆吉や、お寺の犬までが砂山を走り下つて濱へ行きました。

「おうい、みんな來て手つだつてくれえ。」たれかゞかう叫びました。

お寺に遊んでゐた子供たちも、山で栗を拾うてゐた子供たちも、濱で貝を掘つてゐた子供たちもみんな集まつて來ました。そして濱の難破船の板だの、磯馴木だのをかついでは山の上の彌一の庭に運んでくれました。

彌一はどんなに喜んだでせう。子供たちもどんなにか喜んだでせう。日は暮れて來ました。

「さあ今夜こそ天までとゞくほど火を燃やすべえ。」
たれかゞかう言つて、うれしさうに踊りました。
「さうだ。」
「さうだ。天までとゞけ。」
子供たちは山の上に、家の高さくらゐに薪を積んで火をつけました。
山も、お寺の屋根も、濱の砂山もまつかに火の光りにうつつて見えました。
ほんたうに子供たちが山の上で焚いた炎は天までとゞくかと思はれました。
ちやうどその夜でした。或る遠い外國の船がそこの沖を通つてゐました。船長は船橋の上から天までとゞくやうな大きな火の柱を見ました。
「何でせう？」
「昔ユダヤの豫言者が見たといふ火の柱のやうに聖い火だ。」と船長は話しました。
「あれを御覧なさい、船長。」と若い士官が望遠鏡を眼にあてたまゝまをしました。
「なるほど、何だらう。あの聖い火の柱をめぐつてたくさんの子供たちが踊つてゐるぞ。これはすてきだ。まるで神さまの世界のやうだ。」と船長はまをしました。
船長はあまり物珍らしい火の柱にひきつけられて思はず船を濱の方へ向けました。
黒い小山のやうな船が濱につきました。錨が高い水煙を立てゝ海の底に投げこまれました。
ちやうどその時でした。一人の日本人が甲板の上に躍り上つて來ました。そして船長にまをしました。

「こゝは私の故郷の濱にちがひありません。あのあか〳〵と火の柱に照らされてゐるお寺の根屋も、あの砂山もすつかり私の故郷にちがひありません。」

その男は眞つ先にボートに乘りうつりました。それは彌一の父だつたのです。

あの大嵐の夜、彌一の父は遠い〳〵外國の海岸までも流されてしまつて、船の中で死にかゝつてゐたのをその外國船に助けられたのでした。

船長や、士官たちはボートから陸に上ると彌一の父を胴上げしてよろこびました。彌一の父は船長たちを案内して山の方へ走りました。

「それにしても彌一はどうなつたらう。家が見えないが？」と心配しながら火の柱の方へ走つてゆきました。

「彌一ッ！」

「おう、父が歸つた。」

二人は抱き合つてうれし泣きに泣きました。

まつかな火の柱が幸福な親と子を照らしました。

まんまるい月が出て來ました。

子供たちも、外國の士官たちもまつかな火の柱をめぐつて踊りました。

「天までとゞけ
お月さままつか

お星さままつか
金太郎のやうな顔して
天まで燃えろ！」

あたたかい風

南の空から
あたたかい風が
青い黄いろい野良を吹いてやつて來た

南の風なら故郷の風だ
大きな息して吸ひたいだけ吸つて見よう

胸がさけるほど吸つても見たが
風は母さんのたよりも忘れたか
青い畑をさら〳〵と逃げた

南の風なら故郷の風だ
兩手をひろげて
吹かれるだけ吹かれて見よう

兩手をひろげて吹かれても見たが
風は弟の唱歌さへ忘れたか
黄いろい畑にころ〳〵と逃げた

逃げた春風の行方を追ふて
北を向いたら
筑波の山が
泣いた子のやうに暮れてゐた。

青い鳥と赤い花

夏の眞晝、太陽はぎら〳〵と北の國の大きな都會を燒きつくすやうに照らしてゐました。

大通りのアカシヤや鈴懸の並樹の若葉もまるで死んでしまつたかのやうに、指でかるくさはつたほどのそよぎも立てませんでした。

重い荷車を曳いて通る馬も、馬子も喘ぎながら、燒けた鐵のやうなアスファルトの道を歩いて行きました。

白い入道雲がもく〳〵と地平線の上に湧いて來ました。太陽は血のやうな色に燃えはじめました。

「地震だ！」たれかゞ、かう叫び出しました時は、もう、直ぐ眼の前の高い家は二つに折れて、もく〳〵と、黑い土煙が立ち上つてゐました。庭に遊んでゐた藤作はまるで毬のやうに二三間もころ〳〵ところがされました。

高い建物の窓からは赤ん坊を抱いた若いおつ母さんが飛び下りました。

「火事だ！」女の泣き聲があつちからも、こつちからも聞えました。高い建物の窓からは眞つ黑な煙と眞つ赤な炎がもく〳〵と噴き出されました。

「金庫の鍵を持つて來い。」

「お金を出すんだ。」

「簞笥の中の物を出すんだ。」

たれもかれも血眼になつて金目の物を運びました。

「僕は何を持ち出したらいゝか知ら？」藤作は庭の松の木につかまりながら考へました。

「あゝ三階の青い鳥だ！　それからあの小さな鉢の木！」藤作はどうしても二羽の青い小鳥と、鉢の木を助けなければならないと考へました。ぐら／＼と揺れてゐる庭を走つて階段の方へ行きました。

「坊ちやんあぶない！　三階の屋根が燃え出してゐます。」

金庫の中のお金を掴み出してゐた番頭はかう言つて、階段を飛び上つてゆく藤作を引き止めようとしました。

「だつて青い鳥が可哀さうぢやないか。」

藤作はぐん／＼階段を昇つてゆきました。二階まで黒い煙がもく／＼と襲つて來てゐました。それでも藤作は三階の方へ走つて行きました。

火は三階の窓まで押し寄せてゐました。藤作は煙の中にかすかに青い鳥の籠と小さな鉢の木を見出しました。藤作は夢中になつて青い鳥の籠と鉢の木とを抱へました。そして煙の中を走り下りて來ました。

「まあ坊ちやんは、そんなものを抱へて、捨てゝおしまひなさいよ、小鳥だの、植木だの、いつだつて買へるぢやありませんか。」と金庫のお金を抱へた番頭が言ひました。

「だつて焼け死んだら可哀さうぢやないか。」

「こんな大地震では、人間さへ何萬と死ぬんですもの、そんなものゝ命なんか、何でもありませんよ。」

「だつて可哀さうだよ。」藤作はどうしても小鳥の籠と、鉢の木とをはなしませんでした。そしていろんな荷物を積んだ車の間をぴよん／＼と兎のやうに飛んで大通りを郊外の方へ逃げてゆきました。

藤作は何時間走つたのか、どこを歩いてゐるのかまつたく無我夢中で草の中を歩いてゐました。

日が暮れてしまひました。大きなお月さまが月見草の原を照らしてゐました。

そこにもこゝにも家を燒かれ、親兄弟を失つた不幸な人たちが夜露に打たれたまゝ燃えてゆく大都會の眞つ赤な空をながめてゐました。

しかしたいていの人間といふものはどこまで慾深いものだか知れません。草の中に集まつた人たちは自分らが火の中から持ち出して來たいろ／＼な家の寶物だの、お金だのをかぞへはじめました。そして少しでも人よりたくさんのお金を持ち出したり、寶物を持ち出した人たちは、得意さうな顔をして人を見ました。

藤作が二羽の青い鳥と小さな鉢の木だけを持ち出したことを聞いた時、草の中の人たちはみんな藤作を見て笑ひました。

「この子は少しおめでたいんだよ。」かう言つて藤作と鳥籠をながめたお婆さんもありました。

三日三夜つゞけて火は燃えさかりました。そしてたうとう大きな都會は一軒の家をも一本の木をも殘さず滅びてしまひました。

都會を追はれた人々は遠い旅をつゞけて南の國へ移つてゆかなければなりませんでした。

人々は滅びてしまつた大きな都會から幾千里とはなれた荒野の中に、石を築き上げては新しい町を作りました。

寶物やお金を持つて逃げて來た人たちは、荒野の中に家を作つたり、廣い屋敷をかまへたりすることができました。

藤作だけは小さな鉢の木と二羽の青い鳥だけを持つて來ましたので、誰もあひてになつてくれる人もありませんでした。ですから藤作はまるで乞丐のやうになつて、小さな腕をはたらかせて煉瓦をはこんだり、石をかついだりしてわづかのお金をもらつては、青い鳥に餌を買つてやつたり、自分もまづい黑パンをたべたりして、夜になると星を見な

から草の中に眠るのでした。

藤作はお金持ちの家のあたりを歩いてはこはれた煉瓦を拾つて來たりして、或る坂の中程に自分と青い鳥の籠だけを入れることのできる小舍を作りました。そして小舍の前には鉢の木を植ゑました。

五年たち、六年たちました。小舍の前に植ゑた木はずん／＼空を突くほどに大きくのびてまゐりました。樹といふ樹からは寶石のやうな眞つ赤な花が咲きました。

赤い花の下からは泉が湧いて來ました。藤作は二羽の青い鳥を籠から出してやりました。二羽の青い鳥は赤い花の間をかけまはつては、いちんち啼いてゐました。

坂を上つて行く人たちはその赤い花の下で青い鳥の聲をきゝながら、ぎら／＼と照る南の國の光りを避けて、涼しい木蔭をたのしみました。

藤作は小舍の小窓から赤い花と青い鳥と、そこに休んでゐる旅人を見てはよろこんでゐました。

重い荷を積んだ駱駝や、旅人を見ると藤作は小舍から走り出て來て、疲れた旅人や駱駝に水を掬んでやつてはいたはりました。

新しい町の人たちが、年々大きな家を作つたり、高い塔を築き上げたり、たくさんのお金を貯めたりしてゐる間に、藤作だけは雨が降つても、日が照つてもにこ／＼して、小さな窓から坂を眺めて、旅人や駱駝をたすけてやりました。そして、いつも乞丐のやうなきたない着物をきて、黒いパンをかじつては、うれしさうに、赤い花と青い鳥をながめてゐました。

二十年たち、三十年たちました。
荒野の中の新しい町には雲を突くやうな高いお寺の塔がそびえました。五里も十里もはなれた遠いところから、旅人は、その塔を眺めることができました。
しかし旅人はその高い塔よりも、もつと高い美しい木を十里も二十里もはなれた荒野の中から見ることができました。それは藤作が植ゑた赤い花の木だつたのです。
赤い花は、二十里三十里はなれた砂漠の旅人にも美しいかをりを送りました。熱い町は、その一本の木のために、いつも、涼しい木蔭を持つことができました。
太陽に照りつけられた旅人や駱駝の群が、喘ぎ〳〵遠い道を歩いてゐるころ、赤い花の間には幾千とかずかぎりもないたくさんの青い鳥が美しい聲で囀るのでした。その小鳥の聲を聽いてゐると疲れた旅人も駱駝も急によみがへつたやうに元氣づいて來るのでした。
藤作はすつかりおぢいさんになつてしまひました。それでも昔と同じやうに眞つ白な長い鬚をなでながら、赤い花の下の小舍の小窓から坂をながめてゐました。そして疲れた旅人や、駱駝が坂を通りかゝると赤い花の下にしやがんでゐる若い男たちに合圖をしました。
若い男たちは十人も二十人もまるでばつたのやうにたかつて行つて旅人や駱駝を助けました。若い男たちはみんな藤作の子や孫でした。
町がどんなに大きくなつても、町の人たちがどんなにお金持ちになつて大きな屋敷を作つても、藤作だけはいつも貧乏で、赤い木の下の小舍の中に住んでは小窓から往來を見てゐました。

藤作の子や、孫たちもみんな祖父さんにならつて可愛い小舍を赤い木のまはりに作つては、祖父さんと同じやうに小舍から往來の人や駱駝を見てゐました。

月の美しい晩など、赤い花の下で藤作を眞ん中にして、多勢の子や孫たちがうれしさうに輪を作つてうたひながら夜つぴて踊るのでした。

赤い花がぽと／＼と落ちて美しい毛氈を作つてくれました。

高い／＼木の上の巢では幾千といふ青い鳥が、月の光りに踊つてゐる藤作や、多勢の孫たちの歌の聲に合はせて美しい聲で鳴くのでした。

杢平爺さんの死

海安寺の鐘撞き男杢平爺さんは御飯よりも酒が大好きでした。けれども鐘を撞いてゐるだけでは、酒を買ふ金もあまりもらへませんので、お葬があるたんびに墓を掘つてはお金をいたゞいて酒を飲むのでした。

ですから杢平爺さんはお寺にお葬がやつて來るのが何より樂しみでした。朝早く起きて、鐘樓にのぼつて鐘をつきながらも杢平爺さんは「今日はお葬が來るか知ら?」といふことばかり考へてゐました。

むろん杢平爺さんにしても、人の亡くなることは氣の毒なことだと思つてはゐました。杢平爺さんと仲善しで、月の夜などおそくまで鐘樓の下で將棋をさしてゐた昆布屋の太郎平爺さんが死んだ時などは杢平爺さんは悲しんで一週間ばかりぼんやりしてゐました。

また海安寺の直ぐ下の十七になつたばかりの色の白い糸屋の娘のお葬がお寺にやつて來た時は、墓を掘りながら杢平爺さんはぽとり〳〵と涙を落しました。

人が死ぬといふことゝ、お酒を飲みたいといふことは、杢平爺さんにとつてはまつたく別な問題だつたのです。

「成るたけ人は死なゝい方がいゝ、けれどお酒はなるたけたくさん飲めた方がいゝ。」杢平爺さんはこんなことだけを考へてゐたのでした。

しかし本平爺さんがお酒を飲むのはお葬のある日だけでしたから、本平爺さんはこんなことを考へては悪いと思ひましたが、「今日は一つお葬がやつて來ないかなあ。」などゝひとりごとを言ひながら、鐘樓の上から町の方をながめてゐました。

だん／＼年をとつて行くうちに本平爺さんはえらい發見をしました。それは夜になつて本平爺さんが、ひとりで自分の部屋に寢てゐると、たれも鐘をつきもしないのに、鐘樓の鐘がひとりでに夜中にごうんと陰氣な音を立てゝ響くのでした。その鐘の音を聽いてゐるとぶる／＼と身ぶるひがするほど陰氣でした。そんな事が幾度もありました。妙だなと思つて、本平爺さんはそうつと窓をあけて鐘樓を見るのでしたがそこにはたれもゐませんでした。

ところが、夜中にひとりでに鐘が鳴ると、きつとその翌日はたれかのお葬がやつて來るのでした。

どうかすると一晩のうちに二度も陰氣な鐘の聲が聞えることがありました。さうすると翌日にはお葬が二つもお寺に來るのでした。

それから本平爺さんはこんなことをも發見しました。

若い男が死んだ時は、鐘の音がたいへん強く響くのでした。女や、年寄りや、子供たちが死んだ時は鐘の音がずつと低いのでした。赤ん坊が死んだ時は鐘の音がまるで靜かな秋の風のやうにしか聞えないのでした。

本平爺さんはこのごろは夜中にひとりでに鳴る鐘の音を聞いた時は朝まだ薄暗いうちから起きて、鍬をかついで、寺の裏の墓場に行つて新しい墓を掘るのでした。

お葬のことを頼みにお寺にやつて來た人たちは、ちやんと墓まで掘つてあるのを見てびつくりしました。

「何うして本平さんはお葬が來るのを知つてるんだ？」と人がたづねるたんびに本平爺さんはひとりでに鳴る鐘の

話をして聞かせました。そして「あれはきつと死んだ人の魂が、お寺へ知らせに來るんだ。」と言つてゐました。

或る秋の靜かな夜でした。

杢平爺さんは夜中にひよつと眼をさましました。

ごうん……ごうん……とひとりでに鐘樓の鐘がつぶやくやうに鳴つてゐるのでした。

まただれか死んだのだなと思ひました。その鐘の音はいつものよりずつと陰氣でした。杢平爺さんはぶる〱と身ぶるひをしました。今までに聽いたことのないほどに寂しい鐘の音でした。何だか、いまにも杢平爺さんの部屋まで死んだ人の魂が近づいて來るのではないかと思はれました。杢平爺さんの部屋のすゝけた障子までが、ぶる〱とふるへました。

「何といふ寂しい鐘の聲だらう。」杢平爺さんは鐘をつきました。

鐘樓から霧の下に眠つてゐる町が低く見えました。

「今日はだれのお葬が來るのか知ら？」

杢平爺さんは昨夜の寂しい鐘の音のことを思ひ出したのです。

低く見える鐘の霧の下の町に、だれか死んだ人があるのだなと考へると、杢平爺さんもさすがに氣の毒な心持ちになるのでした。

ですから、だれのために唱へるといふわけもなしに口のなかで「なまみだぶ、なまみだぶ……」と言ひながら夜明けの鐘をつきました。

杢平爺さんは鐘樓を下りて自分の部屋に行きました。

急いで朝の御飯をたべてから、好きなお酒をぎゆつと茶碗に一ぱい飲んでしまひました。

「今日はまたお葬があるのでおいしい酒がうんと飲める。」と思ふとあまり悪い氣持もしないのでした。

しかし今朝は時々、なんだか、いつもとはちがつた妙に寂しい氣がするのでした。

昨夜聽いた鐘の音がいつもとはちがつてゐたことが不思議に思へてならないのでした。

それでも杢平爺さんは、勇氣を引き立たせるために、もういつぱい茶碗になみ〳〵とお酒をつぎました。

杢平爺さんは草を掻きわけて墓を掘りはじめました。

まだ有明の月が山の端にのこつてゐましたので、杢平爺さんが鍬を振り上げるたんびに、鍬の刃に月の光りがかすかにうごきました。

杢平爺さんはお酒を飲んだはずみにぐん〳〵と墓を掘つて行きました。

土が柔かだつたものですから、朝のお日さまが墓場の上に出て來るまでにはずゐぶん深い穴を掘つてしまひました。

「煙草でも一服やらうか。」

かう言つて杢平爺さんは穴の底から上を見ました。

小鳥が恰度朝の空を樂しさうにさへづりながら飛んでゆきました。

杢平爺さんは、やつこらさと言つて腰をたゝいて、墓の底から立ち上つて來ようとしました。そして少しばかり出つぱつてゐた石に手をかけました。

その石に、手をかけて、うんと力を入れたはずみに、土がばら〳〵と落ちて來ました。石が脱け落ちて、いやとい

ふほど杢平爺さんの頭を打ちました。
杢平爺さんは墓の底に倒れてしまひました。
上から穴がくづれて、すつかり杢平爺さんを埋めてしまひました。
お寺の方ではだれも杢平爺さんがゐないことには氣付きませんでした。
おひるになつても杢平爺さんが鐘をつかないので、はじめてお寺の人たちは杢平爺さんのことを思ひ出したのでした。
みんな手分けをして方々さがしました。
寺の裏の墓場に、新しい穴が掘りかけられたまゝになつてゐるのを見て、人々は不思議なことだと思ひました。
「墓の穴がくづれたのぢやないか？」と和尚さまがまをしました。そこには杢平爺さんの帽子が草の中に落ちてゐました。
みんなは急いで穴を掘りかへして、土を草の上に運びました。
土の下から杢平爺さんの死骸が出て來ました。
杢平爺さんは兩手で頭をおさへたまゝしづかに死んでゐました。まるで眠つた人のやうに。

子供と小鳥

父と子の二人が幾日も〳〵秋の野を旅してまゐりました。父は荷車をひいてゐました。子は荷車の上に、荷物といつしよに載せられてゐました。きつい坂道にかゝる時や、美しい川の流れのほとりや、野菊の咲いた廣い原を通り過ぎる時などは子は車からおろされて、荷車のうしろから父について歩いてゆくこともありました。

父と子は去年の恐ろしい地震までは、母もいつしよに東京の場末の工場町に住んでゐたのでした。そして父は毎日暗い工場に通つてゐました。あの地震の日も父は工場に通つてゐたのでした。地震と同時にたいていの人たちは工場を捨てゝ、めい〳〵の家に逃げかへつてしまひました。しかし父は五六人の仲間と工場に踏みとゞまつて、火事を出さないやうに、火を消したり、窓をしめたりしました。家に歸つた時は子と母は交番の前の廣場にふるへてゐました。父と母と子は大きな橋を渡つて逃げました。しかし大きな橋の眞ん中ごろに來た時、大きなつむじ風のために三人ははなれ〴〵になつてしまひました。父と子は翌日の朝山の手の公園で出會ひましたが、母にはたうとう逢ふことができませんでした。母は恐らく大きなつむじ風のために橋の下に吹き落されてしまつたのでありませう。

地震のあとで、父の通つてゐた工場だけは火事も起らなかつたので一ヶ月も經たないうちにふたゝび機械が動くやうになりました。けれども工場ではその時たくさんの職工を追ひ出してしまひました。父もその時工場から追はれた一人でした。

父と子は或る日大きな橋の上に林檎だのお菓子だのを持つて行つて、橋の下をのぞきながら亡くなつた母に供へました。

父も子も幾度となく、橋の下の流れを覗きこんで見ました。ゆるやかな流れには白い雲の影がしづかに動いてゐました。その日の夜、父はどこからか荷車をひいて來ました。そしてわづかの荷物を積んで西の方の大きな都會へ子をつれて旅立つたのであります。

西の方の都會でも父は工場に行つて働きましたがそこでもまた働く人が多すぎたので、工場を出なければなりませんでした。父は荷車の上にわづかの荷物を積んで、また子をつれて北の都會、南の都會へと旅をつゞけて歩きました。けれどもどこの工場でも、乞丐のやうにみすぼらしく瘦せ衰へてゐる父を雇つてくれるところはありませんでした。

父と子は幾日もつゞけて村から村へと歩きました。父はしまひには、寺にはいつて行つては、握り飯をもらつて來たりすることもありました。

その日は朝から父も子も握り飯一つ食べることはできませんでした。

父は日暮方に荷車と子を沼のほとりに置いて村に出かけました。雨が降つて來ました。父はなか〳〵歸つて來ませんでした。子は荷車の傍に蓆をかむつてふるへてゐました。

父は大きな風呂敷包を背負つて歸つて來ました。父と子は沼の近くの水車小屋をさがして、そこの中に雨をしのぎました。父はマツチをすつて蠟燭をともしました。

父は風呂敷の中から眞つ紅な寶石のやうな林檎を出しました。そして皮のまゝ大きな口を開いて林檎に嚙みつきました。子は父の口と手を見つめてゐました。父は一口嚙んで今度はその林檎を子にわたしました。子はむしや〳〵

と、狂人のやうになつて林檎をかじりました。子は直ぐに一つの林檎を食べてしまひました。そして今度は待ちきれなくなつて自分で風呂敷の中に手を突つ込みました。父は寂しい顔をして子を見ました。父は新聞紙につゝんだ握り飯だの、燒いた鳥の肉だのを子に食はせました。それは東京を出てから一度も喰べたことのないほどの御馳走でした。

「おいしかつたかい？ さうか。うむ、よかつたねえ。さあ早くおやすみ、休んでお母さんの夢でも見たがいゝ！」

父は水車小屋の隅の方へ藁を積みかさねて、柔かな寢床を子のために作つてやりました。

「今夜は寢いゝだらう。藁が柔かで……それからなあ。ほれ、これを見い。いゝ着物だらう。いゝ帶だらう。これ買つて來てやつたぞ。明日夜が明けたらこれを着るんだ。」父は藁の寢床の横に新しい着物と帶をきちんとたゝんで置きました。

「いゝか、早く眠れ、ぐつすり眠れ。そしてお母さんの夢でも見ろ！」父はかるく子の頭を撫でてやりました。子が眠つてしまつた時、父は蠟燭をかゝげて子の顏をしみ〴〵と見つめてゐました。父は藁の上にぽとりと涙を落しました。しかし子は眠つてゐて何も知りませんでした。

父は林檎だの、燒き鳥の肉だのを取り出して、藁の寢床の傍に置きました。

父は小さな風呂敷包をかゝへて、水車小屋の戸口から外をのぞいて見ました。やつぱり雨が降つてゐました。空は眞つ暗でした。父は子の寢顏を見ながら、水車小屋の外へ出ました。

夜は明けかゝつて來ました。空は晴れて來ました。

小鳥が沼のほとりの木でしつきりなしに鳴いてゐました。子は眼をさましました。

「お父つあん！」子供は父を呼びました。

何のこたへもありませんでした。

子供は藁の上に起き上りました。そこには新しい着物だの帯だの林檎だの燒き鳥だのが並べられてありました。

子供はもうそんなものに目を引かれることはできませんでした。

「お父つあん！　お父つあん！」子供は狂人のやうに父を呼びました。

水車小屋を出て、沼のほとりを右に左に走りながら父を呼びました。

昨日荷車を置いたところに行つて見ました。荷車は雨に濡れたまゝ昨日と同じ場所に置かれてありました。

たうとう父の影は見えませんでした。

子供は破けた着物を着たまゝ三日四日もたゞ一人で道を歩いてゐました。

畑にも、廣い野にもたくさんの男たちが幸福さうに働いてゐました。しかし父はゐませんでした。

或る湖のほとりを歩いてゐる時でした。子供は低い木にとまつて鳴いてゐる小鳥を見ました。それはほんたうに美しい小鳥でした。

子供は朝から何も食べてゐなかつたのでした。

子供はふと小鳥の巣のことを考へたのでした。きつとそこには小さな卵があるにちがひない。小鳥がゐるにちがひないと思ひました。子供はむしや〳〵と燒き鳥の肉を食べた時のことを思ひ出したのでした。

子供はいつまでも小鳥を見つめてゐました。小鳥は一つの木で鳴いてはまた次の木に飛んで行つて鳴くのでした。

子供は小鳥の鳴く木から木へと、そうつと草の中にからだを隱しては小鳥を追つかけてゆきました。

「もう直ぐ、山の中の巢が見つかるにちがひない。」子供の頭にはおいしい柔かな卵や、小鳥の肉がうかんで來るのでした。小鳥の巢を見つけたら鷲づかみにして巢ぐるみ食べてしまはうと考へました。自分の兩手をひろげて鷲づかみの眞似をして見せたりしました。

いつの間にか子供は小鳥を追ひながら深い山の中にはいつてしまひました。燃えるやうな赤い花の枝に小鳥の巢がありました。

しかし子供は、小鳥の巢を見たと同時にすつかり自分が今まで考へてゐたことを忘れてしまひました。そこには卵は一つもなくて、小さな、可愛らしい五羽の雛鳥がまだ飛べない翼をひろげて大きな口を開けては、親鳥が遠くから運んで來る蟲だの、魚だのを食べるのでした。

子供は自分のおなかがぺこ〳〵に空いたのも忘れてその雛鳥をじいつと見つめてゐました。子供はそこいらの木の幹から小さな蟲を見つけて巢の雛鳥の口に入れてやりました。雛鳥は可愛らしい翼をひろげてうれしさうに蟲を食べました。

「面白いなあ、面白いなあ」子供は手をたゝいて、よろこびました。そして蟲をとつては雛鳥に食べさしてやりました。

子供は深い山の中を木から木へ蟲を探して歩いてゐる間に、高い木にまつはりついてゐる蔓に、美しい實が熟してゐるのを發見しました。子供は實を割つて食べてみました。それは汁の多い、林檎よりももつとおいしいものでした。

子供は懷にいつぱい蔓の實を入れて、兩方の手にはいつぱい蟲をつかまへて小鳥の巢にかへつて來ました。

小鳥はもうこの子供を恐れなくなりました。雛鳥はよろこんで子供の手から蟲をもらつて食べました。

日が西の山へ落ちかゝつて來ました。
小鳥は赤い花の梢で幸福な一日の夕暮をたのしさうにうたひました。
子供は雛鳥に蟲を食べさせては手をたゝいてよろこびました。そして自分では蔓の實をおなかいつぱい食べました。
月が出ました。
小鳥は巣の中に五つの雛鳥を抱いてしづかに眠りました。
赤い花の下では、小鳥の巣を見ながら一人の子供が柔かな草の上に幸福さうに眠つてゐました。
深い山の中の月は、赤い花と、小鳥の巣と、一人の小さな人間の子供とをまもるやうに、いつまでもやさしく夜を照らしてゐました。

仔馬は歸りぬ

霧が深かつたので國境の山も見えなかつた。星も見えなかつた。

新作は馬の背に手をやつて見た。夜霧が重く雨のやうに背をぬらしてゐた。

「ピック！　ピック！」新作は振りかへつて霧の中を見た。仔馬は母馬の脇腹にくつつくやうにして、坂を下つてゐた。

かれは鞍の上から腰をかゞめて仔馬を撫でてやつた。

道はちやうど上野と信濃の國境を走つてゐた。

新作が廐に行つて母馬に鞍をつけたのは今朝の二時であつた。

母馬といつしよに眠つてゐた仔馬はちよつとも母馬から離れなかつた。

「ピック、雨が降りさうだし、信州の方は寒いで雨に濡れて風でもひくといけぬ。お前は來るんぢやないぞ。」新作は仔馬に綱をかけて、鼻面を撫でてやつた。そして無理に仔馬を廐の中へ追ひ込んで、横木をはめた。

仔馬はしきりに母馬をこひしがつて鳴いた。

「ぢや行つて來ます。今度こそすこし長く東京にゐて試驗も受けてかへります。」

「それがいゝ。ぢや、からだを氣をつけてなあ。」

叔父と叔母は庭に出て新作を見送つた。

「ぢや、ピックを氣をつけてなあ。叔父さん、まだ大きくなるまでは可哀さうだから賣らないやうにしてなあ。秣代はわしが東京でかせいで送るから、面倒なら牧場にあづけてもいゝから、馬市につれて行つて賣るやうなことをしてはいけませんぞ。」

「うむ、大丈夫だとも、賣りはせぬ。」と叔父はうなづいて見せた。

「ピックや、いゝか、おとなしくしてくれ。畑に出て玉蜀黍など食つて怒られるぢやないぞ。わるさをすれば馬市につれてゆかれるでなあ。」

新作は仔馬の鼻面を撫でてやつた。しばらくでも別れるのだと思ふと何ともいへず悲しかつた。

「さあ行くことにしよう。」新作は馬に乘つた。從弟の喜一が提灯を持つて馬の口を取つた。

仔馬が母馬を慕うて鳴いてゐる聲が二三丁もへだてた霧の中まで聞えて來た。

霧の深い山一つ越えたところであつた。新作はかすかな蹄の音をきいた。

「どうしたんだらう、誰か馬で山を越えて來るのか知ら？」新作は馬をとめて喜一に聲をかけた。

「さうかも知れぬ。」

蹄の音はます〳〵近づいて來た。仔馬が二三間先の霧の中にあらはれた。

「ピックだ！　ピックだ！」

新作も喜一も驚いて大きな聲を出した。仔馬は横木を飛び越えて、母馬を慕うて暗い霧の中を走つて來たのであつた。そしてうれしさうに母馬の横腹にこすりついて鳴いた。

「馬でもこんなにまで親がこひしいのだのう！」新作は提灯の火にてらされた仔馬をぢつと見つめてゐた。

仔馬は母馬について信濃の方へ山路を下つて行つた。

「星だ、星が見えた！」新作は高い空を指さしてゐた。

霧の間から星がまたゝきはじめてゐた。

夜が明けて間もなくかれ等は信濃の高原の或るステーションに着いた。

汽車が出るまではまだかなりの時間があつたので、新作は玉蜀黍を買つて來て仔馬にたべさしてやつた。

「ピック！　畑の玉蜀黍をたべ荒すでないぞ。叔父さま叔母さまも物惜しみする人だで、お前が畑のものを荒したりすると、すぐ馬市につれて行つてお前を賣りなさるぞ、いゝか、賣られるやうなわるさをするぢやないぞ。」

仔馬はうれしさうに玉蜀黍をたべた。

「喜一さん、仔馬のこと頼むぞ。もし叔父さんが馬市につれてゆくやうなことがあつたら東京へ知らしてくれ。こんなに母馬を慕つてるのを賣るのは可哀さうだでのう。」

「あゝすぐに知らしてやるよ。」

「さうしてくれ。」

汽車がステーションを出てからも新作は窓を明けて喜一や仔馬をながめてゐた。

仔馬は母馬のうしろから、母馬にくつつきながら坂をのぼつて行つた。

東京に着いた新作は或る町外れの長屋の一室を借りて終日働いた。そして夜は二里ちかくの道を歩いて神田の學校へ通つては試驗の準備をした。

新作は體が大きかつたので、まだ少年だつたが、大人たちと同じやうに都會の花やかな街路樹の下を走つてゐる暗い溝の中を掘つたり、高い建物の上に恐ろしい梯子をつたうて重いものを運んだりした。

そこには故郷の廣い草原の花もなく、國境の山々の雪もなかつた。

眞白な美しい手をした人たちは幸福さうに自動車を走らせてゐた。

新作と同じやうに朝はやくから檻の中の獸のやうに驅り立てられて働かねばならぬ人たちはいつも呻いてゐた。いつも人生の不運に苦しんでゐた。大きな花やかな都會中が不仕合せな人たちの呻き聲に滿たされてゐるやうに思はれてならなかつた。

新作はよく、高い建物の上に煉瓦だの鐵材だのを運んで行つては、そこからいろ／＼な不仕合せな人たちを見た。今にも死にさうな老人が撒水車を挽いて公園のまはりを歩いてゐた。幸福な人たちは一度もその老人を見なかつた。日に幾度となく重い荷を積んだ馬は容赦もなく鞭打たれた。馬は鞭打たれては道の上に倒れた。そして死んだ。幸福な人々は馬の死骸を見ても何とも思はなかつた。

都會の屋根の波を被うていつも憂鬱な煤煙が漂うてゐた。新作にはそれが大きな都會の溜息であるやうに想はれた。

見わたすかぎりの草原がかれの眼にうつつて來るのであつた。白い雲が草原の上に漂うてはやがて消えた。走つてゆく馬のたてがみや嘶きが忽然としてかれの記憶によみがへつて來るのであつた。

「ピックはどうしたのか知ら？　大きな馬になつたか知ら？」

かれは仔馬のことをよく思ひ出した。

晝の辨當からかへつて來て、水とパンだけで晩飯をすまして神田の夜學校へ出かけようとしてゐるところに、故鄕の喜一から手紙が來た。

「栗の實が笑みはじめました。昨日は勘助君といつしよに太郎山までまゐり一斗ばかりの栗を拾うてかへりました。松茸、しめぢ、初茸など一雨ごとに出てまゐります。去年の秋は、新ちやんもいつしよだつたになど二人で話し話し栗を拾ひました。五六日前峠へ大きな熊があらはれたといふことで、牧場では警戒してゐます。今日も三人の男が喇叭を吹きながら山の中をのぼつて行くのを見ました。僕等も熊が出てこないやうに大いに軍歌をうたひながら山へはいりました。さて仔馬のことですが、昨日も玉蜀黍畑にはいつて五六本玉蜀黍をたべてしまつたとかで叔母さんが大いに怒つてゐました。それに今月になつて秣だけでも三圓、籾三升、麥五升、燕麥升とかを食はせた。こんな不經濟なことはないから今度の馬市につれて行つて賣つてしまはうとか叔母さんは叔父さんに相談をしてゐました。僕は大いに留めましたが仔馬の運命はなかなか風前の燈といつた有樣です……」

喜一の手紙を讀んだ新作は、もう夜學校へ行く氣にもなれなかつた。それでもかれはともかく學校へ出かけて行つたが、教室にゐても仔馬の姿のみが頭にうかんで仕方がなかつた。

新作は夜おそく學校から歸つて來た。かれは夜更くまで起きてゐて手紙を書いた。

「喜一君。故鄕の秋を思ひ出します。東京はまつたく黄塵萬丈です。憂鬱です。沈鬱です。みんなが呻いてゐます。叔母さんの話、いかにもそんなことになるだらうと覺悟はしてゐました。僕の學資にしようと思つて上京以來働き貯へて置いた金十圓だけお屆けいたします。まことにすみませんが、これで大いに秣を買ひ、玉蜀黍を買ひ、大豆を買つて仔馬に喰べさしてやつて下さい。實はこのお金でセンチユリイの英辭書とグラムマアを買ふつもりでしたが、斷

愛して仔馬のためにさゝげます。よくビックにいひきかせてわるさをせぬやうにして下さい。叔父さんにも叔母さんにもビックを賣らぬやうに賴んで下さい。」

新作はこれだけ書いてしまふと安心して疊の上に寢ころんでしまつた。

かれの枕もとには空になつた鰐口が一つころがつてゐた。

新作の安心はながくはつゞかなかつた。

數日後かれはふたゝび喜一からの手紙をうけとつた。

その手紙には「どうしても仔馬を飼つて置くのは勘定に合はぬからといつて叔母さんはしきりにビックを馬市につれてゆくことを叔父さんにすゝめてゐる。叔父さんははじめはビックを賣るのは可哀さうだといつてゐたが、このごろではだいぶ叔母さんの說に傾いて來たやうである。何でも今賣つても三四十圓には買ひ手がつくだらうといふことだ。」と書いてあつた。

新作はその夜一夜まんじりともしなかつた。どうしたら仔馬を救ふことが出來るか、新作はそのことばかり考へてゐた。

新作は翌日から、今までより早く起きて仕事に出て行つた。そして成るたけ人のいやがるやうなはげしい勞働をした。夜は學校をやめて、夜の仕事をした。そしてできるだけ金をこしらへる計畫を立てた。

新作が働きに働いて三十幾圓の金を貯へたのはもう秋も末に近いころだつた。かれは受驗準備も何もかも捨てゝしまつて、東京を去つた。かれの頭の中は仔馬のことでいつぱいになつてゐた。

かれは信濃の高原の或るステーションに着いた。そこはこの前喜一や仔馬たちと別れたステーションであつた。

コスモスやダリヤは霜に打たれてゐた。

冬になれば信濃の高原では鄰川の水を引いて天然氷を作るのであるが、そこにもこゝにも人々は溜池をこさらへたり、枯草を刈り取つたりして冬の支度をしてゐた。

野菊が道を埋めるやうに咲いてゐた。

新作はたゞひとりでぽつねんと野菊の道を歩いて行つた。

二ケ月前かれは同じそこの道を歩いて東京へ行つたのであつた。その折のかれの頭には未來の花やかな成功の榮冠や、大きな都會生活の明るい幸福や、名譽のみがかゞやいてゐた。

かれは今同じ道を歩きながらたゞあはれな賣られてゆく仔馬のことについてのみ考へてゐた。都會の明るい幸福や、花やかな成功や、そのやうなものは何でもない。つまらないものゝやうに思はれてたらなかつた。

かれはつひに急ぎに急いで國境の山をのぼつて行つた。

道は三里ばかりの深い落葉松の森林地帶にはいつて行つた。柔かな落葉松の葉は落ちて道をうづめてゐた。

栗鼠はくるみの枝を傳うては飛んでゐた。

山鳩は近づいて來る冬を待つやうに啼いてゐた。

落葉松の森林地帶を通りぬけると山は急にひらけて、そこには國境の峠の茶屋が一軒見出された。お婆さんが一人火を焚いてゐた。

「お婆さん、上州の馬市は何日でせう？」

かれはお婆さんのうしろから聲をかけた。
「上州の馬市かい？　今日ぢやよ。」
「今日？」
「あゝ、今日ぢやよ。今朝くらいうちから馬が幾匹もこゝを通つて行つたよ。」
新作は萬事休すと思つた。叔父が仔馬をつれて上州の馬市へ出かけてしまつたにちがひないと思ふと、かれの兩脚がわな〳〵と顫へるのであつた。
しかしかれは自分をはげまして山を走り下つた。
かれは國境からさらに數時間走つて叔父の家にたどりついた。かれは旣に走つて行つた。かれの豫想した通り母馬だけがさびしさうに秣を喰んでゐた。かれは玉蜀黍畑から．牧草の中を見まはしたが仔馬もゐなければ叔父の顏も見えなかつた。
「新作、お前どうしたんぢや、東京から出し拔けに歸つて來て！」叔母は暗い爐のそばから叱るやうに聲をかけた。
「叔母さん、ピックはどうしました？　仔馬はどうしたんです。」かれは今にも泣き出しさうな聲を絞つた。
「仔馬かい。叔父さんが馬市につれてござらしたよ。」
「でも、僕はあれほど賣らないやうにと賴んで置いたではありませんか。母馬から離してしまふなんてまだ可哀さうぢやありませんか。」
「でも仔馬はやつぱり秣だの麥だのを食ふからのう、錢がかゝるわい。」
新作はあきれて叔母の顏を見つめてゐた。ぼろ〳〵と淚が落ちて仕方がなかつた。

新作は懐に入れて置いた金をしつかりと握つて、叔母の家を飛び出した。

村の出口で、かれは喜一に逢つた。

「どうしたんだ新作さん？」喜一は驚いて新作を見た。

「叔父さんがビツクを賣りに馬市に出かけたんぢや。今朝まだくらいうちに。今から行つて買ひもどして來てやるんだよ。」

喜一を殘してかれは飛んで行つた。

叔母の家から上州の馬市までは五里ばかりはなれてゐた。その間はほとんど家もない廣い野原であつた。かれは人の影を見出すこともなかつた。或る小さな流れのほとりでかれは親子づれの巡禮に逢つたきりであつた。

白い雲が草原の上にためらうてゐた。

かれは草の上に不圖黑い影を見出すごとにそれが叔父であればいゝと思つては足を早めた。しかしそこには叔父もなく、仔馬もゐなかつた。

かれが上州の町に走りついたころは馬市は終つてゐた。馬をつれた男たちがあちこちに佇んでゐた。かれは狂氣のやうになつて仔馬と叔父を探して歩いた。

かれは一本の松の木の下で叔父を見た。仔馬はゐなかつた。

叔父は新作を見てびつくらした。さすがに仔馬を賣つたことを恥ぢてゐた。

「仔馬はどうしました？」新作は叔父の前へ走つて行つた。

「賣つたよ。」

「叔父さんはあれほど約束しといて……」

「でも金がかゝるのでのう。」

「幾らで賣りました？」

「三十五兩よ。」

「そして誰に賣りました。」

「名は知らぬが片眼の男だつた。」

「どつちに行きましたその男は？」

「あの峠の方へ行つた。他に五六頭つれて行きよつたよ。」

叔父の話を聽くと同時に、新作はふたゝび叔父が指さした峠の方へ走つて行つた。

かれは一里ちかくも走りつゞけた。しかし片眼の男も、仔馬も見えなかつた。

かれはがつかりして道ばたの小石に腰を卸した。すべての希望が失はれてしまつたやうにすら思はれた。

ちやどその時であつた。かれは霧の中に馬の嘶きをきいた。かれは勇を鼓して山を攀つた。

一人の男が五頭の馬を連れて行く姿がかれの眼に映つた。さらにうしろから一疋の仔馬がかなしさうに頭を下げて歩いて行つた。

「ビツクだ！」かれは飛び上つてよろこんだ。

「ビツク！　ビツク！」かれは聲をかぎりに呼んだ。

仔馬は立ちとまつた。そして振りかへつてかれを見た。

「ビック！　ビック！」かれは仔馬の首を抱いてうれし泣きに泣いた。

「何するだね、おれが買つた馬を！」その男は振りかへつてかれを見た。片眼の男であつた。

「僕の叔父さんが、僕の留守にこの仔馬を賣つてしまつたのです。すみませんが僕にかへしてください。」

「金で買つたものをかへせるか。」

「いゝえ、お金はもどします。どうぞ馬をかへしてください。」

「お前、馬を買ひもどす金を持つてゐるのかい。」

「はい、こゝに持つてゐます。」

「幾ら持つてる？」

「三十圓ばかり持つてゐます。」

「馬鹿いふでない。三十五兩で買つた馬を三十圓で賣つた日にはおれの商賣はあがつたりだ。」

「では幾らで賣つてくださいますか。」

「さうさな、まづ五十兩だ。」

「それでは殘りの金は東京へ行つてから何とかして送りますから三十圓だけ取つて置いて、仔馬をかへしてください。」

「はゝはゝは……馬鹿こくでねえ。いつたん賣つた馬が惜しくなつたので、お前のやうな子供をつかつて芝居を打つてるのだなはゝはゝは……その手は食はぬぞ。」

片眼の男はどうしても新作のいふことをきゝいれなかつた。そして馬をつれてぐん／＼山をのぼつて行つた。

新作はどうしても仔馬からはなれることはできなかつたので、かれは片眼の男のうしろから、どこまでもついて行つた。

「おい、小僧や、早く歸つた方がいゝぞ。今に日が暮れて歸れなくなるぞ。」

「歸れなくなつてもいゝから、どこまでゞもその馬といつしよに歩かせてください。僕はたゞその仔馬といつしよに歩いてさへゐればいゝのです。ごらんなさい、僕が來たので仔馬がこんなに元氣になつたぢやありませんか。」

「ぢやいゝや、どこまでゞもついて來い。わしは五十兩から一文もまけては賣らぬからなあ。」

日が暮れて來た。峠を越えてふたゝび廣い草原がつゞいた。

「今夜はこゝいらで野宿だ。町を發つのが少し遲かつたからなあ。小僧、お前もいつしよに寢かしてやるぞ、谿の水をさがして米を洗つて來てくれ。」片眼の男は鞍の嚢から米を出して新作にわたした。

新作は谿川を探しに草の中を歩いて行つた。

新作は片眼の男のために忠實に働いた。そして夜になつても馬の傍に寢ては六頭の馬の面倒を見てやつた。

二日目の夜もかれ等は草の中に寢なければならなかつた。その夜は幾度か遠くで狼の聲をきいた。狼の聲をきくと馬は意氣地なく弱つてしまつた。片眼の男までがわな／＼と顫へてゐた。

「心配することはありません。安心して休んでおいでなさい。」新作はかういつて草の中に火を焚いた。そして夜つぴて馬をいたはつてゐた。狼はたうとう近づいて來ることができなかつた。

「お前はゑらい小僧だなあ。」夜が明けてから片眼の男はかういつて新作を見た。

三日目の夜もかれ等は草の中に寝なければならなかつた。

最初は新作を嫌つてゐた片眼の男も、一日一日と新作の忠實な働き振りと、駒を可愛がる親切心とに動かされてしまつた。

草の原を月が照らしてゐた。

二人は焚火を中にして夜の更けるまで語つた。仔駒は新作の肩に頭をくつつけて眠つてゐた。

「お前はお父あんもおつ母さんもゐないのか？」と片眼の男がたづねた。片眼の男の顏は昨日まではまるでちがつた柔和さを持つてゐた。

「さうです。僕が小さいころ父も母も亡くなつたのです。」

「それで叔父さんの家に厄介になつてるのだなあ。」

「さうです。」

「叔父さんがあの仔駒を賣るのをお前は知らなかつたのかい？」

「僕は東京にゐたものですから。」

「東京にゐた？」

「東京に出て働いてゐたのです。このお金も一生懸命働いて貯へた金です。叔父が駒を賣ることを從弟が教へてくれたものですから、僕飛んで歸つて來たのです。」

「さうかい……ふうむ……お前はそんなにあの仔駒と別れるのが悲しいのか？」

「えゝ……」
片眼の男と新作は夜つぴて焚火のはたで語つた。
夜が明けて朝の食事をすましてからであつた。片眼の男は仔馬の背に大きな嚢を背つけた。中には秣だの、豆だのがいつぱい入れてあつた。
「おい、この馬はお前にもどしてあげるよ。三十五兩で買つたのだが、今日までお前さんが忠實に働いてくれたので、そのお禮に三十兩だけで賣つて上げよう。」と片眼の男はいつた。
新作は踊り上つてよろこんだ。
新作は三十圓の金を片眼の男にやつて仔馬をつれてその男と別れた。
「ピックや、もう安心するがいゝ。直きに母馬に逢はせてやるぞ。うんと乳を呑めよ。」
新作はかういつて仔馬のたてがみを撫でてやつた。仔馬は新作に頰擦りするほどに顔をちかくつけて、うれしさうに新作のうしろからついて山を下つた。
かれは毎日仔馬をつれては牧場へ出て行つた。そして終日仔馬を見守つてゐた。
「新作、お前はもう東京へは行かぬのか？」と叔父はいつた。
「もう東京へは行かぬ。」と新作は答へた。
「試驗は受けぬのか？」
「あゝ。」
「では、えらくなれめえになあ。」

「どうだか……」

「われ、馬のお守ばかりしてどうする氣だ？」

「どうもせぬが仔馬が可哀さうぢやないか、また叔父さんに賣られでもしたら……」と新作はいつた。そして仔馬の鼻面を撫でてやつた。

叔父は佛頂面をして家の中へはいつてしまつた。

「はゝは……」新作は叔父を見送つて笑つた。

間もなく新作は牧場の草の中に仰向けに眠つてしまつた。いかにも幸福さうに。

白い雲が廣い牧場の上をしづかに漂ふて行つた。

仔馬はいかにもうれしさうに眠つてゐる新作の周圍をめぐつては草を喰んでゐた。

信濃の子

仙吉は二階のねどこの上におきあがつて、きよと〳〵と部屋のなかを見まはしました。

鐵も喜三も六も、まだみんな眠つてゐました。

東の空がしらんで、遠くに汽車の音がきこえてゐました。口やかましい叔父さんも、まだ眠つてゐるのか下の方でも、ひつそりかんとしてゐました。

「おばあや！」仙吉は鐵や喜三にきかれるのが恥しいとおもひましたので、ひくいこゑで、窓の方をむいて、こゑをかけました。

仙吉は、信濃の奥に住んでゐるたゞ一人のおばあさんを呼んでゐるのでした。

「たしかにおばあが、そこに來てゐたのだつたが。」と、仙吉はおもひました。そしてもいちど、きよと〳〵と部屋中を見まはしました。煙突掃除の煤で眞つ黑によごれた三人の仲間が眠つてゐるほかには、だれもゐませんでした。

「おばあは、仙吉々々といつて、わたしを呼んでくれたにちがひないが！」仙吉には夢の中で見たおばあさんが、今にもすぐそこいらから、笑ひながら、出かけて來るやうな氣がしてなりませんでした。

「なぜおばあは、かへつてしまつたのかなあ、せつかく信濃から逢ひに來てくれたに。」仙吉は窓を見ました。

だれが明けといたのか、一枚のガラス窓が、半分ばかり、明いたまゝになつてゐました。

「あゝ、あのまどのところから、おばあはかへつて行つてしまつたのだな。」仙吉は、さう思ひました。夢の中に出て

來たおばあさんだも、繪さへしめておけば、かへつて行つてしまふなんてことは、ない筈だと思ひました。

「さあ、みんな早く、仕事へ出かけるんだ。」

叔父さんが下からこゑをかけました。鐵も喜三も六も、ぶつくさいひながら、煤によごれたまゝの顔を洗ひもしないで、冷たいごはんをたべて、土間におりました。

仙吉も、みんなといつしよに、土間のかべにさがつてゐる道具袋をしよつて、町へ出かけてゆきました。袋の中にはねぢまはしだの、煙突掃除のブラツシだの、金づちだの、いろんなものがはいつてゐました。四人の小さな煙突掃除屋が袋をしよつて、朝の町を歩いてゆく姿を通りかかりの人たちは笑ひながら見てゐました。鐵も喜三も六も仙吉も、手も足も顔もまつ黒によごれて、目ばかりぱちくり光つてゐました。ですから、とほりすがりの人たちはたまげた目をみはつて四人の子供を見ました。

ちよつと店にたちよつて、道をたづねようとしても「おい、そんなにまどにくつついてもらつてはこまるよ。まどがよごれて仕方がない。」といひました。電車にのらうとしても、「おい、ばかやらう、汚れてしまふぢやないか。」などといつて、電車にものせてくれないのでした。いぢのわるい子供たちは、仙吉たちの姿を見ると、黒ん坊だの、熊の子だのといつて、うしろからついて來ては、はやしたてゝ、石をなげるのでした。信濃を出る時は、東京へさへゆけば、めづらしいものも見られ、おいしいものもたべられ、どんなりつぱなところへでもゆける、といふので、東京から迎へにきてくれた叔父さんと、いつしよに馬車にのつて、峠の茶屋まで、おばあさんに送られてきたのでしたが、東京はちつとも、いゝところではありませんでした。大きな大理石のたてものをみても、たくさんな自動車をみても、仙吉はちつとも、うれしいとはおもひませんでした。何をたべても、おいしいともおもひませんでした。二百萬も住

んでゐるたくさんな人のうちで、たゞの一人だつてやさしい言葉をかけてくれるものもありませんでした。

「おい仙ちやん、上にのぼつておくれよ」いつも一番ずるい鐵が、けさも高い〳〵煙突の上に、仙吉をのぼらせるのでした。仙吉はちひさい時から、信濃の山の高い木にのぼりつけてゐましたから、わりあひに高いところへのぼるのは平氣でした。けれどもあまり高い煙突へのぼるのはこはいと思ふこともありました。

仙吉はおとなしく、たかい〳〵煙突の上にのぼつて行きました。そこからは遠い〳〵甲斐や、上野、下野あたりの山までも見えました。

「あのきれいな山にくらべて、何といふみにくい都會だらう。」仙吉はすぐ目の下の黒いにごつた流れや、やけつちにつゝまれた町を見ました。そこには一羽の鳥も鳴いてゐませんでした。牛や馬のやうに、まづしい人たちが、川のふちで、のゝしられながら重いものをかついだり、土を掘つたりしてはたらいてゐました。

「あゝ何といふ美しい山だらう！　何といふ美しい空だらう！」仙吉は思はず、遠い山や空を見てさけびました。あの遠い山のうしろに、おばあさんが仙吉をまつてゐてくれるのだ。と思ふと、たまらなくなるのでした。

「おばあや！」と仙吉はだしぬけにたかい〳〵煙突の上から、信濃の方をむいてさけびました。

下の方から、仙吉を見てゐた鐵や喜三や六はびつくりして、煙突の上をながめました。

日がくれました。仙吉は、三人のなかまといつしよにまつ黒な顔をして袋をしよつて、叔父さんの家へかへつてきました。仙吉には、日がくれて眠ることが一番たのしみでした。夢の中では、いつでも、おばあさんに逢へるからでした。

鐵も喜三も六も、眠つてしまひました。仙吉は部屋の中を見まはしました。ガラス窓がどうしたのか、また一枚あ

けかけたまゝになつてゐました。

「あゝあの窓から、おばあは、かへつてしまふのだなあ」と仙吉は思ひました。仙吉はすぐに立つて行つてその窓をぴつたりとしめてしまひました。

「さあ、これで大丈夫だ。これならおばあがかへる道がないから。」と、思つて安心してやすみました。夜があけました。仙吉は眼をさましました。そこいらをきよと／＼と見まはしました　ガラス窓はしまつたまゝになつてゐました。仙吉はがつかりしました。

「いくら窓をしめといても、夢で逢つただけでは、おばあは夜があけぬうちに、信濃へかへつてしまふのだなあ、遠い山をこえてかへるのでは、おばあも、くたびれるだらうに！」と仙吉はかんがへました。仙吉はおばあさんに逢ひたくて逢ひたくてなりませんでした。その朝仙吉はみんなといつしよに叔父さんの家を出ましたが、みんなが或るお寺の門の前で、猿芝居のかんばんを見てゐた間に、どん／＼人ごみの中を、かくれて行つてしまひました。そしてある大きな川の岸の青い草の上に、袋を置いたまゝ自分ひとりで山の方へ、山の方へと歩いて行きました。十日ばかりの旅をつゞけて、まつ黒な煙突掃除の仙吉は信濃の山の奥へかへつてゆきました。

「わしのだいじな、だいじな、世界でたつた一人の、孫の仙吉がかへつて来た！」といつて、おばあさんはまつ黒な仙吉の顔に、頬ずりして涙を流して、よろこびました。おばあさんが泣いて喜んで、仙吉を抱へてくれましたので、涙が仙吉の顔に落ちました。おばあさんのうれし泣きの涙が落ちるたんびに、仙吉の黒い顔のよごれが洗はれて、仙吉は、だん／＼白い顔になつてまゐりました。まつ黒な手も足も、おばあさんのうれし涙で、まつ白になつてしまひました。すゞしい仙吉の眼が寶石のやうに、美しくかゞやきました。

空は青々とかゞやいてゐました。

小鳥は枝から枝へとさへづつてゐました。

おばあさんはさゝの葉につゝんだちまきをこしらへては、仙吉にたべさしてくれました。

信濃の山の、奥の奥の、おばあさんと仙吉はいつまでも、幸福な日をおくりました。

白い雲が飛ぶ

筑紫の夏！　かういつたばかりでも、わたくしの胸は躍る。

そこには葦の葉がすい〱と氣持ちよく有明の潮風に吹かれて伸びてゐる、蟹は葦の根を這つてゐる。

山は遠く、川は長く、蒼茫な平原は眞夏の太陽の下に喘いでゐる。

白い帆が葦の葉とすれ〱に有明へ滑つてゆく。溫泉嶽が青黑く海の上へそゝり立つてゐる。阿蘇の煙が平原の涯にたなびいてゐる。

筑紫の夏！

そこには鵲が鳴いてゐる。

白い雲の下に菱の花が咲いてゐる、子供らは沼の鳥貝をあさつてゐる。

「勘六爺！」

わたくしは一人の老人を思ひ出す。

塘の土堤下の小さな家の勘六爺！

背が低く、痩せこけていつも貧相な顏をしてゐた。眼が小さくて枸杞の實のやうであつた。

わたくしは、いつか勘六爺が空を仰いでゐるのを見た。秋であつた。わたくしはちつと勘六爺の眼をのぞいてやつた。

枸杞の實のやうな小さな勘六爺の眼にも、秋の白い雲が寫つてゐた。眞つかに燃えた櫨紅葉の土堤を走る馬の姿が寫つてゐた。

勘六爺は貧乏で、五人の子を育てゝゆくのにも、ずゐぶん骨が折れてゐるやうであつた。

勘六爺の家は、土堤下の國道に面して立つてゐた。昔は長崎から江戸へ行く大名たちが通つた殿さま道で、ところどころに大きな松の並樹があつた。

汽車ができたので、そこを通る旅人の影もめつたに見られなくなつたが、城下へ米を運ぶ馬車などが、たま〳〵に通つてゐた。琵琶をかゝへた男や、遍路などが疲れた足を引き摺つてゆくこともあつた。

夏になつて平原の村々に蚊柱が立つ頃になると、厩の馬が蚊にせめられて痩せるのであつた。わたくしたちは柘榴の花の下に、蚊遣りを焚いて馬にたかる蚊を追つたことがあつた。

その頃になれば、馬を涼しい山の農家にあづけるのが平原の村々の夏の行事になつてゐた。高い山の村には蚊がゐなかつたから。

明日から山へあづけるのだといふことになれば、わたくしたちは、できるだけ御馳走をこしらへて馬に食はせた。馬は朝暗いうちに厩から曳き出された。わたくしたちは馬の背を撫でてやつた。鞍の嚢には糯だの豆だのをいつぱい入れてやつた。

わたくしたちは門火を焚いて馬を見送つた。馬は小暗い庭を國道の方へ曳かれて行つた。子供のわたくしたちは馬を見送つてよく泣いたものである。

勘六爺の家の前を朝から日暮ころまで、毎日山へあづけられにゆく馬が草鞋を穿いて通つて行つた。

勘六爺は一番鶏が鳴くころから起きて、長い飴の棒をこしらへてゐた。雨戸をとりはづして、その上に七八寸の飴の棒がいつも並べられてあつた。その傍には馬の草鞋が懸けられてあつた。

わたくしたちはよくお小遣をもらつては、勘六爺の白い飴の棒を買つてしやぶりながら、山へつれられてゆく馬を眺めてゐたものである。

秋になつて平原の稲が刈られるころになれば、山につづけられた馬はまる〳〵と肥えて平原の村にかへつて来るのであつた。わたくしたちは前の晩あたりから眠れないで馬を待つてゐた。わたくしたちは門火を焚いて馬を迎へた。

秋の白い雲を仰ぎながら、土堤の上にのぼつてわたくしたちは勘六爺の飴の棒をしやぶりしやぶり、地平線の上にあらはれて来る馬の群をながめてゐた。

自家の馬があらはれた時、わたくしたちはもうどんなにか夢中になつて馬の名を呼んだか知れない。手に握つてゐた勘六爺の飴の棒が流れてしまふまでわたくしたちは躍り上つた。

勘六爺の三番目の子、それがわたくしの一番仲良しであつた。笹吉といふ名からしてわたくしたちにはめづらしかつた。

裏の大川には美しい水が流れてゐた。勘六爺のおかみさんが、川へ洗濯に行つて急にお腹が痛み出して、川の縁の笹原の中で生んだのが笹吉であると、勘六爺は笑ひながら語つてゐた。

「この子は不思議ですよ。生まれて間もなく桑畑の中へ寝かして置きましたら、八幡さまの鳩が飛んで来て、この子

の頭の上にとまつてゐるんです。この子はいまにきつと出世をするにちがひありません。」人の善い勘六爺は酒に醉ふとよくこんなことをいつて笹吉の頭を撫でた。

しかし、笹吉は勘六爺が想像してゐるほど立身出世をしさうにも思はれなかつた。學校へ行つてもたいていびりから一番か二番ぐらゐの成績だつたし、それに非常な臆病者で、誰にでも馬鹿にされてゐた。それでも上手に罪のない嘘をつくことゝ、思ひがけないことでみんなをびつくりさせるやうなことがよくあつた。

笹吉はまつたく罪もない出鱈目をいつては自分で困ることがしば〳〵あつた。

或る時かれはわたくしたちに「昨夜僕の家に鶴が下りた。」といつた。

「ぢや、鶴を見に行かう。」わたくしたちは學校のかへりに笹吉について行つた。

「どこにゐるんだ鶴は?」わたくしたちは狹い勘六爺の家の周圍をぐる〳〵とまはつて見た。或る者は屋根の上まであがつて見た、また或る者は暗い緣の下までのぞき込んで見た。

「いつたい鶴はどこにゐるんだか?」

わたくしたちがさがしあぐんでからたづねた時は、笹吉はもうそこにはゐなかつた。かれは白い磧の方へどん〳〵逃げて行つた。

「昨日白い南京鼠を一匹買つて來た。それのことぢやありませんか。」勘六爺は石油箱の中へ入れた小さな南京鼠を手の平に乘せて笑つた。

笹吉は惡氣があつてそんなことをいふのではなかつた。むしろ人を喜ばせてやりたいといふやうな親切氣から出鱈

嘘をいふのであつたが、いつも直ぐに嘘がばれてみんなにこつぴどくやつつけられるのであつたが懲り性もなく同じ失敗をくりかへした。

しかし、そのやうな缺點を除くと、笹吉は親切なところがあつた。

或る雨の日であつた。かれは學校がへりに半里くらゐの間一軒の家もない畷をたゞ一人で歸つて來た。かれはちつとも[illegible]できなかつたので、その日おそくまで居殘りを食つたのであつた。

ぼんやり畷道を歩いて來ると、かれは溝のかたはらに一人の老人がしやがんでゐるのを見出した。老人は傘も持たないで雨に濡れてゐた。

「どうしたんだいお爺さん？」とかれは聲をかけた。

老人は聲も出せないくらゐに慄へてゐた。

「朝から何も食べてゐませんのでどうぞ一つ……」老人はやつとそれだけのことをいつた。

笹吉は雨の中を十五六町も村まで飛んで來て、大きな握り飯をこしらへて老人へ持つて行つてやつた。何でも人に頼まれたり、おだてられたりすると、かれは斷ることのできぬ性分であつた。

「恐れ入りますが破れ傘でもありましたら……」と老人は飯を食ひながらいつた。

笹吉は自分の傘をやつた。

「わたくしはどうも寒くてなりませんので、どうか濡れない着物を一枚めぐんでくださいませんか。」と老人はいつた。

笹吉はそこいらを見まはしたが、一軒の家も見つからなかつた。田圃の眞ん中だからどうすることもできなかつた。

老人は氣の毒なほど寒さうにわな〳〵とふるへてゐた。

「さあ、これをあげよう。」笹吉は自分が着てゐた着物をぬいで老人にわたした。無論笹吉の着物は短かつたが、老人は羽織のやうにして笹吉の着物を肩から引つかけて傘をさした。
「しかしお氣の毒ですなあ、あなたの着物をいたゞきましては。」
「なあに、僕の家にはこんな着物はくさるほどたくさんあるんだから。」笹吉はいつもの大きな法螺を吹いた。
そして雨の中をふるへながら傘もなしに素つ裸で村まで飛んでかへつた。笹吉の家には着替への着物がなかつたので、かれは二三日弟のちんちくりんな着物を着せられてゐた。

わたくしは十幾年振りで筑紫の家へかへつて行つた。白い雲が葦の葉につゝまれた平原の上を高く飛んでゐた。
わたくしは、わたくしたちの古い學校のあたりを歩いて見た。菱の花が沼に咲いてゐた。子供たちは昔と同じやうに沼の中へはいつては烏貝をあさつてゐた。
わたくしは笹吉のことを思ひ出した。
「家に白い鶴が下りた。」と笹吉がいつたのは畷の一本松の下であつた。松は枯れかゝつてゐたが、松の下には昔のままに道祖神が立つてゐた。
「笹吉はどうしました？」わたくしは稲田の草をむしつてゐる昔の友人に逢つたのでたづねて見た。
「笹吉は城下の監獄へ入れられて、歸つて來てから死んでしまひましたよ。」わたくしの友人は遠い稲田をへだてゝ見ゆる城下の方を振りかへりながらこたへた。
「笹吉は死んだんですか？」わたくしはどうしても信ずることができなかつた。しかも監獄へ入れられたといふこと

が、どうしてもほんたうだとは思へなかつた。

「ほんたうですか？」

「えゝ、ほんたうですとも。あの畑の土堤へ行つてごらんなさい笹吉の墓がありますから。」

「さうでしたかへえ……」わたくしはしばらくそこに突つたつたまゝ呆然としてゐた。

あのぼんやりのお人善しの笹吉が、監獄にはいるといふことがどうしても信じられなかつたのであつた。そして死んだといふことが。

「面白い男でしたがなあ。あなたは博多へ修學旅行に行つたことを覺えてゐますか。」とわたくしの友人は、田のあぜみちにしやがんだまゝ煙草をふかしはじめた。

「えゝ知つてゐますとも、あの男が失敗したことでせう。はゝはゝはゝはゝ。」

「はゝはゝはゝ……」

わたくしたちはその時のことを思ひ出して笑つた。

話はかうである。

秋といつてもう冬近いころで、橋の上には霜が白く下りてゐた。

わたくしたちは博多の夜の町を歩いてゐた。

或る松原に來た時であつた、笹吉が突然大きな聲を揚げた。

「どうしたんだい？」

「大變なことをした、羽織がなくなつたんだ。」

笹吉は泣き聲を立てゝゐた。
「どうしてなくなつたんだらう？」
無精者のかれは兩手を懷に突つ込んだまゝ、松原を歩いてゐる間に、着てゐた羽織を道に落してしまつたのであつた。
わたくしたちは氣の毒だつたので、星明りでさがしてやつたがどうしても見出せなかつたので宿屋へ歸つてしまつた。
「羽織をなくして歸つたら、家のお父つちゃんに叱られるから。」といつてかれは、べそをかきながら暗い松原の中を探してゐた。
たうとう羽織を探しきれないで松原を出たかれは、今度は宿屋を忘れてしまつたのであつた。
無茶苦茶に歩いてゐる間に、かれは不圖或る長い橋の袂に來た。そこには一人の車夫が焚火をしてゐた。
「まゐりませう旦那。」と笹吉に聲をかけた。
宿屋を忘れて泣き面をしてゐた笹吉は、旦那と呼ばれたので得意になり車に乘つた。
車は長い橋をごろ〳〵と走つて行つた。
橋を渡つてしまふと、車はすぐそこの宿屋の玄關へ停つた。
「はいこゝがお宿でございます。」
笹吉はあつけらかんとして車夫の顏をながめてゐた。
「お前は橋一つだけ車に乘つたのか……はゝはゝゝゝゝ」みんながはやし立てゝ笹吉を笑つた。

わたくしは稻田の中に草をむしつてゐた昔の友人から鉦吉についていろ〳〵な話をきいてから、その友人とも別れて古い國道の方へ歩いて行つた。松並樹の下には晝顏の花が咲いてゐたり、きりぎりすが鳴いてゐたりした。

「やつぱり鉦吉は鉦吉らしいことをして死んでしまつたのだな！」わたくしは松並樹の下を歩きながらさう思つた。さつき田圃の中で逢つた友人の話を思ひ出しながら。

或る年の夏のことであつた。

昔から夏になればわたくしたちの村では、大水のために幾晩となく眠れないことがあつた。

雷が鳴る。四日五日とつゞけて大雨が降る。堤防がくづれさうになる。村々の半鐘の音が眞つ暗な夜のあらしにつれて、ものすごく響いて來る。若い男たちは俵に土を入れて運んだり、竹槍や鐵砲をかついで土堤の上を守つたりするのであつた。

「一丈三尺！」絹を裂くやうな若い男の悲壯な聲が、暗の中に聞える。水の深さを知らせてゐるのである。

「一丈三尺八寸！」さらに悽慘な聲である。

ごうんごうんと半鐘は響く。提灯は走る。

「もう五寸で土堤はくづれるぞッ！」人々はもう聲を出すこともできない。

篠突く雨は止みさうにもない。東の土堤か西の土堤か、どつちにしても一方の土堤がこわされなければ水は兩岸の村々を押し流してしまふのである。このやうな危機が迫つて來ると川の東岸の人たちは、ひそかに若者たちを西岸に送つて、西岸の土堤を破壞しようとつとめるのである。西岸の人たちは槍や鐵砲を抱へて東岸の闖入者を防禦するの

である。

わたくしたちは、ほとんど毎年のやうに夏になると、このやうな恐ろしい光景を見せつけられた。

笹吉が十九の時であつた。

いつもの夏と同じやうに雨ばかり降りつゞいた。

夜の靜寂を破つて半鐘が鳴つた。村の人々はがばとはね起きた。

「嘉穗村の奴が川をわたつて來て今こつちの土堤を破壞してゐるぞッ！」暗の中を村の若者が叫んで歩いた。嘉穗村といふのはわたくしたちの村と川を挾んでゐる向ふ岸の村の名であつた。

村の若者は手に手に竹槍だの、鍬だのをかついで鎭守の森に集まつた。人々は武者ぶるひした。

「嘉穗の德が隊長でやつて來てゐるやうだ！」村の若者は聲をひそめていつた。

嘉穗の德！　といふ名を聽くと、今まで武者ぶるひしてゐた村の若者たちは急に勇氣を落してしまつた。嘉穗村の德右衞門といへば六尺一寸何分といふ大男で、馬を一頭兩手でさし上げたといはれるほどの力持ちで、おまけに近鄕切つてのあばれ者であつた。酒は飲む、喧嘩はする、弱い者はいぢめまはるといつた風な近鄕での厄介者であつた。しかしあんまり力が強いので誰も手を出すことができなかつた。

だから今夜も嘉穗の德ときいたばかりで、人々は電氣にでも打たれたものゝやうに意氣地なくなつてしまつた。

しかし、今はちよつとも猶豫することのできない場合であつた。

暗い嵐の中を半鐘は咽び泣くやうに響いて來た。今にも村中が水の底に沈むかも知れないといふので、村の女や子供たちは、土堤の上へ走り上つて來ては泣き叫ぶのであつた。

嘉穂の德に導かれた向ふ岸の村の人たちは、かれらをあざ笑ふやうに提灯の火を照らして、わたくしたちの村の堤防を破壞するのであつた。

「誰か出てくれないか。誰か眞つ先に進んで行つて嘉穂の德を叩きつけてくれぬか。」

「德さへ叩きつければ、あとの奴は何でもないのだがなあ。」

「さあ誰か眞つ先に德を叩きつけてくれないか。」

人々はたゞさわぐばかりであつた。誰れ一人村のために先頭に立つて嘉穂の德を叩きつけてやらうといふものはなかつた。

村中の家も田も、もう半時間の後には嘉穂の若者たちのために、堤防を破壞され、洪水に押し流されてしまはなければならなかつた。

「あんたたちは、男のくせに嘉穂の德が怖いのか。ぢやわたしたちが行つて死んで來るぞ。」と一人の子供を背負つた女が叫び出した。

「女に行かれてたまるものか。おい誰か先に立つて行け。」と一人の老人が、若者たちの顏を提灯の火で一人々々のぞいて見た。

「嘉穂の德は強いことはないぞ。わしはこないだあいつを川の中に放り込んでしまつたことがある。」と錐吉はついまたいつものやうに口から出まかせのことをいつて、みんなを勇氣付けようとした。

「錐吉、なるほどお前は強さうだ。どうだ眞つ先に行つてくれぬか。そして今夜も德を川の中に放り込んでくれよ。」

老人は笑ひながらかういつた。

「笹吉さんならきつと勝てるぞ！」

みんなは吹き出して笑つた。

五尺にも足りないほどの小男、そして臆病な笹吉がどうしてあの大男の嘉穂の德に勝てよう！　しかし口から出まかせな言葉の手前、どうしてもかれは何とかしなければならなかつた。それに子供のころから、妙におだてられ易い笹吉は、眞つ先に行つてくれと頼まれると、急に英雄にでもなつたやうな氣がした。

ちやうどその時、誰かゞ村長さんの倉の中から古い腹卷と脛當を持ち出して來た。

「さあ笹吉さんこれを着たがいゝ。この鎧さへ着れば切られても痛くはない。」

一人の男が無理に腹卷を笹吉に着せた。そしてさらに一人の男が脛當をあてゝやつた。

「どう見ても立派な大將だ。」

笹吉は槍を持たせられた。

「さあ行け。眞つ先に進んでくれ！」老人が聲をかけた。

笹吉は二三度りゆう〳〵と槍をしごいて見た。ふだんは臆病なかれであつたが見てゐる間にかれの顏色が蒼くなつてしまつた。と同時に眼がひきつツて來て凄くなつてしまつた。今までからかつてゐた人達も提灯の明りに照らされた笹吉の顏が、あまり凄いほどになつて來たので、笑ふこともできず、笹吉に惹きつけられてしまつて、ちやうど魔術にでもかゝつた人のやうにかれのうしろからついて行つた。

「笹吉さん！」低い聲でかれを呼んで見る者もあつた。しかし笹吉の眼は吊し上つて、たゞ一點を見つめてゐるばかりであつた。かれは唖默つたまゝすゝんで行つた。

「氣が狂ふたのぢやないか……あの眼はたしかに狂人の目だ！」と低い聲でさゝやく者もあつた。

「みんな默つてゐろ。提灯の火を消せ！」と笹吉はあだかも大將軍のやうな嚴かな態度で命令した。たしかにかれの命令は人々の腹の底までしみこんで行つた。人々はあつけにとられて、たゞかれが命ずるまゝに火を消し、眞つ暗な土堤をあらしに叩きつけられながら、ひた走りに走つて行つた。

土堤を破壞してゐる鍬の音が聞えた。

みんな笹吉の後から草の中を這つて近づいて行つた。

笹吉は眞つ先に進んで行つて、一間ばかりの手前から大聲を揚げて跳び上つた。そして滅茶々々に敵の提灯の火を叩き消してしまつた。

嘉穗の德は眞つ先にすゝんで來た笹吉の胴腹を目がけて棍棒で突いた。しかし腹卷を着てゐたので棍棒ははじきかへされた。

嘉穗の德はびつくらして「しまつた！」と叫んだ。そしてそのはずみに、くづしかけてゐた土堤の土が、雨でどろどろになつてゐたのでそれに足を踏みこんで、一間ばかり滑つて後頭部を石に叩きつけて氣絶してしまつた。嘉穗の德が倒れたのを見た敵の若者たちは、德が殺されたと思つたので度膽を拔かれてしまつた。そして一散に逃げ出した。人々はたかつて來て滑りこけた嘉穗の德の頭をなぐりつけてしまつた。

村の堤防は破壞されなかつた。人々は笹吉を褒め立てた。

「笹吉はえらい、嘉穗の德を叩きつけてしまつたのだから！」

どこへ行つても笹吉の名がうたはれた。

「笹吉君は英雄だ！　たしかに村の大恩人だ！」
人々は笹吉の勇氣をたゝへた。今まで臆病者の典型であつた笹吉は既に大英雄にまつり上げられてしまつた。
かれはその時から氣が變になつたのであつた。
「おれは宮本武藏だ！」などと、かれは平氣でいふやうになつた。
嘉穗の德を叩きつけた廉で二ケ月ばかり監獄に送られたのであつたが間もなく無罪で監獄を出た。
村の人たちは、この若い英雄を迎へるために、旗を立てゝ城下へ出かけて行つた。
笹吉はます〳〵自分の英雄心を滿足させた。そしていよいよ氣が變になつて來た。
或る寒い冬の朝、かれは素裸になつて自分の着物をみんな松並樹の下で燒いてしまつた。
「英雄は寒さなんかに恐れぬぞ！」素裸になつたかれは、雪の中を大威張りで歩いてゐた。
間もなくかれは病氣になつて死んだ。

わたくしは勘六爺の家の前を通つて見た。勘六爺も死んでしまつた。家の前には昔と同じやうに雨戸を横にした上に、長い飴の棒が並べられてあつた。
わたくしの村からも色々な人が都會に出て、社長になつたり、學者になつたり、軍人になつたりしてゐる。しかしわたくしは、不思議と笹吉といふ男のことをいつも一番多く思ひ出す。
櫨の並木につゝまれた長い土堤が、有明の海まで走つてゐる。そこには葦の間に行々子が鳴いてゐる。
笹吉の小さな墓が土堤の櫨の下にある。白い雲が飛んでゐる

わたしたちの先生

山にはくるみや栗の實が落ちる秋になりました。栗鼠は木の間を飛んでゐます。

わたしたちの學校は高い山の松原の中にありますので、そこからは信濃の山も上野や越後越中の山脈も青くかすんで見えます。

學校といつてもこけら葺の屋根の、山の小屋みたいな建物です。門もなければ垣根もありません。

せまい教場がたつた一つあるきりで、そこには冬になれば大きな爐が切れるやうになつてゐます。雪が四尺も五尺もつもりますので、窓からすぐに松山の中へ飛びこえてゆけるやうになります。

わたしたちの仲間は一年から六年まで男と女を集めて十六人しかゐません。それだけがすつかりの生徒なんです。

たつた一枚のボールドがあるきりで、先生もたつた一人しかゐません。一年から六年まで生徒が同じ教場で一人の先生から教はつてゐるのです。

何か先生がお話しになる。わたしたちはぢつとうかゞつてゐます、爐の大きな藥罐の湯が煮立つてゐる音が聞えるといつた風です。

こんな小さな、みすぼらしい學校ですが、わたしたちはほんたうに幸福だとおもひます。

窓からは美しい山が見えるし、一年中雪をいたゞいた山もあります。八月になつても窓のところではほとゝぎすだの鶯だのが鳴いてゐます。それに一番うれしいことはわたしたちの校長先生が親切なことなんです。校長先生とい

つたところで學校にはその先生一人しかいらつしやらないのですが。

松並鎌太郎といふ先生です。松並先生はもう六十おいくつだとかいふのです。このごろは年のせゐで學校の坂をのぼるのがお苦しいやうですから、わたしたちは先生の腰に細引を結びつけてみんなで引き上げます。先生のうしろから押してゐるものもあります。その細引は日本アルプスにのぼつた若い大學生が學校に立ち寄つた時忘れて行つたものです。

學校には柱時計が一つありますが、明治何年かに買つたものださうで、時間の字もはつきり讀めないほどすゝけてゐます。そして毎日幾度もとまつてしまひます。先生が一つ大きな懷中時計を持つておいでゞすが、その時計は一日に三十分もすゝんだり、一時間もおくれたりします。ですから八時はじまりといつてもまだ七時も打たないのに先生は自分で鐘を鳴らしたり、またあべこべに九時になつても學校へ出ていらつしやらないこともあります。

一度なんか「今日はやすみにしてみんなで栗を拾ひにゆかう。」とおつしやいました。先生の大きな懷中時計も學校の古い柱時計もとまつてしまつて時間がわからなくなつたのです。むろんわづか十軒ばかりの家しかない山の村には、滿足な時計なんて一つもないのです。

或る日曜日なんか先生は五里もへだたつた輕便鐵道のステーションまで懷中時計を持つて時間を合せにおいでになりましたが、その歸りに峠の茶屋でやすんでゐた間に、今合せて來たばかりの懷中時計が止まつてしまつたさうです。

松並先生は親切なばかりでなく、絶對に人の言葉を信用なさいます。わたしたちは遊びたい時には「先生わたしは頭がいたみます。」とか「わたしは齒が痛みます。」とかいひますと「あゝさうか〳〵。」といつて、すぐ遊ばせてくれます。

「先生、今日はおひるからひどい雨になつて、山の道が步けなくなりますさうですから、おけいこはおひるまでにしてください。」とまをしますと先生は、「それはたいへんだ。それではおひるでおけいこはやめにしよう。」といつてわたしたちをかへしてくれます。

いつかの秋でした。わたしたちは先生といつしよに栗拾ひにゆきました。「先生、この栗の番をしてゐてください。」といつてわたしたちは先生の膝の上に十ばかりの栗をのつけて、村の方へかへつてしまひました。わたしたちは、先生を忘れてしまつたのでした。

村の人が山を越えて栗林の中を通りぬけて來ると先生が膝の上の栗を大事さうに握つたまゝ草の上に眠つてゐるんださうです。月が照つてゐたので、村の人は顏をのぞきこんで、「先生さまぢやないか。」と聲をかけましたら、先生は眼をひらいて「栗はたくさんとれたかい。」とおつしやつたさうです。

先生の奧さんがまだ亡くならないころのお話であります。

奧さんは若いころ山に行つて、木の枝で左の眼を突いたので、左の眼は見えなくなつてゐました。

ある時奧さんは京都の御本山まゐりに出かけたさうです。先生はひとりで山の家にお留守番をしておいでだつたさうです。

一週間目の夜になつて奧さんが京都からかへつておいでになつたさうです。村の人たちも集まつて來て奧さんのために鯉だの、岩魚だの、山の薯だのを持つて來ては御馳走をこしらへたんださうです。

先生はたいそうよろこんで奧さんに御馳走をなすつたさうです。

京都からかへつて來た奧さんはさかんにお魚を頭からむしやむしやとおいしさうに骨ぐるみたべてしまふのださうで

す。ふだんはたいへん遠慮ぶかい方でお魚なんかもめつたにたべない人だつたので、村の人たちは變だなと思つてゐたさうです。そのころは石油一箱はこんで來るにも今よりもなほ不自由な山の奧でしたから、くらいランプが一つ部屋の中にともされてあつたきりでした。大きな口をあけてガリ〱と魚の頭を嚙じつてゐる奧さんの顏をくらいランプの下で見てゐるとものすごかつたさうです。その時手つだひに來てゐた小娘が自分の母親に低い聲で「奧さまはふだんは左の方の眼がつぶれてゐたに、今夜は右の方ぢやなあ。」とさゝやいたさうです。

「ほんにさうだつた。今夜は右めつかちだ。」と母親は低い聲で娘にこたへました。そして今度は隣りに坐つてゐた男にさゝやきました。その男は先生を裏口に呼び出して、

「先生さま、奧さまはありやばけものぢやないでせうか。奧さまはどつちの眼がつぶれてゐましたか？」とたづねました。

「むろん左の眼だよ。」と先生は答へました。

「ぢや、見てごらんなさい、こゝから。奧さんの眼は右がつぶれてをりますよ。」

その男は、暗い庭の隅から、奧さんをのぞかせました。

「なるほど右の眼がつぶれてるなあ。」と先生は溜息をつきました。

「さうでせう。ですからな、あれは狐か貉かゞ化て來てゐるのですよ。あの魚を頭からぼり〱とたべるぐあひを見てもわかります。早く叩きころしてしまひませう。」とその男はまをしました。

「魚をたべるのは長い旅行でおなかゞすいてゐるからさ。でも、もとから右の眼がつぶれてゐたのを、わしが左の眼だと思ひ違ひしてゐたのかも知れん。」と先生はおつしやつたさうです。

「でも、わたしたちもみんな奥さまの眼は、左が惡いといふことは知つてゐますもの。」

「いや、わしさへ思ひちがへてゐるくらゐだからお前たちはなほさらだ。わしの妻にちがひない。ものを疑つてはいけない。何でも疑ふのは惡いことだ。」

どうしても先生は自分の奥さんだと思ひこんでゐるのでした。奥さんはむしや〳〵つゞけて魚をたべてゐました。

そのうちに一人のかしこい男があつて、先生の机の中から奥さんの寫眞を出して來ました。

「それ先生、このお寫眞にはちやんと左の眼がつぶれてゐます。」

「寫眞なんか、右と左とまちがふことはあるよ。何でも物事は信じなくちやだめだ。わしの妻がたしかにこゝにかへつて來たのぢや。何を疑ふのだ。」と先生はたうとう高い聲でいひました。

「でも、ほんたうの奥さまはこの寫眞の通り左の眼がつぶれてゐますのに、この女は右の眼が……」と村の男はつい高い聲でいつてしまつて、寫眞をみんなの前に持ち出しました。

さうすると魚の骨をしやぶつてゐた奥さんは急に右の眼をあけて、左の眼をつぶつてしまひました。

みんなはびつくらしました。みんなが狸だ〳〵といつて急にさわぎ立てました、そして一人の男は臺所の薪をつかんでいきなり魚をたべてゐる女の頭をなぐりつけました。しかしそこにはもう女はゐませんでした。障子を蹴破つて一疋の大狸が飛び出して行つたさうです。

その翌日の午後、ほんたうの奥さんが京都の御本山まゐりからかへつて來ました。先生はそうつと奥さんの顏を見ました。やつぱり左の眼がつぶれてゐたさうです。

わたしたちの學校から一里ばかりはなれた草山には秋になると野葡萄の實が原いちめんにうれます。山の熊は野葡

蓿がすきですから、秋になると時々草山へおりて來ます。三四年前でした。一疋の可愛い子熊をつれた母熊が野苜蓿をたべに草山に下りて來ましたところを、獵師が鐵砲で母熊を殺して、子熊を生けどりにしました。

五六人の獵師が殺された母熊をかついで、生けどりにした子熊を綱でくゝつて引きながら學校の下を通りかゝりました。

松並先生は引かれてゆく子熊を見るとたまらなくなつて、わたしたちのおけいこをうつちやらかしといて松山を走つてゆきました。

「その子熊はどうするんだい？」

「町に持つて行つて賣りまさあ。八十兩がものはありますよ。」

「わしに賣つてくれ、五十兩出すでなあ。」

「ぢや、仕方がない、三十兩損だが先生のことだで五十兩にまけずなあ。」

獵師たちは子熊を五十圓で松並先生に賣りつけました。五十圓といふお金は先生にとつてはあまり少くないお金だつたのです。先生は五十圓を貯金するためには一年くらゐかゝつたのでした。

先生は毎日子熊のために野苜蓿をとつて來てはたべさせました。子熊はまる〱とふとりました。先生はある日奥の奥の山へつれて行つて「お前は二度と草山の野苜蓿をたべに來るな。草山には恐ろしい獵師がゐるでなあ。」といひきかせて子熊を放しました。子熊は振りかへり〱山の奥へはいつて行きました。

その翌年の秋でした。どこからか一人の若者が一疋の子熊をつれて先生のところにやつて來ました。

「わたしは越中の獵師だが、子熊を生けどりにして町に賣りに行くのだが、あんた一つ買つてくれませんか。」といひ

ました。

松並先生はその年もまた貯金をすつかり出してしまつて、その子熊を買つてやりました。先生は毎日野葡萄をとつて來ては子熊にたべさせました。

三日ばかり經つと子熊が急にゐなくなりました。越中の獵師だといつて子熊を賣りに來たのは熊の膽を賣りに歩いてゐた旅の男だつたのです。その男が松並先生の話を村の人にきいて、先生をだましたのでした。熊の膽賣りは、松並先生に子熊を賣つてから三日目の夕方こつそり先生の家へ來て、子熊を盜んで行つてしまひました。

それから數日後、隣り村でその男が檻に入れた子熊を車に乘せて引きながら、熊の膽を賣つて歩いてゐたのを見かけた人がありましたさうです。

今でも村の人たちはお金が欲しくなると冗談半分に「おらも町に行つて熊の膽賣りの熊を借りて來て先生からお金を貰ふべえか。」などと話して笑ひます

松並先生は今年の秋も毎日のやうに草山に出かけます。そして野葡萄のまんなかに立つて大きな聲で「子熊よ、出るでねえぞ。葡萄をたべに出ると鐵砲で打たれるぞ。」と言つておいでゞす。

「先生、草山で子熊がつかまると可哀さうです。おひるからおけいこはやめにして草山へ行きませう。」わたしたちはおけいこがいやになると先生にかう話しかけます

「さうしようかのう、はゝゝゝゝ……」先生は大きな聲で笑ひます。そして急に鐘を鳴らしておけいこをおしまひになさいます。先生のうしろからわたしたちはわい〳〵さわぎながら草山の方へ歩いてゆきます。

ふとつた王様

王さまは毎日々々お城の中にばかりゐて、毎日同じやうな時間に同じやうなものをたべて、同じやうな時間に同じ大臣のお爺さんたちにぺこ〳〵頭をさげられてゐるばかりで、ちつとも面白いとはお思ひになりませんでした。

たまにお馬車に乘つて町をお通りになると、百姓たちはのんきな顔をして桃の花の下のやはらかい草の中にねそべつて煙草をふかしてゐました。子供たちは仔牛といつしよにチウリツプの畑のすみにきよとんと靑い空を眺めて、面白さうにうたをうたつてゐました。

またあるところでは若い男たちは足で水車を踏んで沼の水を田へくみ上げてゐました。

くるくるくるくると水車は太陽の光りをあびて愉快さうにまはつてゐました。

世界で一番つらいことは王さまに生まれて來ることだと、いつも王さまはさうお考へになりました。

あんなに桃の花の下でねそべりながらビスケツトがかじられたらどんなに愉快だか知れないとも王さまはお思ひになりました。けれども、御家來たちは王さまをちつともお馬車から外には出しませんでした。そしてお城におかへりになると、待つてゐましたといはぬばかりに、御家來たちはたくさんな御馳走を並べ立てゝ王さまにすゝめました。

王さまは毎日腸詰だの、印度の何とかいふ鳥の卵だの、支那の燕の巣だの、アフリカの獸だの、エヂプトの果物だのといふやうな珍らしいものばかり、いやといふほど、召上らなければなりませんでした。

それに王さまのお國は大陸のまん中にありましたから、東洋や西洋からの方々の王さまたちや、王さまのお使ひた

ちが毎日のやうにたづねてきてゐましたので、王さまはそのお客さまの席へ出ても毎日御馳走ばかり召上らなければなりませんでした。

王さまの隣國といつてはペルシヤや印度やエヂプトといふやうな國々でしたが、都合のわるいことにはそこから來るお客さまたちはみんな大食家でしたから、王さまも自然おつき合ひをして大食をなさいました。ですから年々王さまの胃ぶくろは大きくなつてゆくばかりで、ちつとも休む暇がないものですから、王さまはいつも太鼓のやうな大きなおなかを突き出してお歩きになりました。

「王といふものは、丈夫な胃袋を持つことが一ばん必要だわい。」王さまはいつもさうお考へになるのでした。胃ぶくろばかりではありません、しまひには王さまのおからだまでがビール樽のやうに大きくなつて王さまはお歩きになることさへ苦しくなつてしまひました

「どうか御馳走をたべないですむやうな人間になりたい。」

ペルシヤのお客さまのおもてなしをすませて食堂から庭に出て來たばかりの王さまは、悲しさうな顏をして、御自分のビール樽のやうなおなかを眺めておいでになりました。

ちやうどその時一人の侍從がやつて來て、

「印度の王さまもお待ちかねでございます。どうぞ食堂へお越し下さいますやうに。」

「あゝ今すぐにゆくよ。」

王さまは氣のない返事をなすつて、侍從のうしろからふたゝび食堂の方へお歩きになりました。

印度のお客さまをお見送りして町はづれまでおいでになつた王さまは、御家來たちの油斷を見て象のうしろにかくれて、うまく馬車からお逃げになりました。

王さまは何か自分で仕事をして、一日でものんきな生活をして見たいとお思ひになりました。

王さまはいつか馬車の中からごらんになつた水車を踏む百姓の仕事をお思ひ出しになりました。

「あれなら面白いにちがひない。」

ひろいたんぼの中を一人で歩いておいでになると、いつも馬車でおいでになるのとちがつて、太陽の光りはぢかに王さまの胸や手を照らすのでした。かんらんの葉かげの風はいかにも涼しうございました。王さまはほんたうに幸福でございました。

「もし〱、わたしにその水車を踏ませてくれないか？わしは百姓になつてみたいのだ。」王さまは水車を踏んでゐる若い男に、聲をおかけになりました。

「あゝ、水車が踏みたければ踏んで見るがいゝ。」と若い男はいひました。

王さまは、つぱし一人前の百姓になつたつもりでその若者が敎へてくれた通りに、長い棹を杖にして水車に足をかけて沼の水をくみ上げようとなさいました。

しかし王さまはあまりふとつておいでゞしたから水車はたつた一度でめちや〱にこはれてしまひました。それを見た若者は、

「お前さん見たいな人間に百姓もできはしない。」といつて叱りつけました。

王さまは廣い野を歩いておいでになりました。可愛い娘たちが羊を追うてゐました。そしていかにも愉快さうに美

しい聲でうたをうたつてゐました。

「わたしにも羊の面倒を見させてくれ。」と王さまはおたのみになりました。

娘たちはビール樽のやうな男を見て笑ひました。しかし人のよささうな顔をしてゐる王さまを見て安心したかして、

「では羊をおあづけしませう。」といつてくれました。

王さまは大喜びでございます。

「わしは立派な羊飼ひになつて見せるぞ。」

娘から棒をうけとつて、羊の群の中へはいつて行きました。

空がくもつて來ました。嵐が近づいて來ました。臆病な羊は草の中を走りました。王さまは羊を追つかけて行きました。しかしあまりふとつてゐるにちつとも走れませんので、しまひには羊の影をすつかり見失つてしまひました。

王さまは羊飼ひになる資格もないことを發見なさいました。

王さまは鍛冶屋の弟子にもなつて見ました。だけど息切れがして滿足に鎚を振り上げることもできませんでした。

王さまはそこでもまたすぐ追ひ出されてしまひました。

王さまは或る町を歩いておいでになりました。そこにはホテルだの酒場だのが隣りから隣りへと軒をならべてゐました。いろんなたべものゝ香がおいしさうに漂うてゐました。

「あゝうまいことを考へたわい。」と王さまはお膝を打つておよろこびなさいました。

「もし／＼、わたしはどんなおいしいものでも喰べます。どんなにたくさんでもたべて上げます。どうか、おいしいものばかりたべるやうな仕事でいゝからわたしを使つてくれ。」と、或るホテルの主人にお話しになりました。

ホテルの主人は大きな聲をして、おなかをかゝへて笑ひました。王さまはそこでも駄目でした。

王さまには、どこを歩いても御自分に適當な仕事はないやうに思はれました。王さまはがつかりして道を歩いておいでになりました。

「わしには鍛冶屋の仕事もできぬし、百姓にもなれないし、羊飼ひにもなれないし……さうするとわしには何の能力もないといふことになる。だがまだ何か一つくらゐ役に立つことがわしのからだについてゐる筈だ。」

王さまはしきりに、道を歩きながらお考へになりました。

ちやうどその時一人の乞丐がこつちの方へ歩いて來ました。その乞丐はまるで骨と皮ばかりに痩せてゐました。

王さまはその乞丐をごらんになると急に乞丐が可哀さうでたまりませんでした。

王さまはどうかしてその乞丐を立派にふとらせてやりたいとお考へになりました。

王さまの國では昔からふとつた人のパンを貰つてお祈りをしながらそのパンを食べると、どんなに痩せた人でもふとるといふことを誰でも信じてゐました。王さまはふところをおさぐりになりました。

城をお出かけになります時、ふところにかくしておいでになつたパンが指先にあたりました。

王さまはそのパンを持つて行つて乞丐の前に立ち「さあ、このパンを上げるから食べてごらん。これはわたしのパンなんだ。このパンを食べるとお前さんもわたしのやうにふとるから。」とおつしやつてパンを乞丐の手へわたさうとなさいました。

乞丐はしばらく王さまの顔だの、ビール樽のやうに大きなおなかだのを見てゐましたが、急にぶる／＼とふるへ上りました。

「あゝとんでもないことだ。あんたのパンなんか冗談にもいたゞけるものか。」と乞食は声をしました。
「だつてお前はそんなに痩せつぽちぢやないか。わたしのやうにふとりたいだらう。」と王さまはおつしやいました。
「めつさうなことを、乞食といふ職業は痩せこけてゐればこそ、いかにもあはれつぽいので、みなさんが可哀さうだと思つていろんなものをめぐんでくださいます。あんたのやうにふとつてゐたらちつともあはれつぽくないから、たれも一文だつてめぐんでくれる人はありませんよ。痩せこけてゐるのが乞食の身上ですよ。あんたのやうにふとつちや乞食にもなれませんや。」といつて乞食はどん〳〵逃げて行つてしまひました。王さまは泣き出したいやうな顔をして暫くそこに立ちどまつておいでになりました。
王さまは間もなく侍従たちに探し出されて馬車に乗つてふたゝびお城へお歸りになりました。

お寺の塔

麥畑と、菜の花が十里も二十里もつゞいて春の光りに照らされてゐました。

そのひろい平原の眞ん中に小さな學校がありました。生徒はたつた二十人しかゐませんでした。

先生は七十にちかいお鬚の眞つ白な、いつもにこ〱したお爺さんでした。

學校は少し小高いところになつてゐましたので、南の窓からは小さな靜かな村が一目で見えるのでした。

村を取り圍んで柔かな牧場の草が青々と繁つてゐました。白い花や紅い花にかざられた森もありました。

赤い瓦の屋根や、白い倉の壁が美しく日光に反射してゐました。

また村の東のはづれには銀のやうにかゞやいて流れてゐる小川もありました。

小さな芝山の上に立つてゐる火の見もありました。

小鳥は朝から晩まで村の上を飛びまはつて、樂しさうに鳴いてゐました。

世界のどこに行つても、この村ぐらゐ靜かな氣持ちのいゝ村はあるまいと思はれました。

しかしたゞ一つ村の人たちが悲しんでゐたことがありました。

それは今から千何百年も前にえらい坊さまが拵へてくだすつたお寺の塔がこの村の岡の上にあつたのですが、五六年前の大風で倒れてしまつたのでした。それつきり誰もその塔を建てることができないのでした。

村のお寺の和尚さまも、村長さんも、お爺さんの先生も、塔がなくなつたことだけはほんたうに悲しんでゐました。

今日もお爺さんの先生は二階の窓から村の方をながめてゐました。
白い鳥がしづかに村の麦畑の上を飛んで行きました。
「あゝ／＼ほんたうにこんな美しい村はないが、あすこの岡のお寺の塔が見えなくなつたので、何だか寂しい！」と窓によりかゝりながら、先生が白い鬚をつかんだまゝ考へこんでゐました。
「先生！」と威勢よく聲をかけた子がありました。村で一番腕白な鍛冶屋の子の虎吉でありました。
「何だい？」と先生は虎吉の方を向きました。
「今に、僕がえらくなつて、きつとお寺の塔を建てゝやります！」とまをしました。
先生はにこ／＼して「どうして塔を建てる？」とたづねました。
虎吉は「立派な商人になつて、外國に出かけて行つて、お錢だの、いろんな寶だの、たくさん分捕品を持つて歸つて來ます。それから塔を建てゝやります。」といかにも元氣よく答へました。
「先生、僕も村の人のために塔を建てゝやります。」と言つた子供がありました。それは村でも一番慾の深い、金貸の子の金助でありました。
「お前はどうして？」と先生がにこ／＼笑ひながらたづねました。
「僕はアメリカに行つて、商賣をしてたくさんお錢を儲けて來ます。そのお錢で塔を建てます。」とまをしました。
そのほかの子供たちもみんなめい／＼に自分も塔を建てゝやるとまをしました。
「僕は立派な博士になつてから……」
「僕は會社の社長になつてから……」

「僕は世界一の音樂家になつてから……」
みんなの話を聽いてゐた先生はたいそう喜びました。しかしその時先生は隅の方に、今日も算術が出來ないで立たされてゐる馬太郎が何も言はないでゐるのに氣付きました。
「おう〳〵、そこに馬太郎がまだ一人殘つてゐた、お前はどうするつもりだい。」と先生が尋ねました。
みんなはどつと笑ひました、何も彼も乙と丙ばかりで、馬鹿太郎馬鹿太郎といはれてゐる馬太郎に、何が出來るものかと思つたからです。
それでも馬太郎はしばらく考へてゐましたが「僕は鑿と槌で塔を建てます！」とまをしました。
「馬鹿太郎の馬太郎やあい……」
「あつはつは……」
「ふつふつふつ……」
みんなが再び笑ひ出しました。
馬太郎は何も彼も乙と丙ばかりでしたが、たつた一つ感心なことがありました。それはどんなことがあつても、決して人にさからはぬといふことでした。
今日も先生と塔の話をしたその次の時間の出來事でしたが、お休みの時間に、腕白大將の虎吉と、狐のやうにずるい金助が眞つ先になつて、南の窓のわきの廊下で騷いでゐました。
子供たちは馬を作つて、その上に虎吉と金助を乘せて戰ごつこをしてゐました。

馬太郎一人は今度は讀み方が出來なかつたので、つまらなさうに壁の前に立たされてゐるのでした。
ところが、廊下で馬の上の虎吉と金助が組打ちをやつたはずみに、廊下の硝子をめちやくに壞してしまひました。
お爺さんの先生がびつくらして飛んで廊下に來ました。
虎吉も金助も他の子供たちもみんな知らぬ顔をして、すばしこく運動場の方へ逃げてしまひました。
お爺さんの先生は眼鏡をかけて、そこいらを探しましたが誰もゐませんでした。先生は壁の前にしよんぼり立つてゐる馬太郎を見つけました。
「馬鹿ツ、お前だな、硝子を割つたのは！」かう言つて先生は馬太郎を叱りつけました。
馬太郎はぢつと先生の顔を見つめたまゝ何ともいひませんでした。
運動場の方からこつそり教室の樣子をうかゞひに來た虎吉や金助たちは、何も知らぬ顔をしておとなしく教場へはいつて來ました。
「誰が割つたのだ、この硝子をお前たちは知らぬか！」と先生が眼鏡越に子供たちを見ました。
「僕たちはみんな運動場でブランコをしてゐましたから知りません。馬太郎だけがこゝにゐました。」と虎吉は言ひました。
「さうです、僕も運動場でみんなと遊んでゐたのです。馬太郎が硝子を割つたのです。」と金助もいひました。
馬太郎はその日も學校がすんでから留め置きを喰ひました。
日が暮れかゝつて來ました。
村の森に夕陽が紅く燃えて來ました。烏が美しい雲の間を飛んで行きました。お寺の鐘の音が聞えて來ました。

馬太郎はわけもなく悲しくなつて來ました。ぽろ〳〵と床の上に涙が落ちました。

それでも馬太郎は何とも言はないで鐘の前に立たされてゐました。

學校を出た馬太郎は貧乏でしたから、村の大工の弟子にやられました。そして毎日こつん〳〵と堅い木を槌で叩いてゐました。

虎吉は大將になるんだといつて東京に出て行きました。

金助は大金持になるんだといつて横濱に出て行きました。

七八年の時が經ちました、靜かな村にはこんな噂がつたはつて來ました。

虎吉は支那に渡つて、支那の士官になつて人を殺してゐたが、自分もたうとう馬賊のために殺されてしまつたといふのでした。

村の人にも、馬鹿太郎だと言はれてゐた馬太郎は、あひかはらず毎日木の屑だらけになつて、こつん〳〵と堅い木を削つたり、穴をあけたりしてゐました。

それからまた二三年經ちました。

雨の日でも、お天氣の日でも、馬太郎はこつん、こつんと木を削つてゐました。

或る日靜かな村には、またもめづらしい事が起りました。

金助が布哇でずるいことをして金を儲けようとしたので、みんなに散々になぐられて、びつこになつて村に歸つて來たのでした。まるで乞丐のやうなみすぼらしい風をして、

ぼろ〳〵の洋服を着て、破けた靴を穿いて杖をつきながら村に歸つて來た時、金助は、今まで村になかつた高いお寺の塔が畑の上に建ちかゝつてゐるのを見てびつくらしました。

金助は建ちかゝつてゐる塔の下まで行つて見ました。

ぼろ〳〵の半纏を着た男がたつた一人でこつん〳〵と槌を振り上げて塔を建てゝゐるのでした。

誰だらうと思つて金助はその男を見つめました。

それは十年前の同じ學校仲間の馬太郎でした。

金助は二度びつくりでした。下から聲をかけました。

「馬太郎君。この塔はお前一人で建てたんぢやないだらう。」と金助がまをしました。

「あゝ。」と、たゞそれだけ馬太郎は答へました。

「ほんたうにお前一人で建てたのかい、こんな大きな塔を？」と金助が問ひかへしました。

今度もやつぱり「あゝ」と面倒くささうにいつただけで、馬太郎は振り向きもしないで、こつん〳〵と槌を振り上げてゐました

高い空の上で。

水の上

霧がこめてゐました。

造船場の汽笛が川向うからひゞいて來ました。

菜葉服を着た若い人たちが小舟に乘つて工場の方へゆきました。

水を打つ棹の音がぱたと朝の靜かな空氣にとけこんでゆきました。

するすると水棹をしたゝる點滴に、東の白い空の色が映りました。

帽子をかぶつた人、かぶらない人、網代笠をかぶつた旅人、天鵞絨のズボンを穿いた人、白い犬をつれた人、自轉車を抱へた人、いろいろな人たちを乘せた小舟がまたそのうしろからすいすいと水をすべつてゆきました。

菜葉服を着た人たちの小舟と、犬をつれた人たちの小舟が一樣に霧の中を向う岸へゆきました。

こつちの船頭が向うの船頭に聲をかけました。

こつちの小舟が霧の中でだん〳〵近づきました。

「お早う！」

「お早う！」

「南風になつた。」

「お天氣は大丈夫だ。」

網代笠をかぶつた旅人が、向うの舟の菜葉服を着た一人の若者から、煙草の火をもらひました。

「ありがたうございました。」網代笠の下からやさしい眼の旅人の顔が見えました。両鬢には白い髪の毛がまじつてゐました。

「や、どうしまして。」

艪がぎいつと鳴りました。

二つの小舟は右と左にわかれました。

菜葉服を着た人たちの小舟は造船場の波止場につきました。

人々は、煙でまつくろによごれた高い工場の中へ吸ひこまれてゆきました。

汽笛がふたゝび響きました。

犬をつれた人や、網代笠をかぶつた人たちを乗せた舟は、向う岸につきました。

人々は東に西に、南に北にわかれわかれに歩いて行つてしまひました。

霧が晴れました。

太陽が川を照らしてゐました。

お城の上からおひるのドンがひゞきました。

工場の汽笛が鳴りました。

今朝網代笠をかぶつた旅人に煙草の火をつけてやつた菜葉服の若者は工場の中から飛び出して来ました。

岸の砂利の上にしやがんでお辨當をたべました。

わたし場の舟がしづかに川をわたつてゐました。
菜葉服の若者は、今朝白い犬をつれてわたつてゐた男が、こんどはこつちの岸からむかうの岸へかへつてゆくのを見ました。犬が舟の上でわんわん吠えてゐました。
菜葉服の若者はポケットから卷煙草を出してぽか〳〵とのみながら、犬をつれた舟の上の人を見てゐました。不圖けさの煙草の火をもらつた網代笠の旅人のことがかれの頭に浮かんで來ました。
「どこに行つたのかなあ、あの笠をかぶつた人は！」
ぢつと水の上を見つめてゐました。
ぶくぶくと水の泡が川の面に浮かんで來ては、ぱつと消えました。
若者は子供のころ葦の中で蟹をとつたことを思ひ出しました。
日が暮れてしまふまでかへらなかつたので、お父さんが提灯をつけてさがしに來たことを思ひ出しました。
「さつきの旅人はどこか亡くなつたお父さんのやうだつた。」
若者はぽつねんと秋の空を見ました。
ぽちやんと音をさして水の上を鳥が飛びました。
汽笛が鳴りました。
若者は吸ひのこしの卷煙草を高く水の上に投げました。そして工場の方へ歩いてゆきました。
犬をつれた人は川をわたつてしまひました。
しづかな水の上には秋の空の白い雲の影が二つ

若者が投げた巻煙草の吸ひがらが一つ
網代笠の影もなく
秋の風の影もなく
水は漫々とひろがつてゐました。

梟と幸吉

山の上の家には幸吉とお爺さんとたゞ二人きりで住んでゐました。
家のまはりには晝でも暗いやうな樫の木立がしげつてゐて、夜になると梟が來て鳴きました。
貧乏でしたから、町の學校から歸つて來ると夜が更けるまで、幸吉はお爺さんと二人で、土間で藁を打つて、むしろをこしらへたり、繩だの草履だのをつくつたりしなければなりませんでした。
お爺さんと二人でこしらへた繩だの、草履だのを町に持つて行つては、いくらかのお金をもらつて山にかへつて來るのでしたが、どこの家でも、貧乏な幸吉の見すぼらしい姿を見てはやさしい言葉をかけてくれるものもありませんでした。
みんなが「親なしの貧乏人の子！」と言つて、意地惡い眼でにらんでゐるやうに思はれてなりませんでした。
學校に上つてからまだ幸吉は一度も帽子を買つてもらつたこともありませんし、袴も持ちませんでしたので、いつもいがぐり頭をぢかにあつい日の光りにさらけ出して、眞つ黑な顏をして、膝のぬけてしまつた着物を着て學校に通つてゐました。
ですからみんなが乞食のやうな幸吉が近づいて來ると逃げてしまつて、だれひとり幸吉と遊んでくれるものもありませんでした。
幸吉はいつもぽつねんとたゞひとりでみんなのうしろの方に立つて、愉快さうに遊んでゐる人たちをながめてゐま

した。また或る時はひとりで學校の裏の小高い芝山にのぼつて遠い山を眺めてゐるやうなこともありました。

學校も町も、不愉快な、暗いところのやうに思はれてなりませんでした。ですからおけいこが終ると幸吉は急いで學校の門を出て、逃げるやうにして町を通り過ぎて山の家にかへつて來ました。

山の家はお爺さんとたつた二人きりでしたが、そこでは他に誰も意地惡い眼をして見る人はありませんでしたから、幸吉は山の家にかへつて來て、はじめてほつと安心するのでした。

しかし夏になつて青葉がしげるやうになると、窓の上の高い樫の枝に來る梟がお爺さんと二人で藁を打つてゐる幸吉を笑つてゐるやうに思はれてなりませんでした。

「お爺さん、あの梟の奴、またわたしたちのことを笑つてゐるよ。」幸吉は藁を握つたまゝ窓の方へちかづいて行つて、窓から高い樫を見ました。まんまるいお月さまが樫の向うがはに照つてゐましたので、梟の姿が眞つ黒な惡魔か何ぞのやうに樫の枝の中に寫つてゐました。

「幸坊や、梟が何で人間のことを笑ふものか。」お爺さんはとん〳〵と土間の臺の上で藁を打ちました。

「いゝえ、やつぱりわたしの惡口をいつてゐます。よくきいてごらんなさい。」

お爺さんは槌を置いて梟の聲をきゝました。

「何も惡口をいつてはゐないぢやないか。幸坊の耳がどうかしてるんだよ、はつはつはつ……」お爺さんは笑ひながらとん〳〵と藁を打ちました。

「いゝえ、やつぱり惡口をいつてゐます。」

「何ていつてるの？　幸坊や。」

「ほうら、幸坊貧乏ッて！」
「幸坊貧乏ッて。」
「えゝ、ほら……幸坊貧乏ッて。」
「はつはつはつ……梟はむかしから五郎助ほうこう五郎助ほうこうつて鳴くにきまつてるもんだよ、はつはつはつ……」お爺さんはおなかをかゝへて笑ひながら槌を握つて藁を打ちました。
幸吉は窓のそばに立つたまゝ梟の聲をきゝました。しかしどんなにきいても梟の聲は「五郎助ほうこう」とはきこえませんでした。
「幸坊貧乏！　幸坊貧乏！」
木の枝の梟はつゞけさまにかう鳴くのでした。
學校のおともだちや町の人ばかりでなく、樫の枝の梟にまでばかにされるのかと思ふとくやしくてなりませんでした。
「お爺さん、わたしに空氣銃を買つておくれな。」幸吉は藁を打つてゐるお爺さんの顏を覗きこみました。
「空氣銃なんか買つて何するだ？」
「幸坊貧乏、幸坊貧乏つて鳴く梟を撃ちころしてやるんだ。」
「ばかなことよしたがいゝよ。梟だつて可哀さうだから。」
「可哀さうなものか、あの意地惡の梟、わたしが貧乏だからばかにしてるもの。」
「そんなに空氣銃が欲しいなら買つてもよいが、わしにはお金がない。お前がいつしやうけんめいはたらいて、お金

をこしらへたらいゝだらう。」

「ぢや、わたし今夜からいつもの倍起きてはたらくよ。」

「さうしたがいゝ。」

幸吉はその夜からおそくまで起きてお爺さんと二人で一つランプの下で、繩をなつたり、草履を作つたりしました。

「幸坊貧乏！　幸坊貧乏！」梟は夜が更けるまで窓の外の樫の枝で鳴きつゞけました。

夜が更けてから幸吉は寝床の中にはいりました。つかれてゐたのですぐ眠つてしまひました。

お爺さんは仕事を片付けてから、ランプをかゝげて幸吉の寝床をのぞいて見ました。

「あゝ、疲れたと見えてよく眠つてる。だが、よつぽど梟の聲がしやくにさはつたのかなあ、何だかくやしさうな顔をして寝てゐるぞ。あんなに苦しさうに溜息をついてゐる。うなされてゐるんだなあ可哀さうに！」

お爺さんはしづかに幸吉の額を撫でてやりました。そして幸吉と並んで寝てしまひました。

毎晩おそくまで一ケ月ばかりもつゞけてはたらきましたので、幸吉は空氣銃を買ふだけのお金をもらふことができました。

「梟の奴、今夜こそ空氣銃を買つて來て撃ちころしてやるから待つてゐろよ。」

幸吉はお金をふところにいれて山の家を出て町へゆきました。

道を歩きながらも幸吉は町の空氣銃を賣つてゐる店の飾り窓のことばかり考へてゐました。

町でぴか〳〵光る空氣銃を買つて來て「幸坊貧乏！　幸坊貧乏！」と鳴く梟を撃ちころしたらどんなにせい〳〵するか知れないと思ひました。

「ざまあ見ろ、悪口屋の梟め！」幸吉は空氣銃で擊ちころされて樫の下に落ちてゐる梟の姿を想像しただけでも、うれしくつてうれしくつてたまらなくなりました。

しかし町の入り口の橋をわたらうとする時、幸吉は自分を呼んでゐる一人の男を見出しました。

「もうし坊ちやん、わたくしは今朝からまだ何もいたゞいてゐませんので、おなかゞすいて死にさうでございます。どうぞ何かめぐんでください。どうぞ親切な坊ちやん！」

いかにも瘦せおとろへた乞丐が石橋の上に兩手をついておじぎをしてゐました。

幸吉はその男が可哀さうで仕方がなくなりました。

幸吉はふところの中から金を出してやりました。

「坊ちやん。」と呼ばれたことは生まれてはじめてでしたから恥かしいと思ひましたが、うれしいとも思ひました。

「ほんたうに感心な坊ちやん、親切な坊ちやん！」乞丐はかう言つてぴよこん〳〵と石橋の上に兩手をついておじぎをしました。

幸吉は乞丐と別れて空氣銃を賣つてゐる店の方へ急いでゆきました。

或るお寺の前に來ました時、山門の前に三人の托鉢僧が立つてゐました。

「もし、もし。」と托鉢僧は聲をかけました。

「はい。」幸吉は三人の坊さまの顏をきよとんとして見ました。

「わたしたちは昨日からまだお粥一ついたゞいてはゐません。どうか、何でもよろしいからいたゞかせてください。」

幸吉はぢいつと坊さまたちの顏をのぞいて見ましたが、三人ともまるで月の夜の大理石のやうに蒼白い顏をしてゐ

ました。
幸吉は氣の毒でたまらなくなりました。
「では、どうぞこのお金をお納め下さい。」
幸吉はふところからお金を出して三人の坊さまたちにわたしました。
幸吉は何だかうれしくてなりませんでした。世の中には自分よりもつと貧乏な人があるといふことや、また自分のやうな貧乏な人間でも人をよろこばせることができるのだといふことを考へるとありがたいやうな氣がするのでした。
幸吉は山門をはなれて空氣銃を賣る店の方へどんどん走つてゆきました。
或る小鳥屋の前に來ますと二羽の小鳥がまだ籠に馴れないせゐか、絶えず羽ばたきをしては悲しさうな聲をして鳴いてゐるのでした。そして嘴の先で籠を破らうとしてゐるのでした。
幸吉は二羽の小鳥が可哀さうでなりませんでした。どうかして助けてやりたいと思ひましたので、店の中へつかつかとはいつてゆきました。
奥の方からは頭の禿げあがつた主人が出て來て、きたない着物を着た幸吉をぢろ〱とけいべつした眼で見ました。
「をぢさん、この小鳥賣つてくれる？」と幸吉はたづねました。
「お金さへ出せば賣るよ。」お前のやうな貧乏な子供に何が買へるものかといつた風な横柄な顔をして、鳥屋の主人は幸吉を見ました。
「お金さへ出せば？」

「さうだよ。だがお前そんなお金を持つてるかい。」
「この小鳥は二羽でいくらです？」
「二圓五十錢だ！　そんなにお金を持つてるかい？」
「ぢや、二圓五十錢、こゝに上げますよ。」幸吉はふところからお金を出して禿頭の主人にわたしました。
「ひつひつひつ……これはすてきだ、ひつひつひつ、これは不思議だ。」小鳥屋の主人は急にやさしい顔をして幸吉の顔と、お金とを見くらべました。
「お前この籠だけはおまけにしとくよ。」
「籠はいらないの。」
「どうして？」
「どうしても……」幸吉は籠をかゝへました。そして急に籠の蓋を明けて逃がしてやりました。
小鳥はうれしさうに鳴きながら、雲雀のやうに高く飛んで行つてしまひました。
「へえ……面白い子供だなあ……」禿頭の主人は眼をまるくして幸吉を見ました。幸吉は笑ひながら小鳥屋を出て行つてしまひました。幸吉は空氣銃を賣つてゐる店の前に立ちとまりました。しかしもうその時はふところには一文のお金ものこつてはゐませんでした。
幸吉はたうとう空氣銃は買はないで、一文のお金も持たないで山の家へかへつて行きました。
しかし幸吉はいままでになく愉快でした。
道を歩きながらも大きな聲でうたつたり、兎のやうにぴよん〱はね上つたりして山の家へかへつてゆきました。

山の家にかへつてから幸吉は空氣銃を買ふお金が無くなつたことや、乞丐や托鉢僧や小鳥の話をお爺さんに話してきかせました。お爺さんは幸吉の頭を撫でてよろこんでくれました。

そして二人はいつものやうに一つのランプの下でまづしい御飯をたべました。けれども、いつになくその夜の御飯はおいしうございました。お爺さんは神棚からお酒をいたゞいて來て、飲んでは手拍子を打つてうたひ出しました。幸吉も何だか嬉しくてたまらなくなつたので踊り出しました。

「幸坊や、梟が鳴いてる！」

「鳴いてる。鳴いてる。」

「何て鳴いてる？」とお爺さんがたづねました。

「おやツ。變だぞツ、梟の奴、今夜から鳴きかたを變へちやつたぞ！」

「何て鳴いてる？　幸坊。」

「あのね。幸坊倉持ち、幸坊倉持ちつて鳴いてゐます。」幸吉はにこ〳〵した顔で答へました。

「うん、ほんたうに、幸坊倉持ちツて鳴いてるのうはつはつはつ……」

幸吉は窓から樫の葉の間を見ました。まんまるいお月さまに照らされていつもの梟がきよとんとした顔をして、「幸坊倉持ち」と鳴いてゐました。幸吉は幸福に輝いた顔をして、寢床にはいつてしまひました。お爺さんはランプをかゝげて幸吉を見ました。

「あゝ、可愛い顔をして眠つてゐる。ほんたうに天使さまのやうな幸福な顔をして眠つてるわい。」

お爺さんはいつまでもランプをかゝげてにこ〳〵して、幸吉の眠つた顔をながめてゐました。

天城の子

「東京！」

修吉はどんなにか東京といふ言葉をくりかへしたことでせう。

東京にゐる叔父さんが、この夏、天城の奥の里にかへつて來た時、修吉の頭をなでていひました。

「修吉や、お前ももう十になつたんだなあ。一度東京を見せてやるべいかのう。」

修吉はあんまりうれしかつたので、ちよつと自分の耳をうたがひました。夢ではないかと思ひました。

しかし夢ではなくて、たしかにそこには人のいゝ叔父さんが笑ひながら坐つてゐるのでした。

「東京を見たくねえのか。いゝぜ東京は、何からなにまで見事なものづくめだ。店だつて七階も八階も高い家があるんだ。一つの家の中に五千人も一萬人も住んでゐるやうな西洋の建物もあるんだ。自動車だつて一萬以上もある。飛行機なんか毎日飛んで來るわ。動物園に行きやあライオンだつて、虎だつて、象だつてゐるんだよ。」

「鳥もゐるのけえ？」

「うむ、鳥なら孔雀でも、鶴でも、くちばしのこんなにでつかいペリカンといふ鳥もゐる。」

「そんなにえゝところけえ？」

「ばかだなあ、修吉は。日本一の都會ぢやねえか、東京は……」

叔父さんと話してゐると、もう東京が見たくて見たくてたまらないのでした。

この世界で一番いゝところ、一番美しいところ、一番幸福なところが東京であるやうに思へてなりませんでした。寶石のやうに澄んだ青い空を銀の翼をつらねた飛行機が飛んでゐたり、雪のやうにまつ白な羽根をもつた鶴がくるくると啼きながら七階も八階もある西洋館の上をかけつてゐたり、美しい孔雀がまだ見たこともない、したたるやうな綠の林の中を自由自在に遊んでゐたりする光景が、まざ〳〵と修吉の眼にうつゝて來るのでした。

「東京！」

修吉は學校への往き來の道でも、口のなかでくりかへしては、自分ひとりで笑ひたくなるのでした。

「秋になつたら東京から迎へに來てやる。」といつて叔父さんは東京へかへりました。

天城の裏の郷の蜜柑が、やゝ色づいて來ました。百舌が高鳴きするやうになりました。

「もういく日したら叔父さんが東京から迎へに來てくれるかのう？」修吉はお母さんの顔さへ見ればたづねました。

叔父さんが東京から迎へに來てくれたのは、もう秋もすぎて冬も深く、毎日白い霜が下りるころでした。

天城の奥の里を出る時には、修吉はどんなによろこんだでせう。

「東京へゆくだ。おらあ東京を見てくるんだよ。」

里の入口で叔父さんといつしよに馬車に乘つて、窓から首を出した時、そこにはうらやましさうな顔をして修吉を見送つてゐる妹だの、村の子供たちが十人ばかり寒さうに立つてゐました。

天城の枯れさびた芝山の中の一本道を、馬車は三島の方へ狩野川へ沿うて走りました。

「東京だ！　東京だ！」修吉は無性にうれしがつて、馬車の床板を二三度蹴つたりしました。

三島から汽車に乘つて、箱根を越えて、もう天城の芝山が見えなくなるころは、さすがに心細くなつて、修吉は叔

父さんの眼をぬすんで、そうつと涙を拭きました。それでも夢にも忘れなかつた東京がすぐ見られるのだと思ふと、さびしいうちにも勇氣がわいて來るのでした。

日が暮れてしまつて、どこもこゝも見えなくなりました。たゞ東京へちかづくにつれて空が暗くなつて來て、星の光りがくもりはじめ、空にも地にも電燈だけがいつぱいに輝いて來ました。

「さあ、こゝが品川だ。こゝで下りるのだ。」修吉はぼんやり叔父さんのうしろからついてゆきました。そして生まれてはじめて電車といふものに乘りました。修吉はきよとんとした眼で電車の中の人たちを見ました。

「これが東京けえ？」修吉は低い聲で、はゞかるやうにして叔父さんに話しかけました。

「さうだよ、これが東京だよ。」

修吉はもいちど電車の中の人たちを見ました。

修吉はすつかりおどろいてしまひました。かるい失望さへわいて來ました。

東京といへば立派な幸福な人たちばかり住んでゐるのだと思つてゐましたが、電車の中で見た人たちは、たいていはあを白い、いかにも疲れきつた顏をしてゐました。みんながいかにも人を疑ふやうな、人を憎むやうなおちつきのない顏をしてゐました。間もなく電車の中の客と運轉手とが口ぎたなく罵り合ひました。そして一人の男は電車から引きずりおろされて、暗い地べたの上にたゝきつけられました。

雪が降りさうな寒いまつ暗な空の下で五六人の男たちは石炭を焚きながら、掘りかへされた道ばたの深い穴の中で土まみれになつて働いてゐました。

天城の奥では村の人たちは太陽とともに起き、終日小鳥の聲をきゝながら、何の屈託もなしに働いて、天城のかな

たに太陽がかくれるとともに家にかへつて、妻や子供たちと樂しい多の夜を爐のはたで樂しむのでした。天城の奧の人たちの生活にくらべて、東京の人たちの生活は、けつして幸福ではないと修吉は考へました。

芝の叔父さんの庭には二三本小さな青木が大事さうに植ゑつけられてゐました。修吉はをかしくて吹き出してしまひました。

「わつちの山へゆけば、こんなちつぽけな木なんか何萬本もあるに、はゝはゝはゝ……」

東京で生まれたといふ叔母さんはびつくらして、丸い眼で修吉を見ました。

叔父さんにつれられて修吉は毎日東京見物をしました。しかしなにもかも修吉の豫想を裏切るものばかりでした。七階八階の大きな西洋館の中では色のあをい瘦せこけた人たちが、監獄の中でゞも働いてゐるやうな疲れた顏をして、まるで機械のやうになつてペンを動かしたり、そろばんをはぢいたりしてゐました。そこには氣もちのいゝ空氣もなく、太陽の光りさへありませんでした。

ちよつと往來に出ても、まるで狂人のやうになつた人たちが自動車だの、自轉車だのに乘つて駈けめぐつてゐました。或る町の辻では修吉のすぐそばにゐた一人の若者があわやといふ間もなく自動車に轢かれて殺されてしまひました。

その若者を見てゐた一人の男は、かむつてゐた黑い自分の帽子を脫いで片方の手を高く振り上げたかと思ふと急に帽子を地べたにたゝきつけてしまひました。そして、

「あゝ、人生とはこんなものか。」と叫びました。

周圍に立つてゐた人たちは黑い帽をかむつた男の言葉をきいてゐましたが、たれひとり笑ふ人もなく、ぢつと考へ

こんでしまひました。修吉には何のことだかわかりませんでしたが、たゞわけもなくその黒い帽子の男と、轢き殺された若者の死骸にひきつけられてしまひました。

修吉はもう東京の往來を歩く氣にはなりませんでしたので、その日はすぐ叔父さんの家へかへつてしまひました。

その翌日、修吉は叔母さんにつれられて動物園へゆきました。しかし一番たのしみにして行つた動物園も修吉の心を暗くしてしまひました。

孔雀はせまい籠の中に痩せこけてゐました。鶴は煙突の煙によごれて鼠色になつてゐました。象は可哀さうに鐵のくさりで足をくゝられてゐました。虎も獅子も窮屈な檻の中で病人のやうにうめいてゐました。

「面白くつて？」と叔母さんが動物園の門を出る時たづねました。

「うんにや、面白くねえ。窮屈だんべえ。」と修吉は答へました。叔母さんはおなかをかゝへて笑ひました。

修吉はます〳〵暗い心になりました。

道を歩いてゐるとよぼ〳〵のお爺さんが水まき車を曳いて坂をのぼつて來ました。お爺さんは坂をのぼりきれないで困つてゐましたが、誰も手つだつてやる人もありませんでした。

廣告塔のかはりになつて活動寫眞の行燈をかついで町を歩いてゐる老人もありました。

橋の袂にふるへながら立つてゐる男たちもありました。

「こゝが日本一の日本橋だよ。」と叔母さんが敎へてくれたので、橋の上を見ましたが、そこには三人の乞丐が頭を土にくつゝけてぺこ〳〵おぢぎをしてゐました。ぼろ〳〵の着物を着た男たちがおほぜい船から何か運んでゐました。

橋の下にもやはれた船に乘つてゐる人たちも、みんなぼろ〳〵の着物を着てゐました。

たくさんの橋がありましたが、きつと橋の袂や、橋の下あたりには、ぼろ〳〵の着物を着た男や女たちが牛のやうに働いてゐました。

或る橋の袂では二人の男が、水の上をながれて來た一つの林檎を竹竿で掻き寄せてゐました。そして一人の男が半分だけ食つて、のこりの半分を自分のポケットに入れてしまひました。近くにゐた一人の男はだしぬけにポケットの林檎をひつたくりました。二人は橋の上でなぐり合ひました。

修吉には東京の生活は何もかも不愉快でなりませんでした。高い建物は、あを白い顔の人々を押しこめた牢屋であり、長い鐵橋には、ぼろぼろの着物を着た不幸な人たちや、くさつた林檎を食つてゐる人たちばかり立つてゐました。

空は終日どんよりと曇つて、そこには鳥の聲ひとつ聞えませんでした。星もかゞやきませんでした。

修吉の心は一日々々と暗くなつて來ました。

「修吉、もう山の家がこひしいのか、はゝはゝはゝ」

叔父さんがかういつて、修吉を天城の家へおくりかへしてくれたのは、お正月も過ぎてからでした。

修吉はふたゝび箱根を越えて天城を見た時、はじめて救はれたやうに思ひました。

天城にはもうまつ白な雪がつもつてゐました。

馬車は天城の方へいきほひよく駈けました。

一歩々々天城の奧がちかづいて來ました。

修吉は芝山を吹いて來る風を一息々々むさぼるやうに吸ひました。椿がまつ赤に道の兩側に咲いてゐました。

空が眞珠のやうに美しくかゞやいてゐました。小鳥らは春の天城をうれしさうに鳴いてゐました。
「何といふ美しい空であらう。」修吉は思はず天城の上の空をながめました。そこには焰のやうに美しくもえた夕燒がまつ白な天城の雪に映つてゐました。
里の子供たちは、天城の春をかざる御火を作るために、山の笹竹を切つて來て、その枝々にだるまだの、色紙だのを、きれいにくつつけてゐました。
「やあ、修ちやんが歸つて來た！」御火をこしらへてゐた子供たちは、修吉の馬車をとりまいて踊り上りました。
「東京はいゝところだんべえ。」と皆がいひました。
「東京はつまんねえだ！」修吉はたゞ一言さう言つただけで、珍らしさうにみんなが作つてゐる御火を見まもりました。
日が暮れて來ました。
妹が背戶の方から、拍子木をたゝいて出て來ました。そして修吉を見ながらうれしさうに笑ひました。
「ちやんき、ちやんき、ちやんちやんき
おらのせどをまはらつせえ！」
妹は拍子木をたゝきながらふたゝび背戶の方へまはりました。修吉は泣かずにはをられないほど、うれしくなつてしまひました。
「この子は笑ひながら泣いてる。」おつ母さんが出て來て、かういひながら、修吉を抱きました。そしておつ母さんまでが笑ひながら泣きました。

驢馬のやうな男

山の明星學院ではその朝も藤二郎はさん〴〵王仁先生に叱られた。

「お前くらゐ馬鹿な人間はない。どうしてお前はそんなんだらう。わたしは昨夜何といつた、四時になつたらちやんと朝の祈禱の鐘を鳴らさなければならないとあれほどかたくいひつけて置いたぢやないか。それだのにお前は五時になつても五時半になつても鐘を鳴らしてくれなかつた。おかげで今朝の祈禱はめちや〳〵になつてしまつたぢやないか。」

王仁先生は大きな眼をむいて叱りつけた。そしていかにも神經質な歩き方で禮拜堂のなかへはいつて行つた。

藤二郎は王仁先生の姿をしばらくぼんやり見送つてゐた。

「何で僕はこんなにぼんやりなんだらう。昨夜先生からあれほどやかましく四時には朝の祈禱の鐘を鳴らすやうにといはれてゐたのに！」

藤二郎は悪いことをしたと思つた。自分の注意の足りないことを後悔もした。しかしそんな失策は今朝がはじめてではなかつた。これまでにも幾度となく藤二郎は同じやうな失策をくりかへした。そしてよく王仁先生に叱られた。

同じ寄宿舍の仲間たちには輕蔑せられた。

「僕はどうしてこんなに驢馬のやうに馬鹿なんだらう！」かれは禮拜堂の階段に立ちすくんだまゝ考へ込んでゐた。

禮拜堂の中からは靜かに讃美歌の聲が聞えて來た。

藤二郎は禮拜堂の中へはいつて行つて寄宿舍の仲間から顏を見られるのが恥かしかつたので、石の階段にしやがんだまゝ俯向いてゐた。

藤二郎が明星學院の給費生として日向の海岸から送られて來たのは三年前の春のことであつた。それまではかれは日向の海岸の或る西洋の尼さまが經營してゐた慈心學園に養はれてゐたのであつた。かれは父をも母をも知らなかつた。かれはまつたくの孤兒であつた。

かれはそのころから數學も語學も不得手であつた。たゞ猿のやうに木にのぼることや、河童のやうに波をくゞることが上手であつた。それにどの子供たちに對しても親切であつた。かれが親切であることだけがひどく尼さまをよろこばせた。

「藤二郎は學問は駄目。だけど親切な心があるから天使さまに愛せられるにちがひない。」

尼さまはいつも冗談まじりにこんなことをいつた。そして驢馬のやうな藤二郎を自分の子のやうに可愛がつてくれた。だから藤二郎は、日向の慈心學園ではほんたうに幸福であつた。

尼さまはよく藤二郎に薔薇の花を作らせた。藤二郎が手をかけると薔薇の花が山の畑一面にかゞやくほど競ひ咲くのであつた。

尼さまはまた藤二郎に羊を飼はせた。藤二郎は薔薇と同じやうに羊を飼ふことも上手であつた。薔薇を育てるとすれば藤二郎は一杯の水をやるにしても、一塊の土をかけるにしても親切な心でやつて行くのであつたし、羊を飼ふにしても、骨身を惜まず遠い野山まで歩いて柔かな草を羊に食はせるやうにした。

「驢馬のやうな藤二郎はまた天使のやうな藤二郎です！」と尼さまはよくお友達に話したことがあつた。

日向の尼さまに別れて港の明星學院に送られて來た時は藤二郎は悲しいと思つた。王仁先生は立派な學者でもあり、物事のわかつた人であつたが、日向の尼さまほどやさしい人ではなかつた。

明星學院では薔薇を育てる仕事もなく、羊を追ふて野山を歩くこともなかつたが、給費生の藤二郎は毎日禮拜堂の高い塔の鐘を鳴らすこと、炊事場の薪を割ること、冬になればストーヴの石炭を運ぶことを仕事として命じられてゐた。

今朝もかれは三時ごろから塔の上へのぼつて行つた。そして間違ひなく四時の祈禱の鐘を鳴らすつもりで、一本の蠟燭を點したまゝ塔の中へ坐つてゐた。高く頭の上につるされてゐる鐘からは、二本の長い綱が垂れてゐた。

かれはその綱を兩手に握つたまゝ四時を待つてゐた。

その時かれは不圖窓の外に青い一つの大きな星がまたゝいてゐるのを發見した。

藤二郎の頭には日向の海岸の尼さまのことや羊のことや薔薇のことや、五六十人の仲間のことがはつきり思ひ出されたのであつた。

日向にゐたころ、朝眞つ暗なうちに起きて、山の薔薇の畑へ出かけてゆく折など、かれはよくその大きな青い星を見たのであつた。その星を見てゐる間に、かれはそのころのことを思ひ出したのであつた。

「日向にかへりたい！ あすこにはやさしい尼さまもおいでだ。羊もゐる。薔薇の花も咲いてゐる。親切な仲間たちもゐる！」かう思ふともう飛んで行つてしまひたくなるのであつた。藤二郎はそんなことを考へてゐる間に、四時の時計の音も聽きもらしてしまつたのであつた。

明星學院にはかれの外に八人の給費生がゐた。給費生たちはみんなかれと同じやうに薪を割つたり、石炭を運んだりする仕事をしなければならなかつた。しかしかれらは狡猾であつた。そして人のいゝ驢馬のやうな藤二郎に自分らの仕事までも押しつけてしまうことが多かつた。

ポーロといふニツクネームを持つた男と、ユダといふニツクネームを持つた男は、中でも一番ずるい人間であつた。ポーロはよく藤二郎の金を借りては酒を飲んでゐた。ユダは王仁先生の靴だけはいつも自分から進んで行つてみがいてゐた。ポーロもユダも頭はよかつた。どの學科も天才的にうまかつた。

ポーロやユダは自分らの薪割りをよく藤二郎にさせてしまつた。

「どうせあいつは學問したつて飯が食つてゆける人間ぢやない。僕等は秀才なんだから薪割りなんかに時間を費すのは惜しい。驢馬は驢馬の仕事をするのがいゝのだ。」などといつた。しかし藤二郎は怒らなかつた。そして自分の前に高く積まれた薪を不平もいはないで割つた。

石炭は運動場の端の方の崖に横穴を掘つてそこに貯へられてあつたので、そこから學院まで運んで來るには五六丁の坂道を車に載せて挽かなければならなかつた。ポーロやユダたちは穴倉の戸口へ立つてゐて藤二郎を倉の中へ入れて石炭を車に積ませた。藤二郎が眞つ黒によごれて石炭を積んでゐるのを見ては「驢馬には驢馬の仕事がある。」といつて、自分らは讃美歌をうたつたり、球を投げたりしてゐた。石炭の車を挽いて坂をのぼつてゆくのも、いつでも藤二郎にきまつてゐた。

「先生、石炭は全部運んでしまひました。」わざと汗を拭きながら王仁先生へこのやうな報告をしてゆくのは、いつもポーロかユダであつた。そんな時、藤二郎は賄所の裏の水道口でぢやぶ〳〵と眞つ黒になつた顔や手を洗つてゐ

た。

鐘を鳴らしそこねたので、さん〲王仁先生に叱られた日の午後であつた。授業もすんでしまつたので、藤二郎はいつものやうに賄所の裏にまはつて薪を割つてゐた。

藤二郎が不圖顏を上げると、そこに乞丐のやうな男が一人立つてゐた。

「君、校長さんの家はどこだねえ？」―その男はひどく痩れてゐた。

「何か用なの？」―藤二郎はけげんな顏をしてその男を見上げた。

「校長さんに逢つておねがひしたいことがあるんだが。」

「おや、連れてつて上げよう。」

藤二郎は先に立つて乞丐のやうな男を王仁先生の家へ連れて行つた。王仁先生の家は學院の裏山の木立の中にあつた。

「どうしようといふのだい？」

王仁先生は不快さうにたづねた。

「實はわたくしは昨日からまた御飯をたべてゐませんので……」その男はおづ〲した調子でいつた。

「金をめぐんでくれといふのかい？」

「はい、すこしばかり。」

「そりや駄目だ。」

「駄目ですかい。ひもじくつてたまらぬのですが。」その男は泣き出しさうな顔をして王仁先生を見た。

「駄目だよ。なまけてゐて、何もしないで人から物をめぐまれようと思ふのはまちがひだよ。そんな乞丐根性は捨ててしまひ給へ。」

「はい、でもあんまりおなかゞ空いてゐますので……」

「おやかうしたまへ。僕は君に仕事をあたへてやる。その仕事の報酬としてお金を拂ふことにしよう。」

「仕事といひますと？　わたしに出來ることでせうか？」

「できることをさして上げよう。薪を割るんだ。薪を！」

「はい……でもおなかゞ空いてゐますので……」

「駄目だよ。働かないで食ふなんて。」どうしても王仁先生はその男のいふことをきゝいれなかつた。

藤二郎はその男を連れて賄所の裏へ行つた。

そこに小山のやうに積み重ねてある薪を見るとその男はびつくりした眼をみひらいてたづねた。

「君、何ですか、こんなにたくさんの薪を割つてしまはなければお金も御飯もいたゞくわけにはゆかないのですかねえ！」

その男は深い溜息をついて、ぺたりと地べたにしやがんでしまつた。

「これで割るんです。」

藤二郎は重い手斧をその男の手にわたした。

「この手斧で割るんですか……」二三度手斧を振つて見たがあまり重いのと、おなかゞ空いてゐるのとで、その男は

ひよろ〳〵と薪の上へ腰を卸してしまつた。

　藤二郎は思はず吹き出して笑つた。それでもぢつとその男の顔を見つめてゐると、氣の毒でならなかつたので、臺所へ行つて何かないかと探して見た。丁度賄のお婆さんがそこにゐたので、大きな握り飯を三つこしらへて貰つて、持つて來て、その男にやつた。

　その男はまたゝくうちに三つの握り飯をたべてしまつた。

「あゝおいしかつた。これでやつと命だけは取りとめた。」水道の水を飲み腹をさすりながら人の善ささうな笑ひ方をして薪の上に腰を卸してしまつた。

腹がくちくなつて來るとその男はもう手斧を揮はうともしなかつた。

「僕はねえ、腹が減つて來ると仕事をするのがいやになつちまうんだ。」

「おや腹が空いた時は？」

「そりや無論腹が空いた時は仕事はできないさ。」

「おや、どんな時仕事をするの？」と藤二郎はたづねた。

「どんな時でも仕事をするのはいやだよ。」その男はポケットから吸ひさしの巻煙草を出して喫かしはじめた。

「あゝ、いゝ氣持になつちやつた。」といひながら大きな伸びをして薪の傍の草の中へ横になつて寝ころんでしまつた。そして直ぐに大きな鼾をかいて眠つてしまつた。

　藤二郎はその男ののんきな顔を見てゐると、可笑しくてたまらなかつた。ポーロやユダよりはむしろその怠け者の方が人が善ささうであつた。

藤二郎は一生懸命に薪を割つた。

日が暮れるころまで藤二郎は薪を割つた。そして割つた薪の大部分はわざとその怠け者の頭の近くに積んで置いてやつた。だからちよつと見たところでは、その怠け者が自分で薪を割つて積んでゐるやうに思はれるのであつた。

藤二郎は夕暮れの祈禱の鐘を鳴らしに塔へのぼつて行つた。そしてふたゝび賄所の裏へかへつて來たが、やつぱりその男は草の中に眠つてゐた。

夕暮れの祈禱がすんでから、王仁先生は賄所の裏へ歩いて來た。そして手斧を提つたまゝ草の中に眠つてゐる男と、高く草の中に積み重ねられてゐる薪を見た。

「あゝずゐぶん精を出したな。それで疲れたのだなあ。」王仁先生は笑ひながら怠け者を搖り起した。

怠け者はびつくりして草の上に起きた。「よく精を出したなあ。これだけたくさん薪を割つたんぢや疲れただらう。」と王仁先生はいつた。

怠け者はきよとんとして草の上を見た。自分の手に握らせられてゐる手斧を見た。そこに高く積み重ねられてある薪を見た。

怠け者には最初何が何だかさつぱり見當がつかなかつた。それでもしばらく王仁先生や藤二郎の顏を見つめてゐる間に、藤二郎の親切に氣付くことができた。

「はい、一生懸命に割りました。ですからこんなにたくさんに出來ました。」とあだかも自分が割つたやうな顏をして王仁先生の前にぴよこんと頭を下げた。

「それ御覽、人間といふものは働かうといふ決心さへつけばどんな仕事でもできるものだ。どんなにお腹が空いても

仕事はできるのだ。今日のことを忘れないでよく働くやうにしなければいけない。」といつて王仁先生はポケットから銀貨を一枚怠け者の手へ渡してやつた。

「いゝか今日の勞働の味を忘れるんぢやないぞ。働きさへすればいゝのだ。」先生は木立の中の家の方へ歸つて行つた。

怠け者は先生のうしろについて歸つて行つた。

藤二郎は怠け者が放り出して行つた手斧を片付けたりして、自分の部屋へもどつて行つた。

二三日經つてからまたその怠け者は王仁先生をたづねて來た。

先生は賄所の裏に連れて行つて藤二郎と二人に薪を割らせた。怠け者は手斧を握つたばかりで、その日も一本の薪も割らなかつた。それでも藤二郎はせつせと自分ひとりで二人前の薪を割つた。怠け者は草の上に寢て、卷煙草を喫かしながら藤二郎を見てゐた。

夕方になると怠け者は王仁先生から金をもらつてかへつて行つた。

怠け者は二三日置きにきつと學院へやつて來た。

そして藤二郎と二人で薪を割るのであつたが、藤二郎ひとりに薪を割らして自分は煙草を喫かしながら草の上に寢ころんで怠けてゐるのであつた。夕方になると金をもらつてかへつて行つた。

王仁先生は、夕方になると賄所の裏に來て高く積み重ねられた薪を見た。そして斧を握つてゐる怠け者を滿足さうな眼でながめた。

「どうだ自分で一生懸命に働くといふことは愉快だらう。」

金を貰つてかへつてゆく怠け者よりは、王仁先生自身の方が愉快さうであつた。

「神さま。わたくしは宗教家としての立派な仕事をすることができました。一人の怠け者を勤勉な男となすことができました！」王仁先生はこんな祈りをした。

夕方になると金を貰つてかへつて行く怠け者の後姿を書齋の窓から眺めながら、王仁先生は自分が怠け者に對してとつた手段を滿足に思ふのであつた。

王仁先生は長いことアメリカの大學に學んでゐたので、王仁先生はどこまでもアメリカ式の考へ方を持つてゐた。「無智な慈善といふものは決して怠け者を善くはしない。怠け者を善くするためには仕事を與へることが一番いゝ事だ。」

王仁先生はいつもかう考へてゐた。この考へ方は正しい考へ方であつた。しかし王仁先生は仕事さへ與へれば怠け者でも勤勉な人間になるのだと信じ切つてゐた。自分のやつたことは正しいことだと滿足してゐた。そして怠け者はやつぱり怠け者で、藤二郎一人が薪を割つてゐることには氣付かなかつた。

王仁先生は大得意であつた。

或る日曜の說教に王仁先生は「一人の怠け者を改心させた話」をした。そして自分の力で一人の怠け者を立派な人間にさせることができたと話した。

王仁先生がそのやうな說教をしてからでも、怠け者は學院へやつて來ては藤二郎と二人で賄所の裏へ行つた。そしてやつぱり終日藤二郎に薪を割らせて自分は草の中に寢たまゝで莨烟草を喫かしてゐた。

そのやうなことが一年ばかりもつゞいた。藤二郎は相變らずポーロやユダに「驢馬には驢馬の仕事がある。」と輕蔑されながら石炭を運んだり、薪を割つたりしてゐた。おまけに怠け者といふ闖入者までがやつて來たので、怠け者

のためにまで餘計な薪割りの仕事をしなければならなかつた。それでもかれは不平一つ言はないで稽古の暇さへあれば汗を流して働いてゐた。

「藤二郎ッ！」と或る日王仁先生が書齋の窓から聲をかけた。藤二郎は先生の書齋へ走つて行つた。

「君は日向へ歸つたらどうだ。學問は君には不適當なやうだ。君はやはり日向にかへつて野良の仕事をした方がいゝかも知れぬ。君には說敎家になつて人を導くといふことは困難だらう。」と王仁先生はいつた。

そんな譯で藤二郎は說敎家となる資格も望みもないといふので、體のいゝ退學を命ぜられたのであつた。

藤二郎が學院を追ひ出されて、いよいよ日向の尼さまの慈心學園へかへつてゆかなければならなくなつた前の日の午後であつた。いつものやうに例の怠け者がやつて來た。

藤二郎は怠け者と二人で賄所の裏へ步いて行つた。そしていつものやうに薪を割りはじめた。怠け者はやつぱり草の中へ寢ころんで煙草を喫かしてゐた。

「藤二郎さん、あんたは學校を追ひ出されたつてほんたうですかい？」と出し拔けに怠け者に聲をかけた。

藤二郎は寂しく笑つてゐるばかりで何も答へなかつた。

「あんたのやうに善い人間を追ひ出すなんて、あの校長さんは餘つ程わからぬ人ですねえ。僕はあんたがこゝの學校にゐなくなれば、もうこゝの學校へ來ることもあるまいし、これまでずゐぶん厄介になりましたが、これでお別れするのだと思ふと何だか悲しくなつて來ましたよ。」怠け者がこんなしんみりした口のきゝ方をしたのはその時がはじめてであつた。

藤二郎はだまつて薪を割りつゞけてゐた。

「もう、薪を割ることなんか止したらいゝでせう。今日つきりで學校を追ひ出されるんですもの。あんなわからずやの校長さんのために働くことはないぢやありませんか。」

藤二郎はやつぱり默りこくつて薪を割りつゞけてゐた。

「今日つきりしきやこゝの薪は割れないのだから……」藤二郎はたゞそれだけいつてこつ〳〵と薪を割りはじめた。

日が暮れかゝつて來た。丸木のまゝの薪はまだ小山のやうに高く積みかさねられてあつた。

藤二郎はそれを見ると今よりは一層精を出して手斧を揮つた。そして根かぎり薪を割つた。

「あんたまだ薪を割るんですかい？」怠け者は不思議さうに藤二郎の顏を見上げた。

「だつて、僕がゐなくなると、明日から王仁先生のために一生懸命に薪を割つて上げる人はありませんし、ポーロだつて、ユダだつて、あなただつて困るでせう！」藤二郎は夢中になつて薪を割つた。

夕暮れの祈りの鐘が鳴り、やがて木立の間から丸い月が出て來た。

藤二郎は手斧を放さなかつた。そしてこつ〳〵と薪を割つた。

月光の中に映し出された藤二郎の姿をぢつと見つめてゐた怠け者は、何と思つたか急に草の中から飛び上つた。そして藤二郎の胸に獅噛みついてしまつた。

「あんたは何といふ尊い心の人だらう。わたしは今日まであんたのやうな立派な人間を見たことがない。わたしは今日まであんた一人を働かして怠けてゐた。わたしはあんたの前に跪いておわびをしなければならぬ……」怠け者はさういつて泣き出してしまつた。

そして急に自分も手斧を握つて薪を割り初めた。

眞晝間のやうにかゞやいた滿月の下で二人の男は夜が更けるまで薪を割つた。

數年後であつた。

或る朝の新聞に二人の日本人の紳士がアメリカの銀行で詐欺をはたらいて、牢舍へ打ち込まれたといふ記事が載つてゐるのを王仁先生は讀んだ。二人の紳士といふのはポーロとユダであつた。

ポーロもユダも王仁先生のお氣に入りで、學院第一の秀才としてアメリカへ留學させられたのであつたが、二人の男は留學中に牢舍に放り込まれたのであつた。

その日終日王仁先生は、書齋の中から出て來なかつた。恰度そのころ日向の尼さまの慈心學園では、今までになく美しい薔薇が咲き、仔羊は殖え、二百人ばかりの園の子供たちは天使のやうにやさしい勤勉な二人の教師に守られて幸福な生活を送つてゐた。

二人の勤勉な天使のやうな教師といふのは、藤二郎と昔の乞丐のやうなあの怠け者であつた。

粗末な黒い法衣のやうな着物を着た二人の男にみちびかれて、靜かな山や野を樂しさうに歩いてゐる慈心學園の子供たちや仔羊の群を、日向の人たちはいつも見ることができた。

ひとりぼつちの鐵ちやん

花梨の花が咲きました。
ほんのりとはにかむだくらゐの赤い色で咲きました。
角の鐵ちやんはひとりで來ては花梨の花を見あげてゐます。

夏の雲かすいすいと花梨の上を高くとんでゆきます。
花梨の實がなりました。
護謨毬のやうな大きな實がなりました。
角の鐵ちやんはひとりで來ては花梨の實を見あげてゐます。

秋の雲がすいすいと花梨の上を高くとんでゆきます。
花梨の葉が散ります。
花梨の實が落ちます。
はだかになつた花梨の枝が冷たい冬の土の上に、網の目のやうな影をなげます。
角の鐵ちやんはひとりで來ては花梨の枝を見あげます。

花も散りました。
實も落ちました。
葉も落ちました。
つめたい霰が降つて來ました。
雪がつもりました。
角の鐵ちやんはいつもひとりで花梨の下に來て立つてゐます。
鐵ちやんのお父さんが船に乘つて遠い外國へ行つたきり、かへつて來ないからなんです。

一年たつても、
二年たつても、
何のたよりもないのです。
角の鐵ちやんは花梨の下に立ちました。——
鐵ちやんは雪の上をぢつと見ました。
ひとりぼつちの鐵ちやんと
ひとりぼつちの影法師が
雪の上をどこまでも

走つても走つても
ひとりぼつちの鐵ちやんと
ひとりぼつちの影法師。

お月さまは高い空に
夜が更けました。

惡太郎烏の死

鎭守の森では、今日も朝から惡太郎烏が柿の木のてつぺんで鳴いてゐました。森にはたくさん烏がゐましたが、そのなかでたゞ一羽意地の惡い烏がゐました。他の烏よりか少しばかりからだも大きいやうでしたが、一番不思議なことには、兩方の羽根が他の烏とちがつて、すこし灰色がかつてゐて、ちよつと見たところでは鷹か鷲のやうに思はれました。嘴までが他の烏よりか長くて、意地の惡い鷲の嘴のやうに尖つてゐました。

村の人たちが種子を蒔くと眞つ先に飛んで來て畑を荒してしまひました。また町まで買ひ物に出かけて行つた子供たちが牛肉でも持つて人通りのないさみしい畷道などを歩いてゐますと、森や村の上や、一本松の枝にとまつて見張りをしてゐて、出しぬけに飛んで來ては子供を脅かして、子供の持つてるものをさらつてしまうのでした。

ですから村の人たちは灰色の羽根を持つたその烏を惡太郎烏といつて憎みました。しかし惡太郎烏はたいへんすばしこい烏で、村の獵師たちもこれまで幾度も怒つては、鐵砲で撃たうと思ひましたが、一度も撃つことができませんでした。

それから不思議なことには惡太郎烏はよく人の家の不幸を知つてゐました。山を越えたところに村があり、更に山を越えたところに村がありましたが、その山を越えて行つた村々に誰か死んだりする日は惡太郎烏は朝から鎭守の森で、いかにも人間の不幸を笑ふやうな聲で鳴くのでした。

ですから村の人たちは、朝起きた時鎭守の森で惡太郎烏が鳴いてゐる聲を聽くと、「また今日もどこかで誰か死ぬのかなあ！」といつてみんな暗い顏をしました。

村で不幸があつたり、何か變事があると一番忙しい目を見なければならぬのは、小さな郵便局のたつた一人の郵便屋さんの少年鐵吉でした。

郵便局といつても村端れに建つてゐる小屋の中にお爺さんの局長と少年の鐵吉とたゞ二人が、明けても暮れても鼻を突き合はせてゐるのでした。山を越えて町の郵便局から一日置きにたゞ一度郵便物を屆けて來るのを配達してしまうと、他に用事はないのですが、何か急な用事でも起ると村の人にやとはれて、山を越えて急便の手紙を持つて走らなければなりませんでした。

鎭守の森で惡太郎烏が鳴いてゐるのを聽くたんびに鐵吉は「今日もまたどこかに不幸があるのかな、また使ひに走らなければならぬかな。」などと思ふのでした。たいてい鐵吉の豫想ははづれませんでした。

「鐵吉や、氣の毒だが急便だ。山を越してくれ！」鬚だらけの局長は氣の毒さうな顏をしていつもよくかういふのでした。

鐵吉が郵便局から飛び出して峠の方へゆくのを見てゐる惡太郎烏は鎭守の木のてつぺんから鐵吉を見て「かあかあかあ」と鳴くのでした。その聲が鐵吉には「ばかばかばか、ざまを見ろ、おれのおかげでまた山越えだ。ばかばか」といつてゐるやうに思はれてなりませんでした。

その朝はひどい雪でした。

山も野も眞つ白な雪にとざされてゐました。

「どうしてあの惡太郎鳥があんなに鳴くのだらうか、今までにあんなに鳴いたことはないがなあ！」鐵吉の祖母さんは背戸の井戸端に立つたまゝ、しばらく柿の木のてつぺんに鳴いてゐる惡太郎鳥を見てゐました。

「ほんたうに今朝はよく鳴くねえ。まるで火がつくやうに鳴いてる。」鐵吉は藁沓を穿いて郵便局へ出かけました。

「また今日もこの雪の中で、誰か死ぬんだらうよ、可哀さうに。あの鳥が鳴く時はきつと誰か死ぬるから。」

「さうかも知れぬ。それにしても今日は特別に大きな聲で鳴いてる。祖母さん氣をつけといで。」鐵吉はお辨當をかかへて雪の中を出かけてゆきました。

鐵吉は惡太郎鳥の聲を聽くまいと思ひましたが、いつまでも鳥の聲が聞えて仕方がありませんでした。

「今日はきつと、人が死ぬにちがひない。あんなに惡太郎鳥が鳴くから、ひよつとしたらよつぽどえらい人が死ぬのかも知れぬ。それともうちの祖母さんでも、わたしの留守に雪の下になつて死んでしまうのぢやないか知ら？」こんなことを心配しながら郵便局の中へはいつてゆきました。

その日は山を越えた町から朝早く郵便物が屆きましたので、鐵吉は朝のうちに雪の山を越えて吹雪と戰ひながら、三つの村々まで郵便物を配達して歩きました。

手もこゞへ、指もちぎれさうになつて、午後の二時ごろ村の郵便局にかへつて來ました。

「ぢや、今日は家にかへつて休んでいゝわ。早くかへつて祖母さんを安心させるがいゝ、雪がひどかつたのでくたびれたゞらう。」といつてしんせつな局長は鐵吉をかへさうとしました。

鐵吉は爐のはたで藁沓を穿きかへて歸り支度をしました。ちやうどその時鐵吉は郵便局の窓口のところに立つて、

おづ／＼しながら窓の中をのぞきこんでゐる一人のおばあさんを見ました。笠も蓑も持たないので、頭からすつかり雪にぬれてふるへてゐました。

「おばあさんどうしたんだい？」と局長が聲をかけました

「はい、家のお爺さんが急病になりましたのでどなたか町のお醫者樣を呼んで見たいのですが……」村はづれに住んでゐるたいへん貧乏な孫六爺さんのおかみさんがかう答へました。

「孫六さんは、そんなにひどく、わづらつてるのかい？」

「はい、こなひだからずつと病んでをりましたが、この大雪で急に惡くなりまして、もう今夜あたりは亡くなるのぢやないかと思ひます。わたしたちのやうな貧乏では町のお醫者樣をこの雪の中へお迎へすることは、とても夢にもできぬことでございますが、それでもやつぱりあきらめきれませんでやつてまゐりました。よし今夜死にますにしてもどうぞして一度だけ、町のお醫者さまに……」

「氣の毒な話だが、お錢がなくつちや、第一お醫者さまを町に呼びにやる使ひを頼むこともできぬぢやないか。」

局長とおばあさんの話をきいてゐた鐵吉は、今朝森で惡太郎烏が、しきりに鳴いたことを思ひ出して「きつと孫六爺さんが死ぬにちがひない。」と思ひました。

「はい、使ひの人を頼むお錢もありませんから、お醫者さまに葉書を一枚書いていたゞいて……」

おばあさんに一錢五厘のお錢を窓口に出しました。

「はつ／＼／＼……のんきなおばあさんだなあ。孫六さんは今夜にも死なうかといふのに、今から葉書を出したところで、今日はもう町へ出す郵便は今朝送つたので、明後日しか町へは出せない。それに町の立派なお醫者さまを呼ん

だところで、お禮をあげるお錢もないのぢやないか。」

「それはさうでございますが……」おばあさんはたうとう窓口のところで泣き出してしまひました。

「氣の毒だが、まあ、仕方がない、家にかへつて孫六さんの背でもさするか、濕布でもしてやるよりほかはない。どうせ死ぬ人たから樂に往生をさして上げなさい。」

「はい〳〵……」おばあさんは泣きながら、郵便局を出て行きました。

おばあさんが錢を持たないで郵便局を出て行くのを見てゐた鐵吉は、雪の中を飛んで行つて、おばあさんに追ひつきました。

「孫六爺さんのおばあさん。わたしが町まで行つて立派なお醫者さまを呼んで來て上げませう。」

「でも、わたしは鐵吉さんにも、お醫者さまにもお禮をするお錢を持ちませんが。」

「そんなことはどうでもいゝ。わたしが町まで行つてくるよ。」

鐵吉は自分が着てゐた外套をおばあさんに着せてしまつて、自分は山を越えて雪の中を町へ飛んで行きました。

鎭守の森の惡太郎烏がどこから見てゐたのか、鐵吉が雪の中を走つて行くのを見つけて、鐵吉を追つかけて來ました。そしていつもよりかもつとはげしく鳴くのでした。

「ばか、ばか、ばか。」

「何をいふか惡太郎烏？」

「ばか、ばか、ばか。孫六爺は死ぬにきまつてる。」

「お前がばかだ、惡太郎奴！」

「ばか、ばか、ばかの鐵吉！」
鐵吉は雪をつかんで投げつけました。
惡太郎烏は一層はげしく追つかけて來ては鳴きました。
峠を越えて、町が見えるやうになつた時、惡太郎烏は鐵吉を追つかけることをやめて、村の方へ鳴きながら歸つてゆきました。
鐵吉は町へ行つて、お醫者さまをたづねました。そして孫六爺さんの病氣のことや、貧乏でちつともお禮をすることができないことをみんな正直に話しました。
町のお醫者さまも立派な心がけの人でしたから、鐵吉の話をきいてすつかり感心してしまひました。
「ぢや、今から直ぐ出かけることにしよう。」
お醫者さまはすぐ玄關へ出ました。
玄關には馬車が用意してありましたので、お醫者さまは鐵吉を馬車へ乘せて、いつしよに降りしきる雪の中を村の方へ走らせました。
村の人たちは見たこともないやうな立派な馬車が、乞丐のやうな貧乏な孫六爺さんの家に着いたのを見てびつくりしました。馬車の中から町のお醫者さまと鐵吉が出て來たのを見て、二度びつくりしました。
惡太郎烏が鎭守の森でひとしきり鳴きました。
「あいつが今日にかぎつてあんなに鳴きやがるが、やつぱり孫六爺さんが死ぬのかなあ。」
「それにしても今まであんなにひどく鳴いたことはないがなあ。」

村の人たちは案じ顔で烏の聲をきゝながら孫六爺さんの家の前に立つて、美しい馬車を見物してゐました。

孫六爺さんはもう死にかゝつてゐました。

「くるしいですか？」とお醫者さまが聲をかけましたけれど、返事をすることができませんでした。

町のお醫者さまはしばらく孫六爺さんを見てゐましたが、馬車に載せて來た箱の中から機械を取り出して、注射をしたり、藥を飲ませたりいたしました。

さうすると不思議なことに、ものゝ三十分も經たないうちに孫六爺さんは、今までの苦痛をけろりと忘れたやうな顔をして笑ひ出しました。

「もうこれで大丈夫です。明日から起きて働けませう！」町のお醫者さまはかういつて、にこ〳〵笑ひながら馬車に乘りました。

「御苦勞だつたなあ！」お醫者さまは雪の中に立つてゐた鐵吉の頭を撫でました。

鐵吉はあまりうれしかつたのでぴよこんと頭を下げました。

うれし泣きに泣いてゐるおばあさんや、村の人たちに見送られながら、町のお醫者さまの馬車は雪の中にかくれてしまひました。

馬車が見えなくなるとほとんど同時に、森の方ではげしい鐵砲の音がしました。今まで鳴きつゞけてゐた惡太郎烏が、ぱつたりと鳴かなくなつてしまひました。

村の人たちは、不思議に思つて森の方を眺めてゐました。

しばらくすると森の中からついぞ見たことのない獵師が鐵砲をかついで出て來ました。

左の手には灰色をした羽根の烏の死骸をひつさげてゐました。
「惡太郎烏だ！　惡太郎烏だ！」といつて村の人たちは烏の死骸を見ました。
獵師は村の人たちには言葉もかけないで、雪の中を山の方へ歩いてゆきました。
日が暮れかゝつてゐました。
鐵吉は家にかへつてゆきました。
爐に榾をくべて、鐵吉の祖母さんはあたゝかな雜炊をこしらへてゐました。
薄暗い明りの下で祖母さんと鐵吉は舌鼓を打つて雜炊をたべました。
鐵吉は孫六爺さんの家に、町のお醫者さまを迎へに行つてつれて來たことや、お醫者さまに頭を撫でてもらつたことやを話しました。
「それはよいことをした。」といつて祖母さんは鐵吉をほめてくれました。
それから鐵吉は惡太郎烏がどこから來たか知らぬ獵師に鐵砲で擊ち殺されたことを話しました。
「さうかい。」
といつて祖母さんは雜炊をたべてゐた箸をちよつと下へ置きました。
「どんな風に死んでゐた？」
「兩方の羽根を摑まれて、頭をぐたりと垂れてゐたの。それから眼を半分ばかり明けてゐたが、眼からは淚が出てゐたやうだつた。」
「いくら惡太郎烏でも、殺されちや可哀さうぢやのう。」

「普段は憎らしいと思つてゐたが、殺されるのを見ると可哀さうぢやのう。」

「あんまり人に憎まれてゐたからのう。それでも今朝からあんなにひどく鳴いてゐたのは、自分が殺されることを知つてゐたのだらう。」と祖母さんはいひました。

「さうかのう。」鐵吉はぢいつと祖母さんの顔を見ました。

「自分で殺されることを今朝から知つて鳴いてゐたんだよ。烏は人間よりかしこいからのう！」

「…………」

鐵吉は森をのぞいて見ました。空も森も暗く暮れてゐました。

「でも可哀さうなことをしたのう。」祖母さんは鐵吉のうしろから、暗い森の方をながめながら、爐の榾火をかきまぜました。

壺作りの人丸

さんざしの木の下で二人の美しい子供が、草の上にしやがんで、青い空を見つめてゐました。空には鳶が大きな輪をゑがいて飛び、さんざしの枝には小鳥が泣いてゐました。空にも地にも人間の世界の平和と幸福がいつぱいにあふれてゐました。

空をながめてゐた二人の少年は、しばらくすると一人はさんざしの木にのぼつてゆきました。花を散らしながら枝を折りました。そしてしきりとナイフで何か拵へてゐました。

もひとりの少年は草の中から粘土を掘りました。そして何かしきりと作つてゐました。

さんざしの枝を持つてゐた虎丸は「こんなものができた。」と言つて大よろこびで草の上にとび上りました。

「刀だよ。これでもつて何でもかでも打ちこはしてやるんだハツハツハツ……」

人丸は土をこねてゐましたが「僕は、こんなものを拵へた。」と言つて草の中を飛びまはりました。

「壺だよ。これに水を入れるんだよ。そしてさんざしの花をさしとくんだよ。うれしい〳〵アツハツハツ……」

「そんな土の壺なんか、何になるものか。僕の刀で一つなぐりつけるとこなみぢんだ……」と虎丸がまをしました。

「だつて壺がなければ泉から水を掬んで來ることもできないし、花をさすこともできないぢやないか。」と人丸が云ひました。

「いんや、何といつても刀がいゝんだ。」

「いんや、壺がいゝんだ。」
二人はかう言つて、さんざしの下で言ひあらそつてゐました。
丁度そこを一人の旅人らしい白いひげのお爺さんが、にこ〳〵笑ひながら通りかゝりました。そして人丸の手にある小さな壺を、つく〴〵とながめてゐました。
「お前がこれを作つたのか？」とお爺さんがたづねました。
「さうです。僕が作りました。」と人丸がまをしました。
「お前はよい子供だ。今に立派な壺作りになるだらう。」と言つて笑ひながら人丸の頭をなでて通りすぎてしまひました。そして虎丸の方には見向きもしませんでした。
虎丸はそのお爺さんを憎らしいと思ひました。そしてうろしから石を投げつけてやらうかと思つて石を拾ひましたが、乞丐のやうなきたない着物をきてゐましたが、何だか普通の人間とはちがつたやうな偉いところがあつて、どうしても石を投げることができませんでした。
その旅人が見えなくなつてから、虎丸は急に人丸の壺を自分の太刀でたゝきこはしてしまひました。
「どうだ、僕の刀の方が壺よりもえらいだらう、ハツハツハツ……」と、虎丸は大きな聲で笑ひました。
人丸はこはされた壺をぢいつとかゝへたまゝ、日が暮れるまでさんざしの木の下に立つてぽつねんとしてゐました。
虎丸は大きくなるにつれて力自慢ばかりして歩いてゐました。そしてすこしばかりの力があるにまかせて人を投げとばしたり、犬や馬をいぢめたりしてゐました。

戰國のころでしたから虎丸は或る大名にかゝへられて侍になりました。村の人たちは虎丸のたかぶつた風を憎みながらも「えらい出世ぢや」と言つてほめそやしました。

虎丸はたくましい馬に乘つて、多勢の家來をひきつれて村へかへつて來ました。

村の人たちはまるでお城の大名でもお迎へするやうに、村の入口まで出て虎丸を迎へました。

虎丸は馬の上から一人々々村の人たちを睨みつけるやうにして見下してゆきました。

人丸が自分を出迎へに來てゐないのが不思議でもあるし、腹立たしくもありました。虎丸は「人丸はどうした？」と村の人にたづねました。「あゝ、人丸でございますか。あれは生まれつきの愚もので、いまにあのさんざしの下で土をいぢつて壺をこしらへてをります、ハツハツハツ……」と一人の男がまをしました。

「なるほど……」と言つて虎丸は岡の上を見ました。そこには昔と同じやうにさんざしの花が咲いてゐました。乞食のやうになつた人丸が、土をこねては何百とかぞへつくせないほどの壺をこしらへてゐるのでした。

「子供のころから白痴な男ぢやつたがフッフッフッ……」とおなかをかゝへて、虎丸は馬上で笑ひました。

「おれの家來にならないか？　家來にさへなれば槍も持たせる。刀も買つてやるが……」

虎丸はかう言つて聲をかけましたが、人丸は振り向きもしないで壺をこしらへてゐました。

村の人たちは人丸がどれほど立派な壺を作るのか、そんなことは少しも知りませんでした。恐らく人丸自身も、自分がどれほど立派な仕事をしてゐるかといふことは知らなかつたでありませう。

いろ／＼の旅人が村を通つてゆきました。たいていは遠い國々から、遠い國々へと、旅をする人たちでした。

旅人たちは春から夏にかけてさんざしの花が咲くころになると、花の下で壺をこしらへてゐる人丸を見て珍らしげ

に立ち止まらないではをりませんでした。

「何だか知らぬが面白い壺だなあ。」

かう言つて、誰もかれも小さな人丸の壺を、懐やまたは肩の行李につゝんでゆきました。二文か三文のお錢をやつてゆく人もあり、中には一文もやらないで二つも三つも盜んでゆく人もありました。けれども人丸はそんなことはいつさい夢中で壺をこしらへてゐました。人丸の壺は五百里も千里も遠い國々まで旅人に運ばれてゆきました。

或る時、人丸の國と隣國の大名との間に戰ひがはじまりました。虎丸は一方の大將となつて戰場に向ひました。しかし敵はたいへん強かつたものですから、どん〳〵國の中に攻め寄せて來ました。そして國中の侍はもとより若い者をすつかり虜にして行つてしまひました。虎丸も馬から引きずり下ろされて虜にされました。人丸は壺をこしらへてゐましたが、作りかけの壺を持つたまゝ虜にされて敵の國へつれられてゆきました。

敵の國では虜をみんな暗い地の下の牢舍にはふりこんでしまひました。そして力の強い侍などは牢から引き出して、大きな石を運ばせたり、大きな木を伐らせたりしました。力の強い虎丸も毎日鐵のくさりでつながれて、牛や馬のやうに大きな石や木を運ばなければなりませんでした。

人丸はからだが弱いので地下の牢舍の中へ入れられたまゝ、空一つ見ることもできませんでした。

暗い牢舍の窓によりかゝつたまゝ人丸は考へこんでゐました。

「もう五月だ。さんざしの花が咲くころだ。」

から思つただけでも涙が落ちて來るのでした。小鳥が鳴いたり、さんざしの花が咲いたりする故鄕のことが思ひ出されるのでした。

「たゞ、もう一度だけでいゝから靑い木の葉が見たい。さんざしの花が見たい。そしたらいつ死んでもいゝ。」と思つて牢舍の窓によりかゝつてゐました。

ところが或る日、ふと窓を見ますとそこに柔らかな靑い葉が上の方から鐵の格子扉をつたはつて垂れてゐるのを見出しました。人丸は自分の眼を疑ひました。しかしたしかに蔦のやうな柔かな枝が垂れて鐵の格子にまとひついてゐるのでした。

「靑い葉だ。靑い葉が見えた。」

狂人のやうによろこんで人丸は叫びました。

一寸二寸と枝はだん〲日に〲さがつて來ました。そして白い香のいゝ花さへ持ちました。人丸は或る日こんなことを考へました。

「こんなに枝が垂れて來るからには、この窓の上にはいろ〲な草木がしげつてゐるにちがひない。また空も見えるにちがひない。」どうかして空の色や、もつといろ〲な草木の花を見たいと思ひました。

ふと虜になつた時持つてゐた作りかけの壺のことを思ひ出しました。

人丸はその壺を鐵の格子の外に出しました。格子の外は石が五六寸も出張つてゐましたから充分小さな壺を置くことができました。やがて壺には雨の水がひた〲と溜りました。

或る日、人丸は鐵格子の中から壺をのぞきこんで見ました。

「あつ、空が壺の中にうつつた。花が……花が……」
かう叫んで人丸はあまりの嬉しさに泣きました。
夜になれば、その壺の中の水の面には星の影や月の光がうつつて來ました。人丸は牢舎にゐることも忘れました。
城に一人の若い美しいお姫さまがゐました。若いお姫さまは遠い國から旅人が持つて來た一つの珍らしい壺を城壁の上に置きました。そしてそれに美しい蔓葛を植ゑました。蔓葛は夏になれば白い花を持ちました。その壺といふのは人丸が作つた壺の一つだつたのです。その蔓葛が城壁をつたはつて丁度その下の牢舎の窓まで垂れてゐたのでした。
お姫さまは或る日、そこの城壁の上に來てその不思議な壺から垂れてゐる蔓葛を御覧になりました。丁度その時、人丸も牢格子の窓の中から眺めてゐましたので、人丸は壺の中にうつつたお姫さまの美しいお顔を見ることができました。
城壁から下をのぞいてゐたお姫さまは、ふと下の暗い格子戸の外に珍らしい一つの壺があるのに氣付きました。
人丸はその日直ぐ牢舎から出されて若いお姫さまの前に連れられました。
「お前は侍ではなかつたのか。」と若いお姫さまは、人丸の顔をじつと御覧になりました。
「はい、わたくしはいつもさんざしの樹の下で壺をこしらへてをりました。」と人丸はまをしました。
「こゝにある壺もお前が作つたのか。」とお姫さまは蔓葛のしげつてゐる壺をお指しになりました。
「たしかにわたくしが作つた壺でございます。」と人丸はまをしました。
その日から人丸は自由な幸福な身となりました。そして毎日お姫さまの前でいろ／＼な美しい壺をこしらへました。
お姫さまはいつまでも人丸を城の中にとめて置きたいと思ひましたが人丸はぜひ一度故郷に歸してくださいとたの

みましたので、お姫さまは若い美しい壺作りのために三十頭の馬と五十人の侍をつけて人丸を故郷にかへしました。
お姫さまは人丸が見えなくなるまで城の上から別れを惜しみました。
人丸はお姫さまから戴いたいろ〳〵の物をみんな村中の老人や子供たちに分けてやりました。それから人丸は手紙を出して、お姫さまに願つて虜になつた若い人たちをみんな故郷に歸してもらひました。
虎丸だけは虜になつて働いてゐる間に、或る日牛に突かれて死んだといふ噂がつたはりました。
人丸は元の乞丐のやうな姿で毎日さんざしの下でいかにも幸福さうに壺をこしらへてゐました。

熊とピストル

山の木が紅葉する間もなく初雪が降りました。

その初雪の朝でした。村の人たちは朝の御飯をすまして仕事へ出かけようとしてゐるところに、あわたゞしいラッパの音をきゝました。

いつも町の郵便局から來る配達の金助さんが山を越えるごとに熊に逢はぬ用心にラッパを吹いてゆくのでしたが、けさは、いかにも、ものに驚いたらしい、あわたゞしいラッパの吹き方だつたので、村の人たちは熊が出たにちがひないと思つて、女たちは家の戸を閉めるし、大人たちは鐵砲を持つたり、槍をかついだりして山の方へ飛んでゆきました。

金助さんは片手に大きな郵便カバンをかゝへたまゝ息を切らしてラッパを吹きながら牧場の方から飛んで來ました。

「どうしたんだい、金助さん。」

村の人たちは、雪のなかを走つて行つてたづねました。

「熊だ！　大きな熊だ。」と金助さんはまるい眼をして答へました。

「えゝッ熊だ！」みんなは腰をぬかさんばかりに驚きました。

「ちよつと待つてくれ。何だと？」

みんなのうしろの方から一人の男が聲をかけました。みんなは振りかへつてうしろを見ました。そこには意地の惡い大地主の權作爺が、眼をぎらぎらさしてみんなをにらみつけるやうにして突つ立つてゐました。

「何だと？　熊が出たつて、馬鹿なことをいふものぢやない。金助！　お前はいつもびくびくして歩いてをるから黑い石のかけらを見ても熊と思ふのだ。十年も前のことなら知らず、今ごろなんで熊なんかこゝいらに出て來るものか。いゝ加減のことをいつて、皆に迷惑をかけると承知しねえぞ。」權作爺は金助さんを赤い眼でにらみつけました。

「だつておやぢさん、たしかにわしはこの眼で見たんぢや。牛のやうに大きな熊がのそくさと歩いてゐるのを見たんぢやもの。」と金助さんは、まだふるへながらいひました。

「馬鹿いふな。何が牛のやうな熊ぢや。いゝ加減なことをいふと、これだぞ。」といつて權作爺はポケットからぎらぎらと光るピストルを出して見せました。

それは權作爺が自慢のピストルでした。權作爺がまだアメリカへ行つて農夫をしてゐたころ、アメリカから買つて歸つて來たといふピストルでしたが、權作爺は、いつもそれを肌身はなさず持つてゐました。そして小作人たちが小作料をまけてくれなどと相談を持ちかけてくると、ピストルを光らせて見せるのでした。

「わしはな、これでもアメリカに二十年ゐたんだぞ。お前たちのやうな小百姓を何で恐がるものか。小作料がたかいと思ふなら勝手に畑をわしにかへして、この村を出て行け。それとも腕力でもわしをまかさうと思ふのか、それならそれでいゝ、このピストルを見ろ、お前たちが十人くらゐかゝつて來てもこれ一つありや何でもないんだ。」さういつて、いつも權作爺は、何も知らぬ正直な小作人たちをおどかしました。

「そのピストルはよつぽど飛びますかいなあ。」と或る小作人がたづねたことがありました。

權作爺はあざわらひながらその男の頭の上にピストルをのせたかと思ふと引金を引きました。ピストルは恐ろしい音を立てゝひゞきました。その男はむろんのこと、はたにゐた男たちまでがへたばつてしまひました。

「どうだ。今の彈丸の飛び具合を見たか。あの牧場の端の柳の下まで飛んだぞ。これさへあれば熊であらうと狼であらうとたゞ一發だ。アメリカ製のピストルだからなあ。」權作爺はいかにも得意さうな顔をしてみんなを見ました。

金助さんはちやうどその時、大きな郵便カバンをかゝへて木の下に立つて見てゐました。

みんながへたばつてしまつた風がをかしかつたので、うしろの方で吹き出して笑ひました。金助さんはその時から、そのピストルが欲しくてたまらなくなつてしまひました。

「おやぢさん。そのピストルはよつぽどたかい値のものだらうな。」金助さんは近づいて行つてたづねました。

「さうだ、金助なんかの月給をまづ十年分貯へたら買つてやらう。」權作爺は、けいべつした眼で金助さんを見ました。

金助さんは寂しい氣持ちになつてしまひました。

熊が出るころになると、金助さんは權作爺のピストルのことを思ひ出しました。

その頃になると、山を越えてはラッパを吹いて熊に出逢はないやうにして行かなければなりませんでしたが、それでももしかして熊が逃げないで追つかけてくるやうなことがあつたらどうしようと思ふと山を越えてゆくのが恐くてならないことがありました。そんな時はきつと金助さんは權作爺のピストルが欲しくてなりませんでした。

「だけどな、おれたちの月給を十年分だけためないでは買へないといふからなあ。」さう思ふとせつかくの希望も、めちやくちやになつてしまふのでした。

だから金助さんは今日も權作爺が自分を叱つた時腹は立ちましたが、權作爺がポケットから出したピストルを見る

と、熊のことも何も忘れてしまふのでした。

「みんな鐵砲なんかかついで山に行ってどうする氣か。熊なんか一度もこの村には出たことはない。もし熊が出て來たら、わしがこのピストル一發で、射止めてやる。安心してみんな歸ったがいゝ。熊なんか出るものか。」權作爺がかつてさういふので、小作人たちは村の方へかへつてしまひました。

權作爺がなぜ金助さんの言葉を噓にしてしまつたかといふと、それにはちやんとわけがあつたのです。

權作爺は大きな牧場を持つてゐました。そこには方々からいろ〳〵な人が馬だの牛だのをあづけに來ました。權作爺はかなりたかい料金をとつて牛や馬をあづかつてゐました。

もし權作爺の牧場に熊が出るといふ噂が立てば、だれもかれも牧場から自分たちの牛や馬をつれてかへつてしまひますから、權作爺はたいへんな損害を蒙ることになります。だから權作爺は熊を見たといつた金助さんの眼の前にピストルを突き出して見せて「もし熊が出たといつて歩けばこれだぞ。」といはぬばかりにして金助さんをおどかしたのでした。

村の人たちは半信半疑で村の方へかへつてしまひました。

その翌日の朝も金助さんはラッパを吹きながら山を越えて來ました。金助さんは昨日熊が歩いてゐたあたりに行つて見ました。そこには一尺もある足あとが雪のなかに殘つてゐました。たしかに熊の足あとでした。

金助さんは、けふもさかんにラッパを吹きながら山を越えて來ました。

金助さんはふと牧場の柳の下に立つて、こつちをながめてゐる權作爺を見つけました。

「おい金助、お前は今何をさがしてゐた？」と權作爺はいひました。そしてポケットからピストルを出しました。

「熊の足あとをさがしましたよ。」と金助さんはいひました。

「また熊といふ。馬鹿！　この近くに何で熊がをるものか。熊がをればわしがこのピストルで……」といつて、にゆつとピストルをつかんだ手を突き出して見せました。

　金助さんは權作爺さんの手のピストルをぢつと見つめてゐました。欲しくて欲しくてたまりませんでした。

「ほんたうにそのピストルを撃てば熊でも狼でも一發で射止められますか。」と金助さんはたづねました。

「さうだとも、まだわしのいふことを信ぜぬのか。お前は馬鹿だなあ。これを見ろ。」さういつて、權作爺は空高くピストルを向けて引金を引きました。雪の空を高くこだまして、いかにも氣持ちよくひゞきながら彈丸は飛びました。

「どうだ、たいしたものだらう。熊なんかこのかいわいにをる氣づかひはない。熊の足あとなんかあつてたまるものか。あれは馬の足あとだ。よいか、熊が出たなどといゝ加減なことをいふんぢやないぞ。お前がおれのいふことさへ聞けば、このピストルだつてお前にくれてやる。」權作爺は金助さんの顏を見ながらさういひました。

「ほんとにそのピストルをわしにくれますか。」金助さんは飛び上るほどによろこびました。そして兩手を出しました。

「馬鹿！　何でこのピストルを今やるものか。わしが死んだらやるよ、ヒ、ヒ、ヒ、……」權作爺は金助さんをからかひながら雪のなかをかへつて行きました。

　金助さんはぼんやり雪のなかに立つてゐました。

「わしのやうな貧乏者には一生かゝつてもあんなピストルは買へない。」さう思ふと金助さんは雪のなかに、ぽとりと涙を落さずにはをれませんでした。

權作爺は誰にもかくれて毎朝牧場のあたりを歩きました。たしかにそこには金助さんがいつたやうに大きな熊の足あとが雪のなかにのこつてゐました。

權作爺は橇に乗つてピストルをポケットに入れてラッパを吹きながら、牧場のあたりを走りまはりました。そして熊の足あとを橇で消しました。

村の人たちは、權作爺が毎朝山に行つてはラッパを吹いて雪のなかを橇で走りまはつてゐるのを、不思議に思ひました。

金助さんはラッパを吹いて山を越えながら、よく橇を走らせてゐる權作爺に逢ひました。そんな時にはきつと權作爺はピストルを出して見せました。そして「いゝか、熊はこのあたりにはをらぬのぢやぞ。」といつて聞かせました。

金助さんは大きな郵便カバンをかゝへたまゝ、ぢつとピストルを見てゐました。

「わしには一生かゝつてもあんなピストルは買へない。ちよつと手に持つて見ることもできない。」と思ふとさびしくなつて來ました。

その顔つきを見てとつた權作爺は、

「いまにお前にこのピストルはあげるよ。わしが死んだらなあヒ、ヒ、ヒ、……」といつて笑ひました。

しかし偶然な出來事からして權作爺のピストルを一度金助さんは手に持つて見ることができるやうになりました。

それはかういふわけなんです。

權作爺は毎朝村の人たちにかくれて橇を走らせて牧場のまはりを見て歩きました。或る朝、馬が驚いてどうしても橇を引きませんでした。馬はちやんと熊が近くに來てゐることを知つたのでした。

權作爺はひどく馬を鞭うちました。やつぱり馬は耳を立てゝ物おびえしてすゝみませんでした。權作爺はふたゝび馬をなぐりつけました。馬は驚いて權作爺を橇から振り落して村の方へ逃げかへつてしまひました。

ちやうどその時、牛のやうに大きな熊が雪のなかにあらはれて權作爺に飛びかゝつて來ました。

權作爺は自慢のピストルを出しましたが、もうその時は、熊の大きな手は權作爺の頭にかゝつてゐました。

村の人たちは橇を引きずつたまゝ雪のなかをかへつて來た馬を見て驚きました。橇のなかにはラッパがたゞ一つのこされてゐました。

權作爺の姿は、たうとうどこにも見出されませんでした。

それから二三ケ月も經つてからでした。金助さんは十里ばかりはなれた町へ出かけて行きました。

雪のなかを歩いてゐると、金助さんは或る店の硝子窓のなかに古いピストルを見出しました。

金助さんはそつと吸ひつけられるやうにして、そのピストルを見ました。

「たしかにこれは權作爺さんのピストルにちがひない。」と思ひました。

金助さんは店のなかにはいつて行きました。

「もし、このピストルはいくらです？」とたづねました。

「そのピストルですか。一圓二十錢で賣りませう。」と店のおかみさんがいひました。

「ずゐぶんやすいピストルですな。こんな上等なピストルが。」といつて金助さんはピストルを手にとつて見ました。
たしかにそれは權作爺のピストルでした。
「お前の月給を十年ためたら賣つてやらう。わしが死んだら上げよう。」と權作爺がいつてゐたピストルが、わづか一圓二十錢で買へようとは夢にも考へられないことでありました。
「どうしてこの立派なピストルがこんなにやすいのですか。」金助さんは不思議でならなかつたのでたづねました。
「それはねえ、ついこなひだ、この町の獵師がどこかの山に行つて牛のやうな大きな熊を殺したのですよ。そしてその熊を解剖したら、胃の腑のなかからそのピストルが出て來たんですつて、人間といつしよにそのピストルも、熊が食つてしまつたんでせう。」
「へえ……」
金助さんは、眼を見はつて、おかみさんを見ました。
「人間といつしよにこのピストルも食つてしまつたのですか。」
「さうださうです。」
「ぢや、やつぱり權作爺さんは、熊に食ひ殺されたにちがひない。」
さう思ふと金助さんはぶる〳〵とふるへ上るやうな氣になりました。そして、今まで欲しい欲しいと思つてゐたピストルを、床の上に落してしまひました。
「や、これは飛んだそさうをしてしまひました。」といつて金助さんは土にまみれたピストルを拾ひ上げました。まだねば〳〵した赤い血がこびりついてゐるやうで氣味がわるくてなりませんでした。

「いゝえ、かまひませんよ、熊に食はれて死んだやうな人のピストルなんか賣れつこはありませんよ。」とおかみさんはいつて、元の硝子窓のなかにはふり込みました。

金助さんは妙にさびしい氣になつてそこの店を出ました。

もう二度とピストルなんか欲しいとは思ひませんでした。

金助さんは今でも大きな郵便カバンをかゝへて、熊が出るころになるとラッパを吹いて毎朝高い山を越えてゆきます。

六里ヶ原

六里ヶ原は上野の國吾妻郡にありて、南に淺間、北に白根の兩火山に抱かれたる草原なり。日本武尊の歩ませ給ひしところ、吾妻、淺間等の牧場連なれり。——

しと／＼と草鞋はしめりぬ
手をやれば髮もスヱータアも
草原をゆく夜の露に
さく／＼と火山灰の道を踏めば
心をどりぬ力杖の白きよろこび
地にひゞくかすかなる音よ
さゝやきよ草原をくゞる流れの
さゝやきよこほろぎの
さゝやきよ馬追の
笛を吹くに似たるわびしき歌よ

星！　星！　大空を南北に二つに劃る眞白なる銀河
さびしからずや秋の夜をのみ見る星よ
獅子、鷲、白鳥、大熊、小熊
爛旰として高天の夜冴ゆ
白根の影よ、淺間の影よかぐろく
いだかれて六里ケ原は眠りぬ
馬追よこほろぎよ秋の夜の歌は長し

東雲の空に星一つ一つ地に別る
微風よ眼ざめよ起きよ
草鞋の紐の見ゆるほど
夜は明けぬ靜かなる火山灰の道
たゞ一度鷄の聲を聽きぬ
六里ケ原の秋を住む家のありてか
吾妻の牧場
淺間の牧場
たゞ二つの家の燭を見るもわびし

蟋蟀の燭たゞ一つ燃えて消えぬ
星なく、燭なく六里ヶ原の夜明は露にさめぬ
霧浅間をつゝみ、白根をつゝみぬ
浅間の煙、白根の煙ゆら〳〵と
夜明けの青空を夜明けのまどろみのごとく白くのぼる
そゝり立つ赭き浅間
そゝり立つかぐろき白根
そのなかに曠くはるかにいだかれて眼ざめたる六里ヶ原

山鳩の啼けり
雉子の鳴けり
日本武尊の歩きませし草原
狭霧こめては消え消えてはかゝる
御剣の音かまがたまのさゝやきか
御顔のごとくうるはしき朝空の下に
朝の風はそよぐ
山鳩の啼けり

雉子の鳴けり
六里ヶ原
道はたゞ一筋に草原をつらぬく
鈴蘭の葉をいとしみ
秋の草花をいとしみ
芒の原は馬の仔を呼ぶ口笛に夜明けぬ
馬の群よ走れ
笛は響くすが〱しき秋の聲のごとく
仔馬よ走れ
男らは鞭を振りて待てり
女らは秣を盛りて待てり
めぐまれたる秣桶の中よ
秋の日は照りぬ
秋の風のごとく口笛はひゞく
仔馬よ走れ
かろやかなる蹄を秋の空にかろく
仔馬よ走れ

六里ケ原の草は甘く柔かなり
六里ケ原
秋の日は照りぬ
芒の原
秋の風は吹きぬ
大白根の靜かなる煙
大淺間の靜かなる煙
秋のごとく白き煙
ゆら〳〵と人の世を思ふ心にも似たり
靜かなる秋の火山よ
そのなかに抱かれて眼ざめたる六里ケ原
見わたせど仰げど人もなし
風のみ空を飛ぶ
野葡萄をあさる小熊も草に夢見む
六里ケ原の朝は眞夜中のごとく靜か
仔馬よ走れ
口笛はひよく

鹽あり
泉あり
秣あり
六里ケ原の草は甘し

六里ケ原
九十九體の御佛たちは慈眼尊く
芒の原にまどろみ給ふ
霧は石佛の御顏を撫づ
草は天に連なり
御佛は草の上三尺の上におはして
白雲を天蓋にいたゞき給ふ

六里ケ原
山鳩は啼けり
雉子は鳴けり

川沿ひの村

村の出はづれに、かなり廣い渡船場があつた。喜作爺と三太は、何時も渡船場の小屋のなかに暮してゐた。渡船場の小舍には幾年も飼はれてゐる犬が一疋ゐた。渡船場の喜作といへば若いころから界隈で知らぬ人もないほど正直な男であつた。喜作爺は雨の日も嵐の夜も、一本の水棹を握つては、一生懸命に渡船場で働いたので、喜作爺が六十になつたころは小さな田畑の二三枚も買ふだけの貯へも出來た。一日の仕事も終つて、夜焚火を圍んで三太と小屋のなかで物語などしてゐる時、喜作爺は「自分ほど世界に幸福な人間はない」とさへ思ふこともあつた。

しかし喜作爺の幸福はながくはつゞかなかつた。三太が八つの時であつた。村の商人たちに欺されて折角稼いで自分のものにした田畑までも、他人に賣り拂はなければならぬことになつた。それから後喜作爺はまたもと〳〵通りな貧乏な渡し守となつて、渡船場に寂しい暮しを送らなければならなかつた。

そのころから喜作爺の性質はすつかり生まれ變つたやうに冷たくなつてしまつた。月の良い晩など喜作爺は船を操りながら、よく美しい聲で歌をうたつたのであつたが、それから後は何時もむつつりしてろくに他人に口を利くこともなくなつた。喜作爺は世の中の人間を、みんな恐ろしい仇敵のやうに想ふやうになつた。「三太、世間の人間を信じちやならぬぞ。他人を見たら盜人と思へ。世間の奴はみんな嘘つきぢや……他人が笑ふて見せても油斷をしてはならぬぞッ！」喜作爺はよくそんなことを三太に語つて聞かせた。その後一年と經たぬうちに、喜作爺は氣が狂れてしまつた。そして往來を歩きながら「俺の畑を返せ！」と叫んでは泣いてゐた。

霜の深い朝であつた。喜作爺は他人に騙り奪られた畑の隅の柿の樹に首を縊つて死んでゐた。

三太はまつたく世界にたゞ一人の孤兒となつた。無論、早瀬を掉して船を操る力はまだ三太にはなかつた。三太は一疋の犬を連れては毎日村から村と乞丐のやうな態をして歩かなければならなかつた。

「首縊りの子やあい！」だの「乞丐の子やあい！」などと言つて三太と犬に石を投げつけるやうな者もあつた。三太は眠る家もなくなつたので犬を連れては森のなかだの、草のなかだのに寢なければならなかつた。

三太は毎日のやうに、亡くなつた喜作爺の言葉を思ひ出すのであつた。喜作爺が死んだのも、世間の人たちが惡いからだと思つた。人が何を呉れても三太は決して笑つた顏をしなかつた。

三太は何うかすると、大人に對しても白い齒をむき出して喰ひ付かうとするやうなこともあつた。

「三太も狂人になつたのだよ！」といつて村の人たちは三太に近寄らないやうにした。自然、村の人たちは、滅多に三太に食ひ物をやることもしなくなつた。三太と犬は一日々々と痩せこけて行つた。

世界に誰一人可愛がつてくれる人も持たぬ三太にも嬉しい時があつた。それは三太が犬といつしよに岸の葦のなかに寢ころんで、青い空を眺めたり、小鳥の聲を聽いたりする時であつた。

三太は一日に一度は乾度岸の葦のなかにはいつて行つて犬といつしよに草のなかに寢ころんで高い空を見上げるのであつた。そこには河の波の音や、櫓の音が聞えて來るのであつた。三太はぢつと耳を傾けて風の音を聽いた。葦の葉摺れの音につれて、さら……さら……といふやうな喜作爺の歌の聲がほんたうに聞えて來るやうに思はれた。三太

は何時とはなしに、風の聲につれて喜作爺の歌をうたひ出すのであつた。

「さら、さら、さら……時雨の音よ、さら、さら、さら……日暮の時雨……山越えて、野越えて、夜の宿さがそ！」三太は低い聲でうたつてゐる間にひとりでに淚がこみ上げて來て、苦しくてたまらないこともあつた。しかし三太には一日のうちで、人に隱れて歌をうたつてゐる時ほど嬉しいことはなかつた。

河を上り下りする船頭たちは、三太の歌の聲を聽いても、風の聲か、葦の聲かと思つてゐた。三太の聲はほんたうに銀の鈴のやうに美しい聲であつた。

しかし、半年ばかり經つ間に、三太の歌の聲に氣付いた者が一人できた。それは村一番の富限者といはるゝ家の一人つ子の松郞であつた。松郞は心のやさしい子供であつたが或る日三太が村の子供たちにいぢめられて泣いて河の方へ歸つて行くのを見たのであつた。松郞は三太に見つけられないやうにして、三太の後をつけて河の方へ歩いて行つた。その日三太は何にも食ふ物を貰はなかつたので、幾度もひよろ〳〵と倒れやうとした。三太の後からは痩せこけた犬がついて行つた。三太が葦のなかにかくれて間もなくであつた。葦のなかゝら歌の聲が聞えて來た。しかも歌の聲はだん〳〵と衰へて行つた。松郞は偸み足をして近寄りながら三太と犬が草の上に死ぬやうに疲れて寢てゐるのを見た。松郞は懷のなかを探つて見た。しかし懷のなかには何にも食べ物ははいつてゐなかつた。たゞ畑に蒔くつもりで持つてゐた向日葵の種子だけが懷のなかにあつた。松郞が歩いて來たのを見た三太は、何時も村の人たちに對してするやうに、白い齒をむき出して、眼を瞪つて、松郞に反抗するやうな態をして見せた。それでも松郞はやさしく笑ひながら三太の方へずん〳〵歩いて行つた。

三太は石を手に握つて、今にも松郎に飛びかゝつて行くやうな氣勢を示した。しかし松郎はまるで自分の親友にでも對するやうなにこ／＼した顏をして三太の兩手を靜かに握つた。

「三太君。怒るんぢやない。僕は他の人たちのやうな意地の惡いことはしない。君は僕の友人にならなくつて？」といひながら松郎は三太の肩を輕く叩いて微笑んだ。

初めの間は三太は恐ろしいやうな眼をして松郎を見てゐたが餘り打ち解けたやさしい松郎の態度にすつかり魅せられてしまつて、しまひには松郎がするまゝに自分の體を投げ出してしまつた。

松郎は懷から向日葵の種子を出して「何にもこゝにはないんだから、これでも良かつたら君に上げよう。」と言つて三太の手にわたした。

一日何にも喰べなかつた三太は、涙を流さんばかりによろこんで、向日葵の種子を貰つてむしや／＼と食つて、犬にも分けてやつた。

「俺こんなものはじめて食つた！」と言つて三太は大きくなつた自分の腹を輕く叩いて見せたりした。

「そんなにおいしかつたの？」と言つて松郎はうれしさうに三太の顏を見た。お腹がくちくなつてから三太はまた歌をうたひはじめた。しまひには松郎も三太につれて「さら、さら……時雨の音よ……」とうたひ出した。その日から三太と松郎とは毎日藁のなかに集まつては歌をうたつた。松郎は飯を持つて來ることができない折は、こつそり倉のなかゝら向日葵の種子を取り出しては三太と犬に持つて來てやるのであつた。松郎の助けで、三太は村にも物を貰ひに行く必要もなくなつた。松郎は毎日三太を訪ねて來ては二人で「さら、さら、時雨の音よ……」と聲を合はせてうたふのであつた。何にも知らぬ犬までがうれしさうな聲を出して、二人の合唱にあはせて鳴くのであつた。三太

は毎日夕方になると犬といつしよに河の岸に立つて松郎の遊びに來るのを待つてゐた。三太は再び喜作爺が生きてゐたころのやうな幸福な日を送ることができた。三太の顏は昔のやうに明るく輝いた。

しかし三太の幸福な日はながくはつゞかなかつた。松郎が四五日ぱつたり河の岸に見えなくなつた。三太は歌もうたはないで寂しい日を送つた。或る日一人の男が大きな袋を擔いで葦のなかにやつて來た。

「松郎さまはひどい病氣だで來れねえから、これをあんたにやつてくれといふことでした。」といつて、その男は袋を置いて、さつさと歸つてしまつた。三太はその袋を改めて見た。袋のなかには冬の着物や向日葵の種子が一ぱい入れてあつた。三太は夜つぴて松郎のことを思ひながら泣いた。

三太は毎日日が暮れると犬を連れて葦のなかゝら廣い寂しい野を横ぎつて村の方へ歩いて行つた。三太は道々向日葵の種子を割つては犬にも喰べさせ、自分も喰べながら歩いた。三太は村に入つて、城のやうな高い石垣の上に建てられてゐる松郎の父の家の前に立つた。高い家の窓からは暗のなかに燈火の光が射してゐた。「屹度あの窓は松郎さんの病室にちがひない！」と思ひながら三太は夜が明けるころまで、窓を見つめてゐることもあつた。

或る雪の夜であつた。三太はいつものやうに石垣の下から城のやうに高い建物の窓を見上げた。その夜は窓は暗くて、いつもの燈は見えなかつた。

三太は低い聲で「さら、さらら、時雨の音よ……」とうたつて見たが、窓はやつぱり暗かつた。三太は丁度、そこに通りかゝつて來た人から松郎が死んだことを聽かされたのであつた。

三太は雪の上に身を投げ出して泣いた。三太は犬を連れて、野を歩いて河の方へ歸つて行つた。三太は終日何にも喰べなかつたが、何にも喰べたいとは思はなかつた。三太は河の方へ歩きながら懷のなかの向日葵の種子を一つ摘ま

んでは投げ、一つ摘んでは投げして泣いた。

夜が明けた。村も川も近年にない大雪に埋められてしまつた。三太と一疋の犬はその夜かぎり村にも川のほとりにも見出されなかつた。「凍え死んだのだらう！」といふ噂もあつたが、死骸も見えなかつた。

春が來た。雪が解けて、丘には松郎の新しい墓が建てられた。麥畑には雲雀が鳴いた。不思議なことには、松郎の父の家の裏から、野を横切つて葦の集つた川の岸まで道に沿ふて、誰かわざと種子でも蒔いたやうに、向日葵の芽が春の光に輝いてゐた。

濱の燭

鹿島灘一帶の砂丘には防風の小さな白い花が咲いてゐた。
空も海も一樣に秋の色に沈んでゐた。
昨夜の嵐で松山の下の道が、たゞ一夜で砂に埋まつてしまつたり、船小屋の屋根がめくれて松山の中まで吹き飛ばされてゐたりした。
まだ波が高かつた。ともすれば潮吹が燈明臺の部屋の中まで吹きこんで來ることもあつた。
虔作は眼をさまして、ぢいつと浪の音を聽いてゐた。父は夜つぴて起きて、火が消えさうになると燈明臺の上まで高い梯子をあがつて行つては油をついだ。今朝は疲れてしまつて父はぐつすり眠つてゐた。
疲れ果てゝ眠つてゐる父の顏を見つめてゐると虔作は昨日も父と東京へゆくことについていさかひをしたことが、われながら氣の毒でならなかつた。
虔作は二年前に高等小學を出た。學校を出てからは、晝は松林の中で草を刈るか、畑の仕事をするか、夜になれば父を助けて燈明臺の番をするか、それが毎日毎夜の虔作の仕事であつた。
虔作は學校ではいつも級長だつたし、父が金さへ持つてゐたら東京の學校へも行けるのだつたが、貧しい燈臺守の子では中學校の門をのぞくこともできなかつた。
「文吉だつて、金助だつて今度は中學の試驗を受けるに、おらひとり高等にいくんか！」

慶作はかういつては父を困らせた。自分に比ぶればずつと〳〵出來のわるい文吉や金助たちが、たゞお金持ちの子供だといふので、町の中學へゆくことができて、自分だけが貧乏人の子だからどこにもゆけないのだと考へるとくやしくてならなかつた。

「だけど考へても見い、お父つあんはこゝの燈臺で夜も寢ないやうにして、一月働いていくら貰へると思ふ。とてもお前を町の中學へ入れて寄宿料を拂ふだけも貰つてはゐないぢやないか」

父の苦しい生活を考へれば、無理もいへなかつたので、そのまゝ自分の不滿な心を押へては高等へ通つてゐた。

「高等までやつて貰ふのは、おれのやうな貧乏人にはもつたいないことだ！」慶作も時としてはこんなことを考へることもあつた。そして學校を出てからは父といつしよに燈臺守の手傳ひをしたり、畑の仕事をしたりしては二年三年を過してしまつた。それでも高等時代から英語だけは人一倍すきだつたので、わづかな小づかひ錢のうちから辭書を買つたり、講義錄を取つたりして、忙しい仕事の暇々にせつせと勉強してゐたので、このごろではちよつとした英語の一くさりや、二くさりは讀めるやうになつてゐた。

將來のことを考へるとまつたく眞つ暗な氣がしてならなかつた。父と同じやうに毎晩燈臺の燈りを守つて、年をとつて、一生波の音を聽いて死んでしまうのかと思ふと、何のために生まれて來たのかと自分で自分の生活に愛想がつきてしまふこともあつた。

しかし本を讀むことが學校時代から好きであつたし、一日々々と丁度霧が晴れてゆくやうに英語などの意味がだんだんとわかつてゆくのがうれしかつたので、暇を作つては辭書と首つ引きで本を讀んでゐた。

高い燈臺の上に燭をつけにゆく時でも、懷には英語の本と辭書を入れて梯子を上つて行つた。そしてどうかする

と燈臺の上で夜明け方まで本を讀んでゐることもあつた。

「おれは世間に出て、もてはやされるやうな人間にならなくたつていゝや。かうやつて一生靜かに好きな本さへ讀んでゐることができれば……」とこんなあきらめがつくこともあつた。自分でも自分のあきらめを悲しいとは思ひながらも。

夏になつて文吉だの金助だのが夏休みで東京の學校から歸つて來た。二人はこの春から東京の學校へ移つてゐたのであつた。

金釦の制服を着てバスケットを提げて船から棧橋へ下りてゐる文吉の姿を、畑の中に働きながら見た時、虔作の胸はさすがに暗くされてしまつた。

虔作が夜の燭を燈臺の上に運んでゆく時であつた。虔作は高い燈臺の窓から下の砂濱を見た。

落日が眞つ赤に濱を照りつけてゐた。

眞つ白な大波が燈臺の直ぐ下の黑い岩をたゝきつけてゐた。

虔作は不圖歌の聲を聽いた。

黑い岩の上には二人の男が立つてゐた。文吉と金助であつた。

打ち寄せて來る怒濤の前に立つて二人は校歌をうたつてゐるのであつた。勝ちほこつたやうなその聲、希望にあふれたやうな笑ひ聲！

虔作は叩きのめされたやうになつて燈臺の硝子窓に凭りかゝつて二人を眺めてゐた。

虔作は文吉や金助が村にかへつて來てゐる間は畑に出ることさへなるべくしないやうにしてゐた。夏休み中、燈明

家から一歩も外へは出まいとすら考へた。

一昨日の午後であつた。虔作は濱の松林の裏に住んでゐる唐五郎といふ盲人が急に病氣がひどくなつたといふので松林の中を突つ切つて唐五郎の小屋まで走つて行かなければならなかつた。

虔作はその途中の松林の中で文吉と金助に出逢つた。急いでゐたけれど、二人に引きとめられたので松の根がたにしやがんだ。二人は東京のことや、東京の學生生活のことなどを誇張して、いかにも愉快さうに話した。

虔作は、自分にはのぞくこともできぬはなやかな世界の出來事をわざと大きな聲で聽かされるやうな氣がしてならなかつた。だから一刻でも早く二人から別れたいと思つた。

「今度またゆつくり文ちやんの家にでも行つて東京の話をきかしてもらはうよ。今日はおらこれから唐五郎の小屋までゆかんけりやならんで……」

「唐五郎つてあの盲目の唄うたひだらう。」

「あゝ虔ちやんはいゝ友達を持つてるのうはゝはゝはゝ……」

「ちや、親友の病氣なのか。急いで行きたまへはゝはゝはゝ……」

「すまんけど今日は失敬する。」

虔作はやつと二人からのがれることができた。

「小學時代の秀才だよあれでもはゝはゝはゝ……」

「小學だけの秀才だよはゝはゝはゝ……」

「十五にして神童、二十にしてぼんくらなんだよはゝはゝはゝ……」

虔作は二人が自分のうしろから笑ひながら高い聲で話してゐるのを聽いた。
虔作はたまらなく腹立たしかつた。かれはうつむいたまゝ松林の砂を踏んで歩いて行つた。
虔作はどんなに苦しい思ひをしても東京に出て學問をしたいと思つた。そして文吉や金助を驚かしてやりたいと思つた。
昨日もそのことで父に相談した。
「東京に行つて學問するなんて、そりや金持の子のすることぢや。親一人子一人の貧乏な家でどうして東京へゆけるか。お前はこの貧乏な病身な父を捨てゝ行くつもりか?」
父にわがまゝを云つて見ても、結句父の言葉には勝てなかつた。それでもかれは東京へゆくといつては一日父をこまらせたのであつた。

虔作は燈臺の下の岩のあたりを歩いて見た。松林の裏の唐五郎の病氣のことが氣にかゝつて仕方がなかつた。
かれは不圖黒い岩の上に白い翼の鳥の死骸が落ちてゐるのを見出した。
燈臺の火を目あてに飛んで來る鳥が、時折、燈臺の硝子窓に頭を叩きつけて死ぬのであつた。
虔作は翼を折つてしまつた鳥の死骸をかゝへて見た。不吉な豫想が浮かんで來て仕方がなかつた。
「もしかしたら唐五郎が死ぬんぢやないか知ら!」
唐五郎はもと上手な漁師であつたが、盲目になつてからは唄をうたつては、わづかの錢をもらつて、妻も子もないあはれた生活を、松林の裏の小屋の中に送つてゐるのであつた。不幸はさらに不幸を生んだ。

盲目になつた唐五郎の聲は人間の聲とも思はれぬほどの美聲で、秋の月の夜など濱でうたつてゐる唐五郎の聲を聽くと濱中の人の心が打ち沈んでしまふくらゐ寂しい、いゝ聲であつた。

それが二年ばかり前からだん〳〵かすれ聲になつて來た。最初は誰も變だなと思つてゐたのであつたが、しまひには唐五郎の肺がわるくなつたといふことがわかつた。

唐五郎が肺をわづらつたといふ噂が立つと同時に誰も唐五郎に唄をうたはせるものがなくなつてしまつた。唐五郎自身でも、

「おれは濱の衆に惡い病氣でもうつしたらすまぬから。」

といつて、濱の家をたゝんで、自分で松林の裏の小屋に移つて行つたのであつた。

小屋の中はたゞ板が張つてあるばかりで、板の上には藁が蓆がはりに敷かれてあつた。

唐五郎の病氣をこはがつて滅多に小屋をたづねてやる人もなかつた。

處作だけは唐五郎が可哀さうでならなかつたので、仕事の暇を見ては松林の裏の小屋をたづねて行つて、濱でとれた魚だの、畑の野菜だのを持つて行つてやつた。

「處作もよつぽど變り者ぢやのう。」濱の人たちは、いつもつくねんとして松林の中を歩いて來る處作の姿を見ては噂をしてゐた。

「小學校時代はかしこい子ぢやつたが、大きうなつたらよつぽど馬鹿になつたやうぢや。いつもぼんやりしてる。」などといふ人もあつた。

雨の降る日など殊に松林の中はさびしかつた。

　そんな時小屋をたづねてゆくと唐五郎は低いしやがれ聲で唄をうたつてゐた。そして自分で自分の聲を聴くやうに首をかしげてゐた。

「どうしたんだらう。おれのあの美しい聲はどこに行つてしまつたんだらう、もう二度とあんないゝ聲は出て來ないのか知ら？」とでも言ひたさうに寂しい顔をして雨の音を聴いてゐることもあつた。

「なあに、また病氣さへよくなれば、昔のやうな美しい聲が出るよ、案じないがいゝよ唐五さん。」

「ほんたうに美しい聲がまた出るやうになるかのう虔さん？」

　そのやうな時微笑をふくんだ唐五郎の顔を見るのは悲慘であつた。

　唐五郎の病氣が氣になつて仕方がなかつたので、虔作は濱から死んだ白い鳥を抱いたまゝ松林の中を走つて行つた。今日は文吉にも金助にも逢はなかつたことを喜びながら、小屋の方へ近づいて行つた。

「唐五さん！」

　小屋の中からは何の答もなかつた。

「唐五さん、濱から鳥を持つて來たが……」

　かれは小屋の中をのぞきこんだ。

「虔さんか？……」

　藁の中にへしつぶされたやうになつて、唐五郎は苦しんでゐた。

「おや、どうしたんだい？」

「今朝がたから急にさしこみが來たんで……」

「そいつは困つたなあ……」
慶作は小屋の中へ飛び込んで行つて、唐五郎の腰を抱へるやうにして一時間ばかりもさすつてやつた。
「おかげでたいへん樂になつた。慶さん濱で鳥を取つて來てくれたんかい？」
唐五郎は手をのばして鳥を手探りに探つて見た。
「大きな鳥だなあ。」
「唐五さんに喰べさして上げようと思つて持つて來た。」
「ありがたう。しかし今日はもう喰べられない。」
「どうして？」
「何だか胸がつかへたやうで、それにその鳥だつて昨夜までは廣い海の上を自由に飛んでゐたんぢやらうが、今朝がたでも燈臺の硝子窓に頭を叩きつけて死んだのだらう。はかないものぢやのう慶さん。わしも今日はその鳥と同じやうに硝子窓に頭を叩きつけなけりやならぬかも知れぬ……」
「ばかなことを。もうぢきに病氣はなほるか……」
「いや、今度は駄目らしい。わしが死んだらその鳥をわしといつしよに墓に埋めてくれよ慶さん。わしは死んでゆくにしても妻もなし、子もなし、墓の中にたつた一人で眠るのぢやからのう……」
慶作はさうつと涙を拭いた。
その日も夕燒の空は眞赤に血のやうにいろどられてゐた。
唐五郎は夕燒に照らされながら血を吐いて死んだ。

唐五郎が死んでも濱の人たちは誰も近づいて來なかつた。

唐五郎の美しい唄の聲に、靜かな秋の夜を味つた人たちも、今では唐五郎の死んだといふ噂を聽いて厄介拂ひでもしたかのやうに感じるのであつた。

唐五郎がまだ達者で船に乘つてゐたころ、いつしよにサガレンまで漁に出かけて行つたといふ三人の漁師が來て、虔作とともに唐五郎の死骸を棺に入れたり、お通夜をしたりした。

濱に落ちてゐた白い鳥の死骸は虔作が唐五郎に抱かせて棺の中へいれてやつた。

燈臺の中の虔作の家にはいつも漁師の子供たちが集つて來ては、虔作に學校の稽古をしてもらつてゐた。だから漁師の子供たちだけは虔作がいひつけることなら何でもよろこんでした。十五六人の濱の子供たちは虔作のうしろから松林の中を歩いて行つた。

子供たちは草を分けてはいろ／＼な秋草を手折つた。みんなが抱へきれないほどたくさんな秋草を手折つて松林の裏の小屋へ集つて行つた。

虔作は子供たちが運んで來た秋草の花で唐五郎の棺をかざり立てた。

夕方一人の納所が來てお經を讀んだ。花でかざられた唐五郎の棺を眞黒な二人の漁師が、砂糖桶でもかつぐやうにしてかついで行つた。

かあんかあんと寂しさうに鉦の音が秋草の中に聞えた。草が深かつたのでともすれば歩いて行く納所の小さな袈裟

姿は、草の中にかくれてしまつた。

濱の漁師の子供たちは手折つた草の花をずつと砂山の墓場まで撒いたり、植ゑたりして行つた。

墓もまた花でかざられた。

唐五郎は白い鳥を抱いたまゝ虔作や子供たちの手で、しづかに墓穴の中へ入れられた。

「もつとたくさん花を取つて來い！」と虔作は子供たちにいひつけた。

子供たちは蜜蜂のやうに秋草の中を飛びまはつて、腕いつぱい花を手折つて來た。そして唐五郎の棺の上に花の雨を降らせた。

「もうそれでたくさんだ。」

花が墓穴を埋めてしまつた。

みんなは砂を運つては唐五郎の墓を埋めた。

虔作は松林の中を濱の方へかへつて來た。

日が沈んでしまつた。

どこかで蜩が鳴いてゐた。

「唐五郎も死んでしまつたのだ！」と考へるとたまらなくなつて來るのであつた。

防風の白い小さな花が濱いちめんに咲いてゐるのをかれはいつまでもぢいつと見つめてゐた。

黒い岩には眞つ白な波が叩きつけられてゐた。

千鳥が鳴いた。

かれは砂の上にしやがんでしまつた。

文吉や金助が學校へ行つて、かれ一人だけが濱にとりのこされて、明けても暮れても浪の音を聽いてゐるやうな單調な生活に、たゞ一つの慰めは英詩を勉强することゝ唐五郎の美しい唄を聽くことであつた。

「虔さんうたはうか！」唐五郎はよくさう言つた。そして見えない眼をみはるやうにして沖の波の音を聽いた。

そこにある黑い岩の上で唐五郎はよくさびしい磯の唄をうたつた。

唄を聽いてゐると自分の魂が海の深い底にでも惹き入れられてゆくやうに悲しかつた。

そのころのことを思ひながら虔作は黑い岩のあたりを見た。そこにはもう唐五郎の姿もなく白い鳥の死骸も見えなかつた。

「唐五郎さんは死んだのだ！」

自分で自分の心にはつきりと言ひきかせても、なほそこいらから唐五郎が美しい聲で唄をうたつて來るやうな氣がしてならなかつた。

濱の棧橋の方で船の汽笛の聲がした。

虔作は驚いて立ち上つた。

夕燒の空がだん〳〵暗くなりかゝつて來た。

かれは急いで燈臺の方へ走つて行つた。

「どうしたんだい、歸つて來ないので、心配してゐたよ。」

父はランプを抱へたまゝ、薄暗い土間に立つてゐた。

「お父つあん、からだの鹽梅はどう？」

「あゝ大したこともあるまい。しかしお前が來てくれたので助かつた。すまぬが今夜もお前に昇つてもらはうか。父は氣の毒さうにランプを慶作の前へ出した。

「無理をせぬがよい。わしがランプを持つて昇つて來るで、お父つあんは少しゆつくり養生しておくれよ。」

「お前ばかりに働かせてすまんのう。」父はさも〳〵氣の毒さうにランプを慶作にわたした。

慶作は英詩の本を懷に入れて、ランプをさげて燈臺の上へ階段を昇つて行つた。

「本が好きぢやなあ、また上で夜つぴて本を讀むんぢやらうはゝはゝ……おれも寂しいで、すこし讀んだら下りて來てくれ、秋の夜は長いで、話しでもしようよのう……」

慶作は笑ひながら階段を昇つて行つた。

岬の燈臺の燈が星のやうに高く暗の中にかゞやいた。

燭の直ぐ下では慶作が熱心に英詩の本を讀んでゐた。

暗い海の上をふたゝび汽笛の音が響いた。

濱の棧橋を一隻の汽船がはなれた。

船は沖へ沖へと暗い海をしづかに滑つて行つた。

船の甲板の上には東京の學校へ歸つて行く文吉と金助が潮風に吹かれながら立つてゐた。

二人は遠ざかつて行く故郷の濱の家々の燭を名殘惜しげに眺めてゐた。

船がだん〳〵陸地から遠ざかるにつれて濱の燭が見えなくなつてしまつた。そして最後にたゞ一つ高い燈臺の燭のみが浪の上に、暗の中に星のやうにかゞやいてゐた。

文吉も金助もいつまでもたゞ一つの故郷の懐かしい燈臺の燭を見つめてゐた。

ともすれば燈臺の燭が浪にかくれて見えなくなることもあつた。そんな時は、まるで貴い物でも取り落したやうにあわてゝ甲板の上を走りながら岬の燈臺の燭を暗の中に探すのであつた。

「あゝ、あすこに、あれだツ！」

「どれ、どこに……」

「あれだ、あの燭だ！」

「あゝほんたうに、岬の燭が見える！」

その刹那の文吉と金助にとつてはこの世界で一番なつかしいもの。一番貴いものは岬のたゞ一點の燈臺の燭であつた。

岬の燈臺の燭が見えてゐる間は二人はまだなつかしい故郷の濱を自分等の眼に見ることができるやうなうれしさと希望とを持つことができるのであつた。

たゞ一つの岬の燈臺の燭は二人にとつては星よりも、月よりも貴いものであつた。

いよ〳〵船が沖へ遠ざかつて行つた。

海が暗くなつて行つた。

燈臺の燭が浪の下にかくれがちになつて行つた。

星だか、燭だか區別がつかなくなつて行つた。

「あゝもう故郷の最後の燭が見えなくなるんだ！」

二人はかう言つて水平線の下に沈んでゆく岬の燈明臺の燭をながめてゐた。

二人は相抱くやうにして最後の燭の影を見つめてゐた。

偉大なる英雄の最後の靜かな呼吸でも聽くかのやうに、二人は息をこらして燈臺の燭を見つめてゐた。

「あゝたうとう見えなくなつた！」

文吉が溜息をついて金助の肩に手をかけた。

二人は沈默つたまゝ岬の燈臺の方を向いて頭を垂れてしまつた。

文吉と金助が沖の船の上で燈臺の方を向いて頭を垂れてしまつたころ、岬の燈臺の上では虔作がしきりと英詩の本を讀みながら、時々燈臺の燭に油をついでゐた。

長谷寺詣で

大和の春は花のさかり、五重の塔も、七堂伽藍も柔かな霞の雲につゝまれてゐました。

長谷、御室、法隆寺と大和の寺々をめぐる旅人や遍路たちは菜の花につゝまれた大和平原を或は南北に或は東西に貫いてゐる路をひつきりなしに歩きました。

空には雲雀が高鳴きしてゐました。

御詠歌の聲がしづかに、菜畑の間を歩いてゐる遍路の群から流れて來ました。

空にも地にもたゞ平和な幸福のみが漂うてゐるやうに思はれました。

今日は長谷寺の奥を三里四里たどつて這入つた山奥の御堂へ葛城の千壽姫がお詣りをなさるといふので、畔にも大和川の土堤の上にもたくさんな人たちが、まだ夜が明けきらぬうちからつめかけて、美しい千壽姫を見にまゐりました。

葛城の大臣といへば畿内はもとより中國にも東にも鳴り響いた立派な人でありました。千壽姫は葛城の大臣のひとりむすめとして生まれ、この世界の幸福といふ幸福は姫一人でたのしんでゐるやうに羨まれてゐました。

しかし千壽姫は世間の人たちが想像してゐたほど幸福ではありませんでした。

千壽姫には何不足もありませんでしたが、たゞ一人のお父さまの葛城の大臣は千壽姫が生まれて間もなく世を捨て

て長谷の山深くこもつてひたすら佛道を修めておいでになるのでした。
このごろでは世間では葛城の大臣のことを長谷の聖といつて誰か彼か生佛さまのやうにあがめてゐました。
しかし長谷の聖はたれが山奥の御堂へたづねて行つても、滅多に人に逢ふことをなさいませんでした。よしんばたま〳〵人にお逢ひになるにしても御堂の奥の眞つ暗な部屋でお逢ひになるのでしたから、長谷の聖はどのやうなお顔をしておいでの方だか誰もそれを知ることはできませんでした。
或る人は「長谷の聖はまことに迦陵頻迦のやうなお聲を持つたお方だ。」といひました。
「お顔もきつと御佛のやうに優しいお美しい方にちがひない。」といふ人もありました。
しかしまた口惜しげに「いや、さうではない。あんな險しいところでなければ人にお逢ひなさらぬところをみれば、長谷の聖はきつと醜いお顔のお方にちがひない。」といふ人もありました。このごろでは「いや、長谷の聖は鬼のやうな恐ろしい顔のお方ぢや。」だの「いや、醜い病氣のために、世間の人たちに顔を見られるのが、つらくて山におはいりになつたさうで、今ではもうお顔も手も爛れてしまつて、體中に蛆が湧いてゐるさうぢや。」などと惡口をいふ人もありました。
千鶴姫は、姫を生んで間もなく母君が亡くなられたこと、つゞいて世をはかなんで葛城の大臣が長谷の奥にこもられたといふことだけをきいてゐましたが、その他には何もお父さまについては知ることができませんでした。
大きく〳〵なるにつれて長谷の奥の御山にお父さまをたづねて見たいといふ念は千鶴姫の心に燃えて來ました。

「お姫さま、そのお考へは御無理もないことでございますが、思ひ止まりあそばした方が宜しいでございませう。」千壽姫が自分の心を打ち明けた時、はたの老女たちはかういつて姫の決心をひるがへさせようといたしました。

老女たちの胸にはもし姫がたづねて行つて、人の噂の通り、鬼のやうな恐ろしい聖のお顔を見なければならぬことにでもなつたら、姫に一生悲しい思ひをさせなければならぬといふ心配があつたのです。

「ほんたうにお父さまは人の噂の通りに癩病人のやうなお顔をしていらつしやるのか知ら？　それでも逢つて見たい。でも、ひよつとしたら御佛のやうに貴いお姿の方でいらつしやるかも知れない。どつちにしてもあたしにとつては天にも地にもたゞ一人のお父さまだから、どうしても逢つてお顔が見たい。お言葉もうけたまはりたい。」姫はたゞ一人で小さな胸を痛めました。

姫は夜も晝もまだ見ぬ長谷の奧の聖の俤のみを胸にゑがいて苦しみました。

或る時は紅蓮の炎の中に突つ立つた不動明王の姿となつてまだ見ぬお父さまが幻にあらはれて來ることもありました。

或る時は姫がいつぞや法隆寺の廊下で見た乞丐のやうに全身眞つ黒に腐つた人となつてあらはれて來ることもありました。

世間の人たちが「長谷の聖はかつたい坊ぢやさうな」「いや、蛇身ぢやさうな。それゆゑに、人に顔を見せるのを嫌つてゐなさるさうぢや。」などと遠慮のない噂をするにつけて、一層お父さまに逢ひたいと思ふ心が、姫の胸につのつてまゐりました。

いよ〳〵今日は姫の行願がかなつて、姫は牛車に乗つておつきの男や女たちをつれて葛城の里から長谷の山奥へと旅をいそぐのでありました。

世間の人の話では、萬人すぐれた善根をつんだ人でなければ長谷の聖に逢ふことはできぬといふことでありましたから、千壽姫は、館を出ます時から三臺の牛車に寶の山を積みかさねさせて、道に逢ふ貧しい人たちにたくさんな施物をいたしました。

牛飼の童たちはお館から長谷のお寺まで幾里の間、車の中の黄金を摑み出しては道の兩側に撒きました。

蓮華草が咲きみだれてゐた道の上に時ならぬ黄金の花をかざり立てました。

姫は牛車の簾をかゝげて春の野邊をながめました。

「千壽姫さま。あなたさまこそ大慈大悲の觀世音さまでございます。」

「何といふお美しいお姫さまであらう。」

「何といふお立派な菩薩さまだらう。」

「お姫さまありがたうございます。」

車の上の黄金を爭うて拾ひ集めた人たちは道の兩側に土下座して、千壽姫を拜みました。

姫の車はおひ〳〵に山にかゝりました。

山の麓には三千のお坊さまたちが集まつてお勤めをしてゐました。

姫は老女にいひつけて三千のお坊さまたちに御供養をいたしました。

三千のお坊さまたちは千壽姫の供養をよろこんでいたゞきました。

「あなたはまあ何といふ尊いお心がけのお姫さまでいらつしやいませう。今の世にありがたい御佛の御姿を拜むやうな心持ちがいたします。」かういつてお坊さまたちは千壽姫の前に跪きました。

こんな風に誰にも彼にもたゝへられますと、普段は内氣な謙遜な千壽姫もいつの間にか自分の供養お施物を人にも誇つて見たいやうな氣にもなるのでした。また菩薩のやうに美しいといはれた自分の姿を世にもなく美しいものと信じたくなつて來るのでした。

姫は谷川のほとりに車をとゞめさせました。

花が咲きみだれてゐました。鶯が啼いてゐました。姫は靜かによどんでゐる谷川の淵に立つて、水の面を覗いて見ました。そこには白百合のやうな美しい姫の姿が寫つてゐました。

姫はしばらく自分の姿に見とれてゐました。菩薩のやうだといつて自分をたゝへた人々の言葉は眞實であると思はずにはをれませんでした。

花のやうに、孔雀のやうに美しい自分の姿を眺めてはいひやうもないうれしさと共に、女らしい誇りも湧いて來るのでした。

姫の車は或る山門の前で立ちどまつてしまひました。そこからは道が嶮しくて車をやることができませんでした。

「どうぞ御輿を召しますやうに。」

老僧に手をとられて、そこからは寶石をちりばめた輿に乘つて、花の雲を分けて御山に登つてまゐりました。

瑠璃鳥の啼いてゐる一本の高い老木の下に姫は輿をとゞめさせました。

「拙僧は近江の志賀からまゐりましたものでございますが、石山の奥に寶塔を建立いたしたいのでございます。何卒幾分の御寄進を仰ぎたく、かくは日本國中の寺々をめぐりましては旅の方々にお願ひ申してをるのでございます。」もう八十にも垂んとした一人の坊さんは荒布のやうに破れた法衣を纏うて冷たい土の上にぬかづいてゐました。

「お坊さま、あなたはいつころから左樣な御發願をなさいました。」

「はい、五十年前からでございます。」

「五十年ですつて？」姫は眼をみはつて老僧を見ました。

「左樣でございます。日本國中を經めぐりまして、或る時は盜賊に襲はれ、また或る時は毒蛇に追はれ、或る時はたゞ一枚の瓦、たゞ一枚の礎石を寄進するために十里二十里の道を歩きますこともございますれば、たかく十年や二十年では一つの御堂も建ちませぬ。」

「ではあなたは一生おかゝりになつて石山の寶塔一つを建立なさるのでございますか？」

「はい、拙僧の力で一生に寶塔一つ建立いたしますことができますれば、この上もない佛果と存じます。もし拙僧の一生に建立いたすことができませぬやうでしたら、法弟等にも拙僧の志しをつがせまして百年二百年の後にはきつと石山の奥に寶塔を……」

「ほつほつほつまあお氣のながいこと。ではあたしが今こゝで一日、いや、一刻でその寶塔を建立させてあげませう。」

びつくりして目をみはつてゐる老僧の前へ姫は手づから黄金の包みを二つ取り出してやりました。
「さあ、今日、今からすぐ近江へかへり、その石山の奥へ寶塔を建立なさい。これだけ黄金があれば立派な寶塔ができませう。でもお坊さまといふものは氣のながいものねえほつほつほつ……」
千壽姫は輿をすゝめて山を奥へ〱と登つてまゐりました。
「お姫さま、あれに見えます御堂にちがひありませぬ。お父さまはあすこでおつとめをなすつておいで遊ばしますでございませう。」
老女は霞につゝまれた峰の上の伽藍を指さしました。

いよ〱お父さまにお目にかゝることができるのだと思ふと姫はうれしくてたりませんでした。早く〱輿を飛ばしてゞもゆきたいくらゐでした。けれども、それと同時に、自分のやうな者が、長谷の聖と呼ばれてゐるお父さまに逢へるか知らといふ心配や、またお目にかゝることができたとしても、もしお父さまが世間の人たちの噂のやうに恐ろしい鬼のやうな顔の人であつたらどうしようなどといふ恐れも湧いて來るのでした。
「ほんたうにあたしのやうな女にお逢ひくださるでせうか？」
「だつてお姫さまあなたのやうなお美しいお子さまをごらんなされたばかりでも、お父さまはまあどんなにかおよろこびなさいますことでせう。それにあなたさまは今日も葛城の里からこの御山までお越し遊ばす間、何千何萬と申す貧しい人たちにお慈悲を施しなされましたし、三千のお坊さまに御供養をなされ、その上に五十年かゝつてもまだで

きなかつた岩山の寶塔をたゞ一刻で建立ができまするやう、あれほど莫大な御寄進をなさいましたではございませんか。これほどの善根をお積みなされたあなたさまでございますもの、どんなにかよろこんでお逢ひなさるでございませう。」

姫は老女たちの言葉にはげまされて山を登りました。

或る高い門の前で老女やおつきの人たちは立ちどまりました。そして姫だけがたゞ一人で深い御堂の奥へはいつてゆきました。

姫はたゞひとりで奥へ〱と歩いてゆきました。半日くらゐ歩いたと思つてもまだ長谷の聖の部屋にはゆきませんでした。

最初はひろい廊下で、そこからは空も見え、小鳥の聲もきこえましたが、歩一歩と廊下は狭くなつて、窓は小さくなり暗くなつてまゐりました。

どこからともなしに恐ろしい嵐の聲が暗い奥殿の方から聞えて來ました。大きな蝙蝠が姫の寶石をちりばめた髪かざりや、長い袂をかすめて飛びました。

或る岩の門に來ました。そこからは眞つ暗な窟になつてゐました。窟のなかをしばらく歩いた時姫は遠くに星のやうなたゞ一つの燈明を見出しました。その燈明を見出した時姫ははじめて救はれたやうな氣になりました。

でもその燈明まではなか〱遠うございました。その燈明を目あてにして歩いても歩いてもほんの螢火くらゐにしか見えませんでした。時としては闇のなかにかくされた星のやうにまつたく見えなくなることもありました。もしこのまま暗い窟のなかで死ぬのではないかと思ふと、お父さまに逢ひもしないで死ぬことがたまらなくなつて來るので

した。

ずゐぶん長い間歩いてやつと一つの燈明に近づくことができました。

長い廻廊の上り口に髪も鬚も眞つ白な老僧が燈籠をさげて立つてゐるのでした。

老僧は無言のまゝ燈籠をさげて姫の先に立つて廻廊をしづかに歩いてまゐりました。

そこからは世界が急にひろくなつて、大伽藍が暗空に高くそゝり立つてゐました。

どこからともなく柔かな風が吹き、この世のものともおもはれぬ美しい鳥の聲が聞えて來ました。

老僧は或る一つの部屋に姫を導いて、燈籠をさげてどこかへ行つてしまひました。

しばらくすると部屋中に咲きこぼれた花の香がそよかぜにつれて漂うてまゐりました。

春の嫩草を撫でてゆく微風のやうな衣摺れの音がして姫の直ぐ前に立つた人がありました。

部屋が眞つ暗でしたから誰がそこに立つたか少しもわかりませんでした。

「あなたはどなたです？」と姫は泣き出しさうな聲でたづねました。

「千壽姫。わたしはあなたの父の葛城の大臣と呼ばれた男なんです！」と暗い影は答へました。その聲は銀の鈴のやうに美しうございました。

「お父さまッ！　お父さまですかッ！」もう姫はたまらなくなつて、聲の方へ手をのばして走り寄りました。しかし手をのばしても、走り寄つて見てもたゞ黒い影ばかりがそこに立つてゐるやうで、どうしても手に觸れることはできませんでした。

「お父さまッ！　どうぞあなたの御衣の裾にでも觸らしてください。」

「まだあなたはわたしに觸つてはいけません。」

「でもお父さま、わたくしは今日まで十六年の間どんなにかお父さまを待つてゐたでございませう。わたくしが生まれて間もなくお母さまはお亡くなりあそばしたさうで、わたくしはたうとうお母さまのお顏を知りません。お父さまはわたくしを家に置いてこゝの御山におはいりになつてしまつたので、わたくしはたうとうお父さまのお顏さへ憶えてはをりませぬ。お父さまわたくしを可哀さうだと思つてください。わたくしほど不仕合せな人間がありませうか。お母さまも、お父さまも知らないんですもの。」姫はすゝり上げて泣きました。

「姫よ、泣くんぢやありません。あなたの心はお父さんにはよくわかつてゐる。たゞ一人の自分の娘に逢ひながらわたしもあなたの顏を見ることができない。わたしだつて一日でも姫のことを忘れたことはありません。わたしはあなたが今朝都の町で王樣の行列をつれて通られたことも、あなたが、黄金を貧しい人たちにまきちらされたことも知つてゐます。道ばたの乞食に二包みの黄金をめぐまれたことも知つてゐます。あなたが御山の土を踏まれた時、あなたの足の寶石のかざりがかすかな音を立てたのも知つてゐます。あなたの足音が一歩々々ちかづいて來るのをわたしは十六年の間どんなにか待つてゐたことでせう。あなたがお父さんを見たいと思つてゐられた心にもまして、わたしは姫に逢ひたいと思つてゐました。あなたは今わたしの直ぐ前に來てくだすつた。わたしはうれしい。だけどわたしにもあなたを見ることはできないのです。姫！　あなたこそこのお父さんにあなたの美しい顏を見せてください。」

「でもお父さん、あなたは長谷の聖とも呼ばれるほどの立派な修行をおつみなされた方ですから。暗のなかでもわたしの顏がお見えになるでございませう。」

「わたしにはこの部屋の中に咲いてゐる花は見えます。」

「えゝッ、花が咲いてゐますつて？　このお部屋の中に？」
「花ばかりではありません。この部屋には小鳥も飛んでゐます。星もかゞやいてゐます。」
「あの小鳥や星が？」
「さうです。わたしの眼には小鳥も星も見えます。だけどたゞ姫の顔だけが見えません。」
「お父さま、お父さまには暗いこのお部屋の中の何も彼もお見えになつて、それでなぜわたくしの顔だけがお見えにならないのでせう？」
「お父さんにもわかりません。姫よ、わたしにはたゞあなたの美しい髪かざりだの、その美しい長い袂だのははつきり見えるに、どうしてもあなたのお顔が見えません。姫よどうぞわたしの手に觸らせてください！」
お父さまは兩方の手をのばして姫に觸つてごらんなさいました。
「おう、ほんたうに大きくなんなすつた。おうこの髪の房々としてなめらかなこと。だがどうしてもお父さんにも姫の顔は見えない。」
お父さまどうか明るいところへわたくしをつれて行つてください。そしてお父さまのお顔をわたくしに見さしてください。そしてまたわたくしの顔も見てください。」
「それは駄目です。こゝではどこまで行つてもたゞ暗ばかりがつゞいてゐます。しかしこゝの御山で修行をしてゐる間には、夜は眞晝より明るくなつて來るのです。暗の中にゐて人は美しい花も、鳥の翅をも見ることができるやうになるのです。光りの世界では見ることのできぬものをも見ることができるのです。この暗のなかでは柔かな草の葉の中を流れてゆくよろこびの泉をも見る　とができます。花を撫でてゆく微風の笑顔をも見ることができます。」

「それだのにどうしてわたくしの顏がお父さまにお見えにならないのでせう？」

「わたしにもそれはわかりません。たゞわたしにはいつかはまた姫がわたしをたづねて來てくださることや、いつかはきつと姫の顏を見ることができるといふ希望の影だけは見ることができます。」

「お父さま、それはほんたうですか？」

「この暗の世界に生まれた希望の影で、消え失せてしまつたものは一つもありません。」

「ではお父さま、わたくしはまたまゐります。きつとお父さまのお顏を見にまゐります。わたくしには今では一つの星も見えませんが、きつとお父さまと同じやうにこの暗い部屋で何も彼も見えるやうになる日を樂しみにして、またおたづねいたします。」

「お父さんもその日を待つてゐますよ。」

「ではお父さま……」

「もうお歸りですか。」

「はい……」姫は暗い甃の上に泣き伏してしまひました。

姫が立ち上つた時にはもうお父さまの影は見えませんでした。そしてそこにはさつきの老僧が燈籠をさげて、姫を迎へに來てゐました。姫は老僧の後から窟を出てまゐりました。

葛城の里に歸つて來た姫は毎日御山で逢つた暗い御堂のなかのお父さまのことばかりを考へてゐました。

「ほんたうにあの暗い御堂ではお父さまにもあたしが見えないのか知ら？　お父さまは人の噂のやうに恐ろしい、醜い顔をしていらつしやるのではないか知ら？」

姫は毎日お父さまのお顔をいろ〳〵に想像しては、尚一度御山にたづねてゆく日のことばかり考へてゐました。

秋になりました。御堂も長谷も燃ゆる紅葉につゝまれてしまひました。

姫はまた老女や伴のものを大勢つれて長谷の奥の御堂へ出かけました。

姫は葛城の里のお邸にありつたけの黄金だの寶物だのを十臺の牛車に積んで出かけました。

「でもお姫さま、少しはお邸に黄金を殘してお置きになりませんでは早速お困りになりませう。」といつて老女たちは姫をとめましたが、姫はたうとうきゝいれないで、七つの倉の扉を開けてしまひました。

大和川のほとりには近くの國々から集まつて來た人たちがわれさきにとひしめいて千壽姫を待つてゐました。

「千壽姫さま！」

「大慈大悲の觀世音。」

「何といふお美しいお姫さまだらう！」

「この春拜みました時よりか、一層お美しくおなりでしたなあ。」

道ばたにあつまつてゐる人たちはかう言つては近づいて來る姫の牛車をとりまくやうにいたしました。

みんなに褒めたゝへられますと普段は謙遜な姫の心もおのづと自分をえらくするやうな氣になつてしまうのでした。

姫は自分の美しい姿を天上の星にもなぞらへたりするやうな氣にもなりました。

姫は家來たちにいひつけては牛車のなかゝら黃金だの、寶だのを草の上にまきました。人々は獸のやうに爭つてはわれさきにと掻き集めました。

姫はまた御山の麓では五千の坊さまに供養を致しました。

姫はまたこの春、老僧と逢つた高い木の下で三人の老僧に出逢ひました。

「わたくしは三井寺の奧に大悲閣を建立いたしたいと思ひまして、今日まで三十年の間諸國を勸進して歩いてをります。」と一人の老僧がまをしました。

「わたくしは那智の奧に五重の塔を建立いたしたいと思ひ立ちまして四十年の間……」

「わたくしは比叡の奧に釋迦堂を建立いたしたく發願いたしまして六十年の間日本國中を歩いてをります。」

三人の老僧も姫の前にぬかづきました。

姫は六包みの黃金を三人の老僧たちに分けてやりました。

「お姫さま、それをお上げなされては葛城のお館には一包みの黃金も殘つてはをりませぬ。」といつて老女たちはとゞめましたが姫は運んで來た黃金をみんなに分けてしまひました。

或る門のところからは、姫はたゞ一人で奧の方へ歩いてまゐりました。

そしてこの前と同じやうにやがて暗い簾を通りました。

或る門のところにはこの前の髮の眞つ白な老僧が燈籠をさげて姫を待つてゐました。

姫は老僧にみちびかれて暗い御堂の中にはいつてまゐりました。

老僧は燈籠をさげてどこかへ消えて行つてしまひました。

暗い影の人が近づいて來ました。

姫はすぐにそれがお父さまであることを知りました。この前來た時よりか御堂の中は幾分明るくなつたやうに思はれました。

「わたしの姿が見えますか？　姫よ。」と美しい聲が暗のなかゝら響きました。

姫は影の方をながめました。

「やつぱり見えませぬ。ですけど、この前よりは何だか、幾らかお父さまのお姿がかすかに見えて來たやうな感じがいたします。」

姫は深い溜息をつきました。どうしてもお父さまのお姿を見ることができぬくらゐなら、このまゝ死んでしまつた方がいゝとも思ひました。それでもどうかして一目でもお父さまを見たいと思つて暗のなかをしばらくぢいつと見つめてゐますと、不思議にもお父さまの居のあたりと思はれるところに小さな星の光りが一つ見えました。最初は針の孔くらゐの小さなものでしたが、それが、だん／＼大きくなつて、しまひには立派な大きな星となつてまたゝきはじめました。

「おやツ、星が？　お父さま。」

「えツ星が見えるつてあなたに。姫、それはほんたうですか。」

「えゝ一つだけ星が見えます。」

「一つだけ星が見えるやうになりましたか、お父さまもはじめてこゝに來た時は何も見えなかつたのですが、二年三年と苦しんでゐる間に一つだけ星が見え、それから二つ見え三つ見えして今では幾千といふ星の光がこの暗い御堂の

なかで見えるやうになりました。もつと〳〵苦しんでみなければ駄目です。まだあなたの御心にはほこりがあります。僞りがあります。何も彼も捨てゝおいでなさい。さあ尙一度山をお下りなさい。そしてまたきつとお父さんをたづねて來てください。待つてゐますから……」

姫はまた泣く〳〵山を下つて葛城の里へかへりました。

葛城の里へかへつた千壽姫はしばらくは病の床についたまゝで、夜も晝もまだ見ぬお父さまのことばかり考へてゐました。

七つの倉にあつたものはこの姫の御山詣にすつかり出してしまひましたので、今では館には何一つ殘つてはゐませんでした。

最初は姫の衣を賣り、寶石の髮かざりを賣りして召使ひたちをもいたはつてゐましたが、今では一枚の衣にさへ不自由を感じるやうになりましたので、召使ひたちは一人去り二人去りして、おしまひには老女も逃げ、牛飼の童も姫一人を殘して去つてしまひました。

館の軒端には鳥が巣くひ、時雨は漏り、野分きの風は吹きこむやうに荒れ果て、かつては夕陽に映えた勾欄に、霜のやうに冷たい芒の穗が打ちなびくやうになつてしまひました。

姫はかしづく人もなく夜を日に恐ろしい荒野の中に住む心地して冬を迎へました。

「あれほどの善根を積んでさへあたしはお父さまを見ることはできなかつた。今では貧しい人たちに施しをしようた

つて一枚の衣も殘つてはゐない。あたしはたゞひとりでさびしく死ぬるより他に道はない。それにしても所詮死なねばならぬのなら、お父さまがいらつしやる長谷の奥の御山の土となつて死にたい。」と思ひましたので、姫はわづかばかりの身のまはりの物を背負ひましてたゞひとりで館を出ました。

館を出ます時はさすがに名殘が惜しまれて、姫はしばらく門のあたりをながめました。

この秋ごろまではいつも見事な車や輿などが置いてあつた車寄のあたりには、落葉がうづたかく重なつてゐました。車も牛も、牛飼の童たちが盜んで逃げてしまつたのでした。

かつて大勢の召使ひたちをひきつれて、牛車に乘つて行つた大和川のほとりを、姫はたゞ一人で、つきそふ人もなく歩いてまゐりました。

ながいあひだ病みつかれてゐました姫が、衣といつたところで破けたまゝになつた衣を着て、髮には何のかざりもなく、いつ櫛けづつたとも知れぬ髮をして大和川のほとりを歩いてゐるのを見た人たちは、どうしてもそれがかつて菩薩のやうに美しかつた姫といふことを夢にも想像することはできませんでした。

かつて牛車にゆられながら春のさかりの花をながめた大和の平原も、今は冬枯れてしまつて、鵲の群が灰色の空を飛んでゐました。

かつて雲のやうに集まつてゐた人々が、嵐のやうに姫をたゝへた道のほとりには道を埋めるばかりに蓬が生ひ茂つてゐました。

或る村はづれにさしかゝつたところでありました、姫は一人のお爺さんが枯れ草の中にしやがんでしきりに頭をさげてゐるのを見ました。

「何か御用なんですか、お爺さん。」姫は聲をかけました。
「はい、わたくしは昨日からまだ一度も御飯をいたゞいてをりませんので、どうかおめぐみ下さいますやうに。」
姫は一つ手前の村でこしらへてもらつたおむすびのことを思ひ出しました。姫は疲れてもゐましたし、おなかも空いてゐましたが、お爺さんを見るといかにも可哀さうでしたから、たうとう自分が背負つてゐたゞけのおむすびをお爺さんにやつてしまひました。
雪が降つて來ました。
姫は或る町はづれのさびしい並木道を歩いてゐました。
幾里歩いても人影一つ見ることもできないほどのさびしい雪の道がつゞきました。
姫は不圖自分の少し先を犬のやうに這ひながら歩いてゐる一人の男を見ました。
近づいて行つてよく見ますと、それは小さな車に膝のない左の片足を乘せて右の片足で雪を蹴りながらのそくさと雪の中を歩いて行く乞食だつたのです。
「もし〳〵。」と乞食は姫に聲をかけました。
姫は立ちどまつて乞食を見ました。
「どこの娘さんか知らないが、雪の中でわしはひどく難儀をしてゐる者だ。どうだね、わしの車をひいてむかうの町までつれて行つてくれないかねえ。」乞食は人の惡さうな眼をして姫を見ました。
「あたしにひけるかどうかわかりませんが、ひいて上げませう。」姫は乞食の車の綱を曳いて雪の中を歩みました。
「あゝ、おかげでわしもこれで樂になつた。娘さん、あんたはなか〳〵車をひくことが上手だ。あんたは前にも車を

ひいたことがあるかね……」

「いゝえ、ありません。」

「それにしてはなか〳〵上手だ。あゝ車といへば思ひ出すが、今年の春であつた、千壽姫さまがやはりこの道をこれはお見事な御車に乘つて長谷寺へおまゐりにゆかれたことがあつた。娘さん、あんたは千壽姫さまのお顏を拜んだことがあるかね？」

「はい……いゝえ……」姫は何といつて返事をしていゝのか困つてしまひました。

姫は乞食の車を曳いて一里ばかりの雪の道を歩きました。車を曳く堅い綱が、姫の柔かな皮膚に喰ひこんでしまつたので姫の手からは眞つ赤な血が滴つては雪の上に落ちました。雪の中でけつまづいたはずみに爪先からも血がにじみ出て來ました。

乞食と別れてから姫はなほ痛む足を引きずりながらたゞひとりで道を急ぎました。

「もし、旅の娘さん。」聲をきいて姫は振りかへりました。

人の善ささうなお爺さんが百姓家の中から出て來ました。

「あんたはどこまで行きなさるのだ。この大雪の中をたつた一人で。」

「長谷のお寺までまゐります。」

「長谷まで、それは難澁なことであらう。しかし見れば手や足から血が流れてゐるやうぢやが、どうなされた。まあ

ちよつとこゝへはいつて爐のはたであたゝまつていかつしやれ。」

お爺さんは姫を家の中のひろい爐のはたへ案内しました。

「それはたいへんだ。はやく藥をつけなくつちや。」お爺さんは藥をなすりつけては傷口をすつかりくゝつてくれました。

「それにあんたは見たところばかに弱つてゐなさるやうぢやが、御飯はたべなさつたか？」

「實は朝からまだ一度もいたゞいてはをりませぬ。」

「ぢや握り飯一つ持ちなさらぬのか？」

「はい何も持ちませぬ。」

「まあ可哀さうに。」お爺さんは大きなおむすびをこしらへて姫にやりました。

姫は生まれてはじめて人から貰つたおむすびを喰べました。

やさしいお爺さんに藥をつけてもらつて、たゞ一つのおむすびをいたゞいたゞけでしたが、姫は今までに、その時ほどうれしいと思つたことはありませんでした。

おむすびをたゞ一ついたゞいて喰べるありがたさは、とても三千や五千のお坊さまたちを供養した日のありがたさよりも、うれしさよりも一層しみ〴〵と姫の心に迫つて來るのでした。

「寒さうぢやなう、可哀さうにもひとつおむすびを上げよう。」とお爺さんは抱へながらおむすびをかゝへてゐる姫をいかにも氣の毒さうに見ました。そして尙一つあたゝかい大きなおむすびをこしらへてくれました。

お爺さんの親切な言葉を聞いてゐると、姫は生まれてはじめて人間のこゝろのあたゝかさ、人間のこゝろのかたじ

けなさといふものをしみ〴〵と感じました。

かゝへてたべてゐるおむすびの上にぽろ〳〵と姫の涙が落ちるのでした。

「こんな親切な人の心こそ御佛の心にちがひない。あたしは今その御佛の心に觸れたのだ。」とおもひますと、ありがたくて、かたじけなくてぢつとしてはをれなくなつてしまひました。姫は出しぬけに土間の上にひざまづいてお爺さんを拜みました。姫はかつて黃金をまきちらして善根を積んだなどと考へてゐた自分のたかぶつた心を恥かしいと思ひました。百姓のお爺さんの御佛のやうな心にくらぶれば自分の心は獸のやうだと思ひました。姫はこゝろからへりくだつてお爺さんを拜みました。

「滅相なことを！ これお娘、あんたは何をしなさる、わしのやうな埒もない人間を拜むなんて、わしは恥かしいがなあはつはつはつ……」お爺さんはきまりわるさうな顏をして暗い土間の奥へ逃げてしまひました。

姫は雪の中を歩いてまゐりました。

或る小さな御堂の前に來ました時、赤ん坊を抱へた一人の女が軒の下にしやがんで顫へてゐました。

「わたくしは一人の子供をかゝへて一昨日から喰べますものもなく、凍へ死ぬのを待つてゐるばかりでございます。何か施していたゞきますものがございますなら……」その女は雪の中に手をついて泣いてゐました。

姫は自分の上衣を脫いでその女にわたしました。

吹雪がひとしきり枯れ野をたゝきつけてゆきました。

姫は寒さに顫へながらその女と別れて長谷の方へ急ぎました。
姫は、或る流れのかたはらに一人の年寄つた遍路が倒れてゐるのを見ました。

そこはこの春、長谷寺詣の時、姫が美しい自分の姿に見とれた谷川の淵になつてゐました。淵には氷が張つてゐて、寒さうな顔をした鴉が一羽淵をのぞいてゐました。

「どうなさいました。もし……」姫は男をかゝへ起しました。そして自分の衣を一枚肩からかけてやりました

「どなたか存じませぬが、ありがたうございます。わたくしは伊賀を立ちまして紀伊の高野山へ參詣に參るものでございますが、雪になやみましてこゝまでまゐりますとふら〳〵と倒れてしまひました。あなたがおいで下さらなければわたくしはこゝでこのまゝ命を失ふところでございました。」

「こんなものをお上げして失禮でございますが今のわたくしには何もお上げいたすものがございませんので。」といつて、肩にかけてあつた衣を遍路の手にわたしました。

「ありがたうございます。ではいたゞいてまゐります。しかしあなたはそのお召物一枚ではこの雪のなかをどうしてお凌ぎなさいます。」

「いゝえわたくしは若いんですから。」といつて姫は老遍路と別れようとしました。不圖見ると遍路は素足のまゝ雪の中を歩いてゆきました。

「あゝ、ちよつとお待ちください。あなたはお沓もないんですか?」

「はい、雪沓を穿いてまゐりましたが、ついこの先の山道で踏み切つてしまひましたので。」

「ではわたくしの雪沓を穿いて下さい。」姫は雪沓をぬいで、素足のまゝ雪のなかを歩きました。歩むごとに指の血が

滴つては雪の上に赤くにじみました。

御山の麓にたどりついたころはもう日が暮れかゝつてゐました。寒さと、痛さとを忍びながら姫は御堂の方へ歩みました。長谷の奥まで行きつかぬうちに雪の中にたふれて死ぬのかも知れないと思ふとたまらなくなるのでしたが、同じ死ぬならば一歩でもお父さまの御堂に近いところで死にたいと思つて、痛む足を引き摺りながら、山をのぼつてまゐりました。

この春、寶塔建立の老僧と逢ひました高い木の下にやつて來ました。一枚の紗は破れ、血がにじみ、亡くなつたお母さまのたゞ一つの形見の珠の首かざりまでも麓で逢つた巡禮の子にやつてしまひましたので、千壽姫自身がまるで乞丐のやうになつてしまひました。

「どうしてこのやうなあさましい姿でお父さまにお目にかゝることができよう。」いつそのこと木の下で死んでしまひたいと思ふ氣にもなりました。

それでもたとひお目にかゝることはできないまでも、あの銀の鈴のやうなお聲だけでも聽いて死にたいと、自分の心をはげましては雪を踏みわけて登りました。

暗い窟のなかを歩いてゐる間に姫はたうとう寒さのために化石のやうに冷たくなつてたふれてしまひました。

姫が目をさました時はそこには白髪の老僧が燈籠をさげて姫のかたはらに立つてゐました。そして不思議なことには今まで凍え死にかゝつてゐた姫の肌を撫でゝ、あたゝかな風が吹いて來ました。

老僧は姫の先に立つて暗い御堂の方へ歩いてまゐりました。

暗い影の人が姫の直ぐ前に歩み寄つて來ました。

「お父さまッ！」よろこびの涙が胸いつぱいにあふれて來て姫はもう何も言ふことはできませんでした。

「姫よ、あなたはたうとう美しい瞳をわたしに見せてくれましたねえ。」とお父さまは仰しやいました。

「お父さま！　お父さまにはわたくしの顔がはつきりお見えになりますつて？」

「すつかりよく見えます。空の星よりもかゞやかな姫の瞳が見えます。白百合のやうな姫の姿が見えます。」

「あのわたくしの瞳がそんなに美しく？　わたくしの姿がそんなにやさしく見えますか？」

「姫の姿ほど美しいものがまたとこの世界にあらうとも思はれません。」

「でも、お父さま、わたくしはこんなに醜い姿をしてゐますのに？　ごらんなさい、わたくしの蓬のやうな髮を、わたくしのこのあさましい姿を！　わたくしはこんな姿でお父さまにお目にかゝるのが恥かしくつてたりませぬ。」

「いゝえ、さうではありませぬ。あなたはこの春お出での時も、この秋お出での時も、牛車に乘り、輿に乘り、寶石をちりばめてお越しになりました。しかしあなたのお心は曇つてゐました。今あなたは人の目にはあさましいとも醜いとも思はれる乞丐の姿で、しかも素足のまゝ雪の中を歩いてこの山へお越しでした。しかし今あなたのお心は月のやうに美しく澄んでゐます。あなたの心の汚れは赤い血となつてみな雪の中に流されてしまつたのでした。姫よ、あなたは今はじめて菩提のさとりを見出されたのです。あなたは、はじめてこの暗い御堂の中の星の光りも、鳥の翅も、美しい花もごらんになることができませう。」

「お父さまそれはほんたうですか。　ではお父さまのお顏を見ることもゆるされるのでせうか。」
姬の心には不安がわいて來ました。「もしお父さまの顏を見ることができるとして、お父さまのお顏が鬼のやうに恐ろしい顏であつたらどうしよう！」
「今日わたしがはじめて姬の顏を見ることをゆるされたやうに、姬もまたわたしの顏を見ることをゆるされる筈です」
「あのお父さまのお顏を！」
姬は顫へながらお父さまの影をしばらく見つめてゐました。
不思議にも霞が消えてゆくやうに闇の幕が開かれて、そこには空いちめんの星があらはれて來ました。
「お父さま！　あんなにたくさんの星が見えて來ました。」
「あゝ、この前お出での時はたゞ一つの星をごらんになつただけでしたねえ。」
「えゝ、さうでしたお父さま。あれ、お父さま、あんなに美しい鳥が！　あれ、あんなに美しい花が！　あれお父さま！」
姬は直ぐ自分の前に立つてゐる端麗な長谷の聖のお姿をはじめて見ました。
「お父さま！　あなたはわたくしのお父さまでございますか？」
お父さまはたゞほゝ笑んでいらつしやいました。
何といふ美妙さであらう！　何といふ端嚴さであらう！　この世界で一番美しいもの、一番尊いもの、一番嚴かなもの！　それがお父さまのお姿でありました。
「姬よ、あなたははじめてわたしの姿を見てくだすつたのです。わたしもまたはじめて姬の美しい姿を見ることがで

きました。姫よあなたはよく苦しみをお忍びでした。よくわたしにあなたの美しい姿を見せてくだされた！」

「お父さま、もつたいないことを仰しやいます。お父さまわたくしこそお父さまの懐しいお姿を夢みましてこんなにうれしいことはありません。お父さま、もうわたくしはいつまでもお父さまのお側にゐていゝんですねえ。」

「今日からあなたは永遠にお父さんといつしよにこゝにゐて、この美しい星と花と小鳥の中に遊んでゐることをゆるされたのです。」

「お父さま、わたくしはもう孤児ではないんですねえ。お父さま……」

千草姫はあまりのうれしさにそれ以上何も語ることはできませんでした。そしてすゝり上げて泣きました。

お父さまはやさしく姫の髪や背を撫でてやつたり、自分の袂でそうつと姫の涙を拭いてやつたりなさいました。

桃の花の下

お蘭は父と二人きりで長い旅をつゞけてゐました。
お蘭の父は喜平次といつて、昔は郡役所につとめて相當の役まで登つたのでしたが、根が正直で一徹なものですから、世の中に容れられず、しまひには亡くなつた妻の位牌と、役人をしてゐたころいたゞいた勳章一つだけを大切に行李に入れてお蘭をつれてあてもなく旅から旅をさ迷ふ身となつてしまつたのでした。
貯への金が充分あるわけではなし、故郷を立つて半年と經たぬうちに、持つてゐたわづかの金もつかひはたしてしまつて、父の喜平次はお蘭をつれて或る峠の小さな町の鍛冶屋の手傳ひになつて働きました。
四十を越しての馴れぬ仕事ですから、どうせうまく出來つこはないのですが、正直な人ですから、どんな仕事でも何の不平もなしに朝は暗いうちから起きて忠實に鎚を振つたり、水を掬んだりしますので、鍛冶屋のお爺さんも喜平次を自分の子供のやうに、お蘭を自分の孫のやうに可愛がつてくれました。
ともかくお蘭は半年振りで落ちついて家に住むことができたことを喜びました。
峠の町の社からは遠い國々の流れや平野がパノラマのやうに美しく見えますので、お蘭は暇さへあれば社の大きな木の幹にもたれながら遠い山だの、白い道だの、ぎら／＼と反射した沼だのをながめてゐました。
そんな時不圖耳をかたむけると、町の方からとんてんかん……とんてんかんといかにもうれしさうな明るい氣持の鎚の音が聞えて來るのでした。

峠の小さな町はいつも眠つたやうに靜かでした。白い雲の下にいつもものうげに横はつてゐました。そんなしづかな町にいつも明るく、いつも心からのびのびとした音樂をあたへてくれるものは鍛冶屋のお爺さんと、喜平次の鎚の音ばかりでした。

「とんてんかん……とんてんかん……」お蘭は峠の山にこだましてゆく鎚の音を眞似て見ました。何といふ快いひびきでせう。何のたくみも、わざとらしさもない美しい山のひゞきでありました。

「とんてんかん……とんてんかん……」鎚のひゞきは赤い岩山にこだましました。白い雲にひゞきました。峠を下りてゆく旅人の胸にもひゞきました。

お父さんとお爺さんが振つてゐる鎚の音をきくとお蘭は愉快でたまりませんでした。

お蘭はよく遊び仲間の娘たちに話しました。

「ほゝらごらんなさい。家のお父さんが鎚を打つので、眠つてゐた山が眼をさまして、あんなにこだましてゐるでせう。お寺の屋根がこだましてるでせう。あたし世界のうちで一番えらい人は家のお父さんだと思ふわ。」さういつてなほお蘭はうれしさうにこだまの音をきいてゐました。

「そんなことはないわなあ。鍛冶屋さんが世界中で一番えらいなんてをかしいやなあ。」山の娘たちはおなかをかゝへて笑ひました。

「一番えらいなお醫者さまだ！」

「一番えらいな校長先生だ！」

「一番えらいな酒屋の旦那さまだ、あの人は村長さまもなすつたでなあ！」

山の娘たちはさういつてお蘭を笑ひました。

しかしお蘭はどうしても世界中で一番えらいのは自分のお父さんだと思ひました。

「眠つてゐる山だつて、家のお父さんが鎚を打つんであんなにこだまするんだもの。町の夜が明けるんだつて、家のお父さんが暗いうちに起きて、とんてんかんと鎚を打つからなんだ！」お蘭はまつたくさう信じました。

お蘭はいつも幸福に感じました。

お蘭は毎日峠の山に登つて行きました。

空は高く青く澄んでゐました。白い雲がしづかに動いてゐました。しかしそこには小鳥の聲さへ聞えませんでした。天も地も眠つてゐました。

ちやうどその時、峠の町からとんてんかんと鎚の音がひゞいて來ました。

「やつぱり家のお父さんが一番えらいんだわ。だつて、お日さまだつて、青い空だつて、高い山だつてみんなお父さんが鎚を打つのであんなにこ〳〵してゐるんだもの。」お蘭はどうしてもお父さんが世界中で一番えらい人だといふよろこびを忘れることはできませんでした。

喜平次が峠の町に來てから三年たつてから鍛冶屋のお爺さんは或る日水車小屋の車を修繕に出かけて行つて、水車に卷きこまれて亡くなりました。お蘭と、お蘭のお父さんはていねいにお爺さんを裏の松山へ葬りました。

或る冷たい雨の日でございました。一人の足なへの男の遍路が車に乘つて自分で車をうごかしながら峠の町へやつて來ました。

遍路は、鍛冶屋の軒の下に車をとゞめて御詠歌をうたひはじめました。

お爺さんはお米とお錢を遍路の胸の袋に入れてやりました。お爺さんは不圖遍路の車の輪を見ました。

「おゝ、車の輪がすつかりこほれてゐるぢやありませんか？」

「はい、もうこの五六日前から輪が切れてしまひましたので、かうやつて麻で結んではをりますが、一日に三度も四度も結び直してやつと、かうやつて歩いてゐるのでございます。」

「それはお困りでせう。そしてこれからどこまで旅をつゞけてゆくんですか？」

「はい、紀州の高野山までまゐりますつもりでございます。まだ何百里といふ道程でございますので、このまゝではとても行けさうもございませんが、何をましても一文の貯へもございませんのではい……まことに心細いことでございます。」遍路はそうつと涙を拭きました。

お爺さんと遍路と話してゐるのを、ふいごのかたはらできいてゐたお父さんは鎚を握つたまゝ軒の下へ出てまゐりました。

「お遍路さん、あんたはいつたいどうして一人で不自由な足をしながら遍路に出なさつたのぢや？」

「まあきいて下さい。わしはもと北の國の雪の深い田舍で妻もあり、子供もありして幸福にくらしてゐたものでございます。ところで人間はいつどんな不仕合せにおそはれるものやらわかりませぬ。わしは廣い林檎畑を持つて、馬も十頭から飼うてをりました。ちやうど春先のことでございましたが……いつたいわしの家はちやうど北に山をうけて南向きのあたゝかなところにありましたが、それがよくなかつたのでございました。わしの家の庭から南の方へ十町歩ほどの林檎畑を作つて、多勢の傭公人もあり、林檎の花が咲くころは妻や子供たちと終日林檎畑をながめながら、世の中の幸福といふ幸福をわし一人で背負つたやうな氣でくらしてをりました。ところで七年前の雪解けのころでご

ざいましたよ……」遍路はそのころのことを思ひ出すかのやうにぢつと眼をつむりました。お蘭も、お父さんもぢつと耳をかたむけて遍路の話をきゝました。遍路は車の上でかた〳〵と煙管をはたきながら物語りをつゞけました。

「その年はいつもより雪が深かつたので、林檎畑も大分ひどく雪に痛められました。わしは雪沓を穿いて一とまはり林檎畑を歩いてをりました。妻や子供たちは家のなかで榾を焚いて遊んでをりました。わしは林檎畑を歩きながら雪を蹴つて見ましたが、もう雪の下にはちやんと春の若々しい草の芽が頭をもたげかけてをるのです。あゝ、もうぢきに春だなとわしは思ひました。一年のうち半分は雪に埋もれてゐる雪國の者には春といふ言葉ほどうれしいものはありませなんだ。わしは春がぢきそこに來たと思つたばかりでうれしうてうれしうて泣きたいやうな氣になりました。ところがちやうどその時でした。山がくづれたかと思ひました。ぐわうつといふものすごい音がしたかと思ふと、どうでございませう、今までしづかに眠つてゐた裏の山が雪煙を立てゝ崩れて來るではありませんか。」

お蘭もお父さんも思はず溜息をつきました。

「おやつと思ふ間もなく雪崩はわしの家を目がけて落ちて來るんです。わしは驚いて妻や子の名を呼びました。しかしわしの聲がどうして聞えませう。妻も子も雪崩の下に埋められてしまひました。わしはその時片方の足だけ切つてしまつたのでしたが、雪崩に打たれた妻や子はたうとう助かりませんでした。」

お蘭は袖口で涙を拭きました。

「不仕合せな時には不仕合せばかり重なるものでございます。わしはこの切れた足をなほすために病院にはいり、それからながいこと溫泉へ出かけましたが、半年振りで家にかへつて見れば、いつの間にかわしの林檎畑も馬もみんな腹黒い叔父のものになつてしまつてゐて、わしは無一文の乞食になつてしまひました。わしは林檎畑の隅の妻や子の

墓の前で死ぬつもりで、林檎の木の枝に帯をかけて首を縊つたのでしたが、業が盡せぬものか、帯が切れましてわしは助かりました。」

「お氣の毒なことだなあ……」

「これからのことでございます。わしは一度は叔父を殺してやらうかとさへ考へましたが、何も彼もあきらめまして、村の人たちにこのやうな車だけ作つてもらうて、かうやつて遍路に出かけて來たのでございます。」

遍路の話をきいてゐる間にお蘭はすつかり遍路が可哀想に思へて仕方がなかつたので、その男のためにお握りをこしらへては、車のなかに入れてやつたりしました。

「お蘭、お前一つその鎚を振り上げて先手をやつてくれ。お前はまだ鎚を振つたことがないが、まあ遍路さんのためちやと思つて鎚を振つてごらん。わしがこの遍路さんのために車の輪をこしらへてやらうではないか。」お父さんは急にふいごの火をおこしました。お蘭はその時はじめて鎚を振り上げることを習ひました。

その一夜だけ遍路は鍛冶屋に泊らせてもらふことになりました。

お父さんとお蘭は夜おそくまで火を焚いては車の輪をこしらへました。

とんてんかん……とんてんかん……いかにも明るい心に鎚の音がひゞきました。遍路の難儀を救ひたい一心からお蘭は上手に鎚を振り上げました。しづかな峠の町の夜はお蘭とお父さんの二人の鎚の音をきゝながら眠つてゐました。

夜明け方になつて車の輪はやつと出來上りました。

「さあ、これなら大丈夫だ。あんたが紀州の高野山まで乘つて行つても、びくともすることはない。さあ安心して乘りなさるがいゝ……」お父さんとお蘭は遍路をかゝへて車に乘せてやりました。

「あゝ、これはいゝ乗り心地になつた。どんなに搖つてもびくともしない……」遍路は子供のやうに喜んで車を搖つたり、車の輪をのぞいて見たりしました。

「さあ、安心してぼつ〳〵お出かけなさい……」お蘭は暗いうちから土間に下りて炊き上げた朝餉を遍路にすゝめてから、大きな風呂敷にお握りをつゝんでやりました。

「ありがたうございます。この御恩は忘れません。」遍路は涙を流してよろこびながら杖を握りました。

お蘭とお父さんと二人で一夜のうちに作り上げました車の輪はしづかに峠の道をすべりながらまはりました。

「金剛遍照……」低い、しかしおごそかな聲で遍路はお父さんとお蘭を見ながら經を誦みました。

遍路の笠の文字を雨上りの朝の日の光りが照らしてゐました。

遍路はしづかに峠を下つて行きました。

とんてんかん……とんてんかん……その日からお蘭は終日お父さんのお手傳ひをして、鎚を振り上げるやうになりました。

世界で一番えらい人はお父さんだと信じながら、その日も終日幸福に暮しました。

お蘭とお蘭のお父さんが二人で毎日暗いうちから起きてふいごのそばで働いてゐる姿は町の評判になりました。

「孝行娘だ！」

「あの娘が打つた鎌をつかうて桑を刈れば蠶がよく育つ！」

かういつた評判が隣り村にも、山を越えた村々までもつたはつて行きました。お父さんとお蘭と二人で働いても働

いても作りきれないほど註文が多くなりました。毎日山を越えた村々から馬に乗つては山の村の人たちがお蘭の鍛冶屋をおとづれてまゐりました。いつも軒の下には、三頭四頭の馬が柳につながれてゐました。

お蘭は馬がすきでしたので、柳の下につながれてゐる馬を見ると、何かたべさしたり、たてがみを撫でたりしてゐましたので、馬の方でもお蘭には馴付いてしまふやうになりました。そんなことからしていつとはなしに峠を上り下りする馬の蹄鐵を打つことまでが、お蘭の仕事の一つになつてしまひました。

「お蘭さん、うちの大鹿毛の蹄を一つ打つておくれやなあ。町の獸醫どんは氣が荒いで、馬までがあの人を見ると氣が荒うなつて、とてもあばれるんで滿足に蹄鐵を打つてもらふこともできぬ。お蘭さんだと不思議に馬がおとなしうしてをるでなあ……」山の伯樂や馬方たちはいつもかういつては鍛冶屋の前に立ちどまつてゐました。

しかし世の中にはいゝことがあればまた一方ではわるいことがあるものです。お蘭の家が繁昌するにつれて他の鍛冶屋たちがだん〳〵仕事がなくなつて行くのでした。近在の町の鍛冶屋たちのうちには心の惡い者もあつてお蘭やお父さんをねたんでゐました。

ちやうどそのころ、亡くなつた鍛冶屋のお爺さんの甥の勘八といふのが北海道から峠の町へかへつて來ました。

勘八は惡い男で、町にもをれないで旅を歩いてゐたのでしたが、十年振りでひよつくり村へ歸つて來ると、叔父にあたるお爺さんは死んで、その後には何處の誰とも知れぬ父子づれ　素人鍛冶屋がはいりこんで、繁昌してゐるのでございました。

勘八は惡いことをたくらみました。近在の惡い鍛冶屋を集めてお蘭とお父さんを追ひ出して、自分がその後に坐り

こまうといふわるだくみを考へました。

「どこの世界から來た馬の骨やらわからぬ風來坊に大きな面をさせるのはおれたちの恥だ。あいつはきつとどこかで乞丐でもしてゐたか、それとも盜人でもしてゐたか、そんな奴にちがひない。折を見て滿座の中で恥をかゝせて町から追ひ出すのだ！」さういつて勘八の仲間は機會を待つてゐました。

間もなくその機會が來ました。

町では小高い丘の上に學校を建てました。そして一番高いところに町中にひゞきわたる鐘をつるして置いて、毎朝夜明けとともに鐘を鳴らして町中の人が野良に出て働き、山にはいつて働くやうにしたいといふ計畫を立てたのでした。ところで風が強い山の町のことですから、誰も鐘をつるす高い塔を作る人がないのです。その難事業を引きうけたのがお蘭とお父さんだつたのです。お父さんとお蘭はまる二年の間夜も寢ないほどにして鐵の塔を作りました。どんな大雪のころも毎夜、夜更けて山の奧までも静かにこだまする鎚の音はお蘭とお父さんが塔を作つてゐる鎚の音でございました。

町の人々は出來上つた塔を見て驚きました。しかし勘八や仲間の人たちは「素人の鍛冶と小娘だけで作つた塔が滿足に立つてたまるものか。風でも吹いて來れば一耐りもなく倒れるにきまつてる……」とあざわらつてゐました。

「あの塔さへ倒るればあいつはいやでも町から逃げるにちがひない。」といつて塔の倒れる日を待つてゐる鍛冶屋もありました。幾度か大嵐が吹いて來ました。しかしお蘭とお父さんが精根をつくして作り上げた塔はびくともしませんでした。

今日はいよ〳〵學校の庭の鐘を撞きはじめるといふ日でありました。

山にはまだ雪が解け殘つてゐましたが、もう空には春の日の光がしづかにかゞやいてゐました。

町では山の上の學校の鐘の塔の噂で持ちきりでした。

「今度はあの立派な鐘の塔を作り上げたので喜平次さんとお蘭さんには知事さまから御褒美を下さるさうぢや。」

「何にしてもたいしたものぢや。素人の鍛冶屋と若い娘きりで作り上げたんぢやからなあ。どんな御褒美が下つてもいゝわ。」

かういつた會話が町の人たちの間にとりかはされました。

勘八や仲間の男たちはお蘭とお父さんがけふの式場に出たところで、散々あくたいをついて、滿座のなかで恥をかかしてやらう。そしたら褒美をもらつても町にはをれまいなどと考へました。勘八と七八人の仲間の男たちは酒をあふつて學校の式場へ出かけて行つて機會を待つてゐました。

學校の廣い庭には紅白の幕が張られて、正面には縣の役人が出張して來て、今日の開校式と、お蘭とお父さんの表彰を兼ねた儀式がはじまらうとしてゐました。

今日の祝賀會の順序がすゝんでいよ／＼お蘭とお父さんの表彰式に移らうとする時でした。係りの人たちの間に狼狽の色があらはれました。

「喜平次さんがをらぬのぢや。お蘭さんもゐない。」

「どこに行つたのぢやらう？」

ちやうどそこに二三日前お蘭に馬の蹄鐵を打ち直してもらつた若者が駈けつけて來ました。そして一通の手紙を差し出しました。

「面白いぞ、あの素人鍛冶屋奴、おれたちがこゝにゐるので恐くて式場に出て來れぬのぢやぞはゝはゝはゝ」勘八は仲間の男をかへりみて低い聲で笑ひました。

「あの鍛冶屋の親爺さんも、お蘭さんもどこへ行つたか、朝から戸をしめて家にはゐませんよ。」とその若者が町長さんに話した。

「それ見い、もと〳〵乞丐か何かそんな奴だから、こんなちやんとした式場などには出て來れぬのだはゝはゝはゝ……」勘八は無遠慮な聲で笑つた。

「昨日でした。明日はわしは式には行かぬからこれを町長さんにとゞけてくれというてあの鍛冶屋さんがわしにことづけましたのぢや。」若者は手紙を町長さんにわたしました。

「ふうむ、不思議ぢやなどれ……」さういつて町長さんは手紙を開いて讀んでゐるうちにわな〳〵と手を顫はせました。

「どうかしましたかい？」と覗き込んだ男がありました。

「うむ、あれは只の鍛冶屋ぢやない。」

「ぢや何か盜人か何か大惡人でせう。」勘八が高い聲で笑ひました。

「ばか、だまつとれ……」町長さんは勘八を叱りつけました。

「ちよつとごらん下さい。」町長さんは縣廳のお役人に手紙を見せました。

「成る程もとは立派なお役人だつたのですね。ほゝう、勳章も持つてゐるんですね。」

「勘八こゝへ來い。あの人はな、身分をかくしてをつたがもとは立派な役人ぢや。それにお前がこのごろ北海道から

かへつて來て、こつそりと仲間を作つてあの人を追ひ出し、お前がその跡へはいりこまうとしてゐることもちやんと知つてをつたのぢや。」

勘八はぢつとうなだれてしまひました。

「あの人はもうこの町にはをらぬのぢや。今ごろはどこか他の町をさがして旅に出てしまうたのぢや。惜しい人を旅に出してしまうた。あのやうな立派な人が一人でも町にゐてくれるとまことにありがたいことぢやがなあ。」町長さんはそつと涙を拭きました。

「勘八よくきけ。あの人はな、今日の御褒美はそのまゝ町で受けとつてくれと書いてござる。それからこの數年の間にお蘭と二人で夜書働きつゞけて貯へた金二百圓は奥の佛壇の中に入れて置いたから、全部勘八さんへ渡してくれと書いてある。それからたゞ一つ古い手押車のこはれたのが縁の下に雨ざらし日ざらしになつてゐたから、あれだけを貰いて行くと書いてある。あんな心の美しい人がこの町にゐてくれゝば、この町がどれほど明るくなるか知れないに……」町長さんはぽろ〳〵と涙を落しました。

學校の庭に集まつて來た人たちはみんなこの美しい話を聽いて、水を打つたやうに靜まつてしまひました。

「ではこれから鐘を打ちます。鐘の式に移ります……」と若い書記が高い聲でいひました。

「あの心の美しい喜平次さんとお蘭さんが、われ〳〵の町のためにのこして行つたこの尊い鐘の塔から響いて來る鐘の音を聽くたんびに、われ〳〵は自分らの汚れた心を淨めて働きたいと思ひます。」町長さんはさういつて若い書記のうしろから鐘の塔の方へ歩いてゆきました。

その朝暗いうちにお蘭とお父さんは、柳の下の古い手押車を運び出しました。手押車のなかには亡くなつたお母さんの位牌とお父さんの勳章や、わづかのお米や、小さな風呂敷包みだけが積んでありました。

夜の明けきらぬうちに二人は町を通りすぎてしまひました。そして冷たい雨の日に軒の下に立つてゐた遍路が下つて行つた同じ道を急いで行きました。

日が山の上に出てまゐりました。

麓ではもう鶯が啼いてゐました。

白い路が霞につゝまれてながく〳〵走つてゐました。

「お蘭や草臥れただらう。もう大丈夫だ、こゝいらで一つ休んでゆかう。」

お父さんは草の上にしやがんで煙管を出しました。

「お父さん、峠の町があすこに見えます。」お蘭は山の上を指さしました。峠の町は霞の下にほの見えてゐました。

「あゝ、あれが峠の町だな。」お父さんは感慨深さうに山の町を見上げました。

「今ごろはあたしたちがゐませんので、みんな町の人たちがさわいでゐるでせうね。」

「はゝはゝはゝさわいでゐる人もあらうし、よろこんでゐる人もあらうよ。」

「お父さん、ほら、鐘が鳴つて來ましたよ。ほら、聞えるでせう……」お蘭はなつかしさうに山の町をながめました。

「おゝ鳴つてゐる！　鳴つてゐる！」

「あの塔の鐘ですね！」

「さうだ……あの塔の鐘を鳴らしはじめたのだなあ。」
「あゝあの鐘だ！」
お父さんとお蘭は草の中にしやがんだまゝ鐘の音をきいてゐました。お蘭は袂で涙を拭きました。
「さあ、ぼつ〳〵旅をつゞけようよ。」お父さんは草の中に立ち上りました。
お蘭はお父さんのうしろからついて歩いて行きました。
いつまでも〳〵二人の旅人を慕ふかのやうに山の町の鐘の音がひゞいてゐました。お父さんとお蘭はうつむきながら歩いてゆきました。

一ケ月ばかりの後お蘭とお父さんが大和の菜畑の間を、一つの手押車を押しながら高野山の方へ旅をつゞけてゐるのを見かけた者がありました。
お父さんは手押車の上に青く、赤く塗つた小さなチヤルメラをたくさん載せてゐました。そして自分でも大きなチヤルメラを吹きながら菜畑と麦畑のなかの町から町を歩いてゐました。
空には雲雀が鳴いてゐました。
太陽は柔かな草の上にかゞやいてゐました。
町の子供たちは争うてチヤルメラの音をしたうて集まつて来ました。
お父さんがしづかにチヤルメラを吹けば空も地も、町も流れもめぐまれたやうに思はれました。
チヤルメラを聴けば大人も子供もみんなしづかな春の幸福にひたされてしまふやうに思はれました。

桃の花も咲いてゐました。

お父さんは或る桃の花の下に立ちどまつてチャルメラを吹きました。子供たちがお父さんとお蘭とを丸くとりまいてチャルメラの音をきゝました。

幸福と平和にめぐまれた春の光りがみんなをつゝんでしまひました。

お父さんは日が暮れるまでチャルメラを吹いては大和の菜畑の間を歩きました。すぐうしろからはお蘭がチャルメラを積んだ手押車を押してゆきました。

子供たちはてんでに小さなチャルメラを手押車の上から一つづゝ持つてゆきました。天使のやうな可愛らしい顔をして。

東の麥畑でも、子供たちは、小さなチャルメラを吹きました。

西の桃畑でも、子供たちは、小さなチャルメラを吹きました。

南の森のほとりでも、北の窓でも子供たちは、小さなチャルメラを吹きました。

お蘭とお父さんがチャルメラを積んだ手押車を押して行きさへすれば、どこの町でも平和なチャルメラの聲が春の光につゝまれてしづかにひゞきわたりました。

チャルメラを作るお父さんは世界で一番えらい人のやうに思はれるのでありました。

チャルメラを吹くお父さんをながめては、お蘭はうしろからついて歩きました。

お蘭はいつも幸福でした。

影

ひろさがり片岡に立てば
雲雀鳴きぬ
ひとり立つわが影の
草に這ひ
たゆたひ歩み
友行きし夏野ものうし
落日を背にし
友の行きし廣野をみれば
わが影の遠くも流る
草越え
罌粟谷越え
湖越えて
わが影よはるかに
友の家のたそがれのとびらまで歩め

わが影の曠野をつゝみぬ
そよかぜに夜のゆめ追ひ
われひとり片岡に立てり

あかつきの湖にゆき
友よ夏の朝の渚に立て
湖を越えて君が影の
わがとびらまで歩み寄らん

山の子たち

山には柿の實が寶石のやうに赤く熟れてゐた。

藤作はからだが重かつたので一番下の枝にかじりついてゐた。そこにはもういゝ柿はなかつたので、一番てつぺんにのぼつて猿のやうにすばしこく柿をもいでは懐に入れてゐる捨松に聲をかけた。

「おれにも一つ二つ赤く熟したのをくれよ。後生だからなあ。」藤作は悲鳴をあげた。

「詮太がお前のすぐ上にゐるぢやないか。詮太からもらへよ。おれはそこまで下りてゆくのは大變だ。」捨松はさういつて木のてつぺんにのぼつたまゝよく熟した眞つ赤な柿をうまさうにかじつた。

「そんなことをいはんで、おれにたつた一つでいゝから、その赤く熟したやつを投げてくれよ。」藤作はうらめしさうな顔をして捨松の方を見上げた。

「ぢや、仕方がない、よいかこの眞つ赤なのを一つ投げるぞ、さあうまく受けとれよ。」捨松は赤い熟柿を一つ藤作の頭の上へ投げてやつた。藤作は帽子を脱いで受けた。

「しまつた！」と藤作は頓狂な聲を出した。熟柿がすつかり帽子のなかでつぶれてしまつたのであつた。それでも藤作はうれしさうな顔をして、帽子のなかに首を突つ込んではつぶれた熟柿をしやぶつてゐた。

藤作と、詮太は夢中になつて熟柿をさがしてゐた。二人が不圖氣付いた時捨松は柿の木を下りて草のなかを國道の方へ走つてゐた。

捨松は橙千木の下の草のなかにしやがんで、懐の柿をすつかりその草のなかに隱してしまつた。それから彼は木の下の流れに行つて口をすゝいで顔を洗つた。

「捨松は何をする氣かなあ。顔なんか洗つてさ。」と藤作が下の方の枝にこはごはとつかまつたまゝ自分の頭の上の枝にのぼつてゐる詮太に聲をかけた。

「さあ、おれたちには何もいはんで何時の間にかあんなところに自分ひとりで突つ走つて、口をすゝいだり、顔を洗うたりしてどうする氣かな。あいつおしやれだな。そして見い、懐のなかにあんなにたくさん持つて行つた熟柿をみんな草のなかに隱しよつたぞ。」

「あいつ、もうあんまりたくさんで懐のなかにはいりきらんので、草のなかに隱しに行つたにちがひない。」

「さうずら……また熟柿を取りに來るずらなあ……」

二人が柿の木の上で話してゐる間に、捨松は流れで顔を洗つて草のなかをづん〳〵國道の方へ走つて行つた。

「をかしいな捨松は、何であつちに行つてしまうずら……」

「おや、をかしいぞ。懐のなかゝら本を出して讀みながら國道を歩いて行くぞ。」

「あいつ本なんかめつたに勉強したことはないくせになあ、ばかに勉強家らしい風をして歩いて行くぞ。」

「あれ見い。本を讀んではばかに考へたやうな風をして歩いとるぢやないか。」

「變ぢやなあ……」

二人はびつくりして木の上から捨松をながめてゐた。

「やあ、わかつた〳〵。鴨方先生が町の方から國道を歩いて來なすつた。眼の早いやつぢやなあ。さつきから木のて

つぺんで鴨方先生を見つけたんだな。

「捨松は鷹のやうに眼が早いのが自慢ぢや。」

「鴨方先生は恐い人ぢやなあ。柿の木なんぞにのぼつてゐるところを見つかつたらまたうんと叱られるぞ。」

「飛び下りようぞ。」

藤作と譚太は猿のやうな恰好をして柿の木から滑り下りて柿の根本の深い草の中に、頭を突き込んでかくれてしまつた。

だいぶ時がたつても捨松はかへつて來なかつたので、藤作と譚太は草のなかゝらそうつと顔を上げて見た。

鴨方先生は本を讀みながら國道を歩いてゐる捨松を見つけた。そして笑ひながら捨松へ聲をかけた。

捨松はびつくりした風をしてはじめて、本から眼をはなして鴨方先生の方を見た。そして頭が膝がしらにつくくらゐ丁寧に頭を下げた。

「あいつ、ずるい奴ぢやなあ。わざと勉強してる風をして鴨方先生に氣に入られようとするんぢやぞ。」

「なか〳〵拔け目のない奴ぢやな。あんなに何かいつて笑つてるぞ。またあんなに丁寧に頭を下げとるぞ。」

二人は草のなかに隱れたまゝ、鴨方先生と捨松を見てゐた。

鴨方先生は寺の方へ歩いて行つた。

捨松は國道の傍の草のなかにしやがんで、まだ本を讀んでゐた。

やがて鴨方先生の姿が見えなくなると捨松は本を懷に入れて、ふたゝび橙子木の方へもどつて來て、草のなかの柿を拾ひはじめた。

「あいつのずるいのには驚いたなあ。」藤作は詮太を見て笑つた。
「さあ、もう歸るんだ！」捨松は柿を懐にいつぱい入れてから二人を呼んだ。

捨松は同じ級のうちでは誰よりも悧巧であつた。生まれつき悧巧であつたところに、その父といふ人が悧巧な上にも悧巧になるやうにと育てたゝめに、捨松の頭には「世の中に立つてゆくにはたゞ悧巧でさへあればいゝのだ。」といふことが沁みこんでしまつてゐたのであつた。

捨松がやつと尋常三年になつたばかりのころのことであつた。捨松は山から下つて來た伯母さんに村のお祭のお小づかひにといつて一圓の金をもらつた。捨松はその金で一月遲れの古雜誌を買ひあつめた。そして表紙をうまく新聞紙でつゝんでは學校の友達へ損料をとつて貸した。一ケ月とたゝぬうちに捨松は二圓餘りの金を儲けた。

父は捨松が學校で雜誌の損料貸しをして金を儲けたことを知つた時、叱らないばかりかかへつてひどく褒めた。
「お前は悧巧だ。いまにきつとえらくなるぞ！」父は眼を細くして喜んだ。
父に褒めてもらひたいばかりに捨松はあらゆる智慧をしぼつた。

それから間もなくであつた。かれは學校がへりに山の麓の茶店の前を通りかゝると、旅の商人らしい男と村の若者とがひそ〳〵と語つてゐるのを見た。
「話はかうなんだ。わしはこの行李のなかに煙草をいつぱい買ひあつめて來たんだ。」と旅の商人がいつた。
「どういふわけでそんなにたくさん煙草を買つたんです。」
「お前だけの話だが、今度煙草がみんな二割がた高くなるのだ。もう東京の方では昨夜それがわかつたのだ。こつち

は山國だから、今夜くらゐにならぬと誰にもそんなことはわからぬわ。そこでだ、今のうちにこの峠を越えて山向うの町まで行つて、ありつたけの煙草を買ひしめてしまふのだ。」

「それぢや買ひしめた後でそのことがわかつたらみんなにうらまれるだらうがなあ。」と村の若者はちよつと心配さうな顏をした。

「わかつたらわしは旅の者だから逃げてつてしまふし、お前さんは何分この土地の人だから顏を見られては困るだらう。だから煙草を買ふ役目はわしがする。お前は隱れてゐて、わしが買ひあつめた煙草の荷をかついで山を歩いてくれさへすればいゝのだ。お金は十圓くらゐあげるよ。」

十圓といふ金に迷はされてしまつたのか、村の若者は旅の商人と一緒に、後からついて峠を越えて村へ行つた。

二人の話をきいてゐた捨松は父の家へ飛んで行つた。そして帳場に坐つてゐた父の耳にさゝやいた。父は金庫の金を捨松にわたした。捨松は馬に乘ることも上手だつたので、すぐとなりの馬車屋に行つて馬を一頭借りて、それに打ち乘つて峠を越えた。二人の男たちは愉快さうに笑ひながら峠を歩いてゐた。峠を越してから二三里の間、捨松はふたゝび馬を走らせた。そして道ばたの煙草屋といふ煙草屋に立ち寄つては、ありつたけの煙草を買ひしめて馬に積んだ。

捨松が山の町の煙草を買ひしめて馬に積んで、ふたゝび峠の方へかへつて來た時、旅の商人と若者は峠を越えて町の方へ近づいて來た。いかにも愉快さうな顏をして、

「いゝか、十圓あげるから成るべく早く煙草を運び出す工夫をしてくれなくちや困るよ。わしはすぐに買ひしめにかかるから。」と旅の商人はいつた。

「おらも十圓の仕事だ、大丈夫だとも。」と若者はいつた。そして二人はまた大きな聲で笑つた。ちやうどその時捨松は馬の上に買ひしめた煙草を積んで峠の方へ急いでゐた。

「おい捨松ぢやないか。ばかに急いでゐるがどこへ行つたのぢや。」若者は聲をかけた。

「わしかな、山の町まで行つたのぢや。」捨松はにこ〳〵笑ひながら答へた。

旅の商人は若者に低い聲で何か話した。

「おい、捨松や、お前のその馬を貸してくれぬか。峠を一つ下つてくれゝば二兩出すがなあ。えらい金儲けぢやないか。」

「えらい金儲けか知らぬが、いつたい何をこの馬に積ませるつもりかな？」と捨松はたづねた。

「他の人にいつては困るが、その馬に煙草を積んでくれぬか。」

若者は旅の商人と顔を見合せて變な笑ひ方をした。

「煙草を積むのか。これから山の町へ行つて煙草を買ひしめてから積むんぢやな。」捨松は馬の上から二人の大人を見下したまゝ馬の手綱を取つた。

「おい、捨松、お前どうしてそんなことを知つとるのぢや？」若者は眼を丸くして捨松を見上げた。

「どうしてゞも知つてるんぢやが、小父さんお氣の毒ぢやがもうこの馬にはこれ以上は煙草は積めぬのぢや。」

「どうしてよ？」

「わしの馬に積んでる荷物はな、こりやみんな煙草ぢや。」

「えツ！　煙草？」旅の商人もまた眼を丸くして驚いた。

「わしは今山の町に行つて、すつかり煙草を買ひしめてしまつたのぢや。」捨松はぎゆつと手綱を引きしめた。

二人の男はそのまゝうしろに倒れんばかりに驚いた。

捨松は笑ひながら馬を走らせた。

「ほんにお前はどれほどえらい人間になるか知れぬぞ。感心なものぢやなあ。」その夜、奥の間にひろげられたたくさんな煙草の荷を見ながら父は捨松を褒めた。

捨松は父をよろこばせるためにはます〳〵世間的に悧巧な人間にならざるを得なかつたのであつた。

しかし悧巧な捨松にもまた氣の弱い、いかにもやさしいところもあつた。

いつであつたかかれは、友達から一匹の犬の子をもらつた。捨松の父はひどくかれを叱つた。

「昔から犬は一日に一升餌を食ふものとしてある。米だけでも一ケ月にどれほどの金高になると思ふ。犬を飼つて幾らのお金が儲けられるのぢや。」

犬を飼ふといふことゝ、金儲けとを結びつけないではをれぬほど父は打算的な人間であつた。

たうとうかれは父の命令で小犬を捨てにゆかなければならなかつた。かれは夜になつてから小犬を抱いて川岸まで出かけて行つた。

「いゝかい。おとなしくして誰かに拾はれて大きくたるんだよ。」捨松は小犬の頭を撫でてやつた。小犬は棄てられることも知らないで、こゝろよくかれの腕に抱かれたまゝ眠つてゐた。

かれはそうつと小犬を草のなかに卸した。

「いゝか、僕はもうかへるから、こゝでおとなしく寢るんだよ。」

かれは二三歩草のなかをあゆみ出した。小犬は急に鳴き出してかれのあとを追つかけて來た。

「駄目だよお前は。大きくなつて一升飯を食ふだらうお前は。だから駄目だつてさ。おとなしくこゝの草のなかに寢ておいでよ。」捨松はふたゝび小犬を草のなかに置いた。

小犬は捨松の足にじやれついたり、鳴いたりした。

「捨てられるのを知つてるんだなお前は。」さういつてかれは尙一度小犬を抱いてやつた。小犬は捨松の懷に抱かれてすぐに眠つてしまつた。

「可哀さうだな。棄てられないなあ……」捨松は眠つてゐる小犬を抱へたまゝしばらく暗のなかに立つてゐた。だけど、父の恐ろしい顏を思ひ出すと、どうしても小犬は棄てゝかへらなければならなかつた。さう思ふと小犬が可哀さうでならなかつた。涙がぽとりと落ちた。

捨松は草のなかに小犬を置いたまゝ一散に家の方へ走つて行つた。

いつまでも小犬が草のなかで鳴いてゐる聲がかれの耳にこびりついてゐた。

「ほんとに棄てゝ來たのか？」父は恐い顏をして捨松を見た。

「あゝ、ほんたうに棄てゝ來た。だけど可哀さうだつたよ。今から川岸まで行つて連れかへつて來てはいけないのかいお父つあん？」

「ばかなことをいふな。もしあの犬を連れて來ようものならお前は乞食の子にしてしまふからさう思へよ。」父は眞つ赤になつて怒つた。

捨松は二階の自分の部屋に行つて寢た。

ばら〳〵と雨の音がした。

「おや雨が降つて來たな……」捨松は耳をすまして雨の音を聽いた。嵐さへ加はつて來た。

「あの小犬はどうしたか知ら？　雨にぬれてふるへてゐるにちがひない！」捨松は小犬のことを思ふとぢつとして眠つてはをれなかつた。

草のなかで鳴いてゐた小犬の聲が嵐につれてひゞいて來るやうにさへ思はれるのであつた。

「ほんたうに可哀さうだ。きつと嵐の聲に顫へてゐるにちがひない。」草のなかを鳴きながら狂氣のやうになつて、自分をさがしてゐるであらう小犬のことをかんがへると、もう捨松はたまらなくなるのであつた。どんなに父に叱られてもいゝから、小犬を助けてやらなければいけないと思ふ心が胸いつぱいにわいて來るのであつた。

捨松はそうつと寢床から起き上つた。そして階段口から階下を覗いて見た。そこにはカンテラが點されてゐて、カンテラの前に父は寢てゐた。父はひどく疲れたらしい鼾をかいて眠つてゐた。捨松は着物を着かへてそうつと跫音を忍ばせて階段を下りて行つた。そして父の枕もとにあつたカンテラをつかんで土間に出た。わな〳〵と足が顫へて仕方がなかつた。捨松は家を出るや否やカンテラを下げて雨嵐のなかを一直線に川の岸へ飛んで行つた。嵐がはげしくて、ともすれば川のなかへ吹き飛ばされさうになることもあつた。

「白ッ！　白ッ！……」捨松は小犬の名を呼んだ。しかし草のなかはすでに水があふれてゐて、そこには小犬の鳴き聲は聞えなかつた。かれは水の中に滑つたはずみにカンテラを落してしまつた。

「もう水に流されて死んでしまつたのぢやないか知ら？」さう考へながらもかれはなほ暗い嵐のなかに犬の名を呼ん

た。
不圖嵐のなかに小犬の鳴く聲が聞えた。かれは水のなかをまつしぐらに聲のする方へ飛んで行つた。
嵐のなかに小犬は死ぬばかりに聲を揚げて鳴いてゐた。
そこはすこし小高い草地になつてゐたが、そこにも水があふれて來て小犬はもう溺れかゝつてゐた。
「おゝ白か、白か、可哀さうに、でも、よかつたなあまだ生きてゐて。」捨松はびしよぬれになつた小犬を抱きしめて泣いた。
捨松は家の方へかへつて行つた。しかしかれの頭にはふたゝび恐ろしい父の顔がうかんで來た。
どんなに賴んだところで父が小犬を飼ふことをゆるしてくれる氣づかひはなかつた。
「それならば小犬をふたゝび棄てなければならぬ。」しかし今夜小犬を棄てたら、小犬はきつと嵐のなかで死んでしまふにちがひない。
「まゝよ、白と一緒にどこかへ行つて寢ることにしよう。」捨松は決心してしまつた。小犬を抱いてしばらく雨のなかを歩いてゐた。
間もなくかれは松山のなかの小さな社のなかへはいつて行つた。
「白や、よかつたなあ、お前が死んでくれなかつたので僕はほんたうにうれしかつた。さあもう安心するがいゝ。もうお前を棄てるやうなことはしないから。」捨松は小犬を抱いて社の軒の下に寢た。小犬は雨に濡れて顫へながら鳴いた。
「可哀さうにお前はぐつしより濡れたなあ。家だつたら爐のはたであたゝめてやるがなあ。こゝには薪一本だつて焚た

くところはないからなあ。」捨松はさういつては小犬を自分の懐に抱きしめた。

「坊ちやん犬をあたゝめるんでしたらわしが火をこしらへてあげませう。」誰かゞ社の縁の下の奥の方から聲をかけた。捨松はびつくりして縁の下をながめた。

一人の男がのこ〳〵と奥の方から這ひ出して來た。

「あんたは誰だい？」捨松は縁の下の男を見た。

「ひゝひゝ……わたしですかい？　坊ちやん……」縁の下の男は急に變な笑ひ聲を出した、そして蠟燭を點した。

捨松はぢつとその男をながめた。

「あゝあんたはいつも手押車を押してゆく小父さんだね。」捨松はびつくりしてその男の顔を見つめた。

「へい、あのいざりの乞食でございますよ。小父さんなんて仰しやつてくださると涙が出るほど嬉しうございます。」

いざりの乞食は縁の下から這ひ出して來て隅の方に置いてあつた手押車のなかゝら燐寸だの焚きつけだのを取り出して焚き火をこしらへてくれた。捨松は嵐の聲をきゝながら夜つぴて小犬を抱いて社の軒下にしやがんでゐた。

夜明け方になつて父は捨松が二階にゐないことを發見して家中をさがした。いつも枕もとに置いて寢るカンテラがないことに氣付いた時、父の顔色は蒼くなつた。

「犬を捨てさせにやつたが、あいつまた犬をさがしに行つたにちがひない。」

父の頭には川岸の草のなかに捨てられた小犬と捨松の姿が浮かんで來るのであつた。父は跣足のまゝ土間に飛び下りた、そして川の方へ走つて行つた。

昨夜の雨に川はあふれて濁流が渦卷いてゐた。

捨松が小犬を捨てたといつてゐた草原はまだ水に浸されてゐた。

「ひよつとしたら小犬を助けようとして一緒に流されてしまつたのぢやないか知ら？」さう思ふと、小犬を捨てさせにやつた自分の冷たい心をさげすまずにはをれなくなつて來るのであつた。

不圖父は楡の根に捨松が持つて出たカンテラが流れついてゐるのを見出した。

「あゝ可哀さうに、あの子は屹度こゝで流されたにちがひない。どうしようあゝあゝ。」父はそこに捨てられてあるカンテラを見た刹那、兩手で顏を掩うて泣いた。

父は家へかへつて行つた。村の人たちを賴んで出來るだけ川のなかを探して、捨松の屍骸だけでも探し出さなければならぬと決心して村の方へ出かけて行つた。

父の頭には、白い小犬をしつかりと抱いたまゝ、水のなかに溺れてゐる捨松の屍骸がうつつて來るのであつた。

父が赭土道の坂を驅けのぼつて村役場の方へ行かうとする時であつた。父は白い小犬を抱いた捨松が社の方から蒼白い顏をして歩いて來るのを見た。

父は飛んで行つて捨松を抱いた。

「おゝお前は生きてゐてくれたか。おゝお前は生きてゐてくれたか！」

父は捨松を抱いて泣いた。

捨松は生まれてからその時の父ほどやさしい父を見たことはなかつた。捨松もたゞわけもなしに、父の顏を見てゐると嬉しいやうな悲しいやうな氣になつて泣いてしまつた。

その日から捨松は大威張りで小犬を飼ふことをゆるされた。

藤作や詮太と懐にいつぱい柿を入れた捨松は村のうしろの小高い丘にのぼつて行つた。そこはいつか捨松が小犬を抱いてゐざりの乞食と夜を明かした社の裏山になつてゐた。

そこからは村も見え、村を通つてゐる國道も見えた。

三人は草のなかに寢ころんだまゝ赤く熟れた柿をかじりながら青い大空をながめたり、村の南側を流れてゐる大川を見たりした。

「おやツ！」と藤作は頓狂な聲を出した。

「どうしたんだい？」詮太が藤作の顏をのぞいて見た。

「あれを見い。あの遠い山をよ。」と藤作は山を指さした。

「山には雪がつもつたぜ。」藤作は山の雪に見とれてゐた。

「あゝ雪だ！　雪だ！」捨松は立ち上つて遠い山の雪をながめた。

雪といふ言葉を聽くと他の二人も、ぢつとしてまるで何かの魔にでもとりつかれたかのやうにしばらく默りこんでしまつた。

雪深い山の國の子供たちにとつて雪ほどなつかしいものはなかつた、それと同時に雪ほどさびしいものはなかつた。山に雪がつもるころになれば、家には炬燵が用意され、軒先には大きな杭を打ち込んで吹雪除けが作られた。馬小屋の隅では馬橇の手入れがはじめられるのであつた。鈴の音をひゞかせて、雪の上を走る馬橇の聲をきくだけでもうれしかつた。子供たちには雪のなかのいろ〳〵な遊びごとが準備されてあつた。

けれどもながい〳〵暗い空につゝまれた冬のことを思ふとかなしかつた。夜も晝も吹雪が荒れた。國境の山を越えて來る北の海の漁夫のおかみさんや旅人たちが雪崩に打たれて死んだといふやうな悲しい物語りも絶えなかつた。雪！　といふ言葉だけでも三人の心を啞默らせてしまふだけの不思議な力を持つてゐた。

三人の子供たちは柿をかじることをも忘れて、暫く遠い山のいたゞきを被うてゐる眞つ白な初雪をながめてゐた。

「昨夜お山の上に雪が來たのかなあ。」詮太は丸い眼をして、何か恐ろしいものについてゞも物語るやうに低い聲でいつた。

「昨夜ずらあな。」と捨松が雪を見ながらいつた。

「もうお正月が直き來るずらあ。」藤作がしばらくたつてからやゝ大きな聲でいつた。

「正月が來りやあもう春だ。春になりやおれたちは卒業だ。」捨松はうれしさうな顏をした。

「卒業したら何になるかなあ。」藤作が赤い柿をかじりながら二人の顏を見た。

「お前何になるか。」詮太が藤作の顏を見た。

「おらか、おらはなあ……お醫者がいゝかな。」

「お前は？」捨松は詮太の顏を見た。

「おらか、おらは師範學校にすべえ、捨松お前は？」

「おらか、おらはなあ日本一の大金持よ。」

「ばかぬかせ、われが何で大金持になれるかい。」藤作はあざわらひながら捨松を見た。

「ならずかよ、見てろよ……」捨松は眞つ赤な熟柿をかじつた。その刹那に捨松は物におびえたやうに草の上へ立ち

上つた。そして大急ぎで丘を走り下つて行いた。そこにはかじりかけられた半分の柿が草の上に投げ出されてあつた。

「何處へ行つたんだらう？」

「おや、また懷から本を出したぞ。」

二人が山の上でそんなことを話してゐる間に、捨松はどん〳〵走つて國道の方へ行つた。

「おや、捨松の奴、また鴨方先生を見つけておじぎをしに行きよつたぞ。」藤作は謙太を振りかへつて見た。

鴨方先生がお寺から村の方へかへつて來るのを、捨松は草のなかに立つて本を讀みながら待つてゐた。

「捨松ぢやないか。」鴨方先生は聲をかけた。

「はい。鴨方先生はどこにおいでになりました？」

「わしか、わしは專念寺の和尚さんとこに將棋をさしに行つたのぢや、お前はあれからずつとこゝで本を讀んでゐたのか。」

「はい、あれからちやうど一册讀み上げてしまひました。」

「よう勉強するのう。感心ぢや……」鴨方先生はにこ〳〵笑ひながら捨松を見た。

捨松は膝頭までも頭が下るほど丁寧に頭を下げた。

藤作と謙太は草の中を這ふやうにして近づいて行つて、隱れたまゝ鴨方先生と捨松の會話を聽いてゐた。

山は深い雪に埋められてしまつた。

桑畑も林檎畑も一樣に眞つ白な雪につゝまれてしまつた。

「捨松や……」父の聲が中二階の梯子段の上から土間の方へひゞいて來た。捨松は土間で雪靴の雪をかき落してゐた。

「あい、何ぢやなお父つあん。」がらんとした家中に捨松の聲がこだまするやうに思はれた。背戸の庇の雪がばたりと地響きをさせて落ちた。

「けふは大晦日ぢやないか。それだのに茂八も喜左衛門も勘九郎も借りた金は一文もかへしはせぬ。われ、これからずつと廻つて金を取つて來い。」父は中二階から算盤と帳面をかゝへながら下りて來た。

「お父つあん、わしこれから貸金の催促に行くのかい。」捨松は雪靴をかゝへたまゝ父の顏を見上げた。

「さうぢや。こゝに證文と、それから釣錢が入れてある。證文に金を受けとつてから返すのだぞ。茂八のところから最初に行け。その次が勘九郎ぢや、山一つ越ゆるのがちよつと難儀ぢやろが、そのかへりに喜左衛門の家に廻つて來てくれ。利子もあるでみんな取つて來るのだぞ。いゝか、けふは他の日とちがふ。一年に一度の大晦日ぢやでなあ。よいか一錢でも一厘でも貸し越しはならぬといへ。」

父は長い紐をつけた革財布のなかに證文と釣錢を入れて捨松の首にかけてやつた。

「ぢや、お父つあん行つて來るぞ！」捨松は雪靴を穿いて雪のなかを出かけて行つた。

「捨松や、よいか、けふは一年に一度の大晦日といふことをわすれるでねえぞ。一錢一厘も貸し越しはなりませぬというて取り上げて來るんだぞ。」父は中二階の窓から首を突き出して捨松に呼びかけた。

「一年に一度の大晦日！」捨松は雪のなかを歩きながら考へた。「一年にたゞ一度の大晦日は何故金を集めなければならぬのか？　大晦日といふものは金を集めるために神さまが人間の地上に造つてくだされたものなのか？」

捨松はいろ／＼に考へて見たが、何故大晦日に金を集めなければならぬのかわからなかつた。

雪はいかにも靜かに山や、雜木林や、桑畑をつゝんでゐた。枯木のてつぺんには小鳥がいかにも平和な聲で鳴いてゐた。

首からかけた革財布のなかに重いほど金を取り集めて雪のなかを歸つて來て、父をよろこばせることはいかにも愉快なことでもあつたが、しかし金を取られる人のことを考へると大晦日といふものはあまりうれしいことでもないやうに思はれた。

「いつたい神さまが、わざ〳〵そんな日をおこしらへになつたのか知ら？」捨松は空を見た。お寺の庭の高い木の上で小鳥がたのしげに鳴いてゐた。

鐘樓には一人の若い坊さまが撞木にお正月の輪飾りを結びつけてゐた。

「お正月が來るんで、お寺の鐘も年を取るんだな！」捨松はさう思ひながら鐘樓の上の若い坊さまを見た。若い坊さまは捨松の顏を見て笑つた。捨松もきまりが惡かつたので笑つた。

「今日は……」捨松は或る農家の土間に立つてゐた。軒は傾き、土間の壁は落ちて、寒い風が吹きこんでゐた。

「今日は……捨松さんか。この寒いのに……」茂八が齒の拔けた口をもぐもぐさせて奧から出て來た。「まあ爐のところへ來てあたんなさいよ。」

「今日は一年にたゞ一度の大晦日だでなあ小父さん……」捨松は父に敎へられた通りにいつて金の催促をした。

「さうぢやとも。わしもなあ捨松さんがこの雪のなかを來てくだされんでもわしの方からその金は持つてかへしにゆくつもりでゐたんぢや。ところでなあ、あれを見てくだせえ。」茂八は土間へ下りて、裏の厩の方へ捨松を案內した。

ぞろ〳〵と茂八の子供たちが蒼い顔をして、瘦せこけた手足をして、二人のうしろからついて來た。

「あの馬を見てくれさつし。あんたもよう知つてゐなさつたが、あのやうに肥つてゐた馬が一月ばかり前木を伐り出しにつれてつたかへりに、木を負ぶつたまゝ谿へ落ちて足を挫いてやな。それからずつとあゝやつて寢たきりぢや。」

馬は瘦せこけて今にも死にさうに見えた。茂八を見るとなつかしさうに鳴いた。茂八は馬のたてがみを撫でながらぽとりと涙を落した。それを見てゐた捨松もぽとりと涙を落した。

「あゝ可哀さうに、畜生だでものもいはぬが大儀ぢやらうよ。うむ、苦しいか……」茂八は馬の鼻づらをさすつたりした。

「なあ捨松さん、これだで……いくら畜生でも可哀さうぢやから、毎日隣りの村の獸醫さんに見てもらふとるんぢや、そのために毎日金を出すばかり、馬は病氣で一厘もかせぐことはできぬしなあ、あの通り馬車はあゝやつて雪のなかに放り出してある始末ぢや。いくら畜生でも、今日まで働いて、わしらを養つてくれたと思へばどうかして助けてやりたいと思ふから、この頃ではこの子供らにも飯さへ滿足には喰べさせんで、馬の藥ばかり買ふとりますのぢや……」

馬はせつなさうに茂八を見て鳴いた。

「うむ、可哀さうに苦しいか、じゆつないか……あゝ！」茂八はいつまでも馬の背を撫でてやつた。子供たちまでがぽとりと涙を落した。それを見てゐると捨松は泣かずにはをれなくなつた。

「いよ〳〵小父さん。ぢや、こゝに借金の證文があるが、これは小父さんから金を貰つてから小父さんにかへすのだといひつかつて來たが、小父さん、あんたにあげます。」捨松はさういつて借用證文を爐の火のなかにくべてしまつた。

「あれ、捨松さん、あんた何をするだ。飛んでもない。そんなことをしてもらつたのぢや、わしの立つ瀬がない。」

「いゝよ小父さん、馬ァ助けておやり、お金のことは心配しないがよいがなあ。」

「でも、それではあまりもつたいないでなあ。」茂八も、茂八のおかみさんも雪の中に立つて顔を掩うて泣いた。

「捨松さん、あんたは神さまのやうな人ぢやなあ。」

「わしが神さまつて？　わしが……え、小父さん？」

「このせちがらい世の中に借金の證文を火にくべてくれる人なんて、日本中歩いてもない。あんたはまつたく神さまだのう……」

「さ、だとも／＼、神さまだ／＼。」茂八のおかみさんは雪の上にぽと／＼と涙を落した。

捨松は雪のなかを歩いてゐた。

茂八の金を取つて來なかつたことを父に叱られるにちがひないと思ふと、恐ろしい父の顔が浮かんで來て雪の道が眞つ暗になるのであつたが、馬を助くること、茂八やおかみさんたちをよろこばせたことを思ふと明るい心にもなるのであつた。さらに「あんたは神さまだ／＼。」といはれた言葉を思ひ出すと愉快でならなかつた。ほんたうに自分自身神さまになつたやうな氣もするのであつた。

いつの間にか山を越えてゐた。

「やあ捨松さんか。この雪のなかを難儀なことであつたらう。さあこつちへ來て爐の火にあたつておくれ。」勘九郎は土間に立つて寂しさうな顔をして捨松を見た。

「けふは一年にたゞ一度の大晦日だでなあ……」捨松は同じことをはじめた。

「捨松さんが來てくれんでも今朝あたりわしの方から借りた金はおかへしに持つて行く筈でゐたにまあどうしたといふことだらう、昨日町の銀行からありつたけの金を引き出して來ればよかつたに、今朝よ、捨松さんもきいただらうが町の銀行がつぶれたで一文の金もないことになりましたぢや。今日は大晦日だといふに明日の支度もできん、それを苦に病んでかゝさまは今朝から奥の方へ寢込んでしまうた。わしも首でもくゝつてしまはうかと思ふとるのさ。」勘九郎は土間にぽとりと淚を落した。

捨松も泣き出してしまつた。

「いゝやなあ小父さん、もう金なんかどうでもいゝよ。この證文は小父さんのだ。かうするからなあ……」捨松は勘九郎の證文を爐のなかへ投げこんでしまつた。

勘九郎は腰をぬかさんばかりに驚いた。

「飛んでもないことぢや。それでは罰があたる。」

「そんな心配はせぬがいゝ。なあ小父さん！」

「でも、あんまりありがた過ぎるわ。おいこゝまで起きて來いよ。」勘九郎は奥の方へ聲をかけた。

「わしも奥の方で捨松さんの話をきいてゐた。あまりありがたうて淚が出てなあ……あんたはまつたく神さまだ。なあ捨松さんは神さまだ。」勘九郎のおかみさんは掌を合せて捨松を拜んだ。

「おかげでわしもすつかり病氣がなほつた。捨松さん、ありがたうございました。」勘九郎のおかみさんは榾を抱へて來て火を焚いてくれた。

捨松は雪のなかを歩いてゐた。

小鳥が木のてつぺんで啼いてゐた。

何となしに愉快でならなかつた。

「あんたは神さまぢや神さまぢや……」雪のなかゝら人聲が聞えた。

「あゝ捨松さんか、この寒いのによう來なすつた。さあ爐にあたつておくれ……」喜左衞門が雪の戸口に立つてゐた。

「今日は一年にたゞ一度の大晦日だでなあ……」捨松は喜左衞門の顏を見た。

「何とも申しわけもないが、あれを見ておくれ、三人の子供が一時に病氣にかゝつてなあ……それにこの大雪で水車小屋はつぶされてしまうし。わしらは三日前から飯も滿足には食つてゐないのでなあ。」喜左衞門とおかみさんは泣いてゐた。

「小父さん。ほら、これは小父さんの證文だよ。火のなかにくべてあげるよ。」

「どうしたの。飛んだことだ。それでは天罰があたるで。」

「心配せぬがいゝ。小父さんは困つとるのぢやから。」

「捨松さん、あんたは神さまぢや……」喜左衞門とおかみさんは雪のなかに見送りながら捨松を拜んだ。

捨松は雪のなかを歩いてゐた。

「あんたは神さまぢや。」雪のなかゝら人の聲が聞えた。捨松は振りかへつて見た。しかし誰もゐなかつた。」

小鳥は高い木のいたゞきに啼いてゐた。

「もし〳〵……」或る辻堂の軒の下に箱車に乘つた躄が捨松に聲をかけた。

「どうしたのかい？」捨松はゐざりの方へ近づいて行つた。

「旦那さまをお呼び立てしてまことに相すみませんが……わたしはこれから山一つ越えて行きたいのですが、この雪では車を押してもらはねば車は動きませぬ。かというて人を雇ふ金はなし、途方に暮れてをるのでございます。」

「ぢや、この山さへ押してやればいゝんだな。」

「左樣でございます。この山さへ越しますれば。」

「ぢや、わしが押して上げるわ……」

「あなたが……ありがたいことで、あなたは神さまのやうな方で……」

「ぢや押して上げよう。」捨松は兩手をかけて箱車を押した。

「神さまのやうな方で。」といはれたことがうれしくてならなかつたのでくす〳〵と笑ひながら車を押して行つた。

五六町も山を登つたところで捨松は罠をかけに行つて山を下つて來る藤作と詮太を見出した。

「おい、捨松が乞食の車の後押しをしとるぞ。」藤作が笑ひ出した。

「乞食の車を押しながらにこ〳〵と笑つとるぢやないか、何がうれしいのだらう、乞食に金でも貰うたのだらうよなあ。」詮太はびつくりした顏をして捨松をながめてゐた。

「さうずらあ、捨松はずるいで、金でももらはぬことにやなか〳〵車なんぞ押してやるものか。」

「あいつ乞食に金をもらうて、乞食の車の後押しをしとるんぢやはゝはゝはゝ……」

二人は峠の上で笑ひこけた。

「詮太よ、藤作よ、何を笑ふとるのぢや。お前たちもこゝへ來て車を押してやれ。」
「おれたちも手傳ふのかい。」
「幾らか金がもらへるのかい。」
「馬鹿いふな。」捨松は二人をにらみつけた。
詮太も藤作も捨松にはいつも一目置いてゐたので、捨松がいふまゝに車の先に綱をつけて二人で引き上げることにした。
三人の山の子たちは雪を蹴つて山を越した。
「ありがたい、ありがたい。」旅の男は涙を落してよろこんだ。
ところが大事件が突發した。旅の男は山の子たちへ心ばかりのお禮をしようと思つて車のなかの抽斗しから金を出さうとしたが、かれは突然呻くやうな聲を出した。
「後の村で盗まれたにちがひない！」かれは泣かんばかりにして麓の方をながめてゐた。
「あんたらにお小遣を上げようと思つてゐましたが、一厘もなくなつてしまひましたので、かんにんして下さいよ。」
「でも、小父さん一文なしではこれから先困るでせう。旅をつゞけるのに。」
「困ります。どうしたらいゝか考へもつきませぬ。」旅の男は深い溜息をついた。
「日は暮れるしなあ……」と捨松は氣の毒さうに旅の男を見た。旅の男は泣いてゐた。
「よしツ！　わしが上げよう……」捨松は首からかけてゐた革財布をさかさにした。中には家を出る時父が釣錢だといつて入れてくれた金がはいつてゐた。捨松はその金を壁の手に握らせた。

「あなたはまつたく神さまだ！」旅の男は捨松を拜んだ。

藤作と詮太はきよとんとして二人をながめてゐた。

三人の子供たちは車のうしろの赤いランプに燭をつけた。

旅の男は幾度か頭を下げて、涙を落しながら雪のなかを下つて行つた。

三人の子供たちはすつかり日が暮れてしまうまで遠ざかつて行く箱車の赤い燭を雪のなかに見送つてゐた。

捨松は雪のなかを家にかへつて行つた。

かれは雪明りの道に黒い影が動いてゐるのを見た。一人の男が雪のなかに倒れて呻いてゐた。捨松は黒い影の方へ近づいて行つた。

「捨松ぢやないか？」

「へえ……誰だなあ……」捨松は覗き込んで見た。酒の香がぷうんと鼻を突いた。

「あゝ鴨方先生ですかい？」捨松は酒に醉つて雪のなかに打ち倒れてゐる鴨方先生を見出した。

鴨方先生は酒が好きで、いつも月末に月給を貰ふと酒屋へ行つて醉ひつぶれるまで飲んだ。

「先生さま、またお酒を飲んだだなあ。」

「捨松や、すまんがわしを家まで連れてつてくれ！」

「先生さまのお家までかい？」

「うむ家までぢや……」

「ぢや、わしの肩にしつかりとつかまつてくだされ。」捨松は醉ひつぶれた鴨方先生の腕を引つ張り、肩にかつぐやうにして、雪のなかを歩いて行つた。

「捨松や、お前は感心な子だ。神さまのやうな奴だぞ。」鴨方先生は酒くさい息を捨松に引つかけた。

鴨方先生から「神さまのやうな……」といはれたことが捨松にはたまらなくうれしかつた。

幾度か先生と一緒に雪のなかに、よろめき倒れながらも捨松はうれしくてならなかつた。

先生を送りとゞけて雪のなかを家にかへつて來たのはもう夜の十一時ごろであつた。

「あゝもどつて來たか、雪のなかを一日歩いたので草臥れたであらうな。さあ風呂も沸かしといた。早く風呂にはいつてあたゝまつた方がよい。」父はうれしさうに捨松の雪靴をぬがせたり、肩の雪を落してやつたりした。

「お前は神さまのやうだ！」誰かゞさういつてゐるやうな氣がしてならなかつた。捨松はいまゝでになく愉快でならなかつた。

「捨松や、さあ御飯もあたゝかにしといた。うんとお喰べ。」父はさういつて大きなおはち入れを出して來た。

「時にだ、金はみな集まつただらうな。」父は捨松の首の革財布をじろりと見た。

「しまつた！」と捨松は思つた。

「どれ、その財布を出して見い。」父はひつたくるやうにして捨松の首から革財布を取つた。見る〳〵父の顏色は蒼ざめて來た。

「これ捨松、どうしたんぢや。この中には、一文の金もはいつとらぬが、懷にでも入れて來たのか。」父の手はわなわなと顫へてゐた。

「お父つあん、わし金は一文も取つて來なかつた。」捨松は溜息をついた。
「證文は？」父の眼は凄いほど血走つてゐた。
「證文は燒いてしまつて來た？」
「證文は燒いてしまうた……どゝどうしてよ……」
「茂八さんの家では馬が死にかゝつてゐて、みんながこの四五日飯も食はずにゐたし、勘九郎さんの家ではけさ銀行がつぶれたで首でもくゝらうかと思つてゐるといふことだつたし、喜左衞門さんの家ではこの雪で水車小屋はつぶれる、三人の子供たちは病氣で死にかゝつとるしなあ、わしあんまり可哀さうになつたので……」捨松はうつむいてしまつた。
「それでわれ、金も取らず、證文も燒いて來たのか？」父は拳を握りかためてゐた。
「ちや、わしが持たせてやつた釣錢はどうした？」
「それは旅のゐざりが金を盜まれて雪のなかに泣いてゐたので……」
「その男にやつてしまうたのか？」
「あい……」
「それでお前はわしに何というてわびをするつもりだ。」
「でもなあ、みんながわしのことを、けふは神さまのやうだというたよ。」
「何が神さまだ、ばか〱しい、それで金はみんな盜まれてしまうて、うぬどうしてくれよう。」父は拳を堅めて二つ三つ捨松の頭をどやしつけた。

「お父つあん堪忍しておくれ、わしが惡かつたで……」

「たとひ一文の錢でもなまやさしいことでは儲けられはせぬ。みんな血と汗のかたまりぢやぞ。それだのにきさまは……」ぼか〳〵と捨松をなぐりつけて土間の上に叩きつけた。

捨松はひい〳〵と呻きながら土間の上に突つ伏して泣いた。

「お父つあん、堪忍して、わしが惡かつたで……」

「殺してやるからさう思へ。金のありがたみを知らぬきさまのやうな奴は殺した方がいゝのだ。そこにゐろ、今に殺してやるから……」

父は何と思つたのか土間にあつた手斧を掴んで家の裏に飛び出して行つた。

父は裏の流れに行つて枯柳の下で手斧を研ぎはじめた。

さくさくさくと手斧を研ぐ音が土間の捨松の耳にひゞいて來た。

「お父つあんはわしを殺すつもりであらう！」捨松はさう思ひながら手斧を研ぐ音を聽いてゐた。

「逃げようか知ら？」捨松はさうも思つた。

さくさくさくと手斧を研ぐ音がかれの命を縮めるかのやうにひゞいて來た。

「わしは殺されるより逃げよう。」捨松は暗い土間のなかから裏の柳の下を見た。ひどくなぐりつけられたので、からだ中が痛んで自由に動くこともできなかつた。

空には青い星がまたゝいてゐた。

柳の下で手斧を研いでゐる父の姿が黒い惡魔のやうに見えた。

「早く逃げればよかつた。」と捨松は思つた。しかし絶體絶命である。捨松は暗い土間から表の方へ這ひながら逃げ出さうとした。

ちやうどその時、除夜の鐘がしづかに雪の上を響いて來た。

人間の世界のすべての苦しみをも、悲しみをも、人間が犯すすべての罪業をも、怒りをも、滅するごとくしづかにおごそかに除夜の鐘が鳴りはじめた。

除夜の鐘を聽くと、父は電氣にでも打たれたかのやうに手斧を掴んだまゝ雪の中に突つ立つた。そしてふたゝびぢつと鐘の音を聽いてゐた。

鐘の音はすべての人間の憤りを鎭め、すべての人間の惡念を滅するごとくしづかに雪の上を鳴りつゝ遠くの空へ消えて行つた。

鐘の音を聽きつゝ佇んでゐた父の手からぽとりと手斧が雪の上に落ちた。

捨松は暗い土間から息をこらして父を見てゐた。

鐘はしづかに鳴つた。

父は急にすゝり上げて泣いた。氣の強い父が泣くといふやうなことは捨松は生まれて一度も見たことがなかつたので、最初は可笑しくてならなかつた。ついいまの先まで殺されるにちがひないと思つて顫へてゐた捨松は、すつかり恐怖を忘れて笑ひたくさへなつた。

しかし父がたうとう柳の幹へよりかゝつて泣いてしまつた時は、捨松もわけもなく悲しくなつて泣いた。

捨松は父の方へ飛んで行つた。

「捨松ッ！　堪忍してくれ。わしが悪かつたでなあ！」父は柳の下でひしと捨松を抱きしめた。父の涙が捨松の襟へ落ちた。

「捨松、あれを見い！」父は青い星を指さして見せた。

「お前、あの除夜の鐘をお聽き！」父は雪の上に響いて來る鐘の音に耳をかたむけた。

「捨松、わしはな、あの除夜の鐘を聽くと、三十年も前に亡くなられた祖父さまのことを思ひ出す。祖父さまはな、親切な人ではあつたがなか〱氣荒の人でなあ、氣に食はぬことがあると、わしなんか薪や、斧の柄でなぐりつけられたものぢや。わしが十八の時の、ちやうど大晦日の晩ぢや。何かのことから祖父さまがわしをひどく叱つて斧の柄でわしの背中をいやといふほどなぐりつけなさつた。わしは怒つて祖父さまに飛びついて行つたのぢや、そして雪のなかで祖父さまと取つ組み合ひをした。わしは惡いこと〱は思つたが祖父さまの首を締めようとしたんぢや。ちやうどその時、あの除夜の鐘が鳴りはじめた、雪の上を鳴つて來た。わしはなあ、鐘の音をきくとはつとしたんぢや。惡いことをしたと思うたのぢや、それですぐに祖父さまを雪の上に起してな、わしは雪の上に兩手をついて祖父さまにおわびをした。祖父さまはわしを抱きしめて、もうよいもうよいといはれた。わしも祖父さまもこの柳の下で泣いた。あの時もあの青い星がまたゝいてゐた。わしは除夜の鐘を聽いてゐるとあの時のことを思ひ出してすつかり悲しうなつたのぢや……捨松堪忍してくれ。お前が今日して來たことはみんなよいことぢや。お前はよいことをしてかへつて來た。茂八も勘九郎も喜左衞門も今夜は安心して除夜の鐘を聽いてゐるずらあ……お前はよいことをしてもどつて來た。わしはお前のおかげではじめてよい悟りを開いたのぢや。」

父は捨松をつれて土間にはいつて來た。そして爐に榾をくべて、部屋中が眞つ赤になるまでに火を焚いた。

「捨松や、今にわしがあたゝかいお汁を拵へてやるで、早う御飯をたべろよ、可哀さうにひもじかつたであらう。お汁のなかに餅を入れてやるぞ。さあうんとたべろ……」父は爐の自在鍵に大きな鐵鍋をかけて、餅と、それから、こつそり捨松にかくして鷄の肉を入れた。

「さあもう餅が煮えたぞ、さあ菜つ葉と餅ばかりだでうまくはあるまいが、うんとたべてくれよ。」父はさういつて大きな椀にお汁をよそつてやつた。

捨松は大きな椀をかゝへて咽喉をぐび〳〵いはせてたべはじめた。

「お父つあん！」と捨松は頓狂な聲を出した。

「捨松何ぢや！」

「これどうしたんぢやろ。こんな大きな鷄の肉がはいつとるぞ！」捨松は鷄の肉を箸にはさんでうれしさうな顔をした。

「ほう、それは不思議ぢや、どこから鷄の肉が飛んで來たんぢやろか、お前が今日はよいことをして來たので神さまがお前に鷄の肉を下されたんだらうよのう。」

「さうかなあお父つあん……うまいよお父つあん！」捨松は舌皷を打つて鷄の肉を食つた。

除夜の鐘の音がしづかに雪の上をひゞいて來た。

「お父つあん。今鳴つてゐる鐘なあ、わしあの鐘を撞いてる坊さまを知つてゐるぞい。」

「どうしてよ？」父はかゞやかな顔をして捨松を見た。

「けふな、茂八さんの家へ行く途中で、あのお寺の鐘樓に立つてゐた若い坊さまを見たんぢやぞ。わしを見るとその

若い坊さまが笑つたのぢや。それでわしもまた笑つたんぢや。親切さうな坊さまぢやつたぞ。」
「さうかい。その若い坊さまがあの鐘を撞いてゐなさるんぢやろよ。この寒い夜なかに、ありがたいことぢや。捨松や、もう一杯お汁をかけて御飯をたべてくれよ。」
「もうお父つあん、わし、おなかいつぱいぢや。」
「でも、お前は今日はよいことをわしに教へてくれた。わしはお前のおかげで今年はじめて心からうれしい除夜の鐘を聴くことができた。茂八も勘九郎も喜左衛門も今夜はあの除夜の鐘の音をきゝながら、お前のことを神さまのやうに思うてをるぢやらうよ。わしもうれしいぞ、わしもお前を今夜ばかりは神さまのやうに思ふぞなあ……」父はぽたりと膝の上に涙を落した。
「お父つあんまたこんな大きな鶏の肉がはいつとつた！」捨松は大きな骨付きの鶏の肉をお汁のなかゝらはさんでうれしさうに父に見せた。
「たべろたべろ、幾らでもたべてくれ、今夜だけはうんとたべてくれ！」父は笑ひながら捨松の顔を見た。
「おや、お父つあん……今度はこれ、またこのやうに大きな鶏の肉だよなあ……」捨松は手でつかんでもり〳〵と骨をしやぶつた。
「うまいか捨松！」
「うまいとも、うまいともお父つあん。」
「今夜はうんとたべてくれよ。鶏をたべると、温かになるでのう。」
「あい……」捨松は父の言葉がしみ〴〵とうれしかつたのでぽとりと涙を落した。かれは今夜のやうにやさしい父の

聲をきいたことはなかつた。

「うまさうぢやなあ……よくたべる、よくたべるはゝはゝはゝ……」父はうれしさのあまり笑ひながら泣いた。

雪の上をしづかに除夜の鐘の音が響いては消えて行つた。

「北門より出づれば
憂心殷々たり。
終に窶且貧
我がなやみを知ることなし
已焉哉……」

鴨方先生の丸窓からはいつものやうに先生の低い詩吟の聲が聞えてゐた。

先生は學校からかへつて來ると丸窓に凭りかゝつて、一本の酒をちびりちびりたのしんでは興に乘つてはいつもの詩を低吟するのであつた。

鴨方先生は今から三十幾年も前、まだ捨松たちが生まれないずつと以前に東京からやつて來て、村の學校につとめてから今日までたゞ一人で村中の子供たちを敎へてゐるのであつた。

そのころは鴨方先生もまだ若く、房々とした眞つ黒な髮をしてゐたが、今では髮も半分は白くなつてしまつた。

學校といつても敎室が二つあるきり、運動場といつては學校のまはりの雜木林、春は山櫻も咲き夏は終日ほとゝぎすが鳴き秋になると栗の實が落ちた。

幾度か若い先生が山の學校へやつて來たが半歳と經たぬうちに、都會の學校へ行つてしまふので、このごろは鴨方先生一人でいつも二つの教室を受け持つてゐる。

山の人たちは鴨方先生を神さまのやうに尊敬してゐる。

ながいこと無住の寺があつて、荒れはてゝゐたのを、鴨方先生の住宅にと村の人たちが相談をきめた日から、鴨方先生は無住の寺を家にして住んでゐる。

鴨方先生がはじめて無住の寺へはいつた時は、佛像は誰かに盜まれてしまつて、燒けこげた蓮臺だけがのこつてゐて、蓮臺の上には燃えさしの榾が二本載つけてあつた。

「大方山賊でもこゝに巣を食つてゐて、佛さまは燃やしてしまうたのであらう。」先生はさういひながら家のなかを掃除しはじめた。

池にのぞんだ丸窓がいかにもお寺らしい靜かな感じをあたへたので、先生はいつも丸窓のそばに坐つてゐた。

夏になると、丸窓を明けると古い池の面には黄色な河骨の花が咲いてゐたりした。

「燕燕こゝに飛ぶ
差池たるその羽。
之子こゝに歸る
遠く野に送る。
瞻望およばず

泣涕雨の如し。」

先生の低吟はいつまでもつゞいてゐた。

丸窓の外には梅も散りかゝつてゐた。

先生は若いころから詩吟が上手であつた。暇さへあれば先生は低い聲で詩を吟じた。そして時としては自分で自分の聲をきゝながら眼をうるましてゐることもあつた。

「ほら見い、鴨方先生が泣いてるずらあ。」

山の子たちはさうつと先生の眼をぬすみ見てはからかつたこともあつた。

鴨方先生はいつたい何處の町から來た人であるか、今日まで誰もそんなことを知つた者は一人もゐない。

そのころ縣の知事をしてゐた人が、山の村長さんに一本の手紙をつけて鴨方先生を村に寄越したのが、そも〳〵の初めであつた。まだ明治になつて間もなくのことだつたので、鴨方先生はその時は大小を腰にさして、ちやうど山の初雪がほんのりつもつた道を歩いて來た。着物はひどくよごれてゐて、羽織の紋などもはつきりは見えなかつたといふことである。

知事さんの手紙には「鴨方先生は天下稀に見る清節の士なり……」といふやうなことがむづかしい漢文で書かれてあつたので、山の人たちはよくは讀めなかつたが、知事さんの推薦ではあるし、見たところ立派な武士らしいので最初からすつかり鴨方先生には頭を下げてゐた。

先生は維新の戰ひに薩摩の官軍を對手に戰つた或る大名の家來で、明治政府に仕へるのがいやで、山の中へはいつてしまつたのだとも村の人たちはいつてゐる。先生はそれについては、人がたづねてもたゞ笑つてゐるばかりで答へ

たことはない。

先生の兄と云ふ人が大變出世をして、東京で大臣か何か、ともかくえらい役人になつてゐるといふこと、そして幾度も東京へ出て來るやうにと手紙を寄越しても先生は一度も山を出て行つたことがないといふやうなことだけは捨松も、他の子供たちも村の人たちから聞かされて知つてゐた。

山の子たちも先生がもし東京へでも行つてしまふことになつたらどうしようと、それぱかりはいつも心配してゐるのであつた。だからもし東京から先生のところに手紙が來たりすると、山の子たちは二三日くらゐ先生の顏色ばかり見てゐるのであつた。

捨松はその日桑畑のなかで逢つた郵便配達から鴨方先生へ來た手紙をことづかつたのであつた。その手紙は東京から來た手紙であつた。

「鴨方先生に、東京へ來いといふ手紙ぢやあるめえかなあ。」捨松は詮太や藤作に相談してから、先生に手紙をとゞけようか知らとも考へた。捨松にはいつになくその手紙のことが氣になつて仕方がなかつた。

「でも、そんないことしては惡いでなあ。」捨松はさう思ひながら先生の丸窓の方へ近づいて行つた。

丸窓のなかゝらはいかにものどかな先生の詩吟の聲が聞えてゐた。柔かな春の光りは丸窓を照らしてゐた。いかにも靜かな、のどかな先生の低い詩吟の聲をきくと、捨松はすつかり安心してしまつた。山の人たちを驚かすやうな事件が急に起つて來ようといふことは想像もされなかつたから。

「先生さま、お手紙でございます。」捨松は丸窓の下に立つて上を仰ぎながら聲をかけた。

「誰ぢやな、おう捨松君か！」先生は窓から顏を突き出して捨松を見た。

「ふうむ、手紙かい。ありがたう、どうれ！」先生は丸窓から手をのばして捨松の手から手紙をうけとつた。

捨松はそのまゝ歸らうかと思つたが、ちよつと氣になつたので、丸窓の下にしやがんでゐた。しばらく部屋のなかが森閑としてゐた。

もう先生が詩を讀むころだとおもつて捨松はだいぶ丸窓の下にしやがんで耳をすましてゐたが、部屋のなかゝらは何の音も聞えなかつた。

「變だな！」と思つて捨松は脊伸びをして丸窓のなかをのぞいて見た。

先生は手紙をひろげたまゝ、きちんと坐つてゐた。先生はほろ〳〵と手紙の上に涙を落した。

捨松は今までに先生のそのやうな悲しさうな顏を見たことがなかつたので息を殺して丸窓の下に身をかくしてなほも先生の樣子をうかゞつてゐた。

先生はいつまでも手紙の前に坐つて、しまひには手紙の前に頭を下げて聲を出して泣いてしまつた。

捨松は大變なことになつてしまつたと思つた。かれは村の方へ飛んで行つた。水車小屋の前に立つてゐた詮太を見つけてわつと泣き出してしまつた。

「どうしたんだ捨松！」詮太はびつくりして捨松の顏を見た。

「おめえ、鴨方先生がどうかなさつたゞ。もう先生はわしらの學校にはゐさつしやらぬかも知れねえぞ。」

「何ッ鴨方先生が？」

「さうだとも、先生は東京から來た手紙を見て今泣いてゐなさるだ！」

「どうしべえか？」
「村の衆にをしへてやるだ！」
捨松と諒太は村の方へ走つて行つた。
藤作が萱をかついで山を下つて來るのに出逢つたので、藤作をつれて三人で村の方へ飛んで行つた。
村中の人たちが驚いて集まつて來たのはその日の夕方であつた。
西の空が美しく夕燒雲に燃えてゐた。みんなは先生の前に集まつて仔細をたづねた。
「わしも長いことこゝに來て、一度も東京へも行かなかつたが、今度といふ今度はいやでも東京へ行つて來ねばならぬことになりました　わしのたつた一人の兄がわづらうて、明日にも知れぬといふ知らせぢや……」先生はさびしい顏をしてみんなを見た。
「おや、すぐ先生さまは東京へ立たつしやるだなあ。」と村長さんが暗い顏をしてたづねた。
「今から直ぐに立ちたいと思ひます。別に旅の支度といつても何もありませんので……」と先生は村長さんの顏を見た。
「しかし、山道は難儀でせう。それにまた雪崩でもあると危ふございますで……」
「でも、せめて兄が生きてゐる間に一目でも逢つて置きたいとおもひますのでなあ……」先生は溜息をついた。
「御無理もないことで……」村の人たちは貰ひ泣きをして、鼻をすゝる者もあつた。
ともかく先生のこゝろに任せて、その夜先生を立たせることにきまつた。村からは誰か一人、先生のお伴をして東京まで行かなければならぬ。それには悧巧な捨松がいゝといふことになつて、捨松は急に夢にも思つたことのない東

京へ立たなければならぬことになつた。
「捨松、すぐにかへつて、東京へ行く支度をして先生のお伴をするのぢや。」村長さんはやさしい眼で捨松を見た。
捨松はうれしくてならなかつた。村の人たちの間から自分ひとりが選ばれて先生のお伴をするのだとおもふと胸がわく／＼して來るのであつた。
捨松は家の方へ飛んで行つた。

家の方へ飛んでかへる道すがら不圖捨松の頭に浮かんだ一つの不安があつた。それは今から二十年も前の話であるが、或る時鴨方先生は二十里ばかり離れた町まで出かけて行つた。そのかへりに先生は或る山の中で三人づれの追ひ剝に出逢つたことがあつた。追ひ剝は先生にありつたけの金を出せといつた。先生は懐のなかゝら金入れを出してやつた。「もうお金はこれだけしか持たぬのか。」と追ひ剝はたづねた。
「あゝ、わしはそれだけしか持たぬ。」と先生はいつた。
「ぢや、勘辨しとくから、早くかへれ。」と追ひ剝はいつた。
先生はしづかに山を下つてかへつて來た。ところで、十二三町も歩いたころ、先生は「しまつた！」と叫んだ。先生はその時外套の内かくしに前の夜宿代の剩り錢を入れて置いたことをすつかり忘れてゐたのであつた。
先生は外套の内かくしに手を入れて見た。そこには三圓ばかりの金が紙に包んだまゝはいつてゐた。
先生はふたゝび山を上つて、元の道をかへつて行つた。先生はひた走りに走つた。
さつきの追ひ剝たちはまだ峠の上に火を焚いてあたつてゐた。

「おうい、追ひ剝たち！」先生は大きな聲で呼びかけた。

追ひ剝たちは驚いて先生の方を向いた。乾度先生が復讐に來たにちがひないと思つたのであつた。

先生はきまり悪さうな顔をして笑ひながら追ひ剝たちの方へ近づいて行つて、外套のなかから金を出してやつた。

「さつきわしは、ありつたけの金だといつて金入れをわたしてやつたが、後で氣がついたらまだ外套の内かくしにこれだけ金が殘つてゐたよ。わしはお前たちに噓をいつたやうで心苦しいから、この金もお前たちに上げに來たんだ。さあうけとつてくれ。」先生はさういつて紙に包んだ金を渡さうとした。

三人の追ひ剝はびつくりして先生の顔を見つめてゐたが、しまひには三人の大男が聲へ出してしまつた。

「おい、この金をうけとつてくれ、人間は噓をいうてはならぬでなあ、わしが忘れてゐたお金だから……」さういつて先生は一人の男の手に金を握らせた。

三人の追ひ剝は地べたに頭をすりつけておわびをした。先生は金を三人の前に投げたまゝ山を下つてかへつて來た。

この話は先生の旅の逸話として今日まで山の人たちの間に傳へられてゐることである。

家の方へ飛んでかへつてゆく捨松の頭に浮かんで來た不安は、先生と追ひ剝の話であつた。

東京までのながい旅の間には、乾度追ひ剝もゐるにちがひない。かう思ふと捨松は不安でならなかつた。

追ひ剝が出る。先生を助けて捨松がうまく〳〵追ひ剝を退治するといふやうな空想は、普段ならわいて來たでもあらうが、日も暮れかゝつて來たし、いよ〳〵今夜から先生のお伴をして、歩いたこともない遠い旅をつゞけなければならぬといふ實際の場合になれば、そんな勇ましい空想などはどこにか影をひそめてしまふのであつた。

追ひ剝が出て、先生に金を出せといふ。先生は神さまのやうに正直なお方だからおとなしく懐の金ばかりか、外

嚢の中の金までも出すにちがひない。さうなつて來ると先生と二人が一文なしで乞食のやうな旅をつゞけなければならぬ、捨松の憂ふるところはそこなのである。

そんな場合にどうしたらいゝか? 捨松は捨松一流の智慧をしぼつた。捨松は家にかへつて行つて、祖母さん時代からあつた古い手甲と脚絆を着けて古い古い柳行李の辨當箱の底を二重にして、その底に父から貰つた紙幣と銀貨を入れて、丈夫な絲で縫ひ込みにしてしまつた。それをぼろ〳〵になつた風呂敷に包んで肩から背負つた。これなら誰が見ても金がはいつてゐるとは氣付かないにちがひない。

捨松は父に送られて家を出た。

先生や村の人たちは捨松を待つてゐた。

もうすつかり日が暮れて、村の出口では火を焚いて先生と捨松を送つてくれた。

「捨松や、よく先生の面倒を見て上げるのだぞ、そして御用がおすみになつたら、また先生のお伴をして山にかへつて來るだぞ。」村長さんは捨松の頭をさすつてくれた。

峠を一つ越すまでは、父も村の人たちも提灯をともし、松明を焚いて多勢で見送つてくれた。

峠の地藏堂の前で村の人たちはかへつて行つた。

「捨松や、からだを氣をつけてな、早う達者でかへつて來てくれよ。」いつになく父がやさしい聲でさういつて捨松の肩に兩手をかけてぢつと捨松の顔を見た、捨松は提灯の明りに映つた父の顔を見た時は急に悲しくなつてほろりと涙を落してしまつた。

「それおや、ぼつ〱歩くことにしよう。」先生はかういつて億劫さうに立ち上つた。捨松は先生のうしろからついて行つた。

夜が明けるまでに先生と捨松は山一つ越えて或る山の町に着いた。翌日は馬車に揺られて終日淋しい森に沿うた道を走らなければならなかつた。日が暮れてからはじめて或る町に着いて、そこではじめて電燈を見、汽車を見た。

捨松は汽車に乘つてからも、最初は山にかへつたら藤作や詮太に珍らしい電燈や汽車の話をして聞かせようと思つて眼をみはつてゐたが、しまひには山の父のことばかり思ひ出した。涙が落ちて仕方がなかつたので、そうつと汽車の硝子窓の方を覗くと、そこには旅やつれしたかれ自身のきよとんとした顔が暗のなかに寫つてゐるのであつた。かれは硝子窓に寫つてゐる自分自身の顔をいつまでもながめてゐた。眞つ暗な硝子窓にたゞ一人ぽつねんとして寫つてゐるかれ自身の顔はいかにもあはれであつた。

夜が明けた。霧がふかく高原の枯れ野をこめてゐた。汽車は半日、廣い廣い野のなかを眞つ直ぐに走つた。櫟林の間からは炭を燒く煙が青く漂うてゐたりした。

かれは生まれてはじめて遠いかすかな地平線の上に落ちてゆく太陽をながめた。

また日が暮れて、眞つ暗な硝子窓にぽつねんとかれの顔が寫つて來た。

夜が明けて間もなくかれは先生のうしろから汽車を下りて行つた。

低く曇つた空が大きな都會の屋根をつゝんでゐた。

鴨方先生は停車場を出ると間もなく小高い公園の方へ駈けのぼつて行つた。そこには犬をつれた一人の大男の銅像が立つてゐた。捨松はすぐにそれは西郷隆盛の銅像だといふことを思ひ出した。その眞つ黒な銅像を見上げてゐると

うれしいやうな悲しいやうな心持が一度にわいて來て胸がふさがるやうであつた。

だけど「先生はこれからゆつくり兄さんの立派なお邸に落ちつきなすつて、もし兄さんの病氣がなほつてゞもゐようものなら、わしをつれて毎日東京見物をさせてくださるにちがひない。」と思ふと、捨松はたゞうれしい心でいつぱいになるのであつた。かれは肩にしてゐた柳行李の辨當箱のことも、追ひ剝のことも忘れて、自分に都合のいゝやうな空想ばかり描いて、高い建物や廣いアスファルトの大通りをながめてゐた。

「捨松君、こゝで急いで飯を食つて行かう！」先生は出し抜けに聲をかけた。先生はすでに風呂敷包みのなかから汽車のなかで買つた辨當を出しかけてゐた。捨松も背中の風呂敷包みから先生と同じ辨當を出した。捨松も銅像の下の石に腰を卸して、煙突の黑い煙につゝまれた大きな都會を眺めながら大急ぎで辨當を食つた。人々は不思議さうにこの二人の旅人をながめながら通りすぎて行つた。

鴨方先生はやがて公園の下に出ると、急に走り出した。

「捨松君走つてくれ、病人が生きてるうちに逢ひたいでなあ。」先生はさういつて赤坂まで飛んで行つた。捨松もうしろから走つた。

「もうすぐだ、走れ走れ！」先生は振りかへつて捨松を見ながら飛んで行つた。

二人は或る大きな門の前で立ち止まつた。

「捨松君、こゝだよ兄の家は。」先生はかういつて先に立つて玄關の方へ走つて行つた、しかしすぐと先生は釘付けられたやうに甃の上に立ちどまつた。

「兄さんは死んだのだ！」かういつたきり先生はもう玄關の方へも歩かなかつた。

「御出棺は一時間前でございました。たゞ今はちやうど青山齋場の方で告別式が行はれてゐるころでございます。」と一人の男が走つて來て先生に話しかけた。

色も褪せてしまつた木綿の紋附羽織を着た先生はふたゝび青山墓地の方へ飛んで行つた。うしろからは辨當を包んだ風呂敷を背負つた捨松が、汗を拭き拭き先生を見失はないやうにしながら走つて行つた。

正三位勳一等鴨方友太郎君之柩といふ文字が白い旗に墨痕あざやかに記されてあるのを捨松は見た。

そこには總理大臣をはじめ、社會のあらゆる階級の人たちが集まつてゐた。

鴨方先生が柩の方へ飛んで行つた時、捨松も先生の羽織にしがみつくやうにして人々を押し分けて柩の方へ走つて行つた。汗が眼のなかに流れて來て眼がくらみさうであつた。

人々は驚いてこの奇異な風體の二人の男を見た。

「あなたは省吾さん？」さういつて白無垢を着た嫂さんが飛んで來て鴨方先生の手を握つた。

「嫂さん、省吾です。兄さんのお手紙をいたゞきましたので夜晝飛ぶやうにしてやつて來たのでしたが、兄さんはたうとうお亡くなりなすつて……」鴨方先生はさういつて柩の前に走つて行つて、すゝり上げて泣いた。

鴨方先生がお燒香をすませた後から總理大臣がお燒香をした。

式がすんでから柩を載せた馬車は郊外のさびしい町を走つて行つた。捨松は先生と一緒に馬車に乘つて柩のうしろからついて行つた。捨松には東京の美しい馬車も珍しかつた。しかし、先生が先に走つてゐる柩の方を見てはぽとりぽとりと涙を落すのを見ては自分までが悲しくなつて涙が出て仕方がなかつた。

柩を載せた馬車はやがて欅の並木の間を通りぬけて廣い武藏野のなかを走つて行つた。

麥が青々と春の光りにかゞやいてゐた。ぢつと耳をかたむけると雲雀が高鳴きしてゐた。ちやうどその時であつた。捨松は馬車の窓から遠い山を見出した。山は蒼くかすんでゐた。そしてところ〴〵にまだ白い雪をいたゞいてゐた。

捨松はぢつと山を見つめてゐた。

柩を送つて走つてゐることも、鴨方先生が俯向いて泣いてゐることも忘れて捨松は遠い山をながめてゐた。藤作や詮太が遠い故郷の山のなかゝら、かれを呼びかけてゐるやうな氣がしてならなかつた。

はたと馬車が停まつた。

そこは麥畑の岡と岡の間のすこし窪地になつてゐて、煉瓦の高い煙突が畑のなかにそびえてゐた。

人々は馬車から柩をかゝへて、煉瓦の建物のなかへ運んで行つた。

先生は幽靈のやうに衰へた顏をして柩のうしろからついて行つた。みんなはふたゝび馬車に乘つて都會の方へかへつて行かなければならなかつた。先生は馬車に乘ることをことわつた。

「しかし、ぜひあなたをお邸へおつれしなければなりませぬ。亡くなられたお兄いさまの御遺言であなたにはいろいろおわたしいたさなければならぬものもございますので。」と親戚の若い男がさゝやいた。

「わしにまた金だの地所だのをくれようといふのだらう。わしはそんなものはいらぬよ。」さういつて先生はたうとう馬車にも乘らないで、捨松をつれて麥畑のなかをてく〳〵と歩き出した。

先生は或る麥畑の片隅にしやがんだ。そしてうしろからついて來る捨松を見て、

「おなかゞすいたやうぢやのう。また辨當でもたべようか。」といつた。

先生と捨松はふたゝび風呂敷から辨當を出してたべはじめた。

さつきの馬車が走つて來て、なかゝらは親戚の若い男が出て來た。

「ともかく今夜は赤坂のお邸にお泊り下さいますでせうね。」

「わしですか、せつかくだが斷つといてください。もし泊りたくなれば行きますで。」先生はさういつたきりで振り向きもしなかつた。そしてもぐ／＼と辨當をたべた。

雲雀が絶えず鳴いてゐた。

日が暮れかゝつてから先生と捨松は、或る町外れのさびしい道を歩いてゐた。

御安泊と書いた看板をつるした家があつた

「これが木賃宿といふやつだ。」さういつて先生は暗い土間にはいつて行つた。腰のまがつた老婆が、盥になみ／＼と水を入れて運んで來てくれた。

「お婆さん、今晩だけ泊めてくださいよ。」先生は懐から數枚の銅貨を出して老婆にわたした。狹い八疊の部屋には十人の男が坐つてゐた。めい／＼に辨當をたべるものもあれば、パンをかじるものもあり、濁酒を呑んでゐるものもあつた。

天井からつるしたたゞ一つのランプの下にみんなはだまりこくつて、一枚の石のやうに堅い夜具を引つかむつて寢た。

捨松はどうしても眠ることができなかつた。窓のすぐ下を大きな川が流れてゐて、川船が上り下りするので、絶えず櫓の音が聞えた。いかにもものかなしい音であつた。

眞夜中ごろであつた。一人の男が土間にはいつて來た。捨松は眼を開いて見た。猿まはしの男であつた。背には一疋の猿がきよとんとおぶさつてゐた。

猿まはしの男は、帳場の方へ聲をかけてから、つか〳〵と部屋のなかへはいつて來た。その男は先生と捨松の間へはいつて出しぬけに捨松を夜具ぐるみ壁の方へ押しやつてしまつた。そして先生と捨松の間に自分の夜具を入れて、自分だけは樂々と足を伸ばして寢てしまつた。捨松は仕方なしに壁に押しつけられたまゝ寢なければならなかつた。猿はなか〳〵寢なかつた。そして幾度か捨松の夜具の上へ飛び下りては踊るやうな恰好をした。そのたんびに捨松は呼吸が止まりさうであつた。

「東京といふところはつく〴〵いやなところだ！」捨松は猿の顏をうらめしさうに眺めてはさう思ふのであつた。

月が出た。障子に靑い月の光りが映つて來た。川を下る船のなかゝら靜かな船歌が水の面をつたはつて流れて來るのであつた。それをきいてゐると、故鄕の山のことや、父のことが思ひ出されてならなかつた。捨松は壁に顏をつけたまゝしく〳〵と泣き出してしまつた。

夜が明けるのを待ちかねて先生と捨松は宿を出た。そして昨日の煉瓦の家へ出かけて行つた。そこには三臺の馬車が着いてゐて昨日白無垢を着てゐた先生の嫂さんといふ人も來てゐた。みんなは泣きながら骨を拾つた。

「ぜひ家へ立ち寄つて、遺言だけの物はうけとつて下さい。」といつて引きとめた嫂さんの言葉もきゝ入れないで、先生は逃げるやうに麥畑のなかを走つて行つた。捨松はうしろから犬のやうに飛んで行つた。

「捨松君武藏野だけはいゝだらう。あんなに雲雀が鳴いてゐる。」先生は或る欅の並木の下で草のなかにしやがみながら捨松に話しかけた。

先生は停車場へゆく途中でも、汽車の時間がないといつてあたふたと飛んだ。捨松もうしろから飛んだ。そしてその夜ふたゝび山へ還る方の汽車に乘つた。故郷へかへりついた時父は捨松を抱いて泣いてよろこんだ。藤作や詮太も飛んで來て東京のことをたづねた。捨松は「東京は煙と埃ばかりで何が何やらさつぱりわからぬところだ。わしはただ先生のうしろから犬のやうに走つてばかり行つたゞ。だけど武藏野だけは雲雀が鳴いてゐてよいところだ！」と鴫方先生に敎はつたとほりのことをいつた。一ヶ月ばかりの後には丸窓からふたゝび先生の詩をよむ聲が聞えて來た。

山はまだ雪が深かつた。雪崩の落ちるすさまじい音が毎日のやうに山の人たちの魂を脅かした。

東京から山にかへつた捨松の頭には、日がたつにつれて東京の不思議な誘惑が渦を卷いて起つて來た。最初は東京はいやなところだと思つてゐたが、やがて埃だらけ、煙だらけの東京が、華やかな、幸福にかゞやいた東京となつてよみがへつて來た。

「えらくなるのなら東京に行かなくちやねえ。」或る日熊の膽を買ひに來た旅の片目の男が、捨松をぢつと見つめながら低い聲でさういつた。

「やつぱり東京がいゝかなあ。」

「あゝ、東京だとも、東京へ行かんで何でえらい人になれるものか。」片目の男はじろりと捨松の腹の底を見ぬくやうな眼で見た。捨松はその男の眼を恐れた。だけど、その男にはどことなしに捨松を惹きつけるところがあつた。

「お前東京に行く氣なら、わしがうまいところを世話して上げよう。それにはお前一人よりか、なるたけ連れがあつた方がよい。」とその男はいつた。

捨松の頭には藤作と詮太のことが浮かんで來た。

「ぢや、おれもゆく、東京さ行つてえらくなつてかへるだ」捨松が東京へゆく話をした時、詮太も藤作も二つ返事で贊成した。

ところで、三人が東京へ行くといつたところで親たちがゆるす氣づかひはない、どうでも三人は親にかくれて逃げ出さなければならぬ。

熊の膽買ひは捨松の耳に口をつけてさゝやいた。捨松はちよつと息づまるやうな悲しさを覺えたが、これも將來お父つあんに樂をさせてあげるためだからと思ひ直して、片目の男がいふまゝにして故郷を逃げ出すことに決心した。

その日は都合よく午後になつてめづらしく二頭の大熊が、村の人たちの手で擊たれた。村中がよろこびに祭のやうなさわぎであつた。

獵に出かけて行つた十八人の村の男たちは二十餘頭の犬をつれ、二頭の大熊を橇に載せて、雪のなかをまるで凱旋將軍のやうに意氣揚々としてかへつて來た。

子供たちは雪のなかを家から家へと使ひに走らせられた。日暮れころから村中の男も、女も村長の家に集まつて行つた。小山のやうに積んだ榾の火をかこんで人々は酒を飲み、熊狩の話に興じた。

熊の膽買ひは村の酒屋から酒樽をかついで行つてみんなに振る舞つたので村長はじめみんながひどく酒に醉つて手拍子をとつて焚火のまはりを踊りまはつた。

村の人たちが熊の膽買ひの振る舞ひ酒で醉つてゐる間に、片目の男は、二頭の熊をつるしてある裏の小屋へはいつて行つて、鋭いナイフで手ばしこく二頭の熊の腹を斷ち割つて、なかゝら大きな熊の膽を掴み出した。そしてかねて用意をして持つてゐた袋のなかに入れてしまつた。

かれは馬小屋のなかゝら藁を運んで行つて、裂かれた熊の腹に押しこんでそのまゝ熊の膽をかついで村はづれへ雪のなかを走つて行つた。

捨松や藤作や詮太の親たちも、みんなそのころは熊の膽買ひの振る舞ひ酒に醉つて踊つてゐたので、かれはたくみに二頭の熊の膽を盗んでしまつた。

捨松と藤作と詮太はさつきから外套を冠つて村はづれの辻堂のなかに顫へてゐた。

東京へゆくのはうれしかつたが、捨松は父のことを思ふとぽろ〳〵と涙が落ちて來て仕方がなかつた。

藤作や詮太を見ると、やつぱり家の方を向いてはぽとりと涙を落してゐた。

「いくらえらくなつたつて仕方がない。やつぱり山にゐてお父つあんと二人で暮した方がいゝ……」捨松は藤作や詮太にさういつて、もう東京行きはやめにしようかと思つた。しかしちやうどその時、熊の膽買ひの片目の男が大きな袋を背負ひながら雪のなかを走つて來た。

「おい、そこにゐたのかい？　よし〳〵」熊の膽買ひはじろりと三人をながめた。その男にじろりと見られただけで捨松は何をいふこともできなかつた。

「さあ、ぐづ〳〵してるとつ捕まるぞ。早く逃げるんだ。そしてお前たちは旅費は持つてるだらうな。」熊の膽買ひは氣味の惡い眼をじろりと光らせた。まるで胸許に短刀でも突きつけられたやうに思はれた。

「あい、おらこゝに十圓とすこしばかり持つて來ただ。」と藤作は持つてゐたがまぐちを見せた。

「十圓ぽつちか……こつちに出しときな、小父さんがあづかつとくで、途中で無くすといかんでな。」片目の男は藤作

の金を引つたくるやうにして取つてしまつた。

「お前は？……」詮太の前に立つて、ぐつと詮太を見た。

「わしか。わしは十三圓幾らか持つてる。」

「小父さんがちやんとあづかつとく。」

「捨松お前は？……」片目の男は捨松の顔をじろりと見た。

「わしか……」捨松は片目の男が藤作の金を取つて懐に入れたのを見た時、こいつは油斷をしてはいけないと考へたので、急いでがまぐちのなかの金をそうつと辻堂の土間に落して、がまぐちにはほんのわづかの金を入れて置いた。

「さあ幾ら持つて來た。小父さんが金はあづかるでこゝに出しな。」

「わしかい、これだけ持つて來た。がまぐちぐるみ小父さんにあづけるだ。」

捨松はがまぐちを片目の男に渡した。

「お前は一番感心な子だ。思ひ切りがいゝや。」片目の男はいかにもうれしさうに捨松のがまぐちを受け取つて、なかを明けて見た。見る〳〵かれの顔色がかはつて行つた。

「何だ！　たつたこれつぽちか、一圓もはいつてはゐないぢやないか。」

「二十圓くらゐあるつもりで持つて來たんだが、雪のなかで落したんだらうかなあ。」

捨松はとぼけた返事をした。そしてわざと帶をほどいて見たり、外套のポケットをさかさにしたりして見せた。

「仕方のない子だ。これつばかしの金で東京までつれて行けるか。」

「ぢや、小父さん、わしもう東京へは行かぬ。」

「こゝまで逃げ出して來て、そんなことをいうたら承知はせぬぞ。何でもよい、早く逃げるのぢや。」片目の男は眞つ先に立つて辻堂を出て、雪のなかを走り出した。

捨松は土間へ捨てた鉈をいそいで懐に隱して片目の男のうしろから雪のなかを飛んで行つた。

夜つぴて焚き火のまはりで踊つてゐた村の人たちは、翌日の朝になつて熊の膽買ひのことを思ひ出したので、裏の小屋へ熊を見に行つた。

「見れば見るほど大きな熊だなあ。」

「よくまあ、こんな大きな熊を二頭も擊つたものぢやなあ。」

「この熊の膽なら一つで二百兩はするぞ。」

「何といふ大きな腹だ。まるで太鼓のやうな腹だ。大きな膽が取れるぞ。」

こんなことを語りながら人々は山刀を持つて熊の周圍に集まつた。

しかし人々は豫期してゐた熊の膽のかはりに、間もなく一つかみの古藁を發見しなければならなかつた。

「あの片目の男だ！」人々は山刀を握つてくやしがつた。

それと同時に村では捨松、藤作、善太の三人の子がゐなくなつてしまつたことを發見した。村中が、昨日にひきかへて驚きと失望とにつゝまれてしまつた。若い男たちは雪靴を穿いて片目の男と三人の子供たちを追つかけて山を下つた。

山の人たちが騷いでゐたところには、すでに片目の男は三人の山の子たちをつれて山を越えて馬車を走らせてゐた。

そしてわざと裏道を走つて三日目の夜はすでに東京行きの汽車に乘つてゐた。

「捨松、お前は一番すくなくお金を持つて來た、だからお前が一番働いてくれなけりやならぬぞ。」かういつて片目の男は、何かといつては捨松を追ひ立てゝ使つた。

東京へ着くまでの長い汽車の旅の間でも、捨松はたつた一度だけ辨當を買つてもらつたのみで、あとは藤作や詮太が食ひ殘した辨當をもらつてたべなければならなかつた。

捨松は汽車に乘つてからも片目の男の一擧一動をこつそり注意することをわすれなかつた。片目の男が熊の膽を嚢に入れてゐるのからして捨松には不思議でならなかつた。いつも山では熊が擊たれた時は二日くらゐ村長の家に置いて村中の人に見せてから、眞つ晝間廣庭で神主が來てみんなの前で、熊のためにお祭りをやつてから、熊の膽を取り出すのが普通であつた。それだのに片目の男は、熊が擊たれて來たその夜すぐ熊の膽を嚢に入れて逃げるやうに山を下つてしまつた。

捨松はどうしても熊の膽買ひを疑はないではゐられなかつた。

或る停車場に來た時片目の男は窓から外を眺めた。そこには仲間らしき男が窓の前に立つてゐて、手ばしこく熊の膽をうけとつた。片目の男は何か低い聲で仲間の男に話しかけながら三人の子供たちを偸み見た。

或る停車場に來ると片目の男は急に三人をつれて汽車を下りてしまつた。片目の男はなぜ上野までずつと汽車に乘つて行かないのか、それも捨松には不思議でならなかつた。

そこは川幅の廣い、深い流れであつた。山の雪が解けはじめてゐたので水は漫々として靜かに流れてゐた。

兩舷に水搔き車の附いた昔風の汽船が川を下つて來た。三人の山の子たちははじめて船を見たので、うれしさのあ

まり爭つて甲板に飛び乘つた。

船は川を下つて行つた。兩岸の柳はすでに青々と芽生えて、麥の間には菜の花が幾十里となくかゞやいてゐた。ぢつと眼をつむるとどこからとなく雲雀の高鳴きがのどかに聞えて來た。

「もうすつかり春になつたのだな！」捨松はさう思ひながら土堤の上を見た。そこには山の父に似た男たちが畑を打つてゐたり、土をはこんだりしてゐた。山の父のことを思ふと涙が出て來て仕方がなかつた。

或る川岸の渡止場からどや〳〵と十二三人の男や女たちが船に乘つて來た。岸には櫻が咲いてゐた。長い振袖を着た旅まはりの踊り子が甲板の上で扇をひろげて立つた。痩せこけた女が三味線を彈いた。

「さあ踊つてくれ、踊つてくれ！」一人の醉つぱらひが手拍子をとつてうたひはじめた。

捨松はその踊り子の振袖がひどく垢じみて、ところどころ破けてゐたり、その舞扇が裂けてゐたりするのを見た。唄をうたつてゐる三味線彈きの聲がかすれ〳〵なのを聽いた時、捨松はひどく空腹を感じた。

「小父さん、何かたべさしておくれよ。」捨松はけさから何もたべてゐなかつたので、片目の男にねだつた。

「昨日あれほどたべさしたぢやねえか。」片目の男はさういつて、捨松のびんたをぴしやりと一つくらはせた。捨松は舳にしやがんで、ぢつと水の面を見つめてゐた。涙がぽとり〳〵と流れの上に落ちて行つた。

捨松が顏を上げた時は、もう甲板の上には誰もゐなかつた。川の上には靄が落ちてゐた。まん丸い落日が、岸の並木の梢をへだてゝ草のなかへ沈みかゝつてゐた。

帆をかけた船が澤山な荷を積んではすれちがひに川をのぼつて行つた。父親らしい男が櫓を取り、母親らしい女が赤ん坊を背負つたまゝ水棹を握つて、たくみに船を押して行つた。艫の

方ではきやうだいの子供たちが七輪の火をとりかこんで笑ひながら汽船をながめてゐた。捨松はそのやうな帆かけ船を見るたんびに船の子供たちの幸福をうらやまずにはゐられなかつた。

日がすつかり暮れてしまつてから、三人の子たちはどことも知れぬ或る川岸の寂しい小さな町の波止場で船から上げられてしまつた。

三人の子供たちは朝から何もたべさせられなかつたので、波止場から土堤の方へ二三町も歩いたばかりでもう歩くこともできないほどに疲れてゐた。

藤作は土堤の草のなかへひよろ／＼と倒れてしまつた。片目の男は藤作の襟がみを摑んで、大きな拳を握りかためていやといふほど藤作の背中を三つ四つつゞけざまにどやしつけた。藤作は踏みつけられた猫のやうな形になつて、水たまりのなかへ俯伏せに叩きのめされてしまつた。

「ぎやつ」といつて倒れた藤作の姿がをかしかつたので、捨松も詮太も思はず笑ひ出した。次の刹那には二人の頭の上には片目の男の堅い拳があんと鳴つてゐた。

「今夜はこゝに泊るんだ。」さういつて片目の男は或る軒の低い、煤けた障子の家の前へ立ちどまつた。

「御安泊一宿五錢」といふ看板がかけられてあつた。

そこの隣りも同じやうな古ぼけた家で、そこには「牛馬安泊一宿四錢」と書いてあつた。

「人間と牛馬の差がこゝでは一錢たんだな！」

捨松はそんなことを考へながら、土間へはいらうともせず、ぼんやり往來に立つてゐた。

出し抜けにぐゆつとかれの耳をつねつてつまみ上げた男があつた。
「何をぼんやりしとるんだ、早くなかへはいるんだ。」片目の男はうしろから捨松をどやしつけた。
部屋の眞ん中にはたつた一つ薄暗いランプが、眞つ黒に煤けた天井からつるされてあつた。部屋のなかにはすでに七八人の旅の男たちが小さな火鉢をかこんで坐つてゐた。
「さあ、おまんまだ……」片目の男はどこから持つて來たのか、きたないお盆の上におこげだらけの冷たい握り飯を五つ持つて來て、自分が先づ二つ取つて、殘りを一つづゝ三人の子供たちへ分けてやつた。
三人の子供たちは息もつかないでむさぼり食つた。きたない疊の上にこぼれたたゞ一粒の米さへ拾つて食つた。今朝から空つぽだつたおなかのほんの一部分だけが滿たされたに過ぎなかつた。
「あんたは三人のお子たちをどうなさるんです。」人の善ささうな筆商人が片目の男に話しかけた。
「たしかに、これは三人とも田舍の親無しの子供たちで、みんなわしの甥ですがこんど東京の中學校に入れて、ゆく／＼はこの甥のことをさすゝら大學までやらせるつもりにしとります、ひゝひゝひ……」と片目の男は急にやさしい聲で話しはじめた。
「おい／＼、捨ちやんも、藤ちやんも、それから……仙ちやんも疲れたゞらうから、早くおやすみ……」かれは今までにない親切らしい言葉で三人を隣の方へくつつけて上からたゞ一枚の薄い夜具を着せて寢させた。
「三人に一枚の夜具では幾ら子供でも寒かないかな。」と宿の親爺がいつた。
「夜具一枚借りれば三錢だらう、ばか／＼しい、一枚にしときや六錢の儲けだ、子供は風の子だ、犬つころのやうにかたまつて寢りやかへつて温かだ。」

片目の男はさういつて三人の子供たちの方を見た。捨松は眼をさましてゐたが、眠つた振りをしてかれのいふことを聞いてゐた。

「やあ今晩は、遲くなつたが泊らしてくれ。」捨松は夜具のなかゝら、そつと眼を明けて見た。二人づれの猿まはしが二疋の猿をつれて土間へはいつて來た。猿はきやつ〳〵と叫びながら部屋のなかを跳びまはつて、捨松らの夜具の上に載つては蜜柑の皮をむきはじめた。捨松はかつて鴨方先生と木賃宿に泊つた夜のことを思ひ出した。その時も猿まはしと一緒になつた。

　疲れてゐたので、捨松はすつかり眠つてしまつた。不圖眼をさました時、捨松は今日下つて來た川を上り下りする船の櫓の音が、しづかに夜の暗のなかをつたはつて來るのを聽いた。故鄕の父のことが思ひ出されて仕方がなかつた。捨松は夜具の襟に顏をくつ付けて泣いた。

　ちやうどその時捨松はひそ〳〵と語つてゐる二人の男の聲を聽いた。片目の男と、も一人に瘦せこけた男であつた。二人は土間の爐をかこんで狡猾な眼で三人の子供たちの方を見ながらひそ〳〵と語り合つてゐた。

「三人といつても、まだあんまり小せえので金にはならぬ。まあ北海道の監獄部屋に遣るとしても三人でこれだけだ」瘦せこけた男は五本の指を出して見せた。

「そいつはあんまりやすい。せめてこれだけに買つてくれ。」片目の男は兩手をひろげて見せた。

「百兩かい？」

「うむ……」

「とても百兩なんかに買へるものか。あんな餓鬼を。」

捨松は心臓を突かれたやうに思つた。それでもかれはぢつと二人の話を聽いてゐた。
半時間も經つてからであつた、二人の男は話がまとまつたらしく手を拍つた。
「花が咲いてゐるに、ばかに寒いぢやないか。」
「前祝ひに一つ飲んで來るか。」
二人の男は眠つてゐる三人の子供たちをもう一度見て土間の戸を明けて往來へ出た。
捨松は跳ね起きた。
「藤作や……銓太や……早う起きろ。大變だぞ！」捨松はまだねぼけてゐる二人に片目の男の惡企みを話してきかせた。藤作は泣き出してしまつた。
「藤作の馬鹿、泣いてゐる場合か……」捨松は頭から外套を引つ冠つて眞つ先に土間に降りた。二疋の猿が不思議な顏をして三人の子たちを土間の口まで見送つてゐた。
「いつたいどの見當が東京なんだらう。」捨松は土堤を走りながら暗い空をながめた。川につれて下りさへすればきつと東京へゆくにちがひないと思つたので、三人の子供たちは大急ぎに川に沿うて土堤の上を走つた。
ほの〴〵と夜が明けるまでに山の子たちは三里ばかりの道を走つてゐた。
長い土堤が幾里も幾里もつゞいた。
草の葉にはかすかに露が下りてゐた。
霧が晴れ、涯しもない麥と菜の畑が眼ざめたやうに地平線までひろがつてゐた。
春の太陽は美しい雲をやぶつて平原の上にのぼつて來た。

三人の子たちは疲れと不安とに驅られながら、俯向きがちに露にぬれた土堤を走つてゐた。雲雀が鳴いてゐても、花が散つて來ても聲一つかけるものもなかつた。三人が三人とも小さな魂を脅かされつゝ走つてゐた。
土堤の或る曲り角に來た時であつた。眞つ先に走つてゐた捨松が、出し抜けに大きな聲を出した。
「東京が見える！　東京だッ！　東京だッ！」
藤作も詮太も脊伸びをして地平線の方をながめた。
そこには低く煙と靄とが漂うてゐた。靄のなかに高い煙突が幾十本となく並んでゐた。白い高い建物が草の上に白い雲か何ぞのやうに見出された。
「東京だ！　たしかに東京だ？」
三人の子たちは土堤の上で抱き合つてよろこんだ。うれし泣きに泣いた。
太陽は靜かに三人の山の子たちの魂を照しはじめた。

そこからはすぐ長い橋一つわたれば東京になつてゐた。三人の子たちは死ぬばかりに空腹を感じてゐた。
「おれたちはみんながまぐちの金をあの片目の男にわたしたんでなあ。」と詮太も藤作も悲しい顏をした。
「おれを見い。これ……」捨松は懷のなかから十圓あまりの金を出して見せた。
「捨松は……？」
「おれ。あの男があやしいと思つたんで、一圓ばかし見せて、あとはうまくかくしといたのさ。」
三人は幸福であつた。

長い橋をわたつていよ〳〵東京へはいつたと思つたばかりでも、三人はたまらなく幸福であつた。

捨松は先に立つて或る飲食店にはいつて行つた。

「西洋料理だぞ？」と藤作が眼を丸くした。

「心配するない、おれがあつらへる。」捨松はそこに立つてゐた青ぶくれのおかみさんに聲をかけた。「をばさん、ライス・カレイを一つづゝ、それから珈琲を……」

藤作や詮太には、捨松がそのやうな西洋料理の名を知つてゐることさへ不思議でならなかつた。捨松は、さつきからうしろに腰かけてゐた男が「ライス・カレイと珈琲……」といつてあつらへたのをちやんと聴いてゐたのであつた。

三人は、腹がひきつるほどのひもじさを感じてゐたので、ライス・カレイを盛つて來たパン皿の釉が剝げて落ちはしないかと思はれるほど、皿をこすつて食つた。

「これで腹がくちくなつた。これから三人で何處かへ行つて仕事を見つけるのだ。いよ〳〵えらくなつて山に還らにやならぬで。」捨松はさういつて、まだパン皿をしやぶつてゐる二人を見た。やがて三人の山の子たちは人ごみのなかを歩いて行つた。

しかしちやうど活動寫眞館の前に來て繪を見てゐる時であつた。捨松はすぐ後から片目の男が昨日の痩せこけた男と二人づれで近づいて來るのを見た。

「藤作、詮太逃げろ？」捨松が聲をかけた時は、痩せこけた男の手はむざと捨松の外套を掴んでゐた。捨松は振りかへりざま猿のやうにその男の腕に噛みついた。突然の逆襲に面くらつた男は外套の手をゆるめた。そのはずみに捨松は人ごみのなかへ逃げて行つた。かれは振りかへつて藤作や、詮太を見た。片目の男が罵りながら藤作と詮太を追つ

かけてゐた。

捨松は半日隅田川の岸にしやがんで二人の友だちを案じてゐた。つひに藤作も詮太も何處へ行つたのかわからなかつた。

かれはその翌日もまた隅田川のほとりを歩いてゐた。かれはその日偶然にも一人の若者が高い煙突の上で働いてゐるのを見た。

「もつと手を伸ばしてロープを引き上げるんだ？」

高い煙突の下からは親方が叱りながら指圖をしてゐた。煙突の上の若者が顫へてゐるのが捨松には可笑しかつた。

「小父さん。わしが手傳つて上げようか。」捨松は笑ひながら聲をかけた。

「お前のやうなちびに上れるものか。」親方は見向きもしなかつた。

「できないでさ。」

「ぢや、やつて見ろ。」

山の子たちはどのやうな高いところにも猿のやうに平氣でのぼることができた。「捨松は殊に高いところにのぼることが上手であつた。

かれは樂々と高い煙突の上にのぼつて行つた。そして顫へてゐた若者から長いロープとブラッシュとを受け取つて何の苦もなく煙突を掃除してしまつた。

「恐ろしい奴だなお前は。」親方も若者も驚きの眼を瞠つて捨松を見た。

その日から捨松は煙突掃除の親方の家に厄介になつて、朝は暗いうちからブラッシュやロープを入れた大きな袋を背負つて高い煙突の掃除に出かけて行つた。

都會育ちの若者たちが顫へてゐるやうな高い煙突にもかれは唄をうたひながら平氣でのぼつて行つた。

捨松にとつては高い煙突の上にのぼつてゐる時だけが一番幸福であつた。そこからは富士や秩父や筑波の山々も見えた。まだ山には雪がつもつてゐた。かれは高い煙突の上で白い雪の山をながめては、山の父を思ひ出して泣いたこともあつた。

藤作や、詮太のことを思ひ出すと寂しくてたまらなかつた。もしかして片目の男につかまへられて北海道の監獄部屋へでも賣られはしなかつたか知ら？ そんなことを案じながら、かれは高い煙突の上から低い下の往來をながめた。もし藤作や詮太が、そこいらの道を歩いてゐたら、かれは猿のやうに高い煙突を飛び降りて行つて、藤作や詮太に抱きついて一緒に泣いたにちがひない。

「もすこし辛抱して、それからえらくなつて山に歸ることにしよう？」さう思つては捨松は毎日高い煙突の上で、眞つ黒な煤によごれて働いてゐた。

たまに湯にはいつても、あまり、煙突の煤によごれてゐたので、捨松の顔も手も熊のやうに黒くなつてゐた。通りがかりの人たちはよく捨松の眞つ黒によごれた顔を見ては笑つた。

顔は黒うてもなあ
雪のやうに白い
わしの心に花が散る……

捨松は兄弟子たちと一緒に高い煙突の上でよくこんな唄をうたつた。

捨松が煙突掃除屋に雇はれてからはじめての月一度の公休日に、親方は捨松をつれて淺草へ出かけて行つた。かれは北海道へ賣られて行つたであらう藤作や、詮太のことを案じながら道を歩いてゐた。

「捨松や、曲馬を見せてやらう。」親方はさういつて木戸をくゞつて行つた。捨松はうしろからついて行つた。

大きな象が薬罐の上に載つたり、若い女たちが巧みに馬の上で逆立ちをしたりした。一通り馬や象の藝がすむと、一疋の黒熊が檻のなかから舞臺へ這入つて來た。

「これは北海道は膽振の産、當年とつて三歳、木のぼりが上手でございます、さあ一息に駈けのぼつた。」熊使ひの男はぴしやりと熊の頭をたゝいた。熊は立ち上つて高い丸太にかじりついて駈けのぼつて行つたが、途中から落ちてしまつた。同時に熊の皮を冠つた少年が、手も足も顔も黒く塗つて、笑ひながら熊の腹から出て來た。

「何だ、人間の熊か。」人々は笑ひこけた。

「こいつ馬鹿だな。お客さまの前で皮を脱ぐなんて。」熊使ひは笑ひながらその子の頭を二つ三つぴしやりぴしやりとつゞけざまになぐつた。

「はゝはゝは……」なぐられるたんびにかれは笑つた。

「みなさんごらんなさい。こいつは終日なぐられてさへゐれば御機嫌がよいのでございます。」かれはつゞけざまにまた三つ四つどやしつけた。少年はから〳〵と笑つた。

舞臺の奥からは印度人が出て來、南洋土人が出て來、かはる〳〵その少年の横つ面をなぐつた。なぐられるたんびに變な動物の鳴き眞似をして少年は笑つた、見物も笑つた。

「藤作だ？　藤作にちがひない？」捨松は顔を黒く塗つた少年が熊の眞似をして大きな聲で笑つた時、さういつて舞臺の方へ駈け上つて行かうとした。

「北海道は膽振の山奥に於いていけどりました小熊でござい！」赤いシャツを着た男がさういつて、熊の皮を着た少年の頭を一つどやしつけた。

「ひゝひゝひゝ……」少年はどやしつけられるたんびに妙な聲を出して笑つた、見物も笑つた。

「それ何一つ……」ぴしやりと赤シャツは少年のびんたをはつた。

「ひゝひゝひゝひ」少年は笑つた、見物も笑つた。しかし捨松はその時、少年がぽとりと床の上に涙を落したのを見た。

「藤作だ！　たしかに藤作だ！」捨松は顔を眞つ黒に塗つた少年が笑つた時、二本缺けた前齒を發見した。それはまだ故郷の山里にゐたころ、或る秋の日、藤作が栗の木から落ちたはずみに折つてしまつたものであつた。

捨松はもし姿をかくす忍術を知つてゐたら、すぐにでも藤作を救ひ出してやりたいと思つたりした。

捨松は藤作を曲馬團の群へ賣りこくつた片目の男を憎んだ。藤作をなぐつてゐる赤シャツを憎んだ、藤作がなぐられるたんびにげら〳〵と笑つてゐる見物を憎んだ。

「何て薄情な人間ばかり揃つてゐるのだらう！」捨松には都會の大人たちの心がどうしてもわからなかつた。

「あの人たちにも自分の子供があるにちがひない。もし自分の子供が人買ひに賣られてしまつて、あのやうに公衆の面前で、毎日毎夜なぐられてゐるとしたら、あの人たちはどんなに歎くであらう。それだのにあの人たちは藤作がなぐられて、あのやうにまるで動物のやうに侮辱されても、何の憤りをも感じてはくれない、見ろ！　藤作は笑つて

るのぢやない、泣いてゐるんだぞ、泣いてるんだぞ！」捨松はぢつと藤作を見てゐた。

ちやうどその時例の赤シャツは、げら〱と笑つてゐる見物を一層笑はせるために、三つ四つ五つ、つゞけざまに藤作の頭をどやしつけた。あまりひどくなぐられたので藤作は笑ふことができなくなつて、兩手で頭をかゝへて床の上に突つ伏してしまつた。

「馬鹿ッ！　笑はないか！」赤シャツは藤作の衿をつかんで二三度振りまはして、床の上に投げつけた、藤作はぎやつといつて床の上に四つんばひになつた、赤シャツも見物もどつと笑つた。

ちやうどその時、捨松の下駄にかちりとあたつたものがあつた。捨松はうつむいて堅いものを拾ひ上げた。偶然にもそれは手ごろの石であつた。

赤シャツはふたゝび四つんばひになつてゐる藤作を引き摺り起してもみくちやにして床の上に叩きつけようとしてゐた。

捨松は夢中になつて手のなかの石ころを舞臺目がけて投げつけた。山の子たちは石を投げることがたくみであつた。捨松が投げた石は風を切つて赤シャツの額を目がけて飛んで行つた。

藤作を摑んでゐた手をはなして、赤シャツは仰向けになつて床の上に倒れた。額からはどす黒い血が流れた。

「誰だ、石を投げたのはどいつだ！」

「そこにゐる小僧だ！」

「捕まへろ。殺してしまへ。」

親方が捨松をかばつて何かいつてゐた間に捨松はしつこく見物の袂の下をくゞつて往來に出た。つゞいて曲馬團

の男たちが多勢棍棒を持つて追つかけて來た。

馬の嘶きや、曲馬乘りの女たちの悲鳴までがしばらく聞えてゐた。

活動寫眞の白い建物の横から赤い觀音堂の裏に出て捨松は三十分ばかりも夢中になつて走りつゞけた。

山の子は風のごとく早かつた。

そこは隅田川に沿うた古い靜かな木立になつてゐて、木蓮の花が咲いてゐたりした。

捨松は木の下の草のなかにしやがんでほつと溜息をついた。

耕作をなぐりつけてゐた赤シヤツや、それを平氣で見物してゐた都會の殘酷な大人たちに對して、輕い復讐をしてやつたやうな痛快な微笑みが胸の底からこみ上げて來るのであつた。

風のまに〳〵、ともすれば觀音堂のあたりから樂隊の喇叭の音が少年の淚を誘ふやうに響いて來るのであつた。

捨松は草のなかに仰向けになつて寢てしまつた。青い空がひろがつてゐた。梢の上には小鳥が鳴いてゐた。どこからとなく櫻の白い花びらが雪のやうに散りかゝつて來た。

ひた〳〵と隅田川の岸を打つ漣の音が聞えて來た。

捨松の頭には故鄕の山の姿が映つて來た。

ぼんやり中二階の窓によりかゝつてゐるであらう父の顏が浮かんで來た。

雪のなかの熊狩り、熊狩りの夜の踊り、片目の男、或る川沿ひの安泊の夜の出來事、それからそれへとあわたゞしく過去の事が浮かんで來るのであつた。

白い翼の都鳥が鳴きつれては波の上をしづかに飛んでゐた。

捨松はきよとんとして、草の上に起きあがつて都鳥をながめてゐた。魂のすゝり泣きを聯想させるやうな低い、わびしい鳥の鳴き聲であつた。

二百萬の人々が住んでゐるといふ大きな都會にも、誰一人として心からかれを慰めてくれる者はなかつた。かれはまつたく一人ぼつちであつた。泣いても泣いても泣きつくせないほどのわびしさが胸に湧いて來るのであつた。

藤作は今もなほびんたをなぐられてゐるにちがひない。詮太はどうしたであらう？

「藤作や！　詮太や！」捨松は隅田川の水の面をながめながら心のうちに二人の友達の名を呼んで見た。

「人生とはこんなものだらうか？」捨松は生まれてはじめて、魂の底から人生といふやうなことを考へて見た。

山の子たちにとつては、人生はもつと明るいものであつた。もつとあたゝかなものであつた。大人は子供にやさしかつた。道を歩む人たちはお互にやさしい挨拶の言葉をかはした。お互に健康と幸福とをよろこび合つた。

捨松は長い間あこがれてゐた華やかな都會の生活を見た。

道を行く人たちはみんなお互に冷たい眼で對手を見た。大人たちは遠慮もなしに子供たちをなぐりつけた。誰一人として子供のために義憤を感ずる人もなかつた。

「いやだ、こんな埃つぽい、煙だらけの、そして冷たい獸のやうな大人ばかり威張つてゐる都會はいやだ！」捨松は今すぐにも山の故郷に歸りたいと思つた。

山の雪が解け、春駒が勇み嘶いてゐるであらう廣い靑々とした牧場が眼に寫つて來るのであつた。

かさ〳〵と草のなかを歩む人の跫音がした、捨松の空想はやぶられてしまつた。

麥作を救はなければならぬ、誠太を探さなければならぬ。」捨松はさう思ひながら草の中を見た。

一人の少年が長い竹を川の中に突つ込んで、何か拾ひ上げようとしてゐた。

草のなかには手押車があつて、車のなかには一人の老人がしやがんでゐた。

捨松は少年の方へ近づいて行つた。紅い林檎が流につれて川上へ押し流されてゆくのであつた。少年はしきりに竹をうごかして林檎を掻き寄せようとしたが、どうすることもできなかつた。

「君、僕にその竹を貸して見たまへ。」捨松は少年の手から竹をうけとつて、しばらく水の面を掻きまぜてゐた。

林檎は岸の方へ近く漂うて來た。

「うまく取れた、さあ、うけとりたまへ。」捨松は眞つ赤な林檎を少年の手にわたした。少年はうれしさうな顏をして手押車のなかの父親に持つて行つてやつた。父親はにこ〳〵笑ひながら捨松を見て、幾度か頭を下げた。捨松も幾度かぴよこ〳〵と頭を下げた。

捨松はうれしくてたまらなかつた。

東京へ出て來てからこつち一度も心から打ち解けて笑ふ事さへできなかつた捨松ははじめて少年や、少年の父と心からの微笑みをとりかはすことができた。その刹那に窒息しさうであつた自分の魂が急に春の青空のやうにのびのびとひろがつてゆくのを感じないではをられなかつた。

「どこかにはきつと心の明るい人たちが住んでゐるのだ。人生にはまだ幸福がとりのこされてあるんだ!」捨松はさう思ひながら少年と少年の父とを見た。

雪のやうに白い櫻の花びらがふたゝび手押車のなかの老人や、岸に立つてゐる少年の上に散りかゝつて來た。

「君……何處の子ッ……」少年はなつかしげに聲をかけた。

「僕かい。煙突掃除の小僧なのさ、だけどけふからは家がないのだよ。」

「可哀さうね、ぢや僕の家に來ない？」

「あゝ、行つてもいゝ。」

少年は父の手押車に近づいて行つて低い聲で話してゐた。父はうなづいて見せた。

「ぢや、僕の家に來たまへな。」

捨松は少年のうしろからついて行つた。

少年は手押車に乘つた父を押して、長い橋をわたつて、土堤の上を歩いて行つた。

日が暮れて來た。

人の影も稀に、家もとだえてしまつた。

麥と菜畑のなかを一筋の白い道が夕暗のなかにほのかに走つてゐた。

捨松は少年と二人でかはる〴〵手押車を押して行つた。

丸い月が地平線の上から出た。見わたすかぎりものうき春の夜の霧につゝまれてしまつた。

「あんたはさつき捨松さんとかいつたな、親切な人だな。」手押車のなかの老人は振りかへつて捨松を見た。

「わしがこんな醜い姿で乞食のやうな生活をしてゐると、廣い東京中を歩いても一度だつてやさしい聲一つかけてくれた人間もないに、捨松さん、あんたは實に感心な子供ぢやな……」捨松はうつむいたまゝ手押車を押して行つた。

「あゝいゝ月ぢや。今夜のやうな月を見ると滿洲のあの恐ろしい戰陣の月夜のことを思ひ出すなあ。」老人は岸の蘆の

たかの小屋へはいつて、窓に凭りかゝりながら、水の上の月を眺めては感慨深さうな眼をしばたゝいた。

捨松は壁にかけてあつた古い軍刀と双眼鏡に惹きつけられてしまつた。

「君、あの軍刀や双眼鏡に眼がついたのかい？」老人は笑ひながら長い鬚を撫でた。それは手押車のなかの乞食のやうな老人ではなく、月下に三軍を叱咤する老將軍を想ひ出させるほどの威嚴を持つた老人であつた。

「あれは何でもないのさ、たゞの玩具みたいなものさ。」老人は笑ひながら少年と捨松を見た。

捨松は少年のうしろから川の方へ歩いて行つた。二人は草の上にしやがんで、月をながめてゐた。

「君、家のお父さんが玩具だといつたゞらう、あれはほんたうはすてきな軍刀なんだよ。」

「ほんたうな軍刀ツ？」

「さうだとも、僕のお父さんが日露戰爭の時持つて行つたんだよ。」

「君のお父さんは軍人かい？」

「昔ね、さうさ聯隊長だつたのさ。」

「聯隊長ツ！　えらいんだね。」

「滿洲の戰場で大砲の彈丸に兩脚を撃たれてしまつたんだよ。」

「それでどうしてこんな寂しいところにゐるんだい？」

「僕にはわからない、お父さんはちつとも話してくれないから。でも、いつかお父さんの昔のお友だちといふ人がたづねて來たよ。その人はもう旅團長か何かになつてゐて立派な人だつた。僕そうつと窓の外から二人の話をきいてゐたが、その人が——あんたのやうに美しい心の人はない、あんたは自分の一生を犧牲にして友人の名譽を救つてくれ

たんだ――といつて泣いてゐたよ。」
「そのお友だちといふ人はそれからもまた訪ねて來たのかい。」
「お父さんは、それからすぐ他のところに引つ越してしまつたんだ。お父さんは誰にも、自分のゐるところを知らせてゐないんだもの……」
捨松は家のなかへはいつて行つた。三人はくつろいで夜の食卓についた。
「どこの世界にも、隱れた立派な人が生きてゐるんだな。」捨松は窓からさしてゐる月の光りに照らされた老人の尊い横顔をながめてゐた。自然と頭が下がつて來さうであつた。
「乞食小屋見たいな家だから御馳走は何もないがどつさりおあがり。」老人はやさしくさういつてぢつと捨松を見た。
捨松にはそれが山の父の言葉のやうに思はれて仕方がなかつた。それにかうやつて落ちついて晩の御飯をたべてゐると藤作や詮太のことが思ひ出されて、ついぽろ〳〵と涙が膝の上に落ちるのであつた。
「どうかしなさつたかな？」老人はやさしい眼をみはつて捨松を見た。
捨松はたうとう山の家を逃げ出して東京へ出て來たこと、詮太や藤作と別れ〳〵になつたこと、藤作が曲馬團に賣られて今日も散々になぐられてゐたことを老人に話した。
「捨松さん、あんたは馬に乘れるかい？」
「はい、僕たちは山の牧場でよく馬に乘りました。」
「ぢや、いゝことがある。この新太郎も馬によく乘るのぢや。今夜すぐそのお友だちを救ひ出して來るがいゝ、あとのことはわしが引き受けるで。」老人は捨松と少年に祕策をさづけた。二人はやがて土堤の方へ歩いて行つた、霧がふ

かく川の面をうづめてゐた、二人の少年は渡し船に乘つて川を下つた。

觀音堂の前の曲馬團では團長の赤シャツが見物の小僧に額を傷つけられたので、たうとうその日は小屋を閉めて、夜になつても曲馬團の人々は木戸口の直ぐ上の部屋に集まつて下手人の意見と、その復讐の計畫について會議を開いてゐた。

獅子使ひの印度人は片言まじりの日本語で、

「加害者は警察に頼んでさがしてもらうよろしい。」といつた。

「警察なんかに頼んだのでは、下手人が捕まつても、對手は子供だからといふので、ほんの說諭ぐらゐですむ、どうしても俺たちの手でふんづかまへてこの腕で、そいつの首ねつこをひん曲げてやらなくちや、この額の傷が承知しねえ。」と赤シャツが繃帶を押さへながら怒鳴つた。

「さうだとも〳〵。私刑に限る……」とみんなが合槌を打つた。

「ともかく下手人はあの藤作の仲間にちがひないから、あいつを逃がしてはならぬぞ、あいつを詮議すればわかるにちがひない。あいつはどこに置いた？」赤シャツは卓子の上のコップを摑んで部屋のなかを見まはした。

「さつきから裏の馬小屋のなかにくゝりつけて置きました。」

「うむ、それでよい。だが復讐の前祝ひに大に飲んでくれたまへ。」赤シャツはふたゝび大きなコップを擧げた。

「俺だつて日露戰役にはミスチエンコの騎兵旅團と戰つた男だ！」赤シャツはさういつて腕を叩いて見せた。

新太郎は毎日觀音堂のあたりを歩いてゐたので、そこいらの地理にはくはしかつた。まだ時間が早くて活動見物の人たちが雪崩を打つて甃の上を歩いてゐた。

「すこし時間が早いよ、これでは馬に乘つてもうまく走つて逃げることができない。」

新太郎はさういつて捨松を曲馬團の馬小屋のうしつへ誘うて行つた。

二人はしばらく霧のなかの川の面をながめてゐた。

「僕のお父さんも騎兵だつたんだよ、騎兵の聯隊長なんだ。」

「ぢや、馬に乘るのはうまかつたんだらうな。」

「うまかつたんださうだ、だから僕だつて馬に乘ることはお父さんに敎はつたのさ。」

「おや、もうあんなところに月が行つた。」

「あゝ、もう樂隊の聲も聞えなくなつた。」

「まつたく靜かな夜だなあ。」

二人の少年はそんなことを話しながらふたゝび曲馬團の馬小屋の方へ歩いて行つた。天幕を張つた簡單な馬小屋のなかには十二三頭の馬が、人の跫音を警戒するかのやうに耳をそばたてゝゐた。

「いゝんだよ。よし〳〵。」新太郎は低い聲でさゝやきながら馬の鼻面を撫でてやつた。

「おやッ誰かこゝにくゝられてゐる。」捨松は天幕のすきまから洩れて來る月の光りに黑い人影を發見した。

「捨松ぢやないか、僕だ!」

「あゝ、藤作だ!」捨松は藤作の縛めを解いた。

「捨松！」

「藤作、馬を牽け！　乘るんだ。」

「その馬がいゝ。」

「お前はその馬に乘れ！」

「よいか、僕のうしろから走るんだぞ。」新太郎少年はひらりと馬に乘つた。

捨松も藤作も馬に乘つた。

ちやうど三人の少年が天幕を出ようとする時一人の曲馬乘りの若い女は藤作を發見した。

「逃げるの？」と女は低い聲でさゝやいた。

「あゝ……」と藤作が低い聲で答へた。

「誰にもいはないから安心して早く逃げた方がいゝわ。御機嫌よう。」曲馬乘りの女は手に持つてゐた蠟燭の火を高く振つて見せた。

新太郎少年を先頭に、藤作を中央にして三人の子供たちは鞭をあげて隅田川の土堤を川上の方へ走りに走つた。

月の光りを漂はせた霧がやゝもすれば三つの馬上の少年の姿を淡彩の畫中の人物のやうに尊く見せた。

人里を遠ざかつてしまつて、霧のなかを行くやうに、深い霧を冒して十町ばかりも走つたところで、かれらは廣い草原のなかに出た。

急に草原のなかにぱつと焚火の炎が燃え上つた。五六人の男女の影が霧のなかに現はれた。捨松は「しまつたッ！」と思つた。たしかに曲馬團の男たちが先き廻りをして三人の少年を待ち伏せしてゐるのだと思つた。

捨松はぐつと手綱を控へて藤作を呼びかけた。

「藤作や、馬をとめい……」捨松が聲をかけたとほとんど同時に藤作もぎゆつと手綱を握りしめた。

「捨松や、駄目だなあ。もう逃げ場はない。」藤作は泣き出さんばかりの聲をしぼつて振りかへりながら捨松を見た。

二人は急にふたゝび馬の頭をうしろに向けようとした。

「捨松君！　どうしたの、何でもないんだ、安心していゝんだよ。」新太郎少年は急いで馬を乘り廻して捨松と藤作を引きとめた。

「あすこにゐる人たちは、みんな僕が知つてゐる人なの。」新太郎少年は笑ひながら捨松と藤作を見た。

新太郎少年があまりに落ちついた態をしてゐたので捨松も藤作もはじめて安心して新太郎少年のうしろから馬をすすめて行つた。

「あれはみんなこの川の岸に住んでゐる貧しい人たちなんだ。子供が死んだのだが、火葬場へ連れてゆくお金がないので、眞夜中にみんなでこつそり子供の死骸を燒いてるんだよ。」新太郎少年は低い聲で話しながら焚火の方へ近づいて行つた。

「あゝ誰かと思うてわしらもすこしのことで逃げ出さうと思つとりました。坊ちやんでしたか。」一人の大きな男が笑ひながら聲をかけた。

「あゝ、氣の毒だつたな。どこの子供だい？」新太郎少年は馬をとゞめてたづねた。

「勘五郎の三男坊です。昨日の朝あの川にはまつて溺れて死んだんです。」

「可哀さうだつたなあ。」

勘五郎は燃えてゆくかれ自身の子を見守るかのやうに、ぢつと炎の底を見つめて化石のやうに靜かに草のなかにしやがんでゐた。

捨松は勘五郎と呼ばれた男の寂しい姿をぢつとながめた。幸福と快樂の中心であるかのやうに想像されてゐる大都會のすぐ近くに、草の中で自分の子の死骸を燒かなければならぬほど不幸な人たちが住んでゐるといふことは、ほとんど想像もできないことであつた。

「おい勘五郎や、泣いたつてはじまらぬ、さあもすこし火をくべた。」一人の男が大きな木の枝をはこんで來た。

勘五郎は默つたまゝ木の枝をうけとつてそつと火のなかに入れた。

「ぢや、さよなら……」新太郎少年は手綱を取つた。

藤作も捨松もうしろからつゞいて馬を走らせた。

霧がます〳〵深くなつて行つた。

霧のなかの月に、水に溺れた子供の死骸を燒いてゐる炎とその周圍の人々の姿を照らしてゐた。やがて人の姿も霧のなかに消えてしまつた。草の中の炎のみが霧の底に明滅してゐた。

捨松は空を仰いだ。まん丸い月が花にかすみながら三人の少年を照らしてゐた。

廣い川の上を白く月の光りが流れてゐた。川を下る船の燭がぽつかりとすぐ土堤の下に見えた。

道はふたゝび土堤を下りて、廣い草原を一直線に横切つてゐた。

「すこし休んで行かう……」新太郎少年は眞つ先に馬から下りた。そして草のなかの水溜りに馬をつれて行つて水を飲ませた。

藤作も捨松も馬を下りて水溜りの方へ近づいて行つた。

「藤作や、君はひどい目に逢つてゐたなあ、わづかの間にすつかり痩せてしまつたぞ。」捨松は馬に水を飲ませてゐる藤作の顔をのぞきこみながら聲をかけた。

「捨松や、ありがたう。君のおかげで僕も助かつたのだ。」藤作は捨松の肩に手をかけてなつかしさうに捨松を見た。

「捨松や、君も苦勞したと見えて痩せたぞ！」藤作は月の光りに照らされた捨松の顔をしみ〲と眺め入つた。

「あゝ、それでも二人ともかうやつて無事でゐてほんたうにうれしかつた。」

「さうだとも、さうだとも、僕たちはかうやつて生きてゐることができたんだからなあ。」捨松と藤作はいつの間にか肩に兩手をかけ合つてうれし泣きに泣いてしまつた。

ちやうどその時草の上にしやがんでゐた新太郎少年は急に立ち上つて土堤の方をながめた。

「大變だ、馬の蹄の音が……」新太郎少年は耳に手をあてゝ遠い蹄の音を聽いた。

「追つ手だ……曲馬團の奴等だ……」

「曲馬團の奴等ツ……」捨松は咄嗟に手ごろの小石を三つ四つ拾つて懐に入れた。

「馬の蹄の音だ……」

「乘馬……」

三人の子供たちは電氣に撃たれたやうにして草の上に跳び上つた。

三頭の馬は草原の霧のなかを矢のごとく走つた。

「あゝ聞える聞える……蹄の音だ……」捨松が振りかへつて遠い霧のなかをながめながら叫んだ。

「畜生だらう！」新太郎少年も振りかへつた。

「赤シヤツかな！」藤作も叫んだ。

「赤シヤツ！　はゝはゝは……」捨松はかれに石を投げつけられた男のことを思ひ出したので笑ひ出してしまつた。

子供たちは曲馬團の男たちが追つかけて來たのだと思つた刹那は、さすがに驚いたが、馬を走らせてゐる間にかれらは自分でも不思議なほど沈着と勇氣とをとりもどしてゐた。

高原の牧場で育つた山の子たちは馬を走らせることに關しては、曲馬團の男たち以上に熟練してゐた。だから馬に乘つてゐさへすれば捨松も藤作も曲馬團の男たちを恐れなかつた。新太郎少年も山の子たちに劣らないほどに巧みな馬の乘り方をした。三人の子供たちは晴れやかな競馬場でも走つてゐるやうな落ちついた氣分で馬を走らせた。しかし三人の少年が想像してゐたよりも近く七人の馬上の男の姿が土堤の上にあらはれた時は　さすがに少年たちは驚かざるをえなかつた。追つかけて來る男たちは口々に罵りながら土堤の道を走つて來た。

「いゝから全速力だよ……」新太郎少年はぐつと馬の横腹を蹴つた。藤作も捨松も馬を跳らせてつゞいた。砂煙がぱつと月の光りに映つた。

三人の少年から三四町離れた草の上を七人の曲馬團　男たちが馬に鞭打ちながら砂煙を立てゝ進んで行つた。

戞々と地を蹴る蹄の音が眞夜中の曠野の靜寂を破つた

月に照らされた櫻の花びらが雪のごとく散りかゝつては馬上の少年たちの姿をつゝんでしまつた。

「ピストルだ！」新太郎少年が叫んだ。捨松も振りかへつて見た。

先頭にすゝんでゐた男がピストルを摑んでゐた。額の白い繃帶が月の光りに映つた。

「赤シャツだ！　藤作逃げろ。」捨松は急に馬をかへしてまつしぐらに赤シャツに向つて馬を跳らせて飛びかゝつて行つた。かれは懐のなかの小石を摑んでゐた。

捨松は赤シャツを目がけて小石を投げつけた。藤作を助けたい一心の捨松はもうピストルも、赤シャツも恐れなかつた。かれは自分でも不思議なほど勇氣づけられてゐた。

不意を食つた七人の男たちはあわてふためいて沼のなかに馬を踏み入れさせてしまつた。捨松の第一の小石はうなりながら飛んで行つて赤シャツのこめかみを撃つた。赤シャツは水のなかへ落ちた。曲馬團の男たちが馬から下りて赤シャツを救ひ上げとうよしてゐる間に、捨松はふたゝび馬首をめぐらして疾風のごとく二人の少年の跡を追うて霧のなかにかくれてしまつた。

草の中ではものうげに蟲の音が聞えてゐた。

月の光りがしづかに隅田川の上に漂つてゐた。

ものうい蛙の聲が靄のなかゝら聞えてゐた。

勘五郎の子供の死骸を草のなかで燒いてゐた貧しい人たちが何か低い聲で語りながら川上の方へ歩いて行つた。

捨松も藤作も馬から下りて、水を飲ませたり、秣を食はせたりしてゐた。

「お父つあん馬はどうしませう。」新太郎少年が裏の方から聲をかけた。

「馬も可哀さうだから、よく手入れをしておいてやれ、それがすんだら馬は裏の木につないでおけ。」

「でも、曲馬團の連中が馬を見つけてこゝへやつて來はしないでせうか。」

「やつて來る方がいゝ。どうせ馬はあいつらの馬だからかへしてやらなくちやならぬ。いゝから裏の木につないでお

いてやれ。」

「はい……」

三人の少年は裏の欅の下に馬をつないで土間にはいつて來た。

「ほう、あんたがお藤作さんか、ひどい目に逢つたなあ、でももうこれから安心してゐるがいゝ。こゝの家にさへをれば何も怖がることはない。」

藤作は壁にかゝつてゐる古いピストルに惹きつけられるやうにして見入つてゐたが、不圖老人の言葉に氣付いてぴよこんと頭を下げた。

「あんたはまだ手も足もよく洗ふ暇もなかつたのぢやなはゝはゝはゝ……」老人は墨で塗られたまゝになつてゐる藤作の手足や首のまはりを不思議さうにながめてゐた。

はじめてランプの灯で見るといかにもまだ手のまはりや、顎のさきあたりが黒く塗られたまゝで、目ばかりぎろぎろ光つてゐるのであつた。捨松も甚太郎もくす／＼笑ひ出してしまつた。

「昨日あんたは熊の眞似をして幾つくらゐづゝ頭をなぐられたんぢやな？」

「幾つくらゐなぐられたか算へてはゐませんでした。」

「はゝはゝ……そりやさうだらうな。」

「でも、一日にたいてい百から二百くらゐづゝなぐられてゐたやうでした。」藤作はさういつて瘤で石のやうにかたまつた自分の頭を撫でて見た。

ちやうどその時家の外に急に馬を走らせる音がした。

藤作は押入れのなかへ逃げようとした。

「いゝよ、いゝよ、こゝにゐていゝ。あいつらが幾人來たつてかまやせぬ。そこに坐つておいで……」

老人は壁のピストルを掴んで、窓のそばへにじり寄つた。

「こゝだ、この家だよ。」

「馬がゐる、こゝに逃げて來やがつたんだな。」

家の外では曲馬團の男たちがひらりと馬から飛び下りて、家のまはりを取りかこんでしまつた。

「おい、ちよつと戸を明けてくれ。」曲馬團長の赤シャツが外から聲をかけた。

「明けなければ戸を壞してはいるぞ。」雨戸に手をかけて二三度がた〳〵と戸を外すやうな音をさせた。

「今に明けてやるから待つてろ、何の用で來たのだ。おい新太郎戸を明けておやり。」

少年は土間の戸を明けた。月の光りが暗い土間に流れて來た。

ピストルを手にした團長の赤シャツを先頭に立てゝ、曲馬團の男たちは手に手に獲物を提げて土間にはいつて來た。

捨松と藤作は老人のうしろに顫へてゐた。

「あすこにゐる。おい藤作こつちに出て來い。」赤シャツが藤作をにらみつけた。

「あいつだな、團長の顔に石を投げつけたのは……」

「さうだ、あいつだ。猿見たいな顔をしてゐるあいつだよ。」

捨松は懐のなかに手を突つ込んだ。かれの手はすでに石を掴んでゐた。

「あ、あぶない。あいつもう石を握つてゐるぞ。」先に立つてゐた二人の男は赤シャツの蔭にかくれた。

「静かにしないか、お前たちは曲馬團の男だな、人の子供を盗んで置いて、熊の眞似なんかさせやがつて、不埒千萬な奴だ……」老人はピストルを手に握つたまゝ赤シャツをにらみつけた。

「きさまこそ盗人でないか、大切な子供を連れ出したり、馬を盗んだりしやがつて、おとなしくその子をこつちへ出せ、もし出さなければこれだぞ。」赤シャツは老人の前にピストルを突出して見せた。

新太郎少年は驚いて父の前に立塞がつて赤シャツを防がうとした。

「きさまたちのやうな悪漢のなまくらピストルが、わしのこの胸を射通すことができると思ふのか、よし撃てるなら撃つて見ろ。」

「撃たないでか、足もない不具者の癖になまいきなことをいふな。」

「さあ撃て……」老人は片手で自分の胸をたゝいて見せると同時に自分もまた赤シャツの胸をめがけてピストルを向けた。「新太郎あぶないからこつちへおいで。」老人は無理に少年を傍へ引き寄せた。

赤シャツはピストルの引き鐵に指をあてた。

ちやうどその時窓の硝子を通して蒼白い月の光りが老人の横顔を凄いほどに照らした。

赤シャツは電氣にでも打たれたもののやうにピストルを握つたまゝ老人の顔を見つめてゐた。かれは急にピストルを投げ棄てゝぴつたりと土間へしやがんでしまつた。

「どうしたんだお前は？　おれを撃たぬのか？」老人は笑ひながら赤シャツを見た。

うしろについてゐた六人の若者どもは急に勇氣を挫かれて、戸口に立ちはだかつたまゝ赤シャツをながめてゐた。

「聯隊長殿！　何ともまをしわけがございません。」赤シャツは土間に兩手をついてゐた。

「何だと！　聯隊長殿ッ……」
「聯隊長殿！　面目次第もございません……」
「いつたいお前は誰ぢや？」
「木原上等兵でございます。」
「木原……」
「はい木原練太郎でございます。」
「うむ。木原か……」老人はピストルを投げ捨てゝ土間の方へにじり寄つて行つた。
「おいお前たちはこゝの土間へはいつて來て、おわびをしてくれ。この御老人はいつもわしが話してゐた大寺聯隊長殿だつたのだ……」
六人の男たちは急にぴよこ／＼と頭を下げて土間にはいつて來て、土間に手をついてしまつた。
「聯隊長殿！　どうしてまあこんなお家に？」赤シャツは暗いランプに照らされた小屋のなかを見まはした。
「あの勇敢なミスチエンコの騎兵旅團を蹴散らしてしまつたのはみんな聯隊長殿のおかげだつたのです。それだのにあなたは義理を立てなすつて、あれほどの御名譽を他人にゆづつて、御自分はあんなひどい御負傷をなすつても今ではこんな落ち振れたお暮しをなすつておいでになる。」赤シャツは土間の上にぽと／＼と涙を落した。
「おれの話なら、もうよしてくれ。昔のことはみんな夢だ、それよりかお前こそどうしてそんな曲馬團なんかにはいつて歩いてゐるのだ。」
「聯隊長殿さへ何の不平も仰しやらないでかうやつて世の中からすつかり隱れていらつしやるのに、わたくしのやう

な一兵卒が、論功行賞の不平なんかで捨て鉢になつたなんて、まことにお恥かしいことでございます。」

「さうか、それでそんな妙な商賣を始めたのか？」

「はい、ちやうど聯隊長殿は遼陽の激戰で二度目の御負傷をなすつて野戰病院へはいつておいでの時でしたので、同じ軍の騎兵聯隊でゐながらも、わたくしたちの聯隊がどんなに勇敢に闘つても、實際の功はいつの間にか他の聯隊の者に奪はれてしまつてゐるといふ形でした。同じ村から出征しました臆病者どもが、負傷一つせずに金鵄勳章をいただいて、わたくしたちのやうに胸も、腕も、彈丸の痕だらけの者はかへつて臆病者のやうに取り扱はれてしまつたのでございます。」

「そのこともわしは後で聽いた。」

「そこでわたくしも考へたのでございます。世の中といふものは強い者がちだ。惡い奴が結局仕合せだ。と、かう考へたのでございます。馬に乘れるのを幸に、たうとう曲馬團なんか作りまして、今日までこんなことをやつてをりました。」

「さうか、お前の考へも無理はない、今の世の中では正直な男がずゐぶん損をして、狡猾な男が立身出世をして、大きな面をしてゐる。だが、世間はだますことができても自分の魂をだますことはできぬ。わしのやうにこんな貧乏はしてゐても、實に魂だけはいつもせい〳〵してをる。月を見ても風の聲を聽いても實に愉快ぢや。お前もいゝ加減にすこし悟りを開いたらどうぢやはゝはゝはゝ……」

「はい、わたくしもすつかり心を入れかへまして、聯隊長殿の眞似でもいたしませう。」

「乞食のやうなわしの眞似をする必要はないが、まあ人間らしい生活だけはするやうに心がけてくれ……」

「はい……」赤シャツは手の平で眼頭を拭いた。

「まあ久し振りぢや、ともかく一杯飲んでくれ。昔の滿洲の話でもしようぢやないか。」

爐のまはりには杯がまはされ、酒があたゝめられた。

月は靜かに爐のはたの人々を照らしてゐた。

老人の元氣な笑ひ聲がいつまでも聞えてゐた。

數日後の午後曲馬團長の赤シャツは津輕海峽の聯絡船の甲板に立つてゐた。かれは暮れゆく海峽の黑潮をぢつと見つめてゐた。

だぶ／＼のひどく毛ずれのした荒い縞のセイラア・パンツ、古いぼろ／＼な赤革の大きな長靴、スコツトランドの農夫たちでも着てゐさうな格子縞の上衣の下からは垢染みた赤シャツがのぞいてゐた。だらしなく結ばれたネクタイは横にひん曲つてゐた。かれは帽子も冠らないで、長いもじや／＼の髮を潮風に吹かせてゐた。

船員たちは、船が青森の棧橋を出帆して以來、ほとんど二時間ちかくも、ずつと海の面を見つめてゐる赤シャツを不審さうに眺めてゐた。

「ひよつとしたらこの男は、津輕海峽の眞ん中で投身自殺をするのではないだらうか？」

甲板の欄干によりかゝつてゐる赤シャツを見た人たちはさうも思つた。いかにもかれは悲痛な顏をしてゐた。

人々は赤シャツの憂鬱な顏にのみ氣付いてゐた。

しかし赤シャツの顏には、また時としていかにも明るい希望の光りがかゞやいてゐることもあつた。人々はかれの

瞳の明るい希望に氣付かなかつた。

「お前は人を怨んではならぬ。なるほどお前は滿洲の戰場では祖國のために命をなげすてゝ働いてくれた。わしはたしかにそれを認めてゐる。しかしお前は、それに對して報いられることがきはめて薄かつた。お前が自暴自棄な心になるのも無理はない。だがこゝのところをよく考へなくちやならぬ。われ〳〵が身命を擲つて戰つたのは勳章や世間的な名聞のためではなかつた。われ〳〵は祖國のために働いたのだ。そして見事に、祖國を守りえたのだ。われ〳〵はそれだけで滿足しようではないか。われ〳〵はあの恐ろしい敵のミスチエンコ騎兵旅團の襲擊を蹴散らした時、あまりのうれしさに抱き合つて滿洲の雪のなかで男泣きに泣いた。あの時のうれしさはどうだ。あの時のうれしさだけでわれ〳〵は十分報いられてゐるのだ。わしは今でもかうやつて眼をつむつてゐるとあの襲擊の朝の敵の銃聲が聞える。敵味方の勇ましい喇叭の音が聞える。天皇陛下萬歲を叫んで雪のなかにミスチエンコ旅團を追つかけて行つた朝の突擊の聲が聞える。わしは思ひ出しただけでも心臟が破裂しさうなくらゐにうれしいぞ。あの愉快さだけで十分報いられてゐるのだ。人間が勝手に拵へた名譽なんていふものは玩具みたいなものだ。わかつたか木原……それよりかお互に生きてゐる間にはできるだけ自分の周圍の人たちのために働いてやることだ。お前はこれまで曲馬團の團長なんかやつてゐたのでずゐぶん色んな惡いこともしたであらう。どうだ、けふから生まれかはつて、昔滿洲の雪のなかで祖國のために働いた木原上等兵に立ちかへらないか。」赤シヤツの耳にはなほ數日前の大寺聯隊長の言葉が刻みつけられてゐるのであつた。

「わたくしはすつかり生まれかはります。そして曲馬團にはいつてからの惡事の償ひをいたします。」かれは淚を流して誓つた。

かれはその翌日直に曲馬團を解散してしまつた。二十頭の馬を賣り、一切の物を賣り拂つて團員に分けてやつた。

「おれも今日から生まれかはつて新しい生活にはいる。お前たちはこの金を持つて、皆んなすぐに田舎へかへれ。いいか、東京に殘つてゐてはならぬぞ。お前たちの魂は大都會の腐つた空氣にけがされてしまつてゐる。すぐ田園にかへつてくれ。そして思ふ存分新しい田園の空氣と、汚されない日光に觸れろ。ほんたうな生活は田園のなかから生まれるんだ。おれは今までお前たちと一緒に、十幾年の間日本中を歩いた。支那朝鮮にも一緒に行つた。その間おれはずゐぶん無理なことをいつてお前たちを困らせたこともあつた。しかしみんなはよくおれのいふことをきいてくれた。おれはたとへどこで死んでもお前たちのことを忘れはせぬ……」かれはぽろ／＼と涙を落しながら曲馬團の男や女たちの前で演說をした。みんなも泣いた。そしてその日の午後かれはみんなと別れて捨松と藤作だけをつれて東京を立つたのであつた。

木原は、藤作を曲馬團へ賣りに來た男が詮太を北海道の監獄部屋へ賣つてしまつたことをもほゞ想像することができたので、詮太を救ひ出すために北海道への旅を急いでゐるのであつた。

「おれはすつかり生まれかはるのだ。おれの新しい生活の第一の仕事として三人の山の子たちを救つて立派な人間に育て上げてやるのだ……」さう考へただけでも木原の顏には明るい希望がわいて來るのであつた。

けれども、それと同時に木原が海峽の黑い潮の上を見つめてゐると、過去の悲しい思ひ出がかれの心を暗い影につつんでしまふのであつた。

かれが曲馬團長になつて一團の人々を率ゐて最初に北海道に興行へ行つたその歸り路での出來事であつた。十年前

のことである。

函館を出帆したころは日が暮れかゝつてゐて、雪がいつの間にか甲板の上に白く積つてゐた。

北海道の興行は非常な不入つゞきで、かれは散々な目に逢つて海峡をわたつてゐたのであつた。不愉快な心に囚はれてしまつてゐたかれは、自然何かにつけて周圍の人たちに辛く當り散らした。

日が暮るゝにつれて雪とともに波がはげしくなつて來て、ともすれば波は甲板の上まで襲うて來た。

「團長さん、天龍と生吹があまり船が搖れるためか、二頭とも前足を折つてしまひましたよ。」一人の團員が蒼い顏をしてそこに立つてゐた。

「何だと天龍と生吹が……」かれは飛び上つてケビンを出て船倉の方へ走つて行つた。

天龍と生吹はアラビヤ種の馬で、かれの曲馬團の唯一の財産であつた。かれはいたましくも足を折られてもがいてゐる二頭の馬を見なければならなかつた。

「きさまたちはどんな馬のつなぎ方をしてゐたのだ。おれ達はこの二頭の馬を失したら、明日からどうして興行がつづけられると思ふか。いつたいこんなに海が荒れてゐるのに、お前たちは誰もこの馬の側にはついてゐなかつたのか？　おれがあれほどやかましくいひつけて置いたに……」

「いゝえ、あまり船が動搖するので心配でしたから、こゝに二人づつ交代に來てゐたのでしたが、おかみさんが大丈夫だから早くケビンへ引つて來て飯を食つた方がいゝといつてくだすつたのでつい……」

「何だと、おれの嬶がそんなことをお前たちにいつたのか。」

「はい……」

「おい。お勝ッ……お前は何といふ馬鹿だ。お前が馬鹿なばつかりにおれたちは明日からもう興行をつゞけてゆくこともできないぞ。お前はどうして明日からこの三十幾人の者に飯を食はせてやるつもりだ。」

「どうかしたんですかわたしが？」

「下の船倉に行つて見ろ、天龍も生吹も足を折つて死にかゝつてゐるぞ……」

妻の顏は全然血色を失つてしまつた。

「わたしが悪うございました。堪忍してください……」妻はかれの足もとに身を投げ出してあやまつた。

「あやまればいゝと思ふのか。馬鹿ッ……」かれは堅い靴でいやといふほど妻の頭を蹴つた。

その夜船が青森に着くすこし前、かれの妻は海に身を投げて死んでしまつた。

けふもかれは海峽の黑い潮の面を見つめてゐる間に悲しい妻のことが思ひ出されて仕方がなかつたのであつた。

かれがさつき青森を出帆してからずつと海の面を見つめてゐるのはそのためであつた。

かれは今までになく、亡くなつた妻のことを深く、いたましく、思ひ出したのであつた。かれは今夜くらゐしみじみと亡くなつた妻のことを思ひ出したことはなかつた。

「わしが悪かつた。どうぞ堪辨してくれ。わしは今はじめてお前に懺悔する心になつた。」かれはぢつと海の面を見つめてゐた。

遠い過去の出來事である。それでもかれの心にはなほ昨日今日の出來事のやうに思はるゝのであつた。

「あのころはわしは世間といふものに對して不平ばかり抱いてゐた。だから世間に對する復讐としてわしは誰にでも

辛くあたつた。お前はわしの我がまゝな心の犠牲になつてしまつたのだ。たゞ一目でいゝから波の底からよみがへつて來てお前のやさしい顏を見せてくれ……」かれはこんなことを思つては海の底を見つめてゐるのであつた。

日が暮れてしまつた。人々は悲痛な顏の赤シャツを見ては不思議さうに通り過ぎてしまつた。

「お勝ッ……お前はこの暗い海に、もう十年間ずつとたゞ一人でわたしを待つてゐてくれたのではないか、わたしは今ふたゝび海峽にかへつて來た。たつた一度でいゝから波の上にお前の姿をあらはしてくれ……」かれは欄干にもたれたまゝぽろ／＼と涙を落した。そして幾度か深い溜息をついた。

函館の山手の街の燈が、星のやうに美しく水平線の上にあらはれて來た。

かれは急いでケビンのなかにはいつて行つて、二人の少年を甲板の上につれて來た。

「北海道へ着いた。ほらあれが函館の街だ……」

「北海道……」捨松はさう思つただけで眼の裏が熱くほてつて來るのを感じた。

謙太が氣の荒い男たちにつれられて、たゞ一人で寒い北海道の監獄部屋へ行つたであらうことを考へると、深い谿底にでも蹴落されたやうな暗い心になるのであつた。

棧橋からすぐ主人は幌無しの馬車に乘つた。

「內地では櫻が咲いてゐるに、こつちではまだ雪だよ。」赤シャツは馬車のなかから兩手をひろげて雪を手の平に受けて見せた。屋根にはまだ雪が白く積つてゐた。

馬車は雪の道を一直線に走つて行つた。鈴の音がさびしく暗のなかに響いた。

一時間ばかりも走つた時、馬は湯の川の或る溫泉宿の前に立ちどまつてゐた。

赤シャツはそこに出て來た若い女に何か話しかけてゐた。
「はい、お二人さま。どうぞお上りください。」若い女は先に立つて二階の方へ階段を登つて行つた。赤シャツのうしろから捨松も藤作もつゞいて歩いて行つた。
「どうだ寒かつたゞらう。雪が降つてるからなあ……」さういつて赤シャツは捨松と藤作の冷たい指をごし〳〵とこすつてくれた。
藤作は赤シャツが手を動かすたんびに眼をつむつてびく〳〵と首をすくめてしまつた。ついこなひだまで毎日舞臺へ出ては赤シャツに頭をなぐりつけられてゐたので、まだその習慣と恐怖からのがれることができないでゐるのであつた。だから赤シャツが藤作の冷たい手を握つて、ごし〳〵擦つてくれた時は、藤作は驚いて飛び上つてしまつた。
「あゝ、もう手荒なことをするんぢやないからそんなにびく〳〵することはないはゝはゝは……」赤シャツは笑ひながら手をあたゝめてくれた。「今日からはもうあんたたちはわしの子供のつもりで面倒を見て上げるからなあ、安心してゐるがいゝ。そして一日も早くその詮太といふ子供を探し出さなくつちやならぬ。」赤シャツは輕い吐息をついた。
「ぢや、小父さんはまだ用があるから、あんたたち二人で湯にはいつて來るがいゝ。」さういつて赤シャツは捨松と藤作を溫泉の方へやつた。
「おれ何だか氣味が惡い。」廣い溫泉のなかに浸りながら藤作はきよとんとした眼で捨松を見た。
「何で氣味が惡い？」
「でも、あの赤シャツがこなひだから急に人間が生まれかはつたやうにやさしくなつたぢやないか。いまにおれたちを北海道の熊にでも食はせるつもりぢやないかなあ。」

「そんな馬鹿なことがあつてたまるものか。やつぱり改心したんだ。安心してあの人にまかせといた方がいゝよ。」

「さうかなあ。」

捨松と藤作が温泉からあがつて部屋にもどつて來ると、赤シャツは二人の少年たちの汚れた着物を片付けてしまつて、新しい着物をちやんと揃へて二人の前へ持つて來た。

「あんたたちが湯にはいつてゐる間に、出來合ひの着物を買つて來てもらつたのだ。内地とちがつて北海道は寒いからそれを着るがいゝ。」

捨松も藤作も急に新しい着物を着て、思はずうれしさのあまり笑ひ出してしまつた。

「長い旅で疲れただらう。御飯をたべたらすぐ休んだがいゝ。」さういつて赤シャツは二人の少年たちのために自分で夜具をひろげてくれたりした。

赤シャツがあまり親切にしてくれるので、最初は安心してゐた捨松までが不安に思ふやうになつた。

捨松は夜具を引つかむつて寢ても、急に赤シャツのことが氣になつて眠れなかつた。山を出て三人で東京へ着く前の晩片目の男と一緒に大きな川の岸の宿屋に泊つた時と同じ恐怖が捨松の心に頭をもたげて來るのであつた。

捨松はそうつと夜具の間から眠つた振りをして、赤シャツの動作をうかがつてゐた。

海の波の音が聞えて來た。赤シャツはひとりで起きてゐた。ぽつねんと火鉢の縁によりかゝつてゐた。かれはけふ渡つて來た津輕海峽のことを思ひ出してゐたのであつた。十年前に身を投げて死んだ妻のことを考へてゐたのであつた。

捨松と藤作が寢てゐた部屋と赤シャツが坐つてゐた部屋との間には、襖が立つてゐたし、こちらの部屋の電燈は消

してあつたので、捨松は比較的自由に赤シャツの一擧一動を觀察することができた。捨松は眠りかけてゐた藤作を突ついてそうつと襖の間から赤シャツの部屋を覗いて見た。しかしいつまでたつても赤シャツは寢ようともせず、たゞぽつねんと火鉢によりかゝつて悲しさうな顔をして考へ込んでゐるばかりであつた。それを見ると二人の少年の不安はいつとなしに取りのぞかれるのであつた。

「波の音がさびしいな。」と藤作が赤シャツに聞えないほどの低い聲でさゝやいた。

「津輕海峽の波の音だ。」捨松もぢつと波の音に聽き入つてしまつた。山の子たちには海の波の音がたまらなくさびしかつた。

波の音はいろ〳〵ことを思ひ出させた。

故鄕の山の家で父がたゞ一人で自分を待つてゐるであらうことを思ひ出すと、捨松は胸を搔きむしられるやうな氣になるのであつた。

捨松がだまりこんでしまつたころに藤作もまた同じやうに故鄕の山の家のことを考へ出してゐたのであつた。銓太を探し出して一日も早く山へ歸りたいと思ふと、同じやうに胸が裂けるやうであつた。なつかしい靜かな山の姿が目に浮かんで來て仕方がなかつた。

それにしても、數日前までは自分を曲馬團の舞臺の上に引き摺り出しては熊の眞似をさせて、毎日たぐりつけてゐた赤シャツが、捨松と自分を子供のやうに可愛がつて遠い旅をつゞけてくれてゐることを考へると、藤作は夢ではないかと思ふこともあつた。もし夢がさめたら、またいつものやうに暗い曲馬團の馬小屋の藁のなかに寢てゐるのではあるまいか。さう思うと悲しくてならなかつた。

藤作は襖の間からふたゝび赤シャツの方を覗いて見た。赤シャツはそこに作りつけられたやうに火鉢の縁に寄りかかつたまゝやつぱり起きてゐた。そしてぽろ／＼と膝の上に涙を落してゐた。

赤シャツは海の音を聴きながら亡くなつた妻のことを思ひ出したのであつた。

藤作には數日前までは赤シャツが涙を落すといふやうなことを想像することさへできなかつた。それだのに赤シャツはたしかに今すぐ隣りの部屋で、ぽろ／＼と涙を落してゐるのであつた。「いよ／＼これは夢かも知れない。」とも思つた。藤作は捨松の耳にさゝやいた。

「赤シャツが泣いてるぞ！」

「ほんたうか！」

捨松は起き上つて襖のうしろから覗いて見た。

たしかに赤シャツはぽろ／＼と涙を落してゐた。そして幾度か深い溜息をさへ吐いた。

「ほんたうに泣いてる！」

「泣いてるだらう！」

二人の少年はじつと、泣いてゐる赤シャツを襖のうしろから覗いてゐた。しかし泣いてゐる赤シャツを見てゐると、何といふことなしに、少年たちの心も悲しくなつて來るのであつた。

最初に捨松が、赤シャツと同じやうに自分の膝の上に温かい涙を落した。

「捨松お前も悲しいのか？」藤作がさゝやいた。

「あゝ、赤シャツが泣いてるのを見たら、何故やらおれまで悲しくなつた。」

「おれも、ほんたうはさつきから涙が落ちてなあ。」藤作もまたぽとりと涙を落した。
捨松と藤作は夜具を引つ被つて泣いた。二人の少年は山の家を思ひ出しつゝ泣いた。
赤シャツはやつぱり火鉢の縁で溜息をついてはぽとりと涙を落した。かれは亡くなつた妻のことを思ひ出しつゝ。
湯の川の奥の修道院では、まつたく世を捨てた黒衣の修道尼たちが、今夜も聖像の前にひざまづいて祈つてゐた。
眞夜中の鐘が一つ、修道院の禮拜堂の塔から響いて來た。
赤シャツも二人の少年も夜具のなかにもぐつたまゝ、しんみりした心持で鐘の音を聽いてゐた。ちやうどその時聖像の前の修道尼は、ひざまづいたまゝかく祈つてゐた。
「神よ全世界のすべての罪人の上に、悲しみある人々の上に、御手を下したまへ！」

小さな袋を背負つた二人の少年が先に立つて、そのうしろからは大きな袋を背負つた男が俯向きがちに歩いてゐた。
赤シャツと捨松、藤作の二少年はかくして日も日も北海道の涯から涯をめぐつて歩いた。
廣い北海道をめぐつてたゞ一人の詮太を探し出すといふことはなかなか容易なことではなかつた。さらに赤シャツが第一に苦心したことはかれ等三人の生活費を作り出すことであつた。赤シャツはそのためには一つの町、または海岸の漁場、或は山の坑山にたどりつくたんびに、詮太を探しながら、十日なり二十日なりはげしい勞働をしては次の町までの旅費と、三人のための米やパンを準備するやうな苦心をしなければならなかつた。
最初は赤シャツ一人に頼つて、赤シャツ一人を働かせてぼんやり赤シャツの後について北海道を歩いてゐた捨松も藤作も、あとでは赤シャツと一緒にたつて働いては幾らかの金を拵へるやうにした。

或る海岸では網を曳く仕事を手傳つたり、また或る牧場では毎日秣を切るために雇はれたりした。そして幾らかの金が出來ると三人はありつたけの金でパンや米を買つて袋に入れてその町を出た。

「捨松君、もう北海道にやつて來てから一年になるが、いつたい詮太君は生きてゐるだらうかなあ？」

釧路の方へ出ようとする或る山道で赤シャツはいつになく絶望的な顔をして捨松と藤作を振りかへつて見た。赤シャツは米やパンを入れた大きな袋を背負ひながら先に立つて歩いてゐた。ズボンは破れ、靴はぼく／＼になつてゐた。顔は日に焦けて見るからに衰へ切つてゐた。

「詮太君を探すために、あんた等もその小さな足でほとんど北海道の町といふ町、山といふ山を歩きつくしたのだが何の手がかりもない。どうしたらいゝだらう！」赤シャツは大きな袋を草の上に投げ出して、しやがんでしまつた。

赤シャツにさういはれて見ると捨松も藤作もまつたく絶望の底に蹴落されてしまふのであつた。二人の少年は、赤シャツの左右に草の中にしやがんで、赤シャツと同じやうにぽつねんと高原の涯に沈んでゆく夕陽をながむるともなくながめてゐた。

ながめてもながめても荒涼としてきはまりなき曠野を夕暮の風が吹いてゐた。草は天に接し、風は地平線の涯から直に大空を横ぎつてさらに地平線に飛んで行つた。

「これから歩いたところでとても人家を見出すこともできまい。今夜もまた野宿だ！」赤シャツは二人の少年をかへりみてさういつた。

捨松も藤作も背の袋を卸して、中から古い天幕や飯盒などを取り出していつものやうに野宿の準備にとりかゝらうとした。

ちやうどその時であつた。捨松は遠い草原のなかを風に吹かれながら一人の若い男が近づいて來るのを見た。同時に捨松はその男の周圍を灰色の雲のやうな形で取り卷いてゐるものを發見した。

「何だらう！」捨松は藤作に聲をかけた。

捨松も藤作も草のなかにのび上つて若い男の方をながめた。

草のなかから牧笛の音がきこえた。一疋の犬がはしつこく草のなかを走りながら灰色の群を追ひ立てゝゐた。

「あゝ羊だ！　羊の群だ！」捨松は草のなかに飛び上つた。

夕暮の薄暗はしづかに地平線の上に柔かな草の上に漂ひはじめてゐた。けれども幾百頭の羊の群は太陽が落ちてしまつたことも、日が暮れかゝつてゐることもまるで感じないかのやうに草を食みつゝ夕暮れの風のごとくしづかに草のなかを動いて行つた。時折り若い男は牧笛を吹いた。牧笛の音が草を吹く風のごとく寂然として響いた。

「こいつはうまいものを見つけた。」赤シャツは天幕を張る手を措いて近づいて來る羊の群を見た。

「羊の群がゐるからにはこの近くに何處かに羊飼ひの家があるにちがひない。今夜はそこに行つて泊めてもらふことにしよう」赤シャツの顏には急に明るい希望の色が浮かんで來た。赤シャツは若者の方へ飛んで行つて何か二言三言若者と語り合つた。若者は笑ひながら赤シャツのうしろから、捨松や藤作の方へ近づいて來た。

「久し振りで今夜は屋根の下に眠れるぞ！」赤シャツは二少年の顏を見ながら子供のやうな笑ひ方をした。

間もなく天幕や飯盒を袋のなかに入れて背負つた三人は羊の群のうしろから羊飼ひについて草のなかを歩いて行つた。空には星がまたゝきはじめた。

羊飼ひの家は草原の楡の林のなかにあつた。赤シャツや二少年は若者に手傳つて羊を小屋のなかに入れたり、爐の

火を焚きつけたりした。赤シャツと少年たちは北海道へ來てはじめて心から落ちついて爐の傍で晩飯をとつた。疲れ切つた二少年はすぐに爐のはたに眠つてしまつた。若い羊飼ひは尚一度小屋の方へ羊を見に行つた。

赤シャツは爐のはたに坐つて袋のなかを調べて見た。そこにはたゞわづかの米とパンだけが殘つてゐた。かれはポケットのなかに手を突つ込んで見た。かれの手の平には五六枚の銀貨と十二三枚の銅貨が殘つてゐるばかりであつた。

小屋から羊飼ひが爐のはたにもどつて來た時赤シャツは俯向いて考へ込んでゐた。そしてぽたりと榾火の上に涙を落した。かれは津輕海峡で投身して死んだ妻のことや、探しても探しても見出すことのできない謙太のことを考へてゐたのであつた。

「どうかなさいましたか？」羊飼ひはやさしい言葉で話しかけた。赤シャツは驚いて羊飼ひを見た。

「やあ、飛んだ意氣地のないところをお目にかけました。はゝはゝは……」赤シャツはきまり惡さうに笑ひながら羊飼ひを見た「實はね、わたしはこの二人の子供たちをつれて既う一年の間北海道を歩いてるのですよ。東京を出る時はこれでも三四百の金は持つて來たんです。ずゐぶん儉約をしましたがいつの間にか無くなつてしまつたんです……。稼いでいくらかづゝの旅費を拵へては旅をつゞけてゐるのですが、その尋ねる子をはたして探し出すことができるか知らと思へば、あんまり心細くなつてねえ……」赤シャツは謙太のことだけを語つて、亡くなつた妻のことは話さなかつた。

「その探しておいでになる子供といふのはあなたのお子さんですか？」

「いゝえまるで見ず知らずの子供ですがね、この二人の子供たちの仲間です。惡い奴に賣られてしまつたんですよ。

わたしもこれまでは散々惡いことばかりしてゐましたので、せめて一生のうちには一つくらゐ善いことをして死にたいと思つてゐます。で、罪滅ぼしのためでさあはゝは……どうかしてその賣られて行つた子供を救ひ出してやりたいと思つてゐるんですよ。」

「さうですか。それは感心なお心懸ですな。そしてその賣られた子供つていひますと……へえ、お氣の毒ですが何分廣い北海道のことですし、一度監獄部屋にでも叩き込まれたが最後、二度と明るい世界に出て來ることはできないといひますからなあ……」

「さうですよ。わたしもせめて今度だけは一生懸命になつて一人の人間を助けたいつもりで今日まで根かぎり探して見たのですがもうとても探し出す希望もないとすれば仕方がないから、これから內地へ引きかへすより他に方法はないかとも考へてゐます。」

「せつかく今日までそれほどの努力をなされたのに、お氣の毒なことですなあ。」

「仕方がありません……」赤シャツは深い溜息をついた。

「明日はもう內地へかへりませう。」

赤シャツと羊飼ひは默つたまゝ爐の火を見つめてゐた。

突然羊飼ひが大きな聲を出した。

「あゝさうだ、去年の秋でした、一人の男が十五六の子供を一人連れてこゝの小屋に泊つて行つたことがありましたよ。」

「何ですつて、十五六の子供を一人連れて！」赤シャツは飛び上つたはずみに頓狂な聲を出した。あまり聲が大きか

つたので捨松も藤作も驚いて眼をさましてしまつた。

「えゝ子供を一人つれた男がこの家に泊りましたよ、さういへばその子供は泣いてをりました。」

「どんな子供でしたその子供は！」

「痩せた、顔色の悪い子でした。」

「右の耳の下に火傷のあとがありはしませんでしたか？」捨松が羊飼ひの方を向いてたづねた。

「ありました、これくらゐの火傷のあとがありましたよ。」と羊飼ひは指の先で丸い形をこしらへて見せた。

「鉦太だ！ 鉦太だ！」捨松も藤作も躍り上つて羊飼ひと赤シャツの顔を見た。

「そして、その連れてゐた男つていふのはどんな？」

「熊の膽を買ひに歩いてるんだとかいつてゐましたが……」

「熊の膽を？」

「えゝ熊の膽を買つて歩いてるんだとかいつてゐました。片眼の男でした。」

「片眼の男ですつて？」赤シャツは爐の火の上へのしかゝるやうにして羊飼ひを見た。赤シャツの眼が急にかゞやいた。

「色の黒い片眼の男？」

「えゝ色の黒い片眼の男でした。」

三人の胸にはつきりと前途の光明が見出されたやうに感じられた。

「その男はこゝから何處へ行きました？」

「これから北見の方へ行くといつてゐました。」
「北見ですか？」
「北見の方で大きな熊が獲れたとかいつてゐました。」
「ぢや熊の膽を買つたらまたすぐ內地へ歸るといつてゐましたか？」
「いゝえ、何でも今度はしばらく北海道に落ちついて商ひをするつもりだとかいつてゐましたよ、野付牛あたりは薄荷が大變いゝものですから、何でも熊の膽は熊の膽として今度は薄荷の商ひで一儲けして內地へかへるつもりだとかいつてゐました。」
「野付牛の町！　野付牛つていつてゐましたか？」
「野付牛といつてゐました。」
「ありがたうございました。もうこれですつかり安心しました、その男にちがひありません、わたしが探してゐた子供を賣つた男は　捨松君、藤作君、今度こそ詮太君を屹度救ひ出すことができるにちがひない。こんなにうれしいことはない。わたしはもう所詮駄目だらうと思つて明日は內地へ還らうかと考へてゐたんでしたが。」赤シヤツは手の甲で淚を拭いた。捨松も藤作もうれしさのあまりぽとり〳〵と淚を疊の上に落してしまつた。
羊飼ひは眞夜中に起きて三人の旅人のために食事の支度をしてくれた。
「それでは途中までお送りしませう。」親切な若者は小屋の羊を追ひながら先に立つて草の道を歩いて行つた。
空が晴れて星がまたゝいてゐた。
先頭の羊の首の鈴が銀のやうな美しい音に響いた。

「おやどうぞ御無事でおかへりなさいますやうに：」と、ひがなら羊飼ひは幾枚かの銀貨と數日分の米とを赤シャツの手にわたした。

「ほんたうにありがたうございました。あなたのおかげで一年間のわたしの苦心がすつかり報いられました。それにこんなにいろ／＼なものをいただきまして相すみません、あなたも御機嫌よう。」

或る丘の上で三人は若い羊飼ひや羊の群と別れた。

霧が羊飼ひや羊の群をかくしてしまつた。鈴の音と犬の聲だけがかなり長い間草の原に響いてゐた。

赤シャツと二人の少年は袋を背負つたまゝ小急ぎに霧のなかを歩いて行つた。夜はなか／＼明けなかつた。

數日の苦しい旅行の後三人は野付牛の町に着いた。

「熊の膽を買ひに來た片眼の男がこのあたりにゐませんでせうか？」赤シャツは道で出逢ふかぎりの人たちにたづねて見た。

「さあそんな男は知りませんな。」

「ばか／＼しい、雲をつかむやうなことをいつてたづねたところで廣い北海道だ、何がわかるものか。」こんな惡態をついてせゝら笑ひながら行きすぎる男たちもあつた。

袋を背負つたまゝ三人は二日の間野付牛の町をたづねて歩いた。しかし誰一人片眼の男の消息について知つてるものはなかつた。ふたゝび絶望が三人の胸を支配しはじめた

三日目にかれ等は袋を草の上に投げ出したまゝ川の岸にしやがんでゐた。水楊の葉が川に散つてゐた。かれ等は誠太をたづねてまはる勇氣も失つてゐた。

ちやうどその時川の岸を一臺の荷馬車が通りすぎて行つた。馭者臺には二人の少年が笑ひながら高い聲で話してゐた。

「片眼の男かい？」

「あゝあの男がとても意地の惡い奴だからなあ。村の人たちはみんな惜んでるよ。」

赤シャツの耳には馭者臺の上の少年の言葉が電氣のごとく響いて來た。赤シャツは袋をそこに置いたまゝ馬車を追つかけて行つた。

「もし、もし、あなたは今片眼の男の話をしておいでゝしたが、その片眼の男といふのは何處にゐるんです。」

馭者臺の上の少年たちは馬をとゞめて赤シャツの方を見た。

「それはわたしたちの村にゐるんです。」

「いつころからです？」

「去年の秋ころから來てゐます。」

「一人ですか？」

「最初は子供を一人連れてゐましたが、間もなく子供はどこかへ連れて行つてしまひました。村の人たちはその男をみんな嫌つてゐます。惡い男ださうです、誰もつきあふ人がないのです。」

「わたしはその片眼の男を探してゐるんですが、わたしたちを一緒につれていつてくれませんか。」

「よござんす。ぢや、みなさん一緒にこの馬車にお乘んなさい。」

赤シャツも捨松も藤作も袋を背負つて馬車に乘り、白楊の林を山の方へ走つた。

「その男は熊の膽を買つて歩いてはゐませんか？」

「えゝ、去年の秋わたしたちの村で大きな熊が二頭撃たれました。その時熊の膽を買ひに來たんですが、野付牛の町へ出かけて行つた時何か惡いことをしたとかいつて町でひどくなぐられたさうです。村にかへつて來てからはすつかり病氣になつて、今では誰もかまふ人もないものですから、川原の中に小屋を建てゝそこに寢てゐます。」

村に着いて三人は馬車の少年たちと別れて、七八町ばかり歩いて或る寂しい川原を發見した

「あの小屋にちがひない！」赤シャツは興奮し切つた顏をして白い川原を指さした。そこには水楊と虎杖の叢にとりかこまれた屋根の低い小屋が一つあつきりであたりには人の影も見えなかつた。

赤シャツは背の袋のなかゝらピストルを取り出してポケットのなかに入れた。二少年は赤シャツのうしろからついて小屋の方へ歩いて行つた。捨松も藤作も足が顫へて仕方がなかつた。

赤シャツは小屋の外に立ち止つてしばらく小屋の中の物音を聽いてゐたが、出しぬけに大きな聲をかけた。

「御免なさい。ちよつとおたづねしますが熊の膽を商ひなさるのはこちらですか？」

最初は小屋の中からは返事がなかつた。

赤シャツはふたゝび高い聲で話しかけた。

「わたしは山で熊を撃つて來たのですが、熊の膽を一つ買つてくれませんか、安く賣りますが。」

「何ッ！　熊を撃つて來たのか？」しやがれ聲とともに戸を明けて片眼の男が黑い顏を突き出した。

「あッ！　あの男だ……」捨松は去年かれ等三人を故郷の山から連れ出した片眼の男をそこに見出した。しかし捨松が驚く以上に片眼の男は驚いた「おい、熊の膽は買つてくれるのかい、何でそんなに驚くのだ。」赤シャツは冷靜な言

葉で話しかけた。
「嘘つき、何が熊の膽だ。歸れ！」片眼の男は血走つた眼で赤シャツをにらみつけた。
「歸れといへばすぐ歸るが、その前にお前にたづねたいことがある。詮太はどうした、どこへ連れて行つた！」
「おれはそんな者は知らぬ。」
「嘘をつくな、お前は去年釧路へ來る途中の山の中で羊飼ひの家に詮太をつれて泊つたことがある筈だ！」
さすがに片眼の男は默りこくつてしまつた。そしてどうしても詮太の行方については語らなかつた。
「ぢやい〻、今日はこれで歸る、また明日來るからそれまでによく考へといて返事をしてくれ。」
赤シャツは捨松や藤作をつれて村の方へかへつて行つた。
「ともかく明日からわたしたちは山にでも行つて働かなくちやならぬ。もうポケットには一文の錢も殘つてゐないんだから、だが片眼の男を逃がしてはならぬから、三人のうちで一人づつは川原に殘つてあの男を監視しなければならぬ。」赤シャツは村の木賃宿の暗いランプの下で捨松や藤作に話した。
翌日からかれ等は毎日隱れて山へ木を伐りに行つたり、牧場に出かけて行つたりした。そして暇さへあれば赤シャツは疲れた足を引き摺つて川原の小屋へ出かけて行つて片眼の男に詮太の行方についてたづねたが、片眼の男はます〳〵口をつぐんでしまつた。
或る夜捨松は虎杖のなかに隱れて川原の小屋を見守つてゐた。空には星がきらめいてゐた。
窓からは小さなカンテラの燈が見えた。捨松は跫音をぬすんで小屋の窓ちかく歩いて行つた。
片眼の男は御經を誦みはじめた。

捨松は奇蹟を見せつけられたほどに驚いた。熊を盗み、人の子を賣つて一生を送つてゐる極惡人の片眼の男の口から、やさしい讀經の聲が洩れて來るといふことは想像さへつかないことであつた。

最初捨松は自分の耳を疑つた。しかし、たしかにそれは讀經の聲であつた。間もなく空が曇りはじめて、雨が降つて來たので捨松は宿の方へかへつて行つた。

眞夜中には風が吹きまくつて、山からは恐ろしい勢で濁流があふれはじめた。村の人たちは半鐘を鳴らして川を警戒した。

不圖村の人たちの頭に浮かんで來たのは片意地な憎まれ者の片眼の男のことであつた。

「この大雨であいつの小屋が流されてしまふにちがひない。」

「あいつも流されて死ぬにちがひないはゝはゝはゝ。」

村の若者たちは手を拍つて笑ひこけた。

赤シャツは村の人たちの話を聽いてゐた。かれは捨松や藤作をつれて川の岸へ走つて行つた。そこにはすでに村の人たちが集まつて來て、川の岸に置いてあつた自分たちの家畜や、材木を村の方へ運んでゐたが、誰一人川原の中の片眼の男の小屋が半分以上水に浸されてゐるのを顧みる者もなかつた。

「あれを見ろ、あいつの小屋がもう流れるぞ。」

「あゝあの盗人奴が這ひ出して來た。」

「流された……」

「水楊にしがみついた。」

「はやく死ねばいゝ盗人奴！」

さういつた罵詈と嘲笑が岸の人々の唇から洩れた。

暗のなかゝらたゞ一人の背の高い男が濁流の中に飛び込んで行つた。赤シャツであつた。

赤シャツは幾度か濁流に押し流されながら片眼の男の方へ近づいて行つた。

そしてたうとう水楊にしがみついてゐる片眼の男を救ひ上げて村の方へつれて來た。

片眼の男はすでに死にかゝるほど弱つてゐた。

「もう死ぬにきまつてる。そんな恥知らずの盗人は川に捨てゝしまへ。」と村の人たちはいつた。

赤シャツは人々をなだめながら嵐のなかを木賃宿に連れてかへつた。

「捨松君と藤作君は氣の毒だが馬を借りて町へ行つてお醫者さまを呼んで來てくれ、わしは裸になつてこの病人をわしの體温であたゝめてやらねばならぬから。」さういつて赤シャツは自分のからだで片眼の男をあたゝめてやつた。

捨松と藤作は馬に鞭打つて嵐の中を町まで出かけて行つて醫師を呼んで來た。

うらゝかな秋の日がつゞいた。

赤シャツや二人の少年の親切な介抱のために死にかゝつてゐた片眼の男はやつと口がきけるまでになつた。

或る日片眼の男は赤シャツや二人の少年の前に涙を流しながら過去の一切を懺悔した。

「捨松さん、藤作さん、あんた等を山からおびき出してこんな苦勞をさせたのもみんなわしであつた。それでゐてあんた等に助けられるとは何といふ不思議な因緣だらう。諒太さんは根室の山に賣りました。わしが手紙を附けます、

その手紙のなかに金を入れて置きますから、それを山の人にわたして下さい。詮太さんは無事にかへしてもらへる筈ですから……」片眼の男はその翌日寢床の上に坐つたまゝ手紙を書いた。しかしその夜急に病勢がつのつて來た。

「捨松さん、藤作さん、わしの罪をゆるして下さい。」かれは二人の少年の手を握つて涙を落した。

「小父さん、小父さん安心なさい、僕等は何とも思つてはゐませんから。」捨松も涙を落した。

「ありがたう。わしは安心して死にます。あなたにはほんたうにお世話になりました。」かれは赤シャツの手を握りしめた。そしていかにも安心したらしい顏をして最期の息を引きとつた。

片眼の男の死骸を山に葬つた翌日赤シャツと二人の少年は袋を背負つて根室の旅へ出發した。

山はもう寒かつた。

半月ばかりの後かれ等は根室の山猫に賣られてゐた詮太を救ひ出すことができた。

赤シャツと三人の少年たちは山を下つて町に出た。赤シャツは内地へかへるための旅費を作らなければならなかつた。

かれは毎日々々屈託さうな顏をして町を歩いた。或る日かれは楡の木の下に立ちつくして金のことを考へてゐた。

不圖かれの上衣の袖を引つ張る者があるので何氣なしにうしろを振り向いた。そこには一頭の老馬がなつかしさうに赤シャツを眺めてゐるのであつた。

「おやツ!」赤シャツはおつと老いたる馬を見た。馬はなつかしげに近づいて來て赤シャツの肩に自分の顏をくつ付けた。

「あゝ、お前は新月だ！　新月だ！」赤シャツは躍り上つてよろこんだ。そして自分も馬の首に自分の顏をくつ付け

て泣いた。

十年前曲馬團を率ゐて妻と一緒に北海道を歩いたころ北海道の或る興行師へ賣つて行つた仔馬であつた。仔馬は老いた。しかしなほかれの舊主人を忘れないで赤シャツの袂を引つ張つてゐるのであつた。

馬のうしろには手綱を握つて一人の若者が立つてゐた。赤シャツはその若者から、或る曲馬團の一行が今この町に來てゐること、曲馬團の中の一番すぐれた曲馬師が病死したために困つてゐることを聽いた。

赤シャツはその日すぐ三人の少年をつれて曲馬團をたづねて行つた。赤シャツと三人の少年は旅の曲馬團の一行に加はつて町から町をめぐり歩いた。

「ぢや、わし等はこれで内地へかへる旅費もできたから、内地へ歸ることにする。」と赤シャツがいつた時は曲馬團の人たちはひどく名殘を惜しんで、そしてみんなが港の波止場まで送つて來てくれた。

「すまないがこの新月だけは死ぬまで可愛がつて下さい。わしも別れるのは辛いが……」赤シャツは今日もかれの袖を引つ張つて別れを惜しんでゐる新月の首に顏をくつ付けて泣かずにはをれなかつた。かれは一包みの金を曲馬團の人たちに渡して新月を可愛がつてくれるやうに頼んで船に乘つた。

赤シャツと三人の少年は津輕海峽の月の光りを浴びながら連絡船の甲板の上に立つてゐた。

「さあ、これでわしの使命も果した。君等は山に歸つたら二度と都會をあこがれて無謀なことをするんぢやないよ、ともかく君等は一日も早く山に歸つてみんなを安心させなくつちやいけない。山に歸つて今日までのことを靜かに考へて見たまへ。君等は先づ人生の第一歩を踏み出したのだ。靜かな山に歸つて尚一度今日までの經驗を考へ直して見

たまへ。今度別れたら、もう二度と君等と逢ふこともあるまいが……」さういつて赤シャツは三人の少年の顔をなつかしげにながめた。蒼い月の光りに照らされた赤シャツの顔は尊くさへ思はれた。

「さあ君等は下に行つてすこし眠つたがいゝ」赤シャツは三人の少年を下の船室へつれて行つて、そうつと毛布を着せてやつたりした。

赤シャツはふたゝび上甲板に登つて來た。かれは淒々として月の光りをたゝへた海峡の水の面をながめてゐた。かれは十年前にこの海に身を投げて死んだ亡き妻のことを思ひ出した。かれは惹き入れられるやうにして海の面を見つめてゐた。

眞夜中ごろ赤シャツが上甲板の上でピストルを胸にあてゝ引き鐵を引きながら海に飛び込んだことを發見したのは船橋の上に立つてゐた當直の士官であつた。船は悲しい汽笛を鳴らしつゝ大きな輪をゑがいて二度投身者の周圍をまはつたが赤シャツの死體はつひに發見されなかつた。いつまでも船の走つた跡が月の光りに照らされて水の面に白くはるかにながめられた。船はふたゝび悲しい汽笛の音をのこして青森の方へ走つて行つた。

三人の少年は數日の後無事になつかしい山の村へかへつて行つた。

捨松の父は中二階から飛んで來て捨松を抱きしめて泣いた。捨松も泣いた。

嶺には雪が白く積つてゐた。

鶴方先生の丸窓からはいつも先生の詩吟の聲が聞えてゐた。

「此子こゝに歸る

遠く野に送る

瞻望およばず
泣涕雨の如し。」

捨松はいつも先生の丸窓の下でそうつと先生の詩吟を聽いてゐた。旅から歸つて來てはじめて先生の詩の意味がわかるやうな氣にもなるのであつた。そして先生の詩吟を聽くたんびに月明の下で津輕海峽に身を投げて死んだ赤シャツのことが思ひ出さるゝのであつた。

捨松は手の甲で涙を拭きながら赤シャツの靈のために祈つた。

—了—

昭和七年一月廿三日印刷
昭和七年一月廿八日發行

童話集

一冊・壹圓五拾錢

著作者　吉田絃二郎
發行者　佐藤義亮
印刷所　富士印刷株式會社
製本所　植木製本所

東京市牛込區矢來町七十一番地
發行所　新潮社
電話牛込（八〇五番・八〇七番・八〇六番・八〇八番・八〇九番）

全十六巻内容

第一巻	短篇小説集(1)	島の秋、法妙寺の叔母、山上の小屋、静かなる死、姿見の前、小梅の母外十八篇	既刊
第二巻	短篇小説集(2)	大地の雁、燕のわな、彼岸詣り、憎、疲れたる魂、少年、濱、紙、外十六篇	既刊
第三巻	短篇小説集(3)	雉子笛を吹く人、神の子、青い毒薬、叔父夫婦、手紙、草の上、犬吠崎外十五篇	
第四巻	短篇小説集(4)	山寒し、二人の無能者、母を思ふ日、花梨の下、流人の妻、二老人と彼外十二篇	近刊
第五巻	短篇小説集(5)	芭蕉、壁、屋上白夜、笑ふ彼、秋、草枯れ、地に落つるもの外十七篇	既刊
第六巻	短篇小説集(6)	父、金、家出、二人の老人、時計、秋の海、寒日、形見分け外廿二篇	既刊
第七巻	長篇小説集(1)	静夜曲、人間苦、光り地にありや	既刊
第八巻	長篇小説集(2)	無限、高原の日記	既刊
第九巻	長篇小説集(3)	白路、石に撃たるゝ女	
第十巻	戯曲集	大谷刑部、燕、忠信の父、狂人となる迄、清作の妻、丈草庵の秋、静夜曲外十一篇	
第十一巻	感想集(1)	小鳥の来る日、生の悲劇、雑草の中、生命の微光	既刊
第十二巻	感想集(2)	草光る、生くる日の限り、旅人、山家日記	既刊
第十三巻	感想集(3)	木に凭りて、心より心へ、わが詩、わが旗	既刊
第十四巻	感想集(4)	静かなる土、麦の丘、青鳩	既刊
第十五巻	感想集(5)	白日の恋、霧島紀行、春の日	
第十六巻	童話集	騎兵と馬、或る歩哨の話、熊とピストル、木村軍曹と赤靴、外五十餘篇	既刊

文豪藤村の代表的大作現る!!

夜明け前

島崎藤村氏著

石井鶴三畫伯裝幀

◉各方面の識者は擧つてこの傑作を讃嘆し、激稱し、藤村の大作といはんより、明治より昭和に至る日本文學第一等の作なりと云ふに一致した。

◉「春」「家」「新生」「嵐」に藤村を讃へた者は必ずこの一作を讃んで、藤村の藝術に感激を新にせよ。

藤村島崎先生、齢六旬に及んで精進しばらくも止まず、大作『夜明け前』の稿を起して既に三年、今やその第一部を完了して、ここに刊行せらるゝに至つた。『夜明け前』は、木曾山中の一宿驛の舊き傳統に生ける人々の生活を中心として、そこに反映せられたる明治維新の時代相を描けるもの。一面精到深切なる郷土小説であり、一面雄渾壯麗なる革命小説である。字々苟くもせざる森嚴の姿は、直に東西の古典と比肩し得べく、先生一生の文業は此の一篇に總收せられたるの觀がある。今や一代の文藝は徒らに大衆に迎合して文壇の低俗を嘆かるゝ時、獨り先生あり、獨り先生の此の作あつて、海内の文藝未だ地に落ちず。高嶽の雲を抽んずるが如く、日星の空に輝かなるが如き此の一篇こそ、我等同時代者の以て後世に誇りを殘すべき作品である。

無條件に敬服　青野季吉

徳川の封建支配のぐらついて來たことが、「江戸から八十三里の餘も隔つた木曾の山の中」まで響いて來た頃から慶喜の大政奉還まで、この大作の大きなひと區切りとしてはまことにふさはしい。私はこの第一編十二章、約千三百枚餘の分量には決して驚かない。が、このうちにぎつちりと籠められて、片言隻句の間にも十分窺はれるその觀察者的の努力と、藝術家的の精進には無條件に頭の下つた一人であることをまづ告白する。

四六判特製美本　價壹圓八拾錢 ■ 新潮社出版

歌麿をめぐる女達

邦枝完二氏著
里見弴氏序
山村耕花氏畫

金泥に塗り潰された如き江戸中期の時代相――その影に躍る男女の群れは、恰も人魚の如く奇怪なる愛慾生活を繰返してゐた。

當時江戸隨一の美女と謳はれた灘波屋おきた、松の位の身でありながら、玉の肌に菊壽童の刺靑をした大文字の多賀袖。百に餘る七名の與女中の中から選まれた裸線美のお蘭。これらが愛慾藝術の第一人者たる浮世繪師歌麿を中心にして如何に妖しくもまた華やかな情痴の世界を展開せし事よ。

山村耕花氏の彩毫の、木版刷阿彌たる装幀と艶冶の趣深い挿畫三十葉に飾られた美本だ。

……いま、蠟燭の灯に照らされて、上半身を斜に構へた多賀袖の肌は、珠玉の上を羽二重で掩うたやうに輝いて、その皮膚に觸れた瞬間、歌麿は覺えず手先の顫へるのを、何んとすることも出來なかつた。

百千の浮世繪師を向うへ廻しても、一歩も讓るものではないと、大きな自信に燃えて來た歌麿だけに、今は忽然、奈落の底へ叩き落されたのと同様な惰が、孜々として胸に迫つたのだつた。

「これまで、人間を描くつもりで筆を執つてゐたおれは、愚にも人形を描いてゐたんだ。――生きたこの肌、生きたこの色。今こそおれは、生きた女の肌を知つた。――」

歌麿の掌は、夢中で多賀袖の肌の上を滑り廻つた。（本文の一節）

四六判極美本
紙數四八〇頁

價壹圓八拾錢

大好評忽ち十七版

■新潮社出版■

勝敗

菊池寛氏著

大久保作次郎氏裝幀

現代の長篇作家は菊池寛に止めを刺し、現代の長篇小說は「勝敗」に止めを刺す。あらゆる點に於て代表的モダンガアルたる一人のブルジョア令孃と、その異腹の姉妹なる二人の娘との、

生活の戰ひと愛の戰ひとは絢爛潑剌たる時世粧を背景として描かれ

歩々クライマックスに迫る層々の場景は、斯界第一人者の、文字通り靈活無比の筆によつて展開してゐる。而も、

そこに痛切なる現代の眞理と道德とを語り、且つ敎へてゐるところ、

斷じて單なる通俗小說ではない。東西の朝日新聞に連載され空前のセンセーションを捲き起せる此一篇は、正に小說中の小說であり、作者「第一の成功作」として嘖々推稱されてゐる。

世は擧げて本篇を「作家菊池の偉大さを、愈々固く認識させる傑作だ。」と熱讃し、菊池氏また「此一篇ほど溢れるばかりの感興に乘つて執筆した作はない。」とその自信を示した、文壇空前の一大巨作だ。

現文壇の代表傑作出づ!!

價壹圓五拾錢 ■ 四六判美本・四五〇頁

新潮社

故郷の言葉

神戸市　荒武澄子

吉田先生は九州の方でございませう。それでさらに〳〵わたくしは先生がなつかしくてたりませぬ。

父の故郷、母の故郷の九州、私自身は神戸に生れ育つたのですけれど、お作品のなかに時々わたくしの耳慣れた九州の言葉を見出しては、まあ！　と思ふのです、長篇小説の「無限」のなかに見出した、ちゑすと！　といふ言葉などほんたうに涙がこぼれる程なつかしうございました。

先生の日常のお言葉づかひにもきつと父や母のやうな九州なまりがおありだらうと想像などいたします。さうして先生のお話がお聽きしたくてなりませぬ、若しも何かの機會に先生のお聲をお聽きすることが出來たら如何にか嬉しいだらうと存じます。

行きづりにふと九州のなまりを耳にしてすら見知らぬ人が何か親しまれてなりませぬもの。

をはりに少年少女小説もどうぞお願ひ申します。

×　×　×

次回配本

第四卷　短篇小說集〔4〕

- 山寒し　●髭
- 二人の無能者　●大和の菜畑
- 母を思ふ日　●傷める巢
- 高原　●生まれ來る者
- 花梨の下　●回想の日
- 一老人と彼　●年の瀬
- 秋をゆく　●欅
- 生まれざりし子　●ダビテと子たち

二月下旬配本豫定

てゐる、多からしつこく苦しめられ通してゐる、私は手まねく森の地にひざまづくことも、流れの囁きを求める事も知らない。

――「自分は何時も悲哀を中心として一つの圓を描きながら廻つてゐる」

私は孤獨を樂しむ、然し孤獨なる私の心は野中の細い道をあても無く、煩悶と憂鬱を糧に行く、

行けども、行けども道はつきず

日は暮れ足は一歩も許さず、遂に進むことも退くことも出來ず、寂寞な野のはてに……

星が細く遠く輝く頃やがて天界からはかすかな笛の音がせまる、然しあまりにもさめきつた自分の冷たい心は笛の音を聞いても躍ることは出來ない、唯それに耳をかたむけるべくたをれた體をね返りするのみ。

私の喜び

鶴岡市　米村雄太郎

私の喜び――それは丁度云ひ知れぬ苦惱の一隅に幽かな光明を得た樣なものだ吉田先生の全集の刊行の喜びと云へば私の云ふことはこれで全部だ。一ヶ月一圓五十錢――これは私にとつては決して安い本代ではない。然し先生の本に依つてあらゆるどん底の迷ひから純情と人間愛とによつて救ひ出されることを確認した私は如何なる苦痛をも忍ばねばならなかつた。

×

私は時々この晩秋の野を歩く、そして隨所に丘を求め森を求め小川を求めてはそこに必ずあの寂として人間愛に充ちた吉田先生の顏を描く。

そして又歩む。小道あり菜畑ある所に必ず先生を思ひだす。

斯うして私は――殊に散歩の時には――決して側から離れる事のない先生否、離すことの出來得ざる先生――これが私の本當の告白である。

×

最後に私は云ひたい。

人間に若し父が二人あるとしたら……

それは一人は必ず先生であらねばならない――眞の人間愛を以て呼びかける人――先生――その人が父にあらずして何ぞや!

シグナルの燈の樣に

神戸　久下芳夫

遠い彼方に靑いシグナルの火が見える車は今進行中だ、來た〳〵、靑いシグナルの火の下に。車は、汽車は! その瞬間旅する人々は安らかなる心持になつた。そして次の靑いシグナルの火を希ひつゝ東へ、西へ、その靑いシグナルの火こそ先生なのである。吉田紘二郎先生なのだ。

私もその旅する人の一人なのです。

二十年のこの年まで寂しさを知らずに居た私は、五月の月になつて孤獨になりました、寂しい氣持は一時に頭をもたげました。

當然凡人の辿るべき道を私は辿つたのです、愛してはならない人を愛したのです、然し未だに言葉を! 語つたことのない男です。

先生の作品に慰安をもとめました、何と云ふ淸い澄いお心でしよう。

孤獨である事がうれしくなりました。

孤獨であるを優越に思ひました!

ごみ〳〵した都會の眞中で先生の全集を讀む事を!

故鄕を。田園生活を。もたぬ故に!

旅するものが安全燈の下を通つた樣に先生は孤獨なるものゝ安全燈の樣だ!

×　×　×

私が初めて紘二郎先生の少年小說を讀んだのは何時頃だつたらう？……木枯吹き荒ぶ學期末のある一時間をS先生が割いて讀書をさせて下さつた。私は兒童文庫から表紙のぼろ〳〵になつた日本少年を手にして來て先生の「木曾川の渡し守」を讀んだ。私を幽めい境に惹き入れたそれは華宵の畫と共に忘れる事の出來ないものである。

私は先生の少年小說を讀んではじめて純情は尊ぶべきものであることを知つた。

×

冬枯の野原は寂しいものである。二三寸にのびた麥は風に吹かれてゐる。眼を周圍にうつすと遠くの越後連山も淺間山も近くの赤城榛名の諸山も眞つ白だ。淺間は他の山々よりも雪の降るのが早い。……それ淺間に雪が下りたぞ、俺等も早く田圃を片づけにや……」と言ふ言葉は私達のしば〳〵耳にした言葉である。あの山の麓には輕井澤の高原があるのだ。人は『廣いだけでつまらぬ處だ』といふが私はその高原に立つた時の淋しさを味はつて見たい。

夏ならば—其處には可憐な鈴蘭が風にゆられてゐるのを見出すであらう！ ゴルフ歸りの外國の少年にも會ふであらう。小馬をひいた馬子にも會ふであらう！ 馬子はおとなしく小馬が路傍の草を食み終るまで待つてゐるであらう！ 先生も嘗てその高原にたゝずんで心ゆくまで高原の寂寥を味はつた事であらう！

×

孤獨はよいものうれしいものである。そこには何の惱みもなく至つて安易なものである。

『人間は結句一人だ』とおつしやつた先生のお言葉が此の頃になつておぼろげ乍ら解つて來たやうな氣がする。

私の心よ！ 何時迄も純情であつてくれ！

山よ！ 何時迄も純情でゐようよ！

寂心

京城　三浦　清

孤獨を愛する私——心から泣いて吳れる一人の友をも持つ事の出來ない私。母を亡くして以來、毎日の樣に心で泣き續けて居た私は、此の苦しい氣持、悲しい氣持を、他人に訴へて、幾分でも、慰めてもらはうと致しました。けれど訴へても〳〵此の氣持を眞實に味はつて吳れる人を得る事は出來ませんでした。そして人にいくら訴へて見たところで、到底此の苦惱は人に依つて慰めてもらへるものではない—と云ふことを知りました。

と同時に、私の此の苦しい心、悲しい氣持を慰めてくれるものは、先生の御言葉以外には無いと云ふ事を、はつきりと覺りました。

先生の本と私——今は到底離れる事は出來ないのです。

現在も……そして永遠に……

私は先生の御言葉に慰められ、勵まされ乍ら、淋しい人生を通して行きます。

では愛讀者の諸兄姉方よ—此の偉い先生の全集を出して下さいました新潮社に深く感謝すると共に、先生の御健康を祈りませう。

感想

靜岡縣　堀江　喜光

天城の峰々に安らかな春に醉ひ、狩野川の流れは靜かに私の耳に春を囁きかけてゐる。

けれ共私の心の底には魔物のやうに無氣味にうごめく暗影の執念がつきまとつ

アのホイットマン訪問記を述べた。私はホイットマンの一般論を述べた。

そのことがあつて間もなく有島氏が死なれたので、私としては、そのことでも印象が深いが、其の時、私は始めて吉田氏の風貌にも親しく接した。併し、講演のあとの招待の宴では都合で有島氏と私だけしか出席しなかつたから、吉田氏とは殆んど口をきいたことが無い。だが、私は吉田氏の藝術に親しさを感ずると共に、人間吉田氏の態度の純眞さに好意を持つ

序でだから言ふが、ホイットマン講演會について日夏氏は新潮社版の「明治大正詩史」のなかで、それを揶揄の材料として私の民衆詩を攻撃してゐるが、私は自ら信ずるところがあるので一言もそれに言はなかつた。

ともかく吉田氏のホイットマンに對する傾倒は、知識慾から、それも知つて置かうといふ程度のものでなく、「草の葉」の心からの愛讀者の一人としての聲であるところに價値があつた。

×

吉田氏は旅が好きなやうである、その旅行記は叙述でなくして抒情である。人と人との旅愁を巧みにとらへてゐる。

吉田氏の旅行記は「獨り旅」の記錄である。そして實に筆まめに記述することは驚嘆に値する、私も旅は好きであるが、旅行記はその足跡の十分の一にも足らない。それはあながちヂャーナリズムから機會を與へられない爲めとばかりは言へない。

吉田氏はその意味でいつも「童心」を失はない人である。いや、「童心」といふよりも「少年心」といふべきであらうか。

雜駁な大衆文藝の時代、自己の影を稀薄にして、初めて讀者を得る時代に、吉田氏のごとく自己に徹して然かも讀者を有することは大きい幸福でもあり、翻つて考へると當然なことでもある。

讀者の聲!!

投稿用紙は一行二十字詰の原稿紙を御使用下さい。住所姓名は封筒には勿論でありますが、原稿紙にも御明記を願ひます。

思ふまゝ

高崎市　川邊森兵

山の有難さは山國に生れて朝夕山容に接してゐる者でなければ分らない。

山の美しさは山國に生れた者でなければ分らない。

高原の麗々さは山國に育つた者でなければ分らない。

高原の朝の清涼さは山國に生活する者にのみ味ふ事の出來る快味である。

×

酉の市で中學を卒業した昔の數人の級友を見た。老けてぐれた姿をしてゐた。これが私と同じ年の者であらうかと私は自分を疑つた私は急に悲しくなつた。そして彼等が憐れになつて來て私は急いで其の場を去つた。彼等は少年の日を一日も早く去つて大人になりたいと思つてゐるらしい。彼等はそれを喜んでゐるらしい。何故そんなに早く大人になりたいのだらう？　きつとカフエーへ行く事が出來るからだらう？　實際彼等は中學にゐた時も足繁くカフエーに出入して危く退校されさうになつた位だから……。

私は何時までも純情を守つて永久に少年でゐたいと思つてゐる。

純情は尊ぶべきものである。

汚すべからざるものである。

×

吉田絃二郎全集月報、第十一號、編輯兼發行者、佐藤義亮（昭和七年一月三十日發行）

吉田絃二郎全集月報

吉田絃二郎氏の藝術

白鳥省吾

吉田絃二郎氏の隨筆を讀むと、德富蘆花氏の「自然と人生」といふ本を思ひ出す。「自然と人生」は私の十七八歳の頃、非常に愛讀した本であり、其の以後も引續いて驚くべき發行部數を示したものである。

この書物にもられてゐる淸純な抒情味は實になつかしいものであつた。わけて自然と人間との交渉を書いてゐる細緻な美しい觀察は、ナイーブな少年の琴線を動かさずに措かなかつた。

吉田氏の隨筆に表はれてゐる自然と人生の味ひは、一脈の愛と哀愁を帶びて、德富氏の「自然と人生」の次の時代の現代の若い人々の胸を動かすのであらう。

×

吉田氏の文章の或ものは詩味が豐かであるとか、詩そのものであるとか言はれてゐる。「詩」の持つ內容も現代では餘程變つて來てゐる。新しい詩といふものが、國木田獨步あたりの抒情詩から島崎藤村の抒情詩、更に一飛躍して歐洲大戰以後の民主々義を取り入れた民衆詩、そして現在のイデオロギーの詩へ、さう考へて見ると、創始以來、五六十年の間に幾多の段階を經て來てゐる。しかし、多くの人の考へてゐる詩、また日本の傳統的な詩味を代表してゐるものは「藤村詩集」あたりであらう。

吉田氏の詩味は藤村詩集の柔かさを持つてゐるが、それよりは新しい。そして多分に人道主義的な色彩があるので、現代のイデオロギーの詩味よりは古い。それだけ讀者層に幅の廣さがあるわけである。同時に誰にも愛される穩健中正の健全な藝術といふべきであらう。

×

吉田氏の文章のなかによくアメリカの詩人ワルト・ホイットマンの名が出てくる。ホイットマンの明るい愛に充ちた詩想を吉田氏はよほど好きと見える。人間相互が溫かく手を繫ぎ合つて、この人生を樂しく生きようといふこの民主詩人の態度は、東西に亙つて大きい感化を人に與へた。

吉田氏は旅人としての芭蕉を愛すると共に、街の人としてのホイットマンを愛したのだ。

×

大正十一年の春の頃と記憶するが早稻田大學で、ホイットマンの記念講演會が開催されて、吉田氏の外に今は亡き有島武郎氏、それに日夏耿之介氏と小生との四人が演壇に立つたことがあつた。吉田氏は英國靑年のジョンストンとウォーレスのホイットマン訪問記を基本としてホイットマンについての感想を述べた。有島氏はアンナ・ギリクリスト夫人とホイットマンとの文通を話して。日夏氏はカアペンタ

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03119 2214